

# 二葉町遺跡発掘調査報告書

第3・5・7・8・9・12次調査

—新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う—

2001

神戸市教育委員会



1. 調査地遠景航空写真（北から）



2. 調査地遠景航空写真（南から）

巻頭写真図版 2



1. 二葉6 SE306 出土 船材（右舷前方から）



2. 二葉6 SE306 出土 船材（右舷後方から）



1. 二葉6 ST301 出土遺物



2. 二葉6 ST302 出土遺物

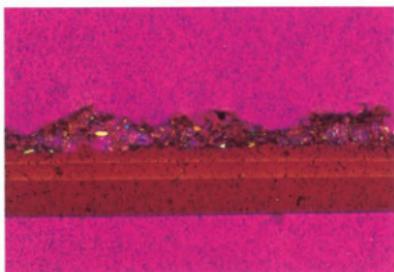
## 巻頭写真図版 4



二葉町遺跡出土土鉢



漆塗り鳥帽子内側織物拡大写真



漆塗り鳥帽子顕微鏡写真  
(経糸横断面方向・偏光) ×170

# 二葉町遺跡発掘調査報告書

第3・5・7・8・9・12次調査

—新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う—

2001  
神戸市教育委員会

## 序

阪神・淡路大震災の発生から、6年の歳月が過ぎました。本書の発掘調査が行われた長田区は、震災による被害が特に甚大なところでした。

本書では、約800年前のむらの様子を明らかにすることができます。

調査では、多くの井戸が検出されました。そのうちの1基では、船材を巧みに再利用して井戸枠にしています。

これらの発掘調査の成果は、地元の情報誌や説明会に話題を提供しました。

発掘調査が完了した区域から、計画に沿った再開発事業が進み、新たな街づくりがはじまっています。

本書の報告にある過去の人々の苦為に思いを馳せるとともに、過去の経験を活かす一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた方々、関係諸機関に厚く御礼申しあげます。

2001年3月  
神戸市教育委員会



## 例　　言

1. 本書は、神戸市长田区駒塚町6丁目・久保町6丁目・二葉町6丁目において、平成8年度から12年度にかけて発掘調査を実施した、二葉町遺跡第3・5・7・8・9・12次の埋蔵文化財調査の報告書である。
2. 当調査は、新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴うもので、神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社・(財)神戸市体育協会・平成10年10月改組)が神戸市都市計画局の委託を受け実施した。調査は、第1章第5節に示した調査組織によって実施した。
3. 平成8年度の調査に関しては、震災復興に伴う発掘調査事業の進捗を図るために兵庫県教育委員会より、復興支援職員(復興調査班)の派遣を受けた。
4. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸首部」・「神戸南部」を、詳細位置図は、神戸市発行の2500分の1の地形図「大橋」の一部を使用した。
5. 本書に用いた方位・座標は平面直角座標系第V系で、標高はT. P.で表示した。
6. 本書は目次に示したように各調査担当者が分担執筆し、川上厚志が編集した。  
また、保存科学調査に関しては千種 浩・中村大介が担当した。
7. SE306出土の船材については、松木 哲(神戸商船大学名誉教授)から指導を受けた。  
また、第8章には玉稿を賜りました。記して、深謝いたします。
8. 下記の作業については作業委託を行った。

発掘調査作業	安西工業(株)
樹種同定	(株)パレオ・ラボ
航空写真測量	国際航業(株)、アジア航測(株)、(株)ジオ・テクノ関西
9. 各調査の遺構写真は各調査担当者が撮影した。  
SE306船材出土状況及び、船材遺物写真については、丸山 濬が撮影した。  
遺物写真は奈良国立文化財研究所 牛嶋 茂氏の指導を得た。  
また、西大寺フォト・杉本和樹氏が撮影を行った。
- SE306出土船材のX線撮影は奈良国立文化財研究所 肥塚隆保氏、高妻洋成氏の協力を得た。
10. 現地での発掘調査の実施については、神戸市都市計画局新長田南再開発事務所の協力を得た。

## 凡　例

### 地区名表記

今回、調査の対象となったのは、二葉町遺跡内の腕塚町6丁目・久保町6丁目・二葉町6丁目の3地区に分かれている。広範囲の調査を除却が済んだ範囲を繋ぎ合わせていく調査となつたため、各調査次数での報告では遺構の全容や遺跡自体の全体像が把握しにくいため、各町毎に3区分して報告を行う。

調査地区の表記については、以下のとおり記述する。

腕塚町・久保町・二葉町の3町を合わせて久二塚地区

腕塚町6丁目・・・腕塚6

久保町6丁目・・・久保6

二葉町6丁目・・・二葉6

### 遺構番号

遺構番号は、縄文時代～弥生時代を100番台、奈良時代～平安時代を200番台、中世を300番台として以下記述する。

遺構は種類ごとに以下の略記号を使用した。

S B ・・・建物跡  
S D ・・・溝、鋤溝  
S E ・・・井戸  
S K ・・・土坑  
S P ・・・ピット、柱穴  
S T ・・・木棺墓  
S X ・・・不明遺構  
P ・・・建物に伴う柱穴

S B 3 0 1 = S B    3    0 1  
|            |            |  
— 個別番号  
— 時代番号  
— 遺構の略記号

### 建物の主軸

掘立柱建物の主軸については、座標北から西に振った角度を表記している。

(例) N-30° W ・・・北から30度西へ振った方向

### 図面表現

遺構図面に関しては、遺構面が現在の生活面から1mに満たない深さに存在することから、搅乱を多く受けており、遺構との煩雑さを避けるため搅乱坑の描線は基本的に省略した。

遺構図に示した方位は国上座標の北を、標高は東京湾平均海水準(T.P.)を使用している。

### 遺物

土器の断面の色は、須恵器を黒塗り、土師器・瓦を白抜き、施釉陶器・陶器・磁器・瓦器・石鍋・石製品をそれぞれ濃度の違うトーン表現により区別している。

# 本文目次

第1章 はじめに		
第1節 調査にいたる経過	1	川上
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	2	口野
第3節 既往の調査概要	6	口野・川上
第4節 調査の実施状況	9	口野・川上
第5節 調査組織	12	川上
第2章 調査の概要		
第1節 試掘調査	15	川上
第2節 各時代の検出遺構	15	川上
第3節 基本層序	16	川上
第3章 諸塚町6丁目の調査		
第1節 中世以前の遺構と遺物	18	口野・須藤・川上
第2節 中世の遺構と遺物	20	口野・須藤・中谷
第3節 小結	27	口野
第4章 久保町6丁目の調査		
第1節 弥生時代の遺構と遺物	28	川上・阿部功
第2節 中世の遺構と遺物	31	川上・阿部功
第3節 小結	62	川上
第5章 二葉町6丁日の調査		
第1節 中世以前の遺構と遺物	65	口野・須藤・富山
第2節 中世の遺構と遺物	77	安田・須藤・池田・川上
第3節 小結	140	川上
第6章 二葉町遺跡出土木製品の樹種同定	141	松葉（パレオ・ラボ）
第7章 保存科学による調査と保存作業	167	千種
第8章 中世船舶資料としての二葉町遺跡出土遺物	179	松木（神戸商船大学名誉教授）
第9章 まとめ		
第1節 二葉町遺跡における各時代の遺構の変遷	183	川上
第2節 二葉町遺跡出土の井戸関連遺構	187	川上

# 挿 図 目 次

fig.1	遺跡位置図	1	fig.50	S B309 平面・断面図	43
fig.2	周辺の遺跡分布図	3	fig.51	S B309 P6平面・断面図	44
fig.3	調査位置図	6	fig.52	S B309 出土遺物	44
fig.4	旧調査次敷溝在範囲	7	fig.53	S B310 平面・断面図	45
fig.5	新調査次敷溝在範囲	7	fig.54	S P301 平面・断面図・出土遺物	45
fig.6	発 sond 施設図	16	fig.55	S P302 平面・断面図・出土遺物	46
fig.7	基本層序断面図	17	fig.56	S P303 平面・断面図・出土遺物	46
fig.8	腕塚 6 中世以前遺構平面図	18	fig.57	S P出土金属製品	47
fig.9	S R101 出土遺物	18	fig.58	久保 6 亂溝平面図	47
fig.10	S R101 土層断面図	18	fig.59	鎌溝出土遺物	47
fig.11	S R101 平面図	18	fig.60	S E301 平面・断面図	48
fig.12	S K101 平面図	19	fig.61	S E301 出土遺物	48
fig.13	S K101 出土遺物	19	fig.62	S E302 平面・断面図	49
fig.14	S D101 平面図	19	fig.63	S E302 出土板	50
fig.15	S D101 断面図	19	fig.64	S E302 出土木製品	51
fig.16	腕塚 6 中世遺構平面図	20	fig.65	S E302 出土遺物	52
fig.17	西端地区 破立柱建物配置図	20	fig.66	S E303 平面・断面図	52
fig.18	S B301 平面・断面図	21	fig.67	S T301 平面・断面図・出土遺物	53
fig.19	S B302 平面・断面図	22	fig.68	S X301 平面・断面図	54
fig.20	S B302 出土遺物	23	fig.69	S X301 出土遺物	55
fig.21	S B303 平面・断面図	23	fig.70	S X301 出土金属製品	55
fig.22	腕塚 6 東端地区遺構平面図	24	fig.71	S X301 出土瓦	55
fig.23	S K301 出土遺物	24	fig.72	S X302 平面・断面図	56
fig.24	S E302 平面・断面図	24	fig.73	S X302 出土鉄滓	57
fig.25	腕塚 6 西端地区鰐溝平面・断面図	26	fig.74	S X302 出土木製品	57
fig.26	久保 6 弥生時代遺構平面図	28	fig.75	S X302 出土遺物	57
fig.27	弥生時代遺構平面直上出土遺物	28	fig.76	S X303 平面・断面図	58
fig.28	S K101 平面・断面図	29	fig.77	S X303 出土遺物	59
fig.29	S K101 出土遺物	29	fig.78	S K301 平面・断面図・出土遺物	60
fig.30	久保 6 中世遺構平面図	30	fig.79	S K302 出土遺物	60
fig.31	S B301 平面・断面図	31	fig.80	包含層出土遺物	61
fig.32	S B301 出土遺物	31	fig.81	包含層出土金属製品	61
fig.33	S B302 平面・断面図	32	fig.82	二葉 6 中世以前遺構平面図	63.64
fig.34	S B302 出土遺物	32	fig.83	二葉 6 粗妙層範囲	65
fig.35	S B303 平面・断面図	33	fig.84	縄文時代晚期の遺物	65
fig.36	S B303 出土遺物	33	fig.85	S B201 平面・断面図	66
fig.37	S B304 平面・断面図	34	fig.86	S B202 平面・断面図	67
fig.38	S B304 出土遺物	34	fig.87	S B203 平面・断面図	68
fig.39	久保 6 南東部掘立柱建物群配置図	35	fig.88	S B203 出土遺物	69
fig.40	S B305 平面・断面図	36	fig.89	S B204 平面・断面図	69
fig.41	S B305 出土遺物	37	fig.90	S B205 平面・断面図	70
fig.42	S B305 出土金属製品	37	fig.91	S B206 平面・断面図	70
fig.43	S B306 平面・断面図	38	fig.92	S E201 平面・断面図	71
fig.44	S B306 P9 平面・断面図・出土遺物	39	fig.93	S E201 出土遺物	71
fig.45	S B306 P10・14・18 平面・断面図・出土遺物	40	fig.94	S E202 平面・断面図	72
fig.46	S B307 平面・断面図	41	fig.95	S E202 井戸側及び井筒部	72
fig.47	S B307 出土遺物	41	fig.96	S E202 出土遺物	72
fig.48	S B308 平面・断面図	42	fig.97	S D201 出土遺物	73
fig.49	S B308 出土遺物	42	fig.98	S K201 平面・断面図	73

fig.99	S K201 出土遺物	73	fig.149	S E306 出土木製品	105
fig.100	S K202 平面・断面図	74	fig.150	S E306 出土転用船材	107
fig.101	S K202 出土遺物	74	fig.151	S E306 出土転用船材	108
fig.102	二型 6 中型遺構平面図	75,76	fig.152	S E306 出土遺物	109
fig.103	S B301 平面・断面図	77	fig.153	S E306 出土金屬製品	110
fig.104	S B301 出土遺物	77	fig.154	S E307 平面・断面図	110
fig.105	S B302 平面・断面図	78	fig.155	S E308 出土曲物	111
fig.106	S B302 出土遺物	78	fig.156	S E308 出土遺物	111
fig.107	S B303 平面・断面図	79	fig.157	S E308,309 平面・断面図	111
fig.108	S B304 平面・断面図	80	fig.158	S E309 出土木製品	112
fig.109	S B304 出土遺物	80	fig.159	S E309 出土木製品	113
fig.110	S B305 平面・断面図	81	fig.160	S E309 出土遺物	114
fig.111	S B306 平面・断面図	82	fig.161	S E310 平面・断面図	114
fig.112	S B306 出土遺物・不明鉄製品	83	fig.162	S E310 出土遺物	114
fig.113	S B307 平面・断面図	83	fig.163	S E311 断面図	114
fig.114	S B307 出土遺物	83	fig.164	S E312 平面・断面図	115
fig.115	S B308 平面・断面図	84	fig.165	S E312 出土遺物	116
fig.116	S B308 出土遺物	84	fig.166	S E313 平面・断面図	117
fig.117	S B309 平面・断面図	85	fig.167	S E313 出土木製品	118
fig.118	S B310 平面・断面図	86	fig.168	S E313 出土木製品	119
fig.119	S B311 平面・断面図	87	fig.169	S E313 出土木製品	120
fig.120	S B312 平面・断面図	88	fig.170	S E313 井筒部材	121
fig.121	S B313 平面・断面図	89	fig.171	S E313 出土金銅製品	121
fig.122	S B313 出土遺物	89	fig.172	S E313 出土遺物	121
fig.123	S B314 平面・断面図	90	fig.173	S E314 平面・断面図	122
fig.124	S B315 平面・断面図	91	fig.174	S D301 出土遺物	122
fig.125	S B316 平面・断面図	91	fig.175	S D303 出土遺物	123
fig.126	S B317 平面・断面図	92	fig.176	S D304 出土遺物	123
fig.127	S B318 平面・断面図	93	fig.177	S D304 出土打金	123
fig.128	S B318 出土遺物	93	fig.178	S K301 平面・断面図	123
fig.129	S B318 柱穴土層断面	94	fig.179	S K301 出土遺物	123
fig.130	S B319 平面・断面図	94	fig.180	S K302 出土遺物	123
fig.131	S B319 出土遺物	95	fig.181	S T301 平面・断面図	124
fig.132	S B320 平面・断面図	95	fig.182	S T301 出土遺物	125
fig.133	S B320 出土遺物	95	fig.183	S T301 出土金属製品	125
fig.134	S B321 平面・断面図	96	fig.184	S T302 平面・断面図	126
fig.135	S E301 平面・断面図	96	fig.185	S T302 出土遺物	127
fig.136	S E302 平面・断面図	97	fig.186	S T302 出土金属製品	127
fig.137	S E302 出土横樋	97	fig.187	S T302 出土木製材	127
fig.138	S E302 出土曲物	97	fig.188	S T303 平面・断面図	128
fig.139	S E302 出土遺物	98	fig.189	S T303 出土遺物	128
fig.140	S E303 平面・断面図	98	fig.190	S T303 出土金銅製品	128
fig.141	S E304 平面・断面図	99	fig.191	S X301 平面・断面図	129
fig.142	S E304 出土木製品	100	fig.192	S X302 平面図	130
fig.143	S E304 平面図	101	fig.193	S X302 立面・断面図	131
fig.144	S E304 出土遺物	101	fig.194	S X302 出土木製品	132
fig.145	S E305 平面・断面図	102	fig.195	S X302 出土木製品	133
fig.146	S F305 出土遺物	102	fig.196	S X302 出土遺物	134
fig.147	S E306 平面・断面図	103	fig.197	S X302 出土金属製品	134
fig.148	S E306 出土木製品	104	fig.198	S X303 平面・断面図	135

## 挿図写真目次

fig.199	S X303 出土遺物	135
fig.200	S X303 不明金属製品	136
fig.201	S X304 平面・断面図	136
fig.202	S X304 出土遺物	136
fig.203	S P301 出土遺物	136
fig.204	S P302 出土不明金属製品	137
fig.205	S P303 出土石製品	137
fig.206	包含層出土遺物	137
fig.207	二葉6 遺構全体図(鋪設含む)	138
fig.208	S E304 平面・断面図	139
fig.209	桶復元設置台模試図	172
fig.210	P E G 水溶液の濃度と液温の变化	172
fig.211	船釘打ち位置図	174
fig.212	船釘12枚調査図	176
fig.213	船釘打ち状況図1	177
fig.214	船釘打ち状況図2	178
fig.215	珍島出土船実測図	181
fig.216	船体接続部概念図	182
fig.217	二葉6 奈良時代建物配図	183
fig.218	二葉町遺跡遺構変遷図	186

## 表 目 次

表1	調査次数一覧表	8
表2	耕作痕跡打ち込み痕データ	25
表3	二葉6 S X302 遺構構築材樹種同定結果	146
表4	11世紀末~13世紀中頃に相当する木製品樹種同定結果	147
表5	神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(1)	148
表6	神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果(2)	149
表7	神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(3)	150
表8	神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(4)	151
表9	神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(5)	152
表10	神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(6)	153
表11	神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(7)	154
表12	神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(8)	155
表13	神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(9)	156
表14	神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(10)	157
表15	二葉6 S E306 船釘打ち状況一覧1	175
表16	二葉6 S E306 船釘打ち状況一覧2	176
表17	二葉町遺跡出土中世井干一覧表	188

挿図写真1	久保6 S X301 掘削作業風景	9
挿図写真2	シンボジウム見学風景	9
挿図写真3	ラジコンヘリ航空写真測量風景	9
挿図写真4	船材一般公開風景	10
挿図写真5	船材保存処理作業風景	10
挿図写真6	地元住民見学風景	10
挿図写真7	埋め戻し作業風景	11
挿図写真8	クレーン航空写真測量風景	11
挿図写真9	体験発掘風景	11
挿図写真10	塙塚6 S D101(南から)	19
挿図写真11	二葉6 S B201(南から)	66
挿図写真12	二葉6 S B321(南から)	96
挿図写真13	船材補修痕	106
挿図写真14	二葉6 S E309(東から)	112
挿図写真15	二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真1	158
挿図写真16	二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真2	159
挿図写真17	二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真3	160
挿図写真18	二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真4	161
挿図写真19	二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真5	162
挿図写真20	二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真6	163
挿図写真21	二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真7	164
挿図写真22	二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真8	165
挿図写真23	二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真9	166
挿図写真24	珍少凍結乾燥準備	167
挿図写真25	S E306 出土船材木材組織顕微鏡写真	169
挿図写真26	船材X線透過撮影状況	170
挿図写真27	船材T R P 製型枠作製	171
挿図写真28	船材の樹脂合浸槽への設置	171
挿図写真29	転用樹脂貯蔵合浸準備	171
挿図写真30	船釘12正・側面写真	176
挿図写真31	船釘打ち状況X線写真1	177
挿図写真32	船釘打ち状況X線写真II	177
挿図写真33	船釘打ち状況X線写真III	177
挿図写真34	船釘打ち状況X線写真IV	177
挿図写真35	船釘打ち状況X線写真V	178
挿図写真36	船釘打ち状況X線写真VI	178
挿図写真37	船釘打ち状況X線写真VII	178
挿図写真38	船釘打ち状況X線写真VIII	178
挿図写真39	二葉町遺跡出土船材	179
挿図写真40	大阪府御川出土船材	180
挿図写真41	法然上人経伝	180
挿図写真42	法然上人経伝・部経大	181

# 卷頭写真図版目次

- 卷頭カラー図版1 椰査地空景航空写真  
卷頭カラー図版2 S E306出土舟材  
卷頭カラー図版3 木棺墓出土遺物  
卷頭カラー図版4 二葉町道路出土土鍾、漆塗り鳥帽子内側織物拡大写真、漆塗り鳥帽子頭微鏡写真

## 写真図版目次

- 写真図版1 椰査地空景航空写真  
写真図版2 椰査地空景航空写真(縮群モザイク)  
写真図版3 脱塚6 西端椰査区航空写真  
写真図版4 脱塚6 透構・遺物出土状況  
写真図版5 脱塚6 遺構検出・遺物写真  
写真図版6 久保6 全景椰査区航空写真  
写真図版7 久保6 遺物出土状況1  
写真図版8 久保6 遺物出土状況2  
写真図版9 久保6 井戸断面・立面写真  
写真図版10 久保6 木棺墓遺構・遺物出土状況  
写真図版11 久保6 不明大型土坑構全景1  
写真図版12 久保6 不明大型土坑構全景2  
写真図版13 久保6 朽生土器・中世掘立柱建物出土遺物  
写真図版14 久保6 S B306出土遺物  
写真図版15 久保6 S B307・308・309出土遺物  
写真図版16 久保6 S P<sup>1</sup>内出土遺物  
写真図版17 久保6 S P・S D・S K出土遺物  
写真図版18 久保6 出土土鍾・S X301出土遺物  
写真図版19 久保6 S X302・303・S T301出土遺物  
写真図版20 久保6 S E302出土木製品  
写真図版21 久保6 S E302出土遺物  
写真図版22 二葉6 全景椰査区航空写真  
写真図版23 二葉6 北東隅椰査区掘立柱建物群全景  
写真図版24 二葉6 掘立柱建物透構検出状況  
写真図版25 二葉6 掘立柱建物・井戸・溝・上坑遺構検出状況  
写真図版26 二葉6 井戸・透構検出状況  
写真図版27 二葉6 清在室全貌写真  
写真図版28 二葉6 掘立柱建物透構及び遺物出土状況  
写真図版29 二葉6 井戸透構・遺物出土状況1  
写真図版30 二葉6 井戸透構・遺物出土状況2  
写真図版31 二葉6 井戸遺構検出状況1  
写真図版32 二葉6 井戸遺構検出状況2  
写真図版33 二葉6 船形取り上げ作業状況  
写真図版34 二葉6 井戸遺構・遺物出土状況3  
写真図版35 二葉6 井戸遺構・遺物出土状況4  
写真図版36 二葉6 木棺墓透構・遺物出土状況1  
写真図版37 二葉6 木棺墓透構・遺物出土状況2  
写真図版38 二葉6 木棺墓透構・遺物出土状況3  
写真図版39 二葉6 不明透構写真  
写真図版40 二葉6 不明大型土坑構写真  
写真図版41 二葉6 近世井戸遺構写真  
写真図版42 二葉6 中世以前出土遺物1  
写真図版43 二葉6 中世以前出土遺物2・中世土鍾  
写真図版44 二葉6 置立柱建物出土遺物  
写真図版45 二葉6 井戸出土遺物1  
写真図版46 二葉6 井戸出土遺物2  
写真図版47 二葉6 井戸出土遺物3  
写真図版48 二葉6 井戸出土遺物4  
写真図版49 二葉6 井戸出土遺物5  
写真図版50 二葉6 井戸出土遺物6  
写真図版51 二葉6 井戸出土遺物7  
写真図版52 二葉6 井戸出土遺物8  
写真図版53 二葉6 木棺墓出土遺物  
写真図版54 二葉6 木棺墓・消・土坑出土遺物  
写真図版55 二葉6 不明大型土坑出土遺物  
写真図版56 二葉6 不明大型土坑・ピット出土遺物  
写真図版57 二葉6 近世井戸・側  
写真図版58 鳥帽子拡大・顕微鏡写真



## 第1章 はじめに

### 第1節 調査にいたる経過

二葉町遺跡が存在する長田区腕塚町・久保町・二葉町（久二塚）周辺は、南北に大正筋商店街、東西に六間道商店街などの大小の商店街が網目状に存在する商業地区であり、古くからの木造家屋が密集して建ち並ぶ地域である。

平成7年1月17日午前5時46分、大都市直下型地震となった兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）が発生し、多くの建物や都市高速道路などが倒壊、焼失した。

当地域に関しても甚大な被害が街を襲い、多くの市民が非難生活を余儀なくされた。仮設住宅が建設された街に、当地区を対象に新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業として都市計画が決定された。

この事業地区内には、北に松野遺跡と南に二葉町遺跡を含む地域であったため、平成7年度より施工範囲決定地区について順次、試掘調査を実施した。その結果、二葉町遺跡については腕塚町6丁目・久保町6丁目・二葉町6丁目（久二塚6）周辺で良好な遺物包含層と遺構面が存在することが確認された。

試掘調査の結果を踏まえ、神戸市都市計画局新長田南再開発事務所と協議し、仮設住宅や既存の家屋を残し、面積的に広い地区を対象に全面的な発掘調査を順次、実施することとした。

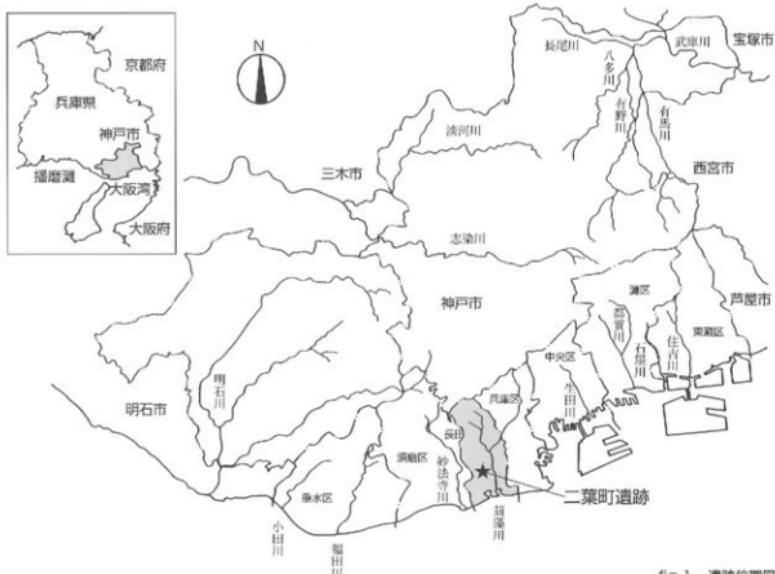


fig. 1 遺跡位置図

## 第2節 遺跡の立地と歴史的環境

二葉町遺跡の遺跡名は現在の町名から命名された。町名の新設は大正年間の耕地整理によるものである<sup>⑩</sup>。

### 自然環境

遺跡の自然環境は、六甲山に起因する土砂や一部大阪層群から流出した土砂によって形成された、沖積地に立地する遺跡である。地形としては、妙法寺川と茹藻川が運んだ土砂を川と漸く内海の海流によって形成された自然堤防帶に位置する<sup>⑪</sup>。当報告にある南北約250mにわたる調査区の比高差は2m足らずで平坦な地形であることがわかる。また現在の海岸線から約500mに位置しており、海に近接した集落遺跡といえる。

### 歴史的環境

次に二葉町遺跡を取り巻く歴史的環境について、周辺の主要な遺跡とともに略述する。

旧石器時代や縄文時代の遺跡は周辺地域では少なく、現状で呈示されている資料は断片的である<sup>⑫</sup>。

縄文時代晩期末から弥生時代前期頃になると遺跡数がやや増加していく。人々の土地利用の方法が変化する時期と符合するようである<sup>⑬</sup>。

弥生時代中期は当地域では、前期から継続する戎町遺跡<sup>⑭</sup>・楠・荒田町遺跡<sup>⑮</sup>などを除き、遺跡数は増加しない。

弥生時代の後期では、松野遺跡<sup>⑯</sup>・神楽遺跡<sup>⑰</sup>・長田神社境内遺跡<sup>⑱</sup>などがあげられる。遺跡数がやや増加する傾向がある。弥生時代は、沖積地の可耕地を基礎にして、集落が形成されていくようである。

古墳時代前期には、鷹取町遺跡<sup>⑲</sup>・若松町遺跡<sup>⑳</sup>・御藏遺跡<sup>㉑</sup>・三番町遺跡<sup>㉒</sup>などの集落で生活が始まるとされる。戎町遺跡は前期頃までは継続するが、中期以降集落は途絶える。長田本庄町遺跡<sup>㉓</sup>の周辺にもこの時期の生活の痕跡を見出すことができる。

古墳時代中期になると、松野遺跡・神楽遺跡・三番町遺跡・上沢遺跡などがあげられ、いずれも竪穴住居と掘立柱建物によって構成される集落であるが、松野遺跡では豪族居館と考えられる掘立柱建物群と柵列が検出されている。神楽遺跡では韓式系上器や算盤玉形滑石製錘車が出土している。三番町遺跡では、小型青銅鏡が大溝から出土している。上沢遺跡では大型造建物や韓式系土器、大景の滑石製玉製品などが検出されている。

古墳時代後期には、鷹取町遺跡・渓川遺跡・楠・荒田町遺跡などの遺跡があげられる。

周辺の丘陵上や茹藻川沿いには古墳が築造される。前期古墳は、西から得能山古墳<sup>㉔</sup>・会下山<sup>㉕</sup>・本松古墳<sup>㉖</sup>・夢野丸山古墳<sup>㉗</sup>が知られている。これらは、近接した時期の古墳と考えられ、また妙法寺川・茹藻川・旧深川とそれぞれの水系毎に古墳が築造されているように考えられる。

中期の古墳では、念仏山古墳<sup>㉘</sup>が知られている。鋸付円筒埴輪の出土が知られており、地形などから砂堆上に築造された全長100mを越す前方後円墳であると言われている。

後期古墳については、丘陵上や茹藻川沿いにその分布が知られるが、現状ではその実態を知る手掛かりは少なく、名称のみが伝承するものも多い。

その外に、高取山東中腹に位置する林山古窯<sup>㉙</sup>がある。採集された須恵器から6世紀後半に操業していた窯である。

図2 地図の測量分布図 (S=1/25,000)



古墳時代を概観して、これらの集落は古墳を築造し、外来的な事物を取り入れていった。そして遺跡の継続、断絶などから、集落が離合集散を繰り返しながら、一定の地域毎にまとまりを形成していくと考えられる。

これに続く飛鳥時代は、発掘調査中に断片的にこの時期の資料が知られる程度である。

奈良時代には、古墳時代を中心に形成された集落を継ぐように山陽道が築造される。この地域での陸上と海上の交通路がより充実していく。奈良時代から平安時代にかけての遺跡として、長野田遺跡<sup>(2)</sup>・大田町遺跡<sup>(3)</sup>・神楽遺跡<sup>(4)</sup>・御蔵遺跡<sup>(5)</sup>・上沢遺跡などがあげられる。

大田町遺跡では、多くの縄縞・灰釉陶器の出土と掘立柱建物群の検出や遺跡の立地などから、須磨駅家としての可能性が高い遺跡と考えられている。御蔵遺跡も同様に建物群が検出され、この地域の有力な集落であると考えられる。上沢遺跡でも同時期の建物が検出されている。また井筒組の井戸枠をもつ井戸内から正倉院や法隆寺の伝世品と同様の削鉈が出土しており、この地域と奈良との結びつきが想起される。

平安時代末には、平氏政権によって大輪田の泊が築修される。前後する時期からさらに遺跡数は増加していく。平安時代末から鎌倉時代にかけての集落は、戎町遺跡・若松町遺跡・二葉町遺跡<sup>(6)</sup>・松野遺跡・長野田遺跡・御船遺跡<sup>(7)</sup>・御蔵遺跡・長田神社境内遺跡・上沢遺跡・大開遺跡<sup>(8)</sup>・兵庫津遺跡<sup>(9)</sup>などがあげられる。

ここでこれらの遺跡の共通項を羅列してみる。集落の構成の主たる構成要素として掘立柱建物・井戸・周辺の可耕地がある。出土遺物として、在地的な土師器・東播系須恵器・和泉焼瓦器・貿易陶磁器等があげられる。在地での生産力を基盤に、集落外からの様々な消費材を取り入れていたことが判る。また若松町遺跡・二葉町遺跡・御蔵遺跡では、屋敷墓と考えられるものが検出され、集落の対外的・対内的なまとまりが見られるようになっていくようである<sup>(10)</sup>。そしてこれらの集落は多少の移動はあるが、江戸時代の集落へと継続していくようである。

## 註

(1) 項名の起源は、西澤耕地整理（組合設立1914）によって新設命名（1920）されたものによる。江戸時代後期絵図「板宿村・西代村・野田村・駒ヶ林村などの記載はあるが二葉町遺跡に該当する村の記載はない。

付言すると森田修一「莊山『平盛後益』を典す。研究紀要『白耕』創刊号百耕資料館1992所収『尼崎明石間沿道跡絵図』写本（財）武井報效会蔵宣文年間絵図には「駒ヶ林村」北東に松の松があり、「ツノ松」の説明書きがある。この松の名については、源氏物語に因るものと考えられる。さらには付言すると旧駒ヶ林村に属する二葉町6丁目・久保町6丁目・駒塚町6丁目の旧字名は、落合重信「長田区内の小字名について」「歴史と神戸」第17巻第4号1978によるとそれぞれ「西松本」・「庄下隣」・「中溝」となる。落合重信・有井基・陸井敏子著「ながたの歴史」長田区役所広報相談課1978

(2) 鹤田和夫・笠間太郎「六甲山地とその周辺の地形」神戸市企画局1971、高橋学「戎町遺跡の地形凍壌」『淡渋・妙法寺川流域の地形環境』『戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会1989

(3) 遺跡の北東約2.5 kmの会下山遺跡でナイフ型石器が採集されており、北約2.5 kmの名倉遺跡で縄文時代中期の土器などが採集されている。「縄文人のくらし」神戸市立考古館1979、高良信夫「神戸市名倉町出土の縄文土器片」近畿古文化調査1943

(4) この時期の主要な遺跡をあげると、戎町遺跡・長田神社境内遺跡・五番町遺跡・三番

- 町遺跡・上沢遺跡・大瀬遺跡・桶・荒田町遺跡などをあげることができる。これらの遺跡は、突変文十器と弥生前期の土器を共にする遺跡で、当地域での縄文時代晚期末から弥生時代前期にかけての大きな変革期の状況を理解するうえで重要である。
- (5) 山本編『戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会 1989
- (6) 丸山・丹治『桶・荒田遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980
- (7) 千種浩他『松野遺跡発掘調査概報』1983
- (8) 菅木宏明『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986, 渡辺伸行・西岡誠司『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
- (9) 黒田編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1990
- (10) 大平茂義『神戸市應天町遺跡』兵庫県教育委員会 1991
- (11) 山田清朝・高木芳史『若松町遺跡』神戸市教育委員会 2000, 『若松町遺跡第2次調査見学のしおり』神戸市教育委員会 1998
- (12) 山口英正・関野豊『平成1年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (13) 『神戸市長田区・香町遺跡現地説明会資料』妙見山麓遺跡調査会 1987, 口野・水嶋『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- (14) 岡田章一・久保弘幸『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (15) 富山直人・斎木敏『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999, 斎木池田義『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (16) 西間巧次『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989
- (17) 梅原未治『神戸市板宿御能山古墳』『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第二輯 19 25
- (18) 吉井太郎他『金下山二木松古墳及び経緯』『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第五輯 1923, 黒田『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
- (19) 梅原未治『神戸市夢野丸山古墳』『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第二輯 1925
- (20) 幕谷美宣『市街地に沿えた古墳一仏山古墳一』博物館研究紀要第6号 神戸市立博物館 1989
- (21) 森田一稔『長田区旗脇山古墳の出土遺物』『博物館だより』No.23 神戸市立博物館 1988, 本村豪章『古墳時代の基壠研究論』『東京国立博物館紀要』16 東京国立博物館 1981
- (22) 須沢正弘・渡辺『神戸市長田区林山墓について』『神戸古代史』3-1 1986
- (23) 兼康深明・小林健二『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- (24) 『大田町遺跡発掘調査報告』大田町遺跡調査団・関西文化財調査会 1994, 口野・川上厚志『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994, 森内秀直編『大田町遺跡』発掘調査報告書兵庫県教育委員会 1993, 山口・東暮代秀『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997
- (25) 菅本『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1981
- (26) 訂(12)に同じ
- (27) 松岡千寿『神戸市二葉町出土の白磁四耳壺』『神女大史学』第9号神戸女子大学史学会 1992
- (28) 京『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999, 池田『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (29) 富山『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995
- (30) 兼康・中山治彦・鶴・菊地・狩野・半澤・大川・高山・阿部功他『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999, 岡田章一『兵庫津遺跡の調査』, 内藤「中臣の兵庫津の街並みー兵庫津遺跡第15次調査の成果からー」『歴史と神』④ 第39巻第2号 2000, 内藤「近世の兵庫津の生活ー兵庫津遺跡第15次調査の成果から②ー」『歴史と神』⑤ 第39巻第3号 2000
- (31) 口野『神戸市域の中世墓』『歴史と神』① 第36巻第3号 1997

### 第3節 既往の調査概要

遺跡の発見

二葉町遺跡は、昭和63年に二葉小学校校舎改築に伴う試掘を行った際に発見された遺跡である。その結果、中世の良好な遺物包含層が確認されている。

## 発掘調査

本格的な発掘調査は、昭和63年にマンション建設に伴う第1次調査が実施された。この調査では、平安時代末から鎌倉時代初めにかけての掘立柱建物が3棟と井戸1基が検出された。また、包含層から出土した白磁の四耳壺が出土している。

第1次調査以降は、個人住宅に伴う第2次調査が行われ、中世の柱穴や耕作に伴う溝などが検出されている。また、縄文時代晩期の上器片を含む南北方向に流れる自然流路を検出した。

平成8年からは、新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う大規模な発掘調査が開始された。今回の報告の対象となる同事業に伴う発掘調査範囲はfig.3に示したとおりである。

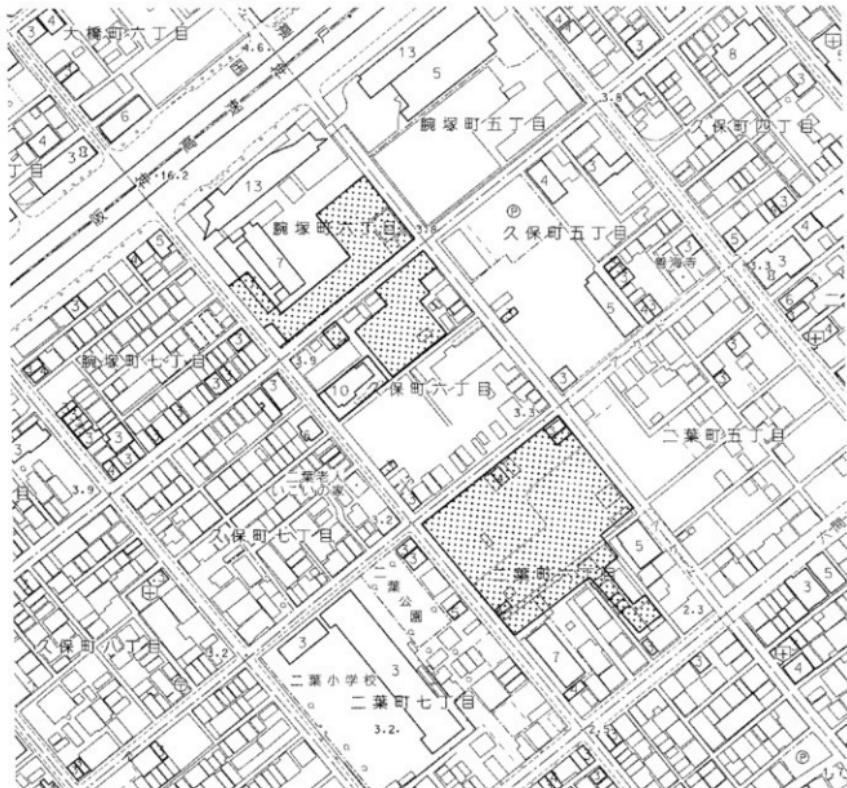


fig. 3 烟道位置圖

## 調査次数

神戸市域では、過去数十年にわたる発掘調査が調査主体の相違などにより、調査次数に齟齬を来す部分があった。神戸市では、これらの問題点を整理するために、平成12年度を区切りとして調査次数の整理を行い、過去の調査についても新たに次数を付けなおす作業を行った。以後の調査・整理・報告書刊行などについては新次数を用いる。

二葉町遺跡についても、既往の調査次数では新次数の取扱基準と齟齬をきたすため修正し、本報告より新次数を使用する事とした。なお、遺物、図面などの保存資料と対応させるため、旧次数と新次数の相対調査地位置図と新旧調査相対表を示しておく。

国道2号線



fig. 4 旧調査次数調査範囲

国道2号線

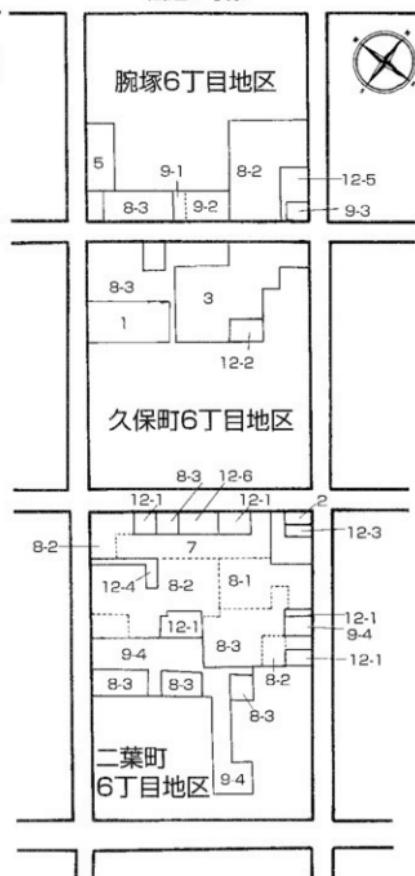


fig. 5 新調査次数調査範囲

表1 調査次数一覧表

新次数	旧次数	地区名	調査面積	調査原因	調査主体	調査担当	調査期間	調査内容
1	1	久保町 6丁目	421m <sup>2</sup>	共同住宅建設	喜田女子大学二層 利害関係者会	藤井利幸 ～890603	平安後醍醐立柱建物、裏塀地、 白瓦瓦棟	
2	2	二葉町 6丁目	40m <sup>2</sup>	市営住宅建設	喜田市営住宅公会	須藤 宏 ～930927	築文院第1社建物、中世溝、 柱穴	
3	3	久保町 6丁目	1,200m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸市スポーツ 君世公会	川上厚志 大西貴夫 ～960228	平安末尾立柱建物、木明大型立柱、 井戸、土壌、瓦	
4	4	久保町 7丁目	35m <sup>2</sup>	個人住宅建設	(財)神戸教育公会	今村道雄 町田利介 ～961213	中世木造建物	
5	5-1	駒塚町 6丁目	255m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	口野博史 ～970725	鎌倉後醍醐立柱建物、 井戸、柱、梁	
6	6	久保町 5丁目	300m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚5)	(財)神戸教育公会	口野博史 ～970805	鎌倉時代後醍醐、 井戸、土塊、ビット	
7	7-1	二葉町 6丁目	700m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	口野博史 石島三和 ～980328	鎌倉時代後醍醐建物、 井戸、土塊、溝	
8-1	7-2	二葉町 6丁目	720m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	口野博史 石島三和 ～980521	鎌倉時代後醍醐建物、 井戸、土塊、溝	
8-2	7-3	二葉町 6丁目	1,546m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	川上厚志 中西さやか ～980804	鎌倉時代後醍醐建物、 井戸、土塊、溝、木材軸組構造	
8-3	7-4	久二塚 6丁目	2,179m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	川上厚志 中西さやか ～990331	鎌倉時代後醍醐立柱建物、 土塊、溝、木組造、不規人型土塊	
9-1	8-1	駒塚町 6丁目	90m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	中谷 正 ～990803	鎌倉時代後醍醐立柱建物、井戸、 溝	
9-2	8-2	駒塚町 6丁目	160m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	中谷さやか ～990913	中世浮舟	
9-3	8-3	駒塚町 6丁目	50m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	安田 滋 ～000218	鎌倉後醍醐	
9-3	8-3	二葉町 6丁目	1,245m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	安田 滋 池田 翔 ～000329	平安末～鎌倉初期立柱建物、 木組造、井戸	
10	9	駒塚町 5丁目	500m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚5)	(財)神戸教育公会	浅谷誠吾 ～000329	同時不規土塊、溝	
11	10	久保町 二塚6	150m <sup>2</sup>	雨水幹線敷設	(財)神戸教育公会	佐伯二郎 池田 翔 ～000331	中世溝、柱穴	
12-1	二葉町 6丁目	565m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	安田 滋 阿部 功 ～000502	鎌倉時代土塊、掘立柱建物、 中世後醍醐建物。		
12-2	久保町 6丁目	184m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	安田 滋 阿澤 功 ～000526	鎌倉後醍醐立柱建物、 中世以前不明		
12-3	二葉町 6丁目	240m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	須藤 宏 ～000812	平安時代さく建物		
12-4	二葉町 6丁目	231m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	前田桂久 ～000825	平安末～鎌倉初期立柱建物		
12-5	二葉町 6丁目	154m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	須藤 宏 ～000904	鎌文後醍醐路		
12-6	二葉町 6丁目	156m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	富山直人 ～001117	当生前園寺、中世岳		
12-7	二葉町 6丁目	50m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚6)	(財)神戸教育公会	富山直人 ～010308			
13	駒塚町 5丁目	1,500m <sup>2</sup>	市街地再開発 (久二塚5)	(財)神戸教育公会	浅谷誠吾 ～000522	同時不規土塊		

久二塚6丁目再開発事業に伴う細掘調査面積・・・9,725m<sup>2</sup>

[ ] ・・・久二塚8丁目再開発事業に伴う鋭意調査

## 第4節 調査の実施状況

### (1) 調査の経過

新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地内開発事業に伴う発掘調査は、平成8年11月から実施した。平成9年度末には、腕塚町6丁目地区の一部を除いて調査が完了し、再開発ビルの建設工事に着手、平成12年度秋での調査の進捗状況は、fig.5に示すとおりである。

### (2) 調査日誌抄

#### 平成8年度（第3次調査）

平成8年11月6日 調査準備作業開始

3 11月11日 重機掘削開始

11月21日 包含層掘削 遺構検出

12月8日 平面実測作業

12月12日 SX01掘削作業断面写真



挿図写真1 久保6 SX301 掘削作業風景

1月8日 全景写真

1月10日 ラジコンヘリにて航空写真測量

1月16日 重機により反転作業開始

1月20日 『災害から文化財を守る』

神戸大会国際シンポジウム参加者

調査現場見学 約50名



挿図写真2 シンポジウム見学風景

1月21日 反転作業 重機掘削完了

1月23日 包含層掘削 遺構検出

1月28日 SX02など遺構掘削

2月5日 遺構掘削 平面実測

2月12日 井戸掘削 平面断面実測

2月18日 ラジコンヘリにて航空写真測量



挿図写真3 ラジコンヘリ航空写真測量風景

2月20日 全景写真 平面実測

2月24日 遺構面断ち割り作業

2月28日 埋め戻し作業完了現地撤収作業

#### 平成9年度（第5次調査）

平成9年 6月18日 重機掘削開始

5-1 6月26日 包含層掘削 遺構検出

7月5日 遺構掘削 平面実測

試掘トレンチ調査

7月22日 全景写真 図化作業

7月23日 クレーンにて航空写真測量

7月25日 埋め戻し作業完了現地撤収作業

5-2 8月27日 重機掘削開始

9月1日 包含層掘削 遺構検出

9月5日 クレーンにて航空写真測量作業

9月10日 埋め戻し作業完了現地撤収作業

#### 平成9年度（第7次調査）

7-1 2月23日 調査準備作業開始

2月26日 重機掘削開始

3月6日 遺構検出作業 平面実測

4月18日 井戸、建物検出 基準点測量

3月25日 井戸曲物枠実測写真

埋め戻し作業

3月28日 現地撤収作業

#### 平成10年度（第7次調査）

平成10年 4月3日 調査準備作業開始

7-2 4月20日 遺構検出 遺構掘削

4月29日 全景写真 平面実測

5月 1日 クレーンにて航空写真測量

5月 7日 遺構断ち割り作業

7-3 5月12日 重機掘削開始

5月14日 重機掘削と共に

包含層掘削 遺構検出

5月15日 クレーンにて航空写真測量

5月22日 遺構検出 遺構掘削

遺構写真 図化作業

6月 5日 クレーンにて航空写真測量

6月15日 井戸断ち割り作業 写真撮影

7月 1日 クレーンにて航空写真測量

7月 2日 遺構掘削 図化作業

7月14日 現場撤収作業 井戸枠材等

埋文センターへ搬入

7月23日 S-E01井戸枠材の鑑定 神戸

商船大学名誉教授松木哲氏

7月30日 船材出土の記者発表

8月 1日 埋文センターにて船材一般公開

展示解説



挿図写真4 船材一般公開風景

8月 4日 船材保存作業開始

8月 日 奈良国立文化財研究所による

X線写真を使用した船釘調査



挿図写真5 船材保存処理作業風景

7月 2日 重機掘削開始

7月 8日 遺構平面実測

7月 9日 遺構掘削 全景写真

7月14日 遺構完掘 写真撮影作業

#### 平成10年度（第7次調査）

7-4 12月 7日 調査準備作業 重機掘削開始

12月11日 J-5 全景写真 平面実測

12月16日 J-5 クレーンにて航空写真測量

G-9重機掘削及び人力掘削

12月22日 G-9クレーンにて航空写真測量

ピット断ち割り作業南地区試掘

1月 6日 南地区J-8重機掘削開始

1月18日 E-4J-8 全景写真

1月27日 L-6 遺構面検出 E-4 埋め戻し

2月 4日 L-6 井戸、墓、不明大型土坑

2月15日 遺構掘削 図化作業

2月23日 J-4 クレーンにて航空写真測量

3月 5日 遺構掘削 図化作業

3月12日 H-9,L-6 クレーン航空写真測量

3月13日 地元住民対象の見学会

約50名参加



挿図写真6 地元住民見学風景

3月31日 埋め戻し作業完了現地撤収作業

腕塚 7-4	2月 4日	重機掘削開始	
	2月 9日	包含層掘削 遺構検出	
	2月16日	全景写真	
	2月23日	クレーンにて航空写真測量	12-2
	3月 3日	埋め戻し	
久保 7-4	3月 2日	重機掘削開始	
	3月12日	クレーンにて航空写真測量	

8-2	9月 3日	調査区仮囲 重機掘削開始	
	9月10日	溝等検出 全景写真	
	9月13日	埋め戻し作業完了	
8-3	2月14日	調査準備作業 重機掘削開始	
	2月16日	埋め戻し作業完了	



押図写真7 埋め戻し作業風景

8-4	2月18日	測量作業	12-4
	2月22日	調査準備作業 重機掘削開始	
	3月 3日	遺構検出作業	
	3月17日	遺構掘削・Ⅱ区全景写真	
	3月22日	I・Ⅱ区クレーン航空写真測量	12-5



押図写真8 クレーン航空写真測量風景

3月24日	平面実測・ピット断ち割り作業	
3月29日	埋め戻し作業完了	

#### 平成12年度（第12次調査）新次数

12-1	4月 6日	重機掘削開始	
	4月13日	1-5 区各調査区遺構検出等	

4月25日	クレーンにて航空写真測量	
5月18日	1-5 区各調査区作業完了	
4月27日	重機掘削開始	
5月18日	クレーンにて航空写真測量	
5月26日	図化作業補足 埋め戻し作業	

12-3	7月18日	重機掘削開始
	7月28日	掘立柱建物等確認
	8月 1日	高校生体験発掘



押図写真9 体験発掘風景

8月 2日	クレーンにて航空写真測量	
8月12日	埋め戻し作業完了	

8月 3日	重機掘削開始	
8月22日	クレーンにて航空写真測量	
8月25日	埋め戻し撤収作業完了	

8月22日	重機掘削開始	
8月25日	第1 遺構面全景写真 実測作業	
9月 1日	縄文流路掘削写真図化作業	
9月 4日	埋め戻し作業完了	

11月 7日	重機掘削開始	
11月15日	クレーンにて航空写真測量	
11月22日	調査終了撤収作業	

1月29日	重機掘削開始	
2月 5日	クレーンにて航空写真測量	
2月 8日	調査終了撤収作業	

## 第5節 調査組織

### 平成8年度 調査組織表

#### 第3次調査

神戸市文化財専門委員会委員

植上 重光

神戸女子短期大学教授

和田 晴吾

立命館大学文学部教授

山岸 常人

神戸芸術工科大学助教授

教育委員会事務局

(財)神戸市スポーツ教育公社

教育長 鞍本 昌男

理事長 福尾 重信

社会教育部長 矢野 栄一郎

専務理事 田村 篤雄

文化財課長 杉田 年章

常務理事 中野 洋二

社会教育部主幹 奥田 哲通

事業課長 家根 康行

埋蔵文化財係長 渡辺 伸行

文化財調査係長 丹治 康明

文化財課主査 丹治 康明

事務担当学芸員 黒田 恭正

同 丸山 澄

調査担当学芸員 川上 厚志

事務担当学芸員 菅本 宏明

兵庫県復興支援 大西 貴夫

同 松林 宏典

遺物整理担当 藤井 太郎

保存科学担当 千種 浩

### 平成9年度 調査組織表

#### 第5・7次調査

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

植上 重光

神戸女子短期大学教授

工賀 善通

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長

和田 晴吾

立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

(財)神戸市スポーツ教育公社

教育長 鞍本 昌男

理事長 福尾 重信

社会教育部長 矢野 栄一郎

専務理事 田村 篤雄

文化財課長 杉田 年章

常務理事 中野 洋二

社会教育部主幹 奥田 哲通

事業課長 家根 康行

埋蔵文化財係長 渡辺 伸行

文化財調査係長 丹治 康明

文化財課主査 丹治 康明

事務担当学芸員 黒田 恭正

同 丸山 澄

同 菅本 宏明

事務担当学芸員 安田 澄

同 橋詰 清孝

同 阿部 功

調査担当学芸員 口野 博史

同 石島 三和

遺物整理担当 佐伯 二郎

保存科学担当 千種 浩

平成10年度 調査組織表

第8次調査

神戸市文化財保護審議会委員	史跡・考古担当
植 上 重 光	前神戸女子短期大学教授
工 楽 善 通	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
和 田 晴 吾	立命館大学文学部教授
教育委員会事務局	(財)神戸市スポーツ教育公社
教育長 鞍本 昌男	理事長 福尾 重信
社会教育部長 矢野 宗一郎	専務理事 田村 篤雄
文化財課長 大勝 俊一	常務理事 中野 洋二
社会教育部主幹 奥田 哲通	事業課長 家根 康行
埋蔵文化財係長 渡辺 伸行	文化財調査係長 丹治 康明
文化財課主査 丹治 康明	事務担当学芸員 山口 英正
同 丸山 潔	
同 菅本 宏明	(財)神戸市体育協会
事務担当学芸員 安田 滋	(平成10年10月改組)
同 東 喜代秀	会長 笹山 幸俊
同 井尻 格	副会長 田村 篤雄
調査担当学芸員 口野 博史	専務理事(兼務) 田村 篤雄
同 川上 厚志	常務理事 中野 洋二
同 石島 三和	同 静観 土一
同 中居さやか	総務課長 村田 孝政
保存科学担当 千種 浩	総務課主幹 中西 光男
	総務課主査 丹治 康明
	遺物整理担当 黒田 敬正

平成11年度 調査組織表

第9次調査

神戸市文化財保護審議会委員	史跡・考古担当
植 上 重 光	前神戸女子短期大学教授
工 楽 善 通	ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
和 田 晴 吾	立命館大学文学部教授
教育委員会事務局	(財)神戸市体育協会
教育長 鞍本 昌男	会長 笹山 幸俊
社会教育部長 水田 裕次	副会長 田村 篤雄
文化財課長 大勝 俊一	専務理事(兼務) 田村 篤雄
埋蔵文化財係長 渡辺 伸行	常務理事 中野 洋二
文化財課主査 丹治 康明	同 静観 土一
同 丸山 潔	総務課長 村田 孝政
同 菅本 宏明	総務課主幹 中西 光男
事務担当学芸員 東 喜代秀	同 奥田 哲通
同 井尻 格	総務課主査 丹治 康明
同 藤井 太郎	事務担当学芸員 斎木 巍
遺物整理担当 平田 利子	調査担当学芸員 安田 滋
保存科学担当 千種 浩	同 池田 裕
中村 人介	同 中谷 正
	同 中居さやか

平成12年度 調査組織表

第12次調査

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

植上 重光	前神戸女子短期大学教授
工楽普通	ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
和田 晴吾	立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	木村 良一	埋蔵文化財調査係長	丹治 康明
社会教育部長	水田 翔次	文化財課上査	宮本 郁雄
文化財課長	大勝 俊一	同	丸山 潔
社会教育部主幹	渡辺 伸行	同	青木 宏明
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)		事務担当学芸員	山口 英正
事務担当学芸員	西岡 誠司	遺物整理担当	谷 正俊
同	東 喜代秀	保存科学担当	千種 浩
同	橋詰 清孝	同	中村 大介

(財)神戸市体育協会

会長	筒山 幸俊
副会長	木村 良一
同	鞍木 昌男
(専務理事事務取扱)	
同	山田 隆
相談役	家治川 豊
常務理事	加茂川 守
参事	静観 圭一
総務課長	財田 美信
事業係長	前田 豊晴
事業係主任(兼務)	瀬田 吉則
同(兼務)	丸山 潔
事務担当学芸員	青木 宏明
調査担当学芸員	斎木 巍
同	安田 滋
同	前田 佳久
同	須藤 宏
同	富山 直人
同	阿部 功

### 第1節 調査の概要

#### 試掘調査

平成7年度に再開発事業地の範囲全域にわたり試掘調査を行った。その後も試掘調査は、既存家屋の解体が終了し更地になった所から行ったため、本格的な発掘調査と平行して順次実施した。二葉町遺跡の北限にあたる腕塚町6丁目地区については、北半分を熊見学園跡地が占めていたため、遺構の有無と遺跡の損壊状況を調べるためにレンチによる試掘調査を行った。その結果、南縁辺部の範囲を対象に発掘調査を実施することが決定された。久保町6丁目は、良好な遺物包含層と遺構面が検出されたため、更地がまとまって確保された北半分の範囲を対象に調査を行った。二葉町6丁目地区は、北辺が遺跡の南限となっていたが、平成9年度の調査により遺構が南にも拡がる事が確認されたため、二葉町6丁目全域を対象に発掘調査を行うこととした。試掘調査により、遺跡全体の面積は68,000m<sup>2</sup>の面積を有し、その内、久保町6丁目地区で9,725m<sup>2</sup>を対象に全面発掘調査を行った。

### 第2節 各時代の検出遺構

各地区とも遺構の存在する時代構成はほぼ同じ様相を呈している。

#### 弥生時代以前

弥生時代以前の遺構としては縄文時代晚期の自然流路、弥生時代前期の溝及び土坑、弥生時代後期の溝が検出されている。縄文時代晚期の自然流路については、二葉町遺跡の遺構面を形成するベースとして所々で粗砂層が存在し、その中に少量の土器が出土する。弥生時代前期の遺構及び遺物は腕塚6と久保6でそれぞれ検出されたが、遺構密度、遺物の出土量も希薄である。

#### 奈良時代

奈良時代の遺構としては、掘立柱建物6棟、井戸1基、土坑1基が検出された。掘立柱建物は、二葉6の東半分に集中して検出されており、井戸2基と土坑2基、溝1条についても二葉6で検出した。奈良時代の二葉町遺跡での土地利用には限られた範囲になるようである。

#### 平安時代

平安時代の遺構としては、井戸1基、土坑1基、溝1条が検出された。二葉6の東に存在しており、井戸が検出されていることから居住地も周辺に存在するものと考えられる。

#### 中世

二葉町遺跡の最も多くの遺構遺物が検出されるのが11世紀～13世紀のものである。遺構としては、掘立柱建物、井戸、墓、不明大型土坑、ピット、溝などを検出した。遺構の拡がりは、3地区全域に拡がっている。

腕塚6では、掘立柱建物3棟、井戸2基、ピット、鍬溝多数を検出した。

久保6では、掘立柱建物10棟、井戸4基、不明大型土坑3基、墓1基、ピット、溝、鍬溝多数を検出した。

二葉6では、掘立柱建物21棟、井戸14基、不明大型土坑1基、墓3基、不明遺構4基、ピット、溝、鍬溝多数を検出した。

この時期の掘立柱建物については、大半が総柱建物であり、各地区とも掘立柱建物が存在する場所には、複数の建物が重なり合うように検出される傾向がある。井戸については、特に二葉6に集中して検出されているが、南北方向に並ぶように検出されている。

### 第3節 基本層序

各調査区とも市街地形成当初から開発が行われてきた地域であるため建物基礎による搅乱が著しく、特に商店街の通りに面した所は鉄筋コンクリート造建物の基礎によりほとんどが破壊されていた。現状地盤から遺構面までが近接しているため、包含層及び遺構面が旧耕作時に削平を受けている地点もある。地形的には、北の山側より南の海岸方向へ緩やかに傾斜している。今回対象範囲の遺構面の標高は北で3.800m、南で2.600mである。

#### 腕塚6

①～③

現状地盤より20～40cmは盛土であり、標高4.000mまで旧耕作土層が存在する。その下層に中世耕作上層の黒褐色砂質シルトまたは、包含層の黒灰色粘質土が存在する。

#### 久保6

④⑤

現状地盤より40cmは盛土であり、標高4.200mで10cm幅の旧耕作上層が確認された。その下層の黒灰色粘質土または、黒褐色砂質土が遺物包含層であり、標高4.000mで遺構面が検出される。

#### 二葉6

⑥～⑩

現状地盤より50cmは盛土であり、標高4.000mで10cm幅の旧耕土層が確認された。その下層に土師器・須恵器・瓦器などの中世の遺物を含む包含層が存在する。遺構面は、標高3.200mから2.600mの淡灰黄色粘質土と黄褐色砂質土がベースとなる。

二葉町遺跡では、2種類の基本層序に大別される。遺構面を構成している層が淡灰黄色粘質土の場合は包含層は黒灰色粘質土であり、黄褐色砂質土の場合は包含層が黒褐色砂質土である。黄褐色砂質土からは、突帯文上器の破片が出土することから、縄文時代晩期に二葉町遺跡周辺の地形を形成する流路及び洪水が頻繁に繰り返されていたと考えられる。遺構面の下層には、約2mの11層からなる粘土層が堆積しており、標高1.000mからは海洋性の粗砂層が標高1.000mまで続くことが確認された。

国道2号線



fig. 6 層序配図

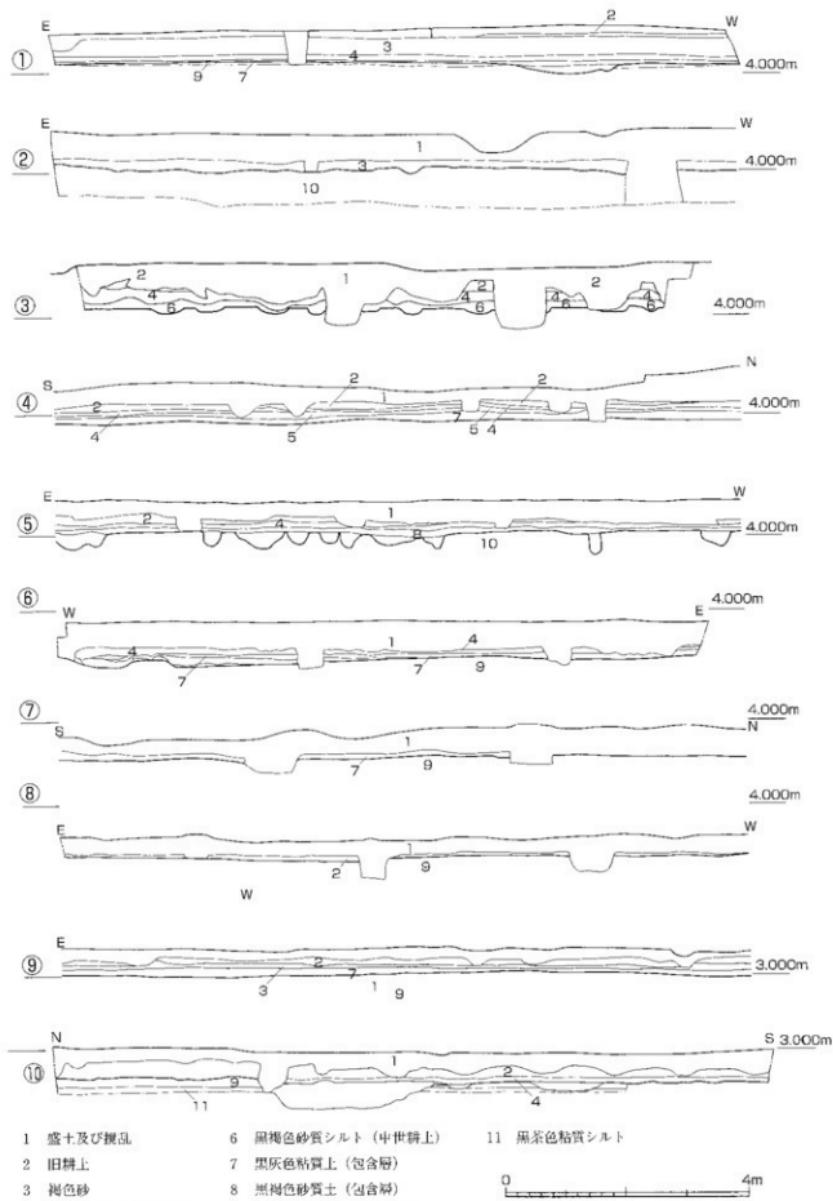


fig. 7 基本層序断面図

## 第3章 腕塚町6丁目の調査

### 第1節 中世以前の遺構と遺物

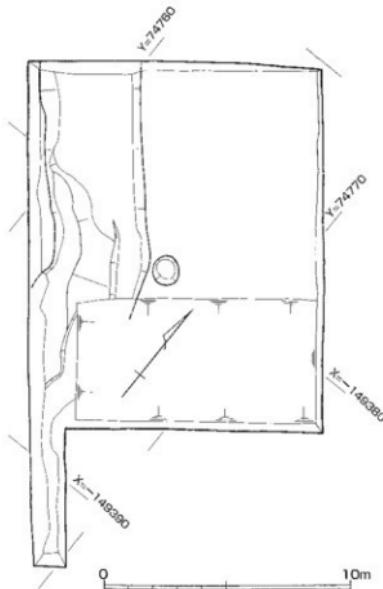
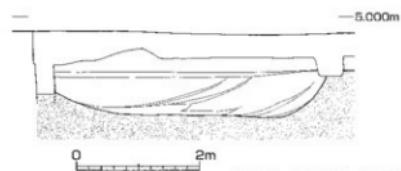
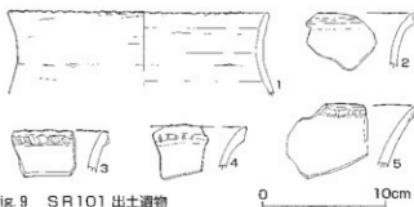
中世以前の遺構は、調査区の東端に南北方向に流れる縄文時代晩期の遺物を含む自然流路（S R101）1条とその東肩で検出された弥生時代前期の土坑（S K101）1基、調査区のほぼ中央で南北方向の弥生時代の溝（S D101）1条を検出した。



#### (1) 縄文時代晩期

SR101

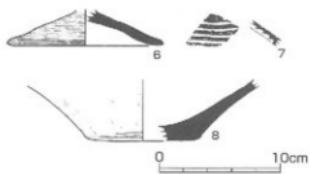
幅約4m、遺構検出面からの深さ75cmを測る横断面船底形の流路。北西から南東へ流れ。覆土は粗砂がほとんどである。縄文時代晩期の土器が出土している。磨滅が少ないことから、ごく近くにこの時期の遺構が存在する可能性が高い。



## (2) 弥生時代前期

SK101

S R101 の東肩付近で1.2m×1.1mのプラン楕円形の土坑を検出した。遺構検出面からの深さ約10cmである。弥生時代前期の蓋と壺形土器の底部などが出土している。

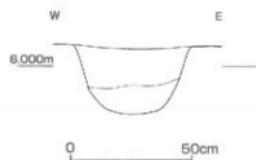


SD101

調査区を南北に貫くこの溝は、北端で幅15cm、南の広い部分で幅50cmを測る。深さは、遺構面からおおよそ30cmで、断面がV字に近い形状を呈している。

出土遺物は、弥生土器片が若干含まれていたが、固化して示せるような遺物はなかった。

この溝の埋土は、上層と下層に分けられる。上層は、濃灰色粘質シルトであり、下層は灰褐色砂まじりシルトである。



## 第2節 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物3棟、溝1条、土坑2基、井戸2基、ピット、鶴溝多数を検出した。



fig.16 調査6 中世遺構平面図

### (1) 掘立柱建物

掘立柱建物は、調査区の北西隅に集中しており、3棟が重なり合った状態で検出された。建物3棟を構成する柱穴にそれぞれに切り合いがなく、建物相互の新旧は判断できない。3棟の建物に伴う柱穴とその他ピットが混在しているため右図にそれぞれの建物を分離して示している。

SB301

主軸をN-38°Wにとる東西4間（約9.0m）×南北2間以上（約3.7m）の総柱建物である。建物の北と東が調査区の外に出ているため正確な規模は不明である。柱の間隔は、2.1mを測る。

柱穴の掘形は、直径20~30cmの円形である。断面観察による柱痕の確認はできなかったが、柱穴底部に柱の沈み込みによると思われる痕跡が検出された。この沈み込み痕は、直径10cmで10cm程の窪みである。

柱穴内から図示できる遺物は出土しなかった。出土遺物などからこの建物は、13世紀前半のものと考えられる。

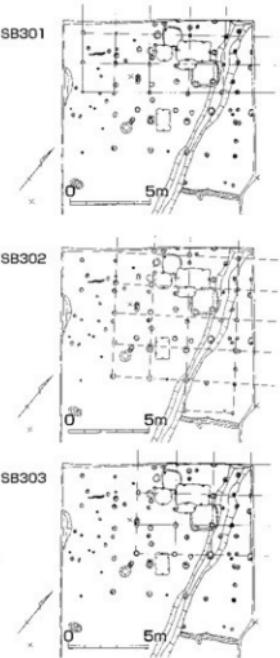


fig.17 西端地区 掘立柱建物配図

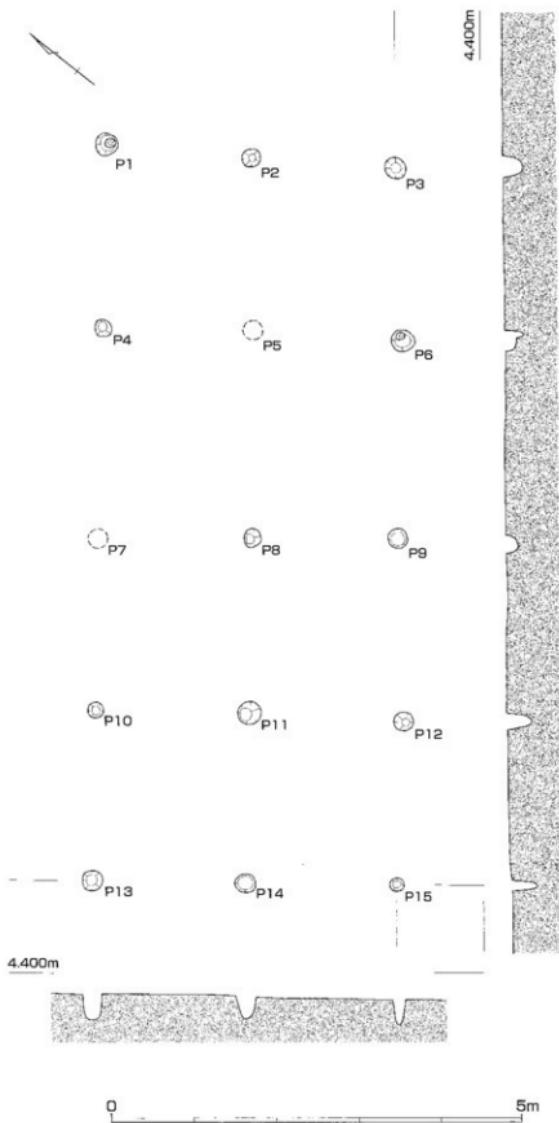


fig.18 SB301 平面·断面图

SB302

主軸をN-37°Wにとる東西3間（約7.7m）×南北4間以上（約9.8m）の総柱建物である。建物の北側が調査区の外に出ているため正確な規模は不明である。

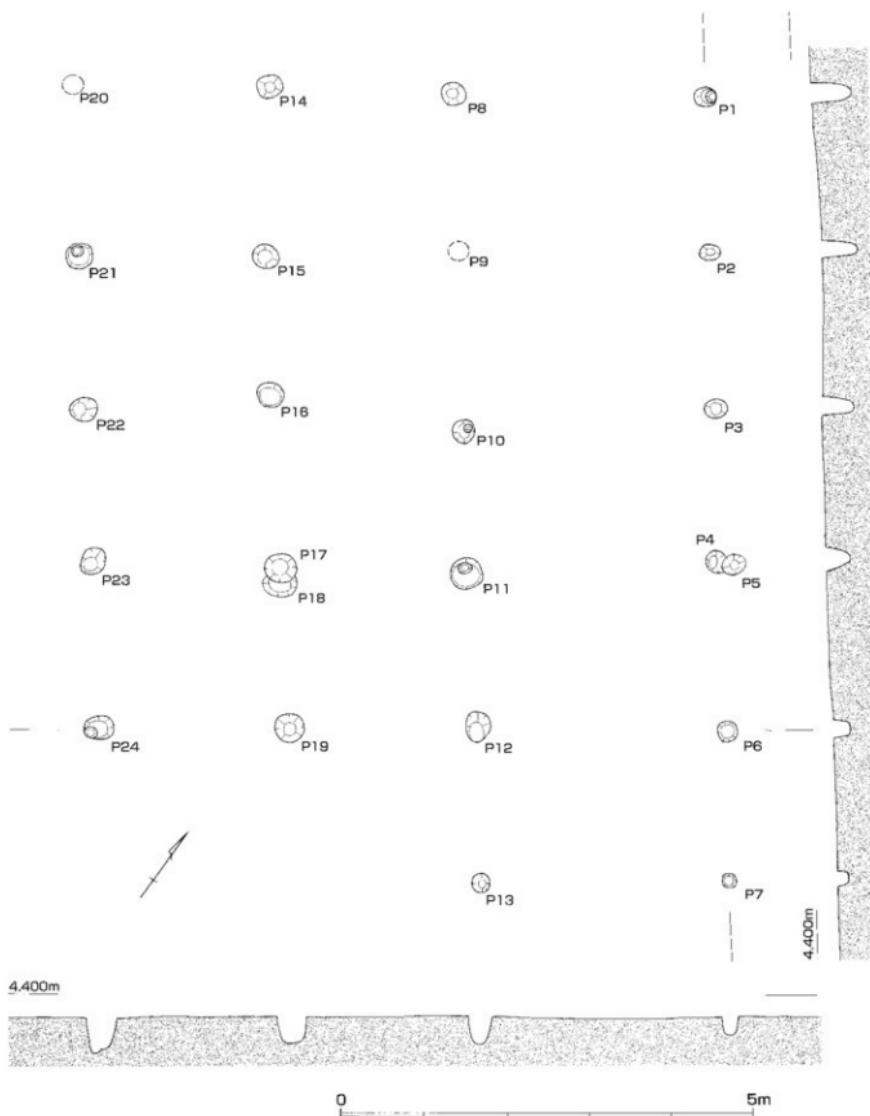


fig.19 SB302 平面・断面図

柱の間隔は、2.3mであるが、東端の柱穴列との柱の間隔は、3.0mと間が開いている。このことから南北棟で東側に廟を持つ建物と考えられる。さらに柱通りから南東部に1間分の軒の張出があることも考えられる。この2ヶ所の柱穴は小さく直径0.15m、深さ0.1mのものである。

その他の柱穴の掘形は、直径30cmの円形である。断面観

察による柱痕の確認はできなかったが、柱穴底部に柱の沈み込みによると思われる痕跡が検出された。この沈み込み痕は直径10cmで10cm程の窪みである。柱穴内からの図示可能な出土遺物として土師器皿(9)と須恵器塊(10)である。12世紀中～末頃の建物と考えられる。

#### SB303

主軸をN-36°50'Wにとる東西3間以上(約7.3m)×南北3間以上(約5.7m)の縦柱建物である。建物の北と東が調査区の外に出ているため正確な規模は不明である。

柱の間隔は、2.3mである。柱穴の掘形は直径40cmの円形であり、3棟中最大の規模である。柱穴内から図示できる遺物は出土しなかった。

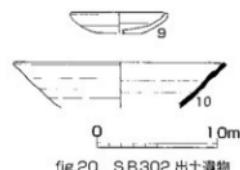


fig.20 SB302 出土遺物

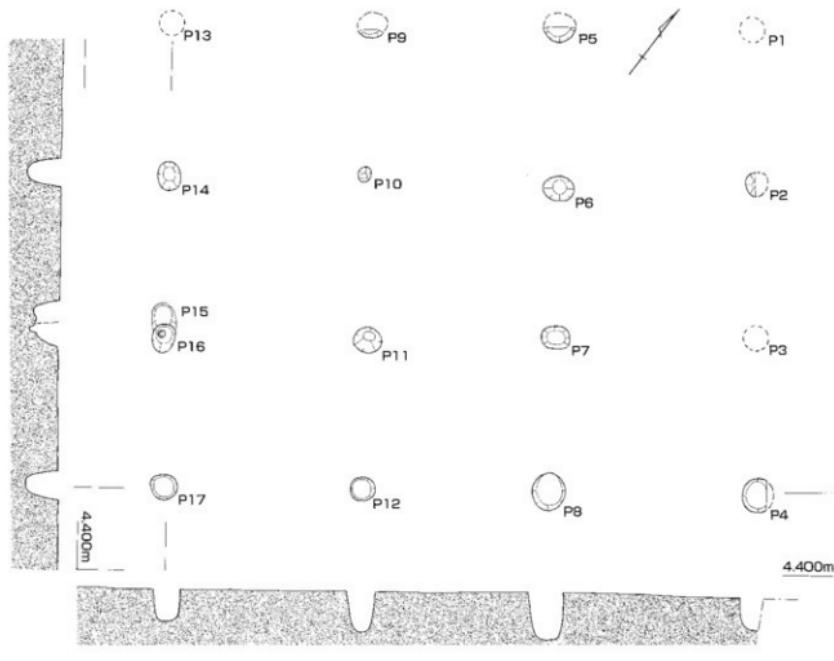


fig.21 SB303 平面・断面図

## (2) 溝

SD301

幅約1.0m、深さ約20cmで調査区北東隅部から南西方向に走る溝である。溝と切り合う柱穴はすべて柱穴が溝を切る。堆積土は黒褐色粘質砂泥で微量の土師器・須恵器と砥石が出土した。

## (3) 土坑

SK301

S K 301 は、1辺約1.8m、深さ約10cmの方形の土坑である。少量の土師器・須恵器が出土した。



SK302

S K 302 は、1辺約1.2m、深さ約5cmの浅い方形の土坑である。遺物は出土せず、ともに性格については不明である。

柱間の間隔からこの土坑は、S B301にだけに納まるところから何らかの関連遺構と考えられる。

## (4) 井戸

SE301

調査区西辺北で検出された井戸であるが、大半が調査区外にあるため、南北約2.5m、深さ約80cmだけ掘削したに止まる。少量の土師器・須恵器・陶器・土錘が出土した。遺物から他の遺構より時期は新しいものようである。

SE301

直径1.6m、深さ0.7m程度の規模をもつ素振りの井戸である。シルトと砂が交互に堆積している状況から、人為的に埋め戻されたと解釈される。おそらく、砂質上のため井戸壁面の崩落が激しかったことが原因であったと考えられる。理上からは遺物は出土しなかったが、周辺の状況から鎌倉時代頃のものと考えられる。

- |               |                          |
|---------------|--------------------------|
| 1 噴灰色粗砂混じりシルト | 6 灰色粗砂(噴灰色シルトがブロック状に入る)  |
| 2 茶褐色粗砂       | 7 黄褐色粗砂(暗灰色シルトがブロック状に入る) |
| 3 暗褐色粗質粗砂     | 8 噴灰色シルト(灰褐色粗砂混じる)       |
| 4 茶褐色粘質粗砂     | 9 灰褐色粗砂(噴灰色シルトがブロック状に入る) |
| 5 灰色粗砂        |                          |

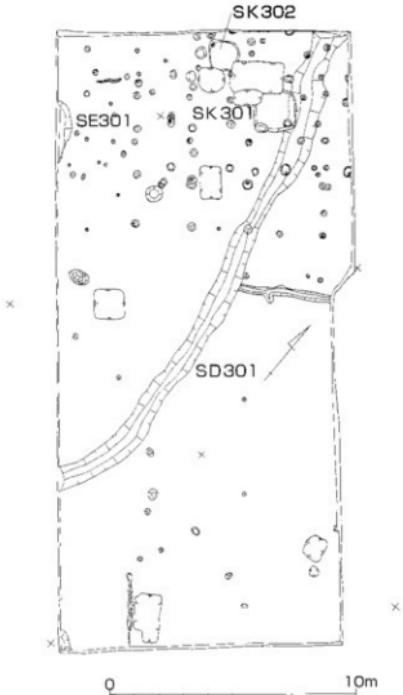


fig.22 調査6 東端地区遺構平面図

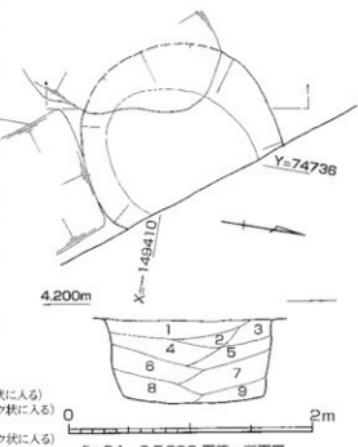


fig.24 SE302 平面・断面図

### (5) 鋸溝

調査地の東端では、中世の耕作に伴う鋸溝が良好な状態で検出された。

条里方向に合う幅20~50cmの溝多数が検出されたが、南西→北東方向のものが多く、北西→南東方向のもの少ない。この範囲に限ってみれば前者が後者よりも新しい。

溝の多くで底面に鋸の打ち込み痕が確認できたが、特にその遺存状況が良好であった S D302~S D308では以下のような状況を観察することができた。

表2 耕作痕跡打ち込み痕データ

遺構番号	鋸の刃先幅	打ち込み列の数	1mあたりの打ち込み回数(1列につき)	打ち込み者の向き
S D302	約15cm	2	(15回/2m=) 7.5回	南西
S D303	約15cm	1	(12回/2m=) 6.0回	南西
S D304	約15cm	2?	(5回/1m=) 5.0回	南西
S D305	約15cm	2	(13回/2m=) 6.5回	北東
S D306	約15cm	3	(16回/3m=) 5.3回	南西
S D307	—	—	—	—
S D308	約15cm	2	(12回/2m=) 6.0回	南西

打ち込み痕のプランはD形のものが多い(fig.25)。その断面を観察すると、幅の広い方が垂直に近い角度で、幅の狭い方が浅い角度になっている(図版5-2)。上廻化していない部分にまで深く鋸を打ち込み、土をかきあげながらこれを抜くという作業の痕跡であると考えた場合、断面の垂直に近い方が打ち込み、浅い角度の方が引き抜きの行為の痕跡と考えられるだろう。この推測が正しければ、打ち込み側の幅が鋸の刃先の幅を示していると考えてよい。その値は約15cmである。また刃先の向きから耕作者の向く方向も判断できることになる。こちらから耕し始めて、隣の溝へ移り、向こうから戻ってきてまた隣に移って向こうへ行くというふうにも見える。

鋸の打ち込み痕は約20cm足らずという間隔で、1mにつき5~6回打ち込んでいることが分かる。また、溝の中心で測った場合、溝の間隔は70cmから1mといったところだが溝底の打ち込み痕は1列で続くものもあれば2列のもの、そして3列のものとバラバラである。当然、3列のものは溝の幅が広く、1列のものは狭い。

S D304など切り合った溝が存在することもあり、すべての打ち込みが一時期の所産でないことも明らかである。しかし、S D302~S D308に関してみれば他の溝と切り合いはほとんどなく、ほぼ等間隔で並んでいること、底面の高さがほぼ共通していること、そして深耕の痕跡である鋸打ち込み痕が共通していることからするとこれらは一時期の所産である可能性が高い。畠立て溝が一時期の所産であって、なぜ鋸の打ち込みに1列・2列・3列があるのかよく分からぬが、類例を待ち今後考えてみたい。

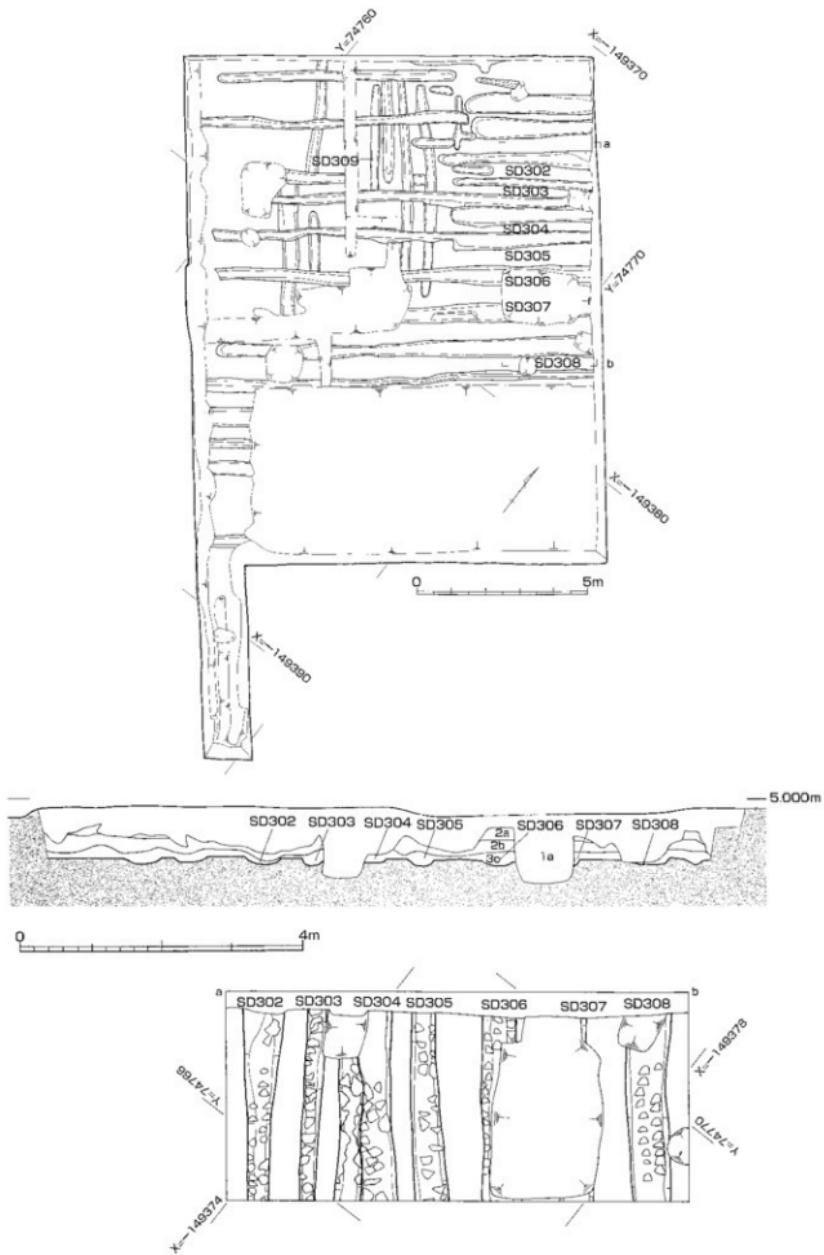


Fig.25 脱媒 6 西端地区勘探平面·断面图

### 第3節 小結

腕塚6地区では、中世の集落遺構の他に縄文時代晩期と弥生時代前期の遺構と遺物が検出された。縄文時代晩期と弥生時代前期の遺物について略述する。

(1)は滋賀單IIIb式かと考えられる深鉢である。(3)は口縁端部にもD字形の刻みをもつ船橋式と考えられる。(2・4・5)は長原式以降の突帯文土器である。(1~5)のいずれも色調は乳褐色系で胎土については在地的な特徴をもつものである。(1)については二葉町遺跡で最も古い時期に属する遺物である。(6~8)は弥生時代前期後葉に属すると考えられる。

中世の遺構では、掘立柱建物・井戸・溝・耕作痕などが検出された。西部は掘立柱建物が集中し、東部では耕作痕が検出された。基本的には遺構内からの出土遺物がほとんどなく時期を詳細に述べることができない。

S-B302には南側に1間分の張出部分がある。前述したが2×4間の主屋に東側に軒を出し、さらに南側に1間分の張出を設けたものと思われる。建物の復元について大方は平面形は矩形に復元されるのが合理的なようである。しかしながら絵巻などに表現される建物は、堂舎などの平面形は矩形であるが、民家はそれほど単純ではないようである。<sup>(1)</sup>建物の時期は柱穴内からの出土遺物から13世紀頃としておきたい。

東部の耕作痕は、今述べた建物よりやや新しく堆積した層位で検出されたものである。しかし現状の町割りとほぼ同一の方向性をもつ。今述べた建物の南側でも同一面でも耕作痕と考えられるものがある。また二葉6地区でも12~13世紀に属し、現状の町割りとほぼ同一の方向性をもつ耕作痕が検出されている。耕作痕の方向性は、中世の開発における重要な要素であり、治水灌漑を念頭において考察していかなければならない。<sup>(2)</sup>

これまでに蓄積された耕作痕の資料より、真北方向の耕作痕から現状の町割りと同一の方向性をもつ耕作痕に転換していく状況があるようである。おそらく律令国家支配が崩壊し、中世に移行していく過程のなかで行われたのではないかと思われる。また平氏政権による大輪田の泊修築に関連する開発も当地域では見逃してはならない要素であろう。まず現状の町割りと同一の方向性をもつ耕作痕の上限を把握することが重要な点となる。そしてどのような時期にその転換があったのかを検討していかなければならない。

さて腕塚6地区でえられた資料から、集落の景観や特徴を挙げるのは困難である。諸点については後章に譲ることとして、気付いた点について述べる。

腕塚6地区は集落の中で占める位置は、二葉町遺跡の北端部にあたると考えられる。

腕塚6地区のみならず、二葉町遺跡全体として集落内もしくは集落周辺において大規模な水路などを掘削したというような開発の状況は現状では知られていない。おそらく前時代の状況を受け継ぎ再開発を行った結果が、今回調査されたものと思われる。いずれにせよ集落景観復元の基礎資料を得ることができた意義は重要である。

#### 註

(1) 今和次郎『日本の民家』岩波文庫1989 時代は異なるが、用途目的に応じて様々な平面形をもつようである。

(2) 広瀬和雄『中世への胎動』岩波講座日本考古学第6巻1986、佐久間貴士『発掘された中世の村と町』岩波講座日本通史第9巻中世3 1994

(3) 山田清朝編『若松町遺跡』神奈川市教育委員会2000では弥生時代末期から古墳時代初期の耕作痕は真北方向に近い。また平成12年度松野遺跡第9次調査(新長田駅北地区区画整理)でも古墳時代中期頃の同様の方位をもつ耕作痕が検出されている。

## 第4章 久保町6丁目の調査

### 第1節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては、溝1条（SD101）と土坑1基（SK101）を検出した。

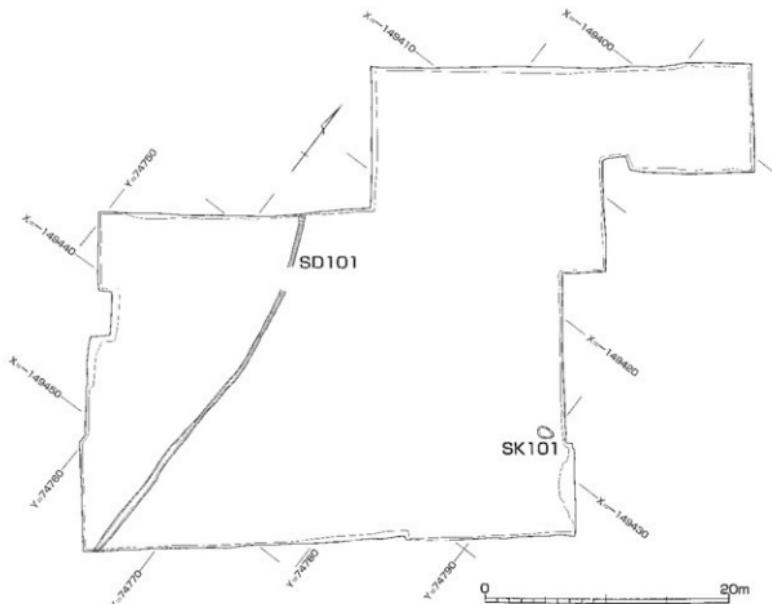


fig.26 久保6 弥生時代遺構平塗図

#### SD101

SD101は久保町のほぼ真ん中を東北方向から南西方向へ流れる、幅40cm、深さ20cmの溝である。遺物は、小片のものが少量出土したのみであり、遺構の明確な時期は不明であるが、中世の造構面より下層であり、溝から出土した遺物に新しい様相の遺物が見られないことから弥生時代の遺構と考えられる。

この溝の近くでは壺形土器1点（12）が出土している。この遺物は、口部に段を持ち、肩部に2条の太い沈線を施している。これらの特徴から弥生時代前期のものと考えられる。

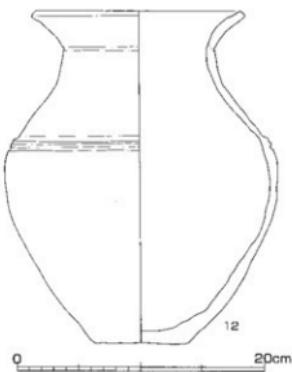


fig.27 弥生時代造構面直上出土遺物

## SK101

調査区南東部の東壁付近で検出した幅0.8m、深さ0.15mの土坑状の落ち込み造構である。全長1.4m以上を検出したが、東西の両端は中世の鶴溝により切られており、全体の規模については不明である。埋土は2層に分かれ、上から暗褐色シルト質極細砂、上層よりもやや明るい暗褐色シルト質極細砂である。

底面部付近で、2個体分の弥生土器片が出土した。

(13)は壺形土器である。上半部を欠損する。残存するのは肩部より以下である。内面には粘土紐の接合痕が明瞭に観察でき、外面の調整はヘラミガキ、内面はナデ調整である。胎土は1.5~2.0mm大の砂粒を多量に含む。肩部には3条の沈線を施した後に、ヘラミガキにより突帯をつくり出している削り出し突帯が施されている。突帯の多条化が始まっているものである。この他削り出し突帯の下部には双頭渦文状の貼り付け突帯が施されている。この貼り付け突帯は奈良県唐古・鍵遺跡<sup>⑨</sup>で「弧形の両端を内方に巻き込んだ一種の双頭渦文状ともいべき形状を、浮文を以て表現」と報告がされている例と類似する。この他、大阪府山賀遺跡<sup>⑩</sup>でも同様の例が出土しており、「貼り付け巴紋」として報告がされている。神戸市内での出土例は稀なものである。

(14)は壺形土器の底部である。外面はヘラミガキにより調整がなされている。胎土の状況、色調など(13)と類似する。

出土遺物からSK101の時期は弥生時代前期後半であると考えられる。

二葉町遺跡の周辺では、弥生時代前期の遺物は松野遺跡でも完形の甕等が出土している。松野遺跡は二葉町遺跡と距離も近接しており、その関係が注目される。

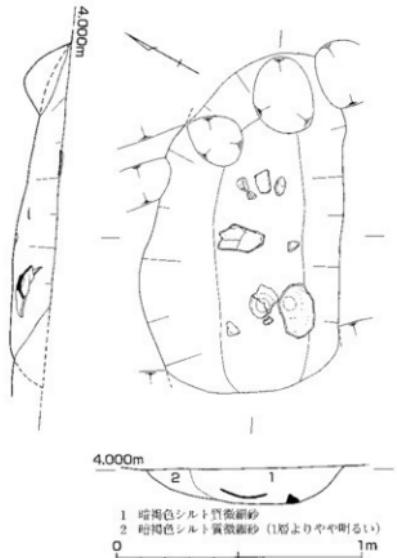


fig.28 SK101 平面・断面図

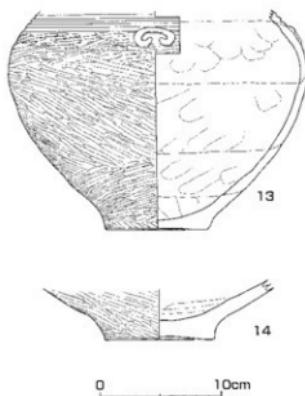


fig.29 SK101 出土遺物

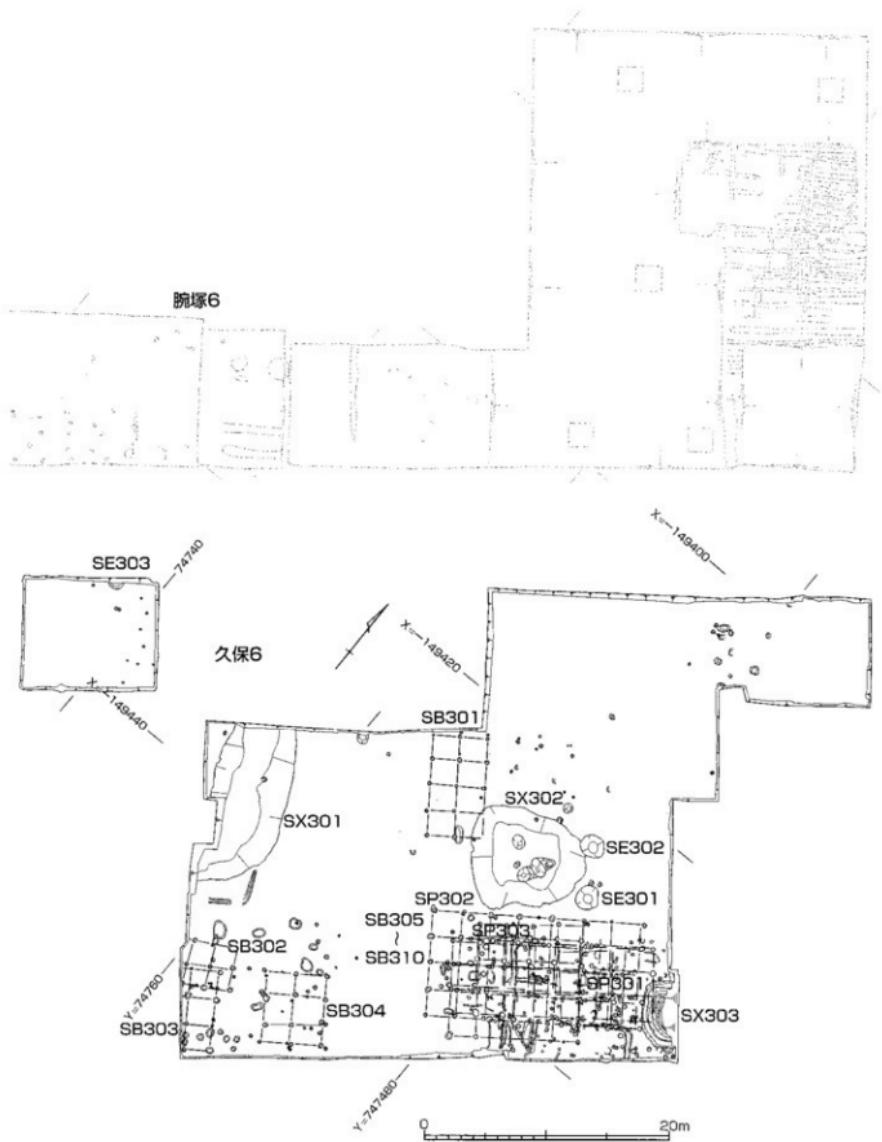


fig.30 久保6 中世遺構平面図

## 第2節 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物10棟、井戸4基、墓1基、不明大型土坑3基、溝、鋤溝多数を検出した。

### (1) 掘立柱建物

SB301

主軸をN-35°50'Wにとる東西2間(約4.3m)×南北4間(約8.0m)で34m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。東列の南東隅の柱穴は、SX302の構築時に削平されて消滅している。柱の間隔は、およそ2.1mである。

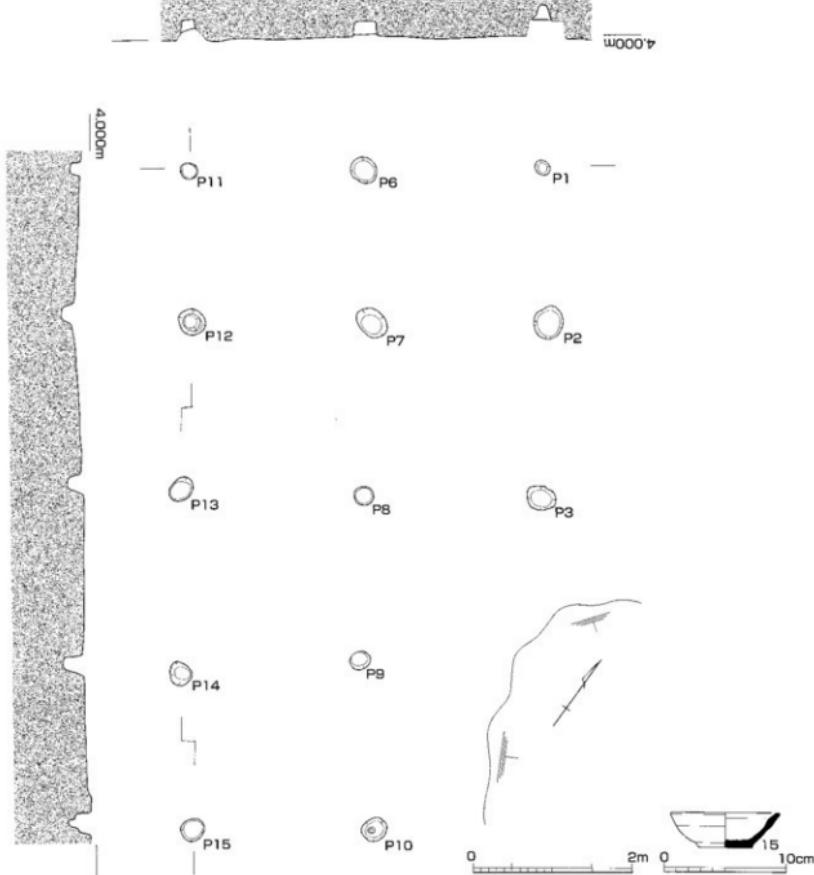


fig.31 SB301 平面・断面図

fig.32 SB301 出土遺物

柱穴の掘形は、20~40cmの円形である。断面観察による柱痕の確認はできなかったが、柱穴底部に柱の沈み込みによると思われる痕跡が検出された。出土遺物として図示できるものは、須恵器皿(15)が柱穴内より出土した。出土遺物などからこの建物は、11世紀末~12世紀初のものと考えられる。

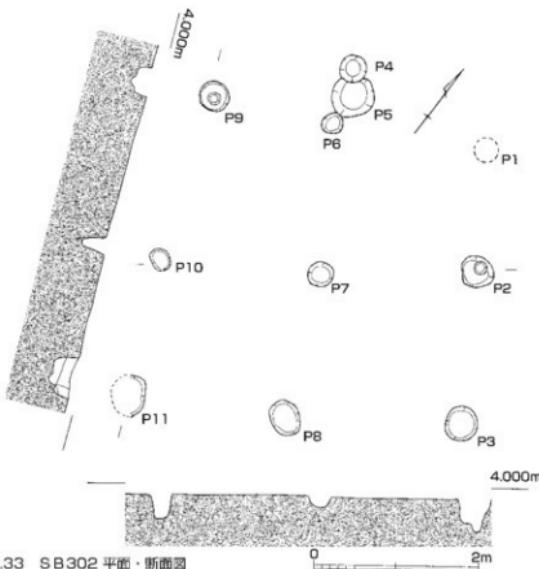


fig.33 SB302 平面・断面図

#### SB302

主軸を東側列でN-30°W、西側列でN-24°Wにとる東西2間以上(約4.0m)×南北2間(約3.7m)の総柱建物である。北東隅の柱が攪乱により消滅しており、建物の西半分が調査区の外に出ているため正確な規模は不明である。

柱の間隔は、西側の列で2.1m、東側の列で1.8mあり、主軸と柱間の間隔が違うため、平面的に見ると台形を呈しているように見える。柱穴の掘形は、20~40cmの円形である。断面観察による柱痕の確認はできなかったが、柱穴底部に柱の沈み込みによると思われる痕跡が検出された。この沈み込み痕は、直径15cmで10cm程の窪みである。

出土遺物として図示できるものは、瓦器皿(16)と須恵器塊(17)が柱穴内より出土している。出土遺物などからこの建物は、13世紀前半のものと考えられる。

#### SB303

主軸をN-30°Wにとる東西1間以上(約2.4m)×南北3間(約6.4m)の総柱建物と考えられる。建物の西半分が調査区の外に出てしまい、南側についても調査区の外に接しているので正確な規模は不明である。

柱の間隔は、2.1mある。柱穴の掘形は、20~50cmの円形である。断面観察による柱痕のは、直径30cmと比較的大きめである。柱穴の中には、柱痕と遇構面において、人頭大

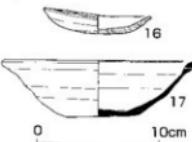


fig.34 SB302 出土遺物

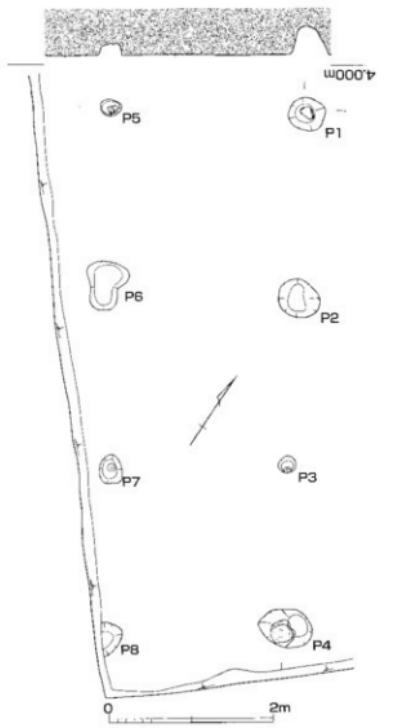


fig.35 SB303 平面・断面図



fig.36 SB303 出土遺物

の平坦な面を上に向けた石をもったものがみられ、礎石または根石として補修時に入れられたものと思われる。出土遺物として図示できるものは、須恵器壺(18)が柱穴内より出土している。出土遺物などからこの建物は、13世紀前半のものと考えられる。

この建物の西側にある第1次調査(fig.5)の東南隅において3棟分の掘立柱建物が重なって検出されているが、その内の1間分のみ検出されたSB3と呼ばれている建物が柱の間隔がSB303と同じであり、主軸もN-30°Wに振っていることから同一の建物の可能性がある。もし、この建物が同一のものであれば、2間×3間の規模をもつ南北棟の建物となる。

#### SB304

主軸をN-35°Wにとる東西2間(約5.0m)×南北3間(約5.7m)で29m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。柱の間隔は、およそ1.8mである。

柱穴の掘形は、20~40cmの円形である。断面観察による柱痕の確認はできなかったが、柱穴底部に柱の沈み込みによると思われる痕跡が検出された。この沈み込みの痕跡は、直径15cm、深さ30cm前後あり、底のレベルは均一に揃っている。

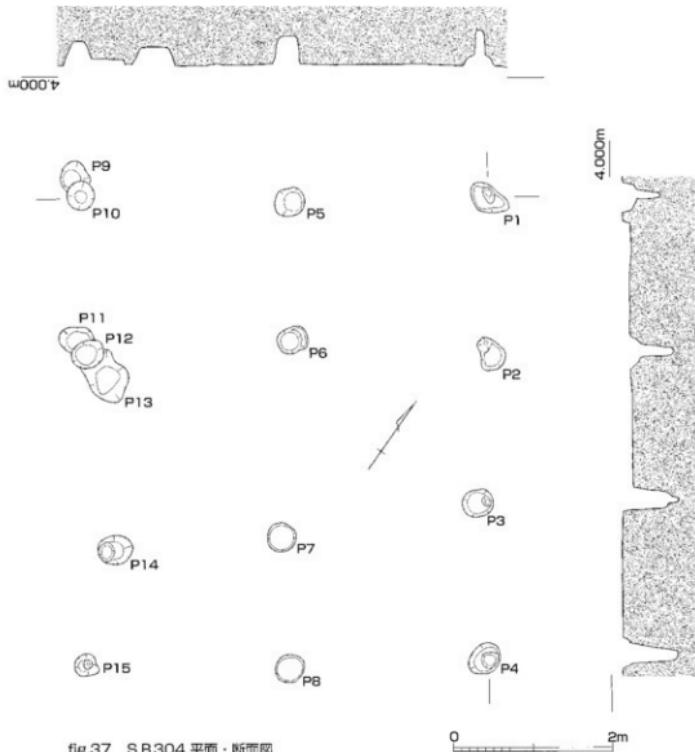


fig.37 SB304 平面・断面図

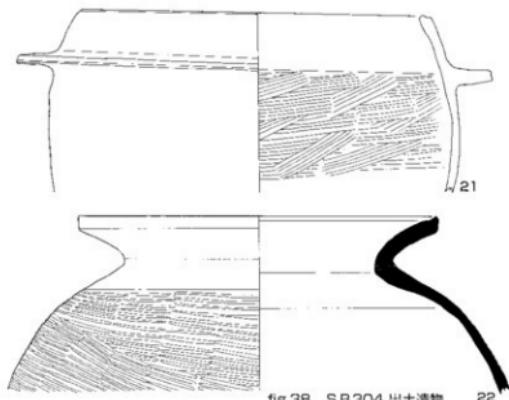
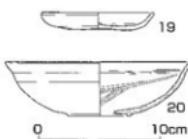
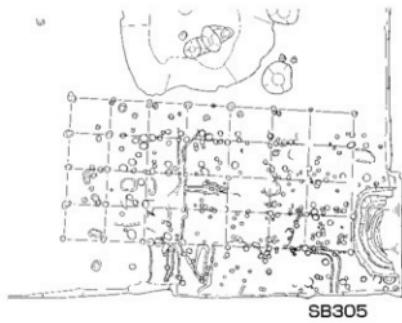


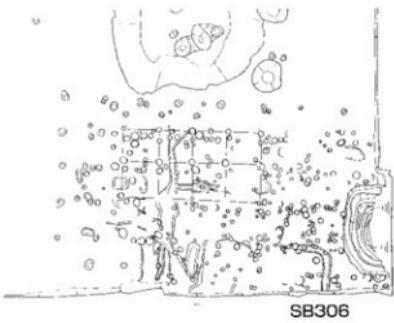
fig.38 SB304 出土遺物 22



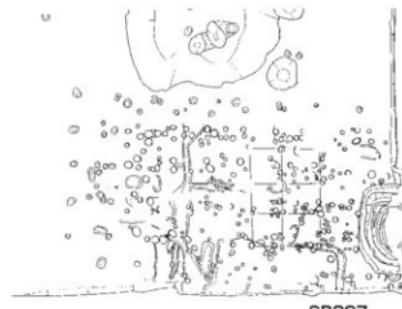
出土遺物として図示できるものは、上師器皿(19)、瓦器塊(20)、羽釜(21)、須恵器甕(22)が柱穴内より出土した。須恵器甕はP12で出土しているが、遺構面において柱の回りに覆うような状態で出土した。柱の補強、補修に使用された可能性がある。出土遺物からこの建物は、13世紀初のものと考えられる。



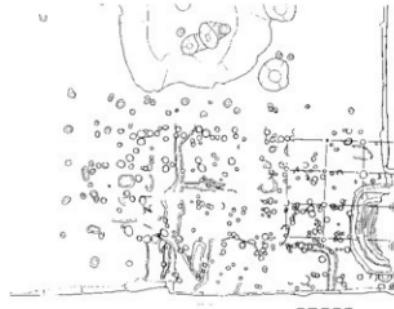
SB305



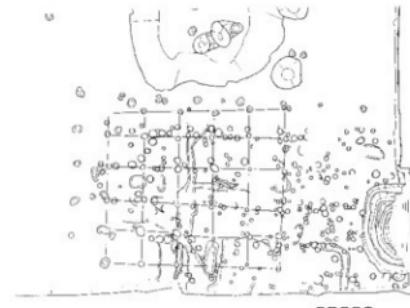
SB306



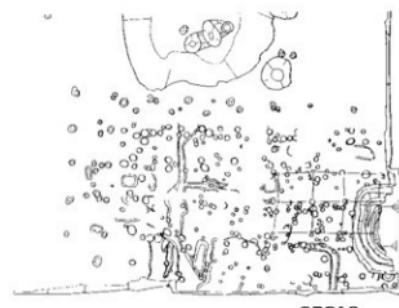
SB307



SB308



SB309



SB310

0 10m

fig.39 久保6 南東隅櫛立柱建物群配画図



fig.40 SB305 平面・断面図

## SB305

主軸をN-35°Wにとる東西7間(約17.8m)×南北4間(約8.7m)で約154.9m<sup>2</sup>を有する総柱建物で、久保町6丁目において検出された中世の掘立柱建物群の中では最大規模である。

柱の間隔は、最小で2.2m、最大で2.9mであるがほぼ2.3mである。

柱穴の掘形は、20~50cmの円形である。断面観察による柱痕は直径20cm前後である。柱穴の中には、柱穴底部に柱の沈み込みによると思われる痕跡が確認された。この沈み込みの痕跡は直径14~18cm、深さ10cm前後であるが、底面のレベルは均一ではない。

柱穴内には根石等は確認されなかった。

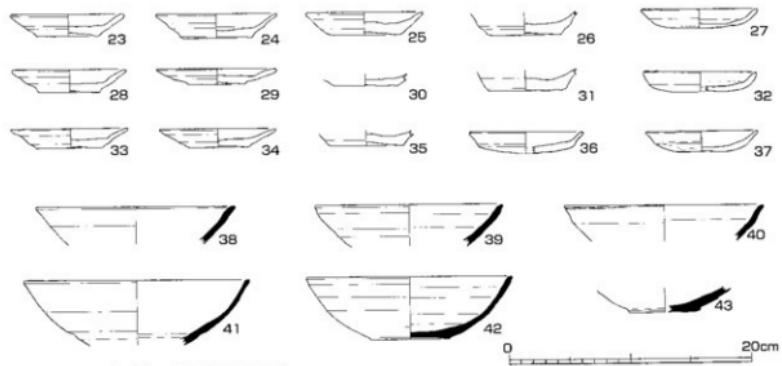


fig.41 SB305 出土遺物

出土遺物で図示できたのは、(23~47)  
である。

(23~37)は上彌器の皿である。(23~  
26・28~31・33~35)は底部からやや外  
反しながら立ち上がる体部をもつタイ  
プで底部は回転糸切りである。(36)は  
体部からヨコナデにより屈曲して外反

しながら立ち上がるタイプである。(27・32・37)は体部上半がヨコナデによる成形で、下半  
にはユビオサエが確認される。(38~43)は須恵器の境で、(38・40)のように口縁がやや外反  
するタイプや、(39)のように口縁が内側気味にやや立ち上がるタイプ、(41)のように丸くお  
さめるタイプ、(42)のように口縁端部にやや内傾する斜面をもつタイプがある。底部が確認  
できる(42・43)は回転糸切りである。

(44~47)は金属製品である。いずれも鉄製品で、釘と考えられる。断面形状は全て台形  
である。

出土遺物からSB305の時期については鎌倉時代前葉(12世紀末葉~13世紀初頭)と考え  
られる。

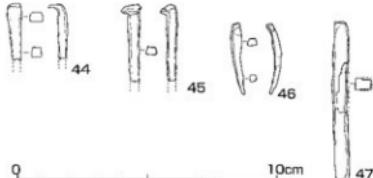


fig.42 SB305 金属製品

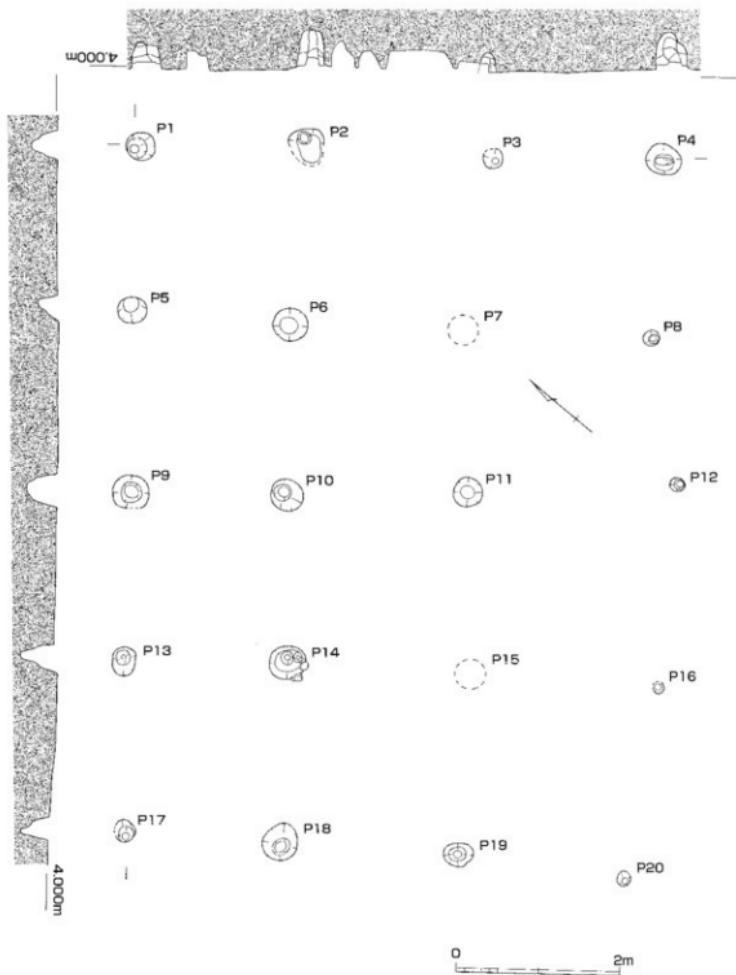


fig.43 SB306 平面·断面图

SB306

主軸をN-40°Wにとる東西4間（最大8.4m、最小8.8m）×南北3間（最大6.5m、最小6.1m）の総柱建物である。柱の間隔は、2.1mを測る。

柱穴の掘形は、15~45cmの円形である。断面観察による柱痕は直径15~20cmである。中には、柱穴底部に柱の沈み込みによると思われる痕跡が確認された。この沈み込みの痕跡は直径14~18cm、深さ10cm前後で、底面のレベルはほぼ均一である。

塊柱穴の中には、P9のように多くの遺物が出土するものも認められた。P9では須恵器、土師器皿、鍋、白磁碗、土鍾が出土した。図示できたのは(48~59)である。

(48~51・55・57~59)は上師器である。(48~51・55)は皿で、(48)は直線的に体部が立ち上がるタイプ、(49)はヨコナデによる成形で外反し、口縁端部を丸く収めるタイプである。(50・51)はヨコナデ、ユビオサエにより成形がなされている。(55)は大皿で口縁端部を上方につまみ上げている。(57~59)は鍋で、鉢形の体部に「く」の字形に屈曲して短い口縁部が直線的に開く。頸部内面の稜は明瞭である。(52)は土師質の有溝上鍾である。

(53・54)は須恵器の塊で、底部は回転糸切り、口縁部は丸く収める。(56)は白磁の碗（IV類）で、玉縁状の口縁を呈するものである。

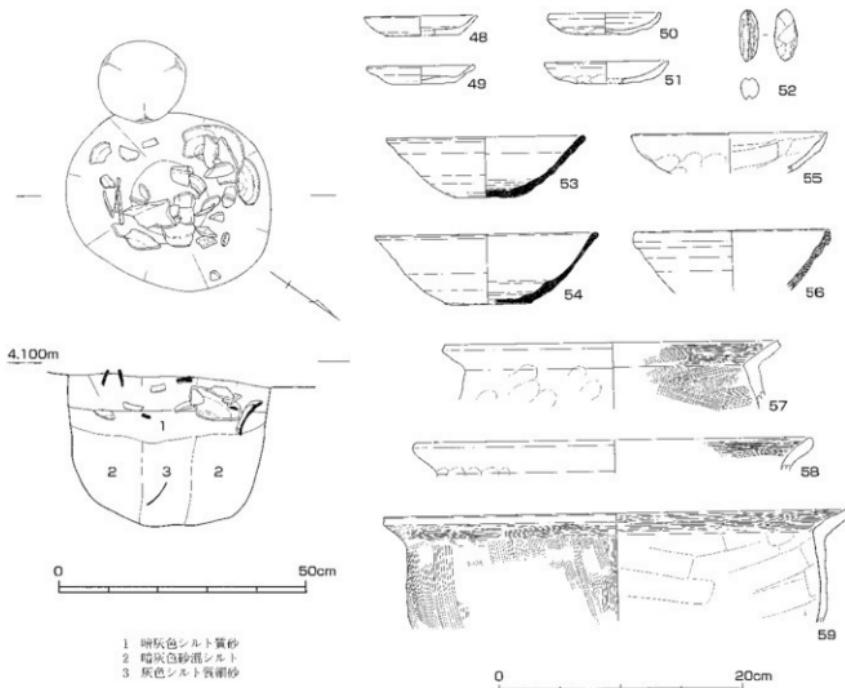


fig.44 SB306P9平面・断面図・出土遺物

P10では須恵器小皿2点が柱痕内下部から出土している他、土師器、土錐が出土した。出土遺物の内、図示できたのは(60~64)である。

(60)は瓦器皿であり、体部下部に強いヨコナデによる屈曲をもつ。(61)は土師器皿である。(63~64)は須恵器の小皿で底部は回転糸切り、低平な器高である。(62)は有溝土錐である。

(65~67)はP11からの出土遺物の内、図示できたものである。

(65)は土師器の皿、(66)は須恵器の小皿である。(67)は土師器の托で、回転糸切りの底部立ち上がり屈曲して外方へ開く体部をもつ。口縁内面に1条の沈線を施す。

(68~70)はP18からの出土遺物の内、図示できたものである。

(68・69)は土師器の皿で、(69)は器高は低く、外方へ開く。(70)は有溝土錐である。

(71~75)はS B306内の他のピットからの出土遺物である。(71・72)が土師器の皿で(71)は非常に器高が低い、(73)は須恵器小皿で(63・64)と同様のタイプ。(74・75)は須恵器の塊である。

これらの出土遺物から、S B306の時期は平安時代末葉～鎌倉時代初頭(12世紀後半)と考えられる。

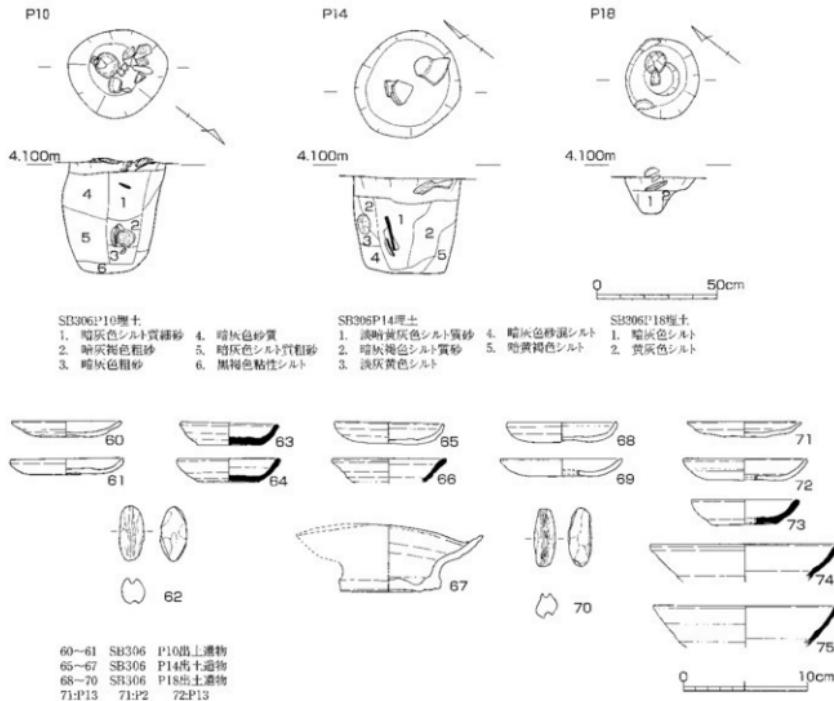


fig.45 S B306P10・14・18 平面・断面図・出土遺物

SB307

主軸をN-41°Wにとる東西2間(南辺4.6m、北辺4.1m)×南北3間(東辺5.6m、西辺6.0m)の総柱建物である。西側と中央の北から1間のピットについては、攪乱の影響により検出されなかった。柱の間隔は、西半で1.9m、東半で2.6m~2.2mと西半部がやや狭い。東半部では、2.2mを測る。

柱穴の掘形は、20~60cmの円形である。断面観察による柱痕は直径20~25cmである。中には、柱穴底部に柱の沈み込みによると思われる痕跡が確認された。この沈み込みの痕跡は直径10~16cm、深さ10cm前後で、底面のレベルはほぼ均一である。

SB307からの出土遺物で図示できたのは、(76)のみである。

(76)はP5から出土した右溝上鍤である。土師質で、手づくね後にユビナデにより成形している。

SB307からの出土遺物は少量であるため、時期の特定は困難であるが、出土遺物から平安時代末~鎌倉時代初頭頃(12世紀後半)の時期が考えられる。

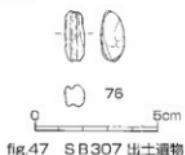


fig.47 SB307 出土遺物

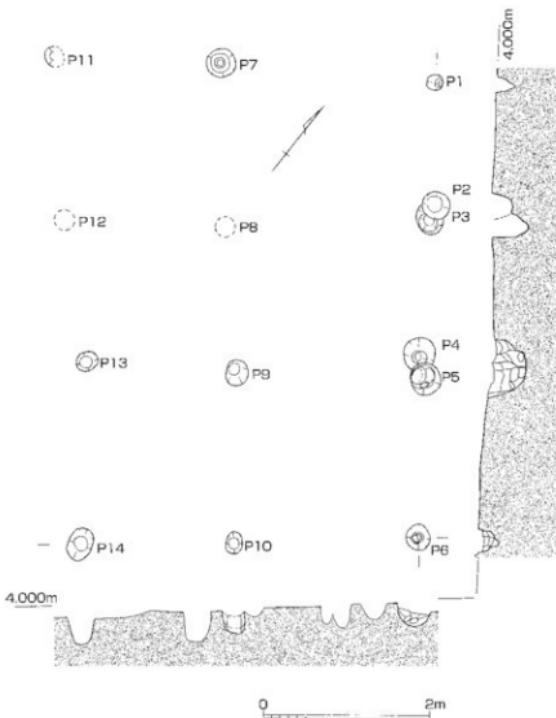


fig.46 SB307 平面・断面図

## SB308

主軸を N-38° W に据る東西 2 間(約4.6m) × 南北 3 間(約6.0m) で約27.6m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。柱の間隔は2.2m~2.3mである。柱穴の掘形は、20~50cmの円形である。断面観察による柱痕は直径10cm~15cmで、最大のもので20cmである。

S B308 からの出土遺物の中で図示できたものは(77~80)である。

(77~79)は瓦器で、高台断面は(76)が三角形、(79)は沈線状に接地面が窪む。(80)は黒内面黒色の A 類である。(80)については混入品と考えられる。

出土遺物から S B308 の時期は平安時代末~鎌倉時代初頭(12世紀後半)と考えられる。

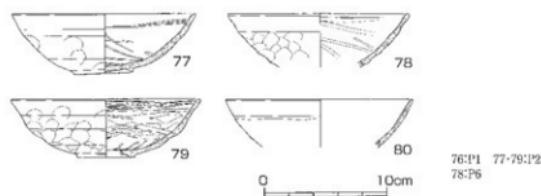
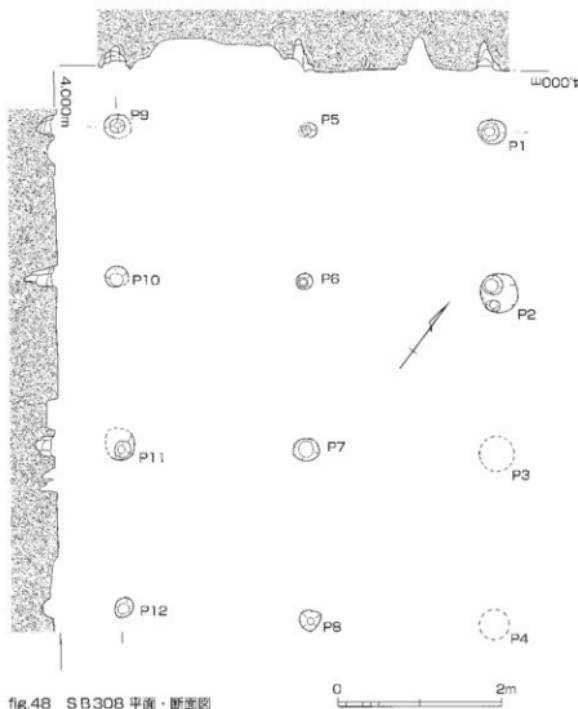




fig.50 SB309 平面・断面図

SB309

主軸を N-37° W にとる東西5間(約10.5m)×南北2間(最大9.6m、最小9.3m)の総柱建物である。

柱の間隔は中央部は主軸中央の1間分が2.5mと広く両側2間分は1.5m前後である。柱穴の掘形は、直径20~60cmの円形で、断面観察による柱痕は20cm前後である。

P6では須恵器塊1点(88)が出土した。祭祀に関連して埋納されたものであると考えられる。

S B 309 からの出土遺物で図示できたのは(81~97)である。

(81~85・88)は土師器である。(81~85)は皿、(88)は羽釜で、口縁端部は内側に内傾する。(86・87)は瓦器である。両者共塊で、(86)はユビオサエ成形後、口縁部はヨコナデにより仕上げを行い、内面には圓線状のヘラミガキが施される。(87)は高台断面は三角形である。(89)は須恵器の塊で、回転糸切りの底部から直線的に立ち上がる体部をもつ。(90・91)は白磁の碗(IV類)である。玉縁状の口縁を呈し、(91)では体部内面下部に一条の沈線が認められ、高台はケズリにより造り出されている。(92~93)は上師質の有溝土鍤である。手づくね後に、ユビナデにより成形されている。(94~97)は金属製品で、全て鉄製品である。(94~96)は釘、(97)は紡錘車である。

出土遺物から S B 309 の時期は鎌倉時代前半(12世紀末~13世紀初頭)と考えられる。

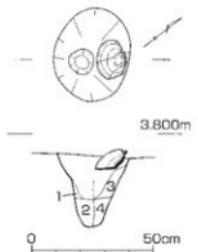


fig.51 SB309 P6平面・断面図

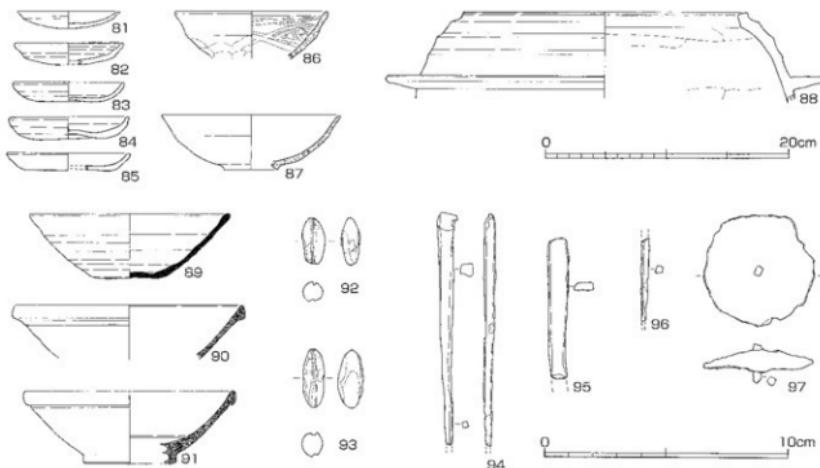


fig.52 SB309 出土遺物

SB310

主軸を N-38° W に据える東西 3 間 (約 6.2m) × 南北 2 間 (約 3.6m) で約 22.3m<sup>2</sup> を有する  
縦柱建物である。柱の間隔は中央部の 1 間分が 1.8m と狭いが、他は 2.3m を測る。柱穴の掘  
形は、直径 15~35cm の円形である。

出土遺物が少量で時期の特定は困難だが、概ね鎌倉時代前半 (12世紀後半) と考えられる。

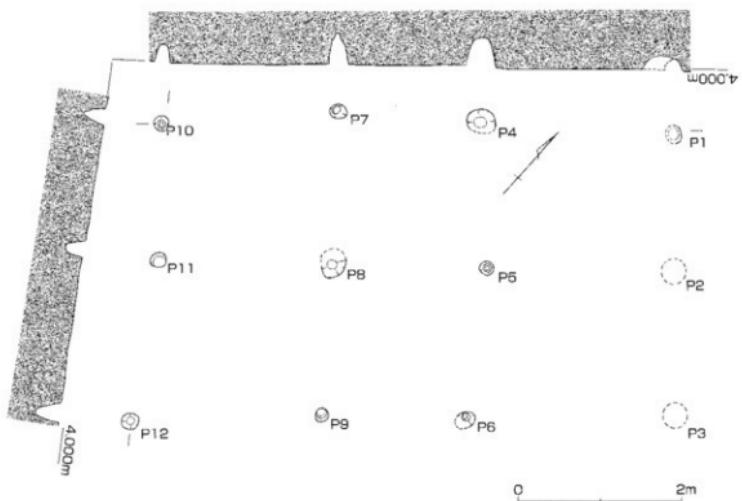


fig.53 SB310 平面・断面図

## (2) ピット

建物を構成するピット以外でも、多量の遺物が出土したピットが確認された。土師器、  
瓦器の小皿を主体とするもので、地鎮祭祀に伴うものと考えられる。

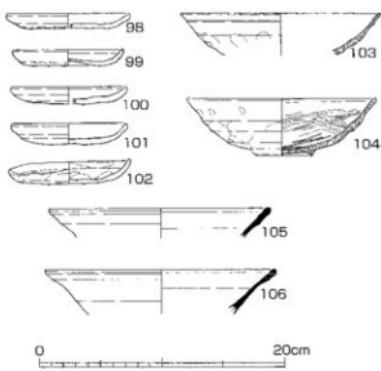
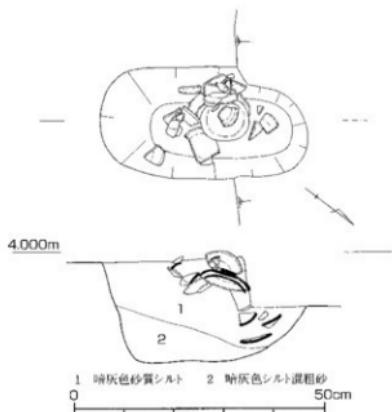


fig.54 SP301 平面・断面図・出土遺物

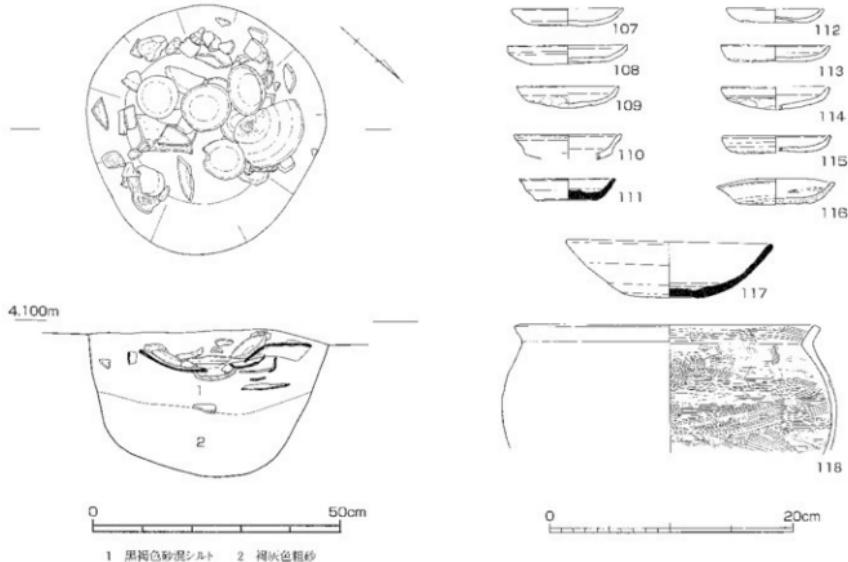


fig.55 SP302 平面・断面図・出土遺物

#### SP301

S P 301 は調査区南東部に位置する直径42cm、短径23cm、深さ20cmの楕円形のピットである。出土した土師器の皿は、口縁部を下にして埋納されていた。出土遺物で図示できたのは(98~106)である。(104)の瓦器塊はいわゆる「和泉型」<sup>(1)</sup>のもので、口縁部下部外間に指穴による柱みを等間隔に巡し、内面には圓線状のヘラミガキ、平行線状の暗文を施す。

S P 301 はこれらの出土遺物から鎌倉時代初頭(12世紀末~13世紀初頭)と考えられる。

#### SP302

S P 302 はS B 306 P-9の東側に隣接する直径50cm前後、深さ29cmの円形のピットである。土師器、瓦器、須恵器の小皿を主体とする比較的まとまった量の遺物が出土した。図示できたのは(107~118)である。

S P 302 の時期はこれらの出土遺物から鎌倉時代初頭(12世紀末~13世紀初頭)と考えられる。

#### SP303

調査区南東部で検出した直径50cm、深さ22cmのピットである。出土遺物から平安時代末~鎌倉時代初頭(12世紀後半)と考えられる。

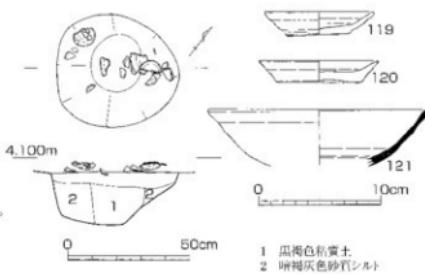


fig.56 SP303 平面・断面図・出土遺物

SP出土  
金属製品

久保町6丁目において検出されたピットからは金属製品(122)～(125)が出土しているものがある。122～124は釘と考えられるが、完全に折れ曲がったもの(122)や抜取りの際に捩じられたもの(123)がある。(125)は鉄錐と考えられるが、先端が欠損しているため詳細は不明である。

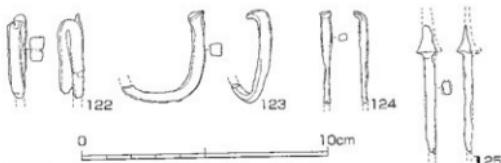


fig.57 SP出土金属製品

(3) 銚溝



fig.58 久保6 銚溝平面図

久保町6丁目では多数の銚溝が検出された。その方向は大半がN-40°W前後であるか、若しくはこれに直交するものである。いずれも幅20cm前後、深さは5～10cm前後である。

これら銚溝からの出土遺物の内、図示できたのが、(126～131)である。上師器は皿(126)、塊(127)が出土した。(127)は白磁碗(IV類)である。(128・129)は上師質の有溝土錠、(131)は須恵器の片口鉢である。これらの出土遺物から銚溝の時期は平安時代後半(12世紀中葉～12世紀後半)と考えられ、掘立柱建物群の造営が開始が始まされる直前まで機能していた事が伺われる。

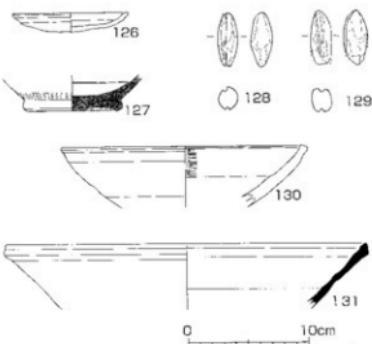


fig.59 銚溝出土遺物

#### (4) 井戸

SE301

S B305 の北側に隣接して検出された素掘りの井戸である。掘形の直径が 2 m の円形をしている。深さは約 1 m で淡灰黄色粘質土の中で収まっており、湧水層である粗砂層には到達していない。井戸の底部の構造は、平坦になっており曲物などを据えつけた痕跡は検出されなかつた。土層断面から、薄いレンズ状の堆積が初期堆積として存在するが、最終的には細かなブロック状の土が堆積していることから井戸廃絶後に人为的に埋め戻された可能性がある。出土遺物から 12世紀中～末頃に廃絶した井戸と考えられる。

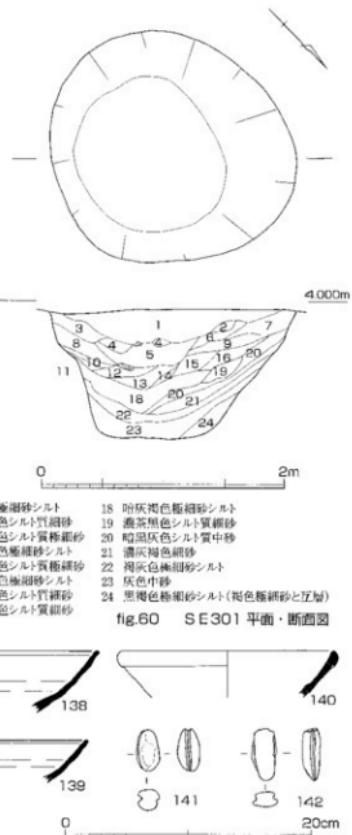


fig.60 SE301 平面・断面図

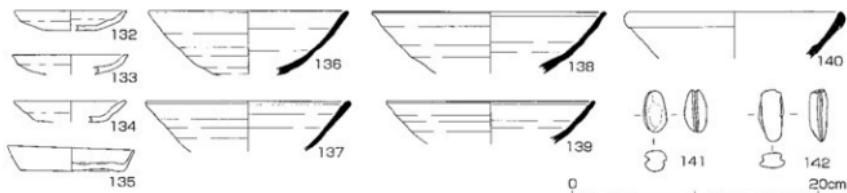


fig.61 SE301 出土遺物

SE302

SE301 の北側に隣接して検出された井戸である。掘形の直径が、約 1.8 m の円形を呈している。井戸の深さは約 3.8 m あり、底は湧水層と思われる粗砂層に到達している。

井戸の構造は、逆円錐形に掘形を掘削して粗砂層に到達しても、さらに 1.2 m 掘り進み、標高 0 m に到達している。底まで掘ると、20cm 程度を整地して曲物 (185-186) を 2段据えつけている。その上に、長さ 60cm、幅 25cm、厚み 2.5cm の表面を手斧で丁寧に平滑に仕上げた板の両短辺を L 字形に切欠をいれ枠をつくりだした 4枚をそれぞれ組み合わせた枠状のもの (181-184) を設置している。枠状木棒の上面で四隅に 15~20cm 程の不定形の平坦面をもつ石を礎石状に基礎として据え、その上に長さ約 20cm、5 cm 角の小さな柱を建て、それぞれの小柱を井桁状に角材 (159-162) を組んで設置している。この井桁組までくると粘土層まで組上がることになる。井桁組の外側から継板を一边に 4枚並べている。この継板は、

長さ1.9m、幅20cm、厚み1~1.5cmの板材(143~158)である。板材の中には、木目や節目などから明らかに同一の木から切削りをして板をつくりだしたことがわかるものがある(143~148・151~155)。これら縦板の中間には内側から横桟を添えた痕跡と一部残欠(163~167)が検出された。

井戸側は、縦板が内側に崩壊した状態で検出されたため上部構造については、不明であるが残存していた木組みの構造から縦板組横桟留構造の井戸に分類されると考えられる。また、掘形の下半部では崩壊に伴い一部が垂直に移動した地崩れの痕跡が粘土層の擦れから観察することができる。

井戸側に使用されている板材は、樹種同定の結果、ヒノキが圧倒的に主体を占めており、スギ、ツガ属、シイ属、モミ属、コウヤマキなどが少量使用されている。板の一部に抉り

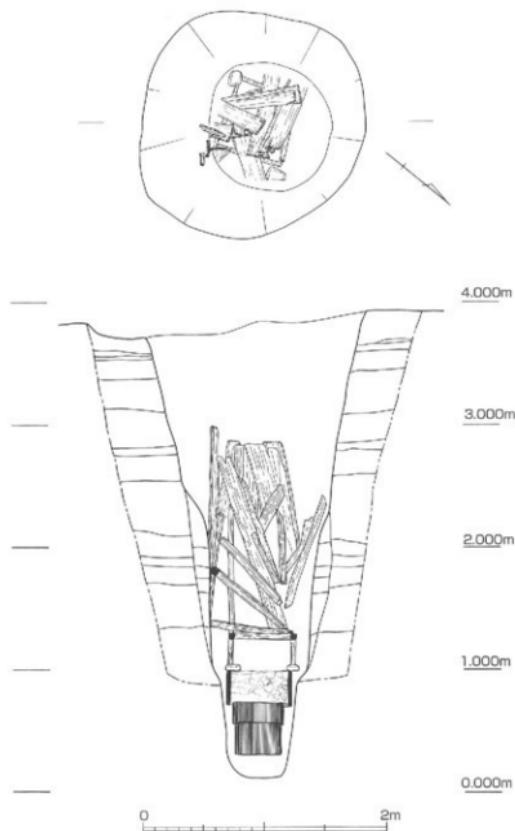


fig.62 SE 302 平面・断面図

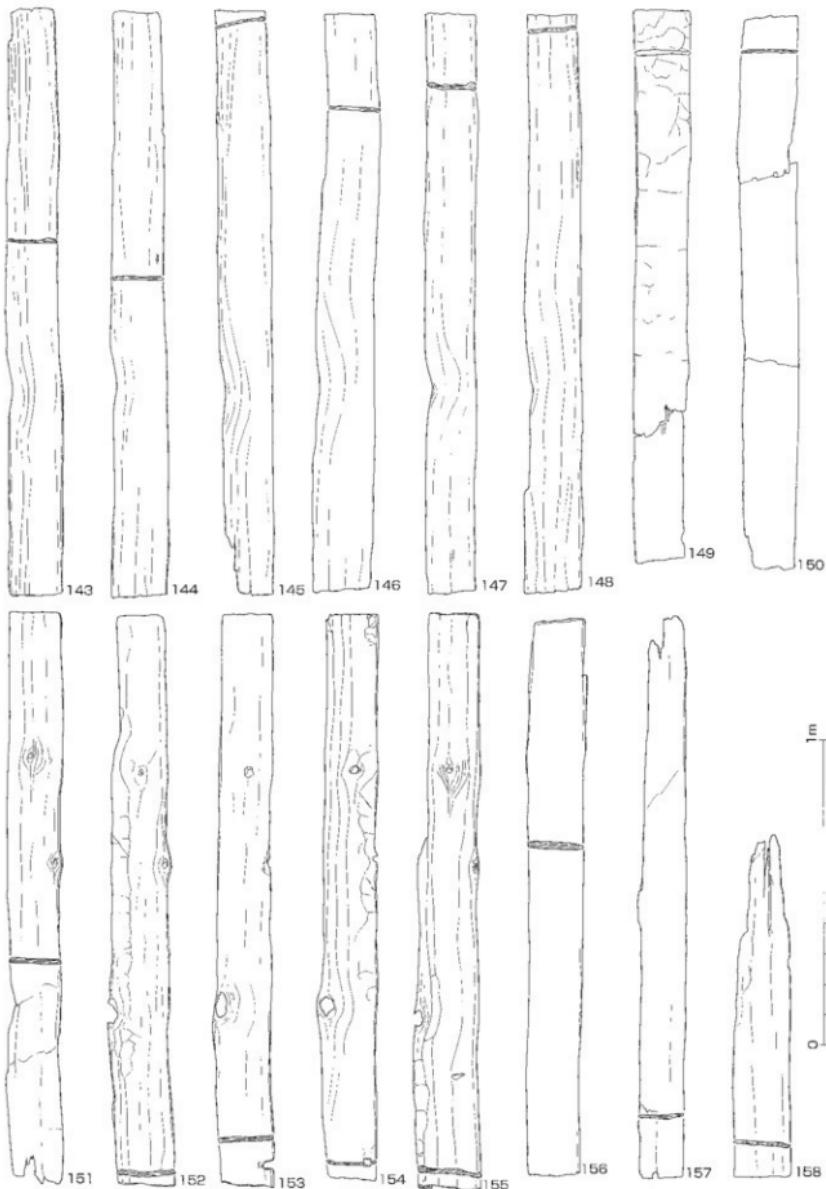


fig.63 SE302 出土縱板

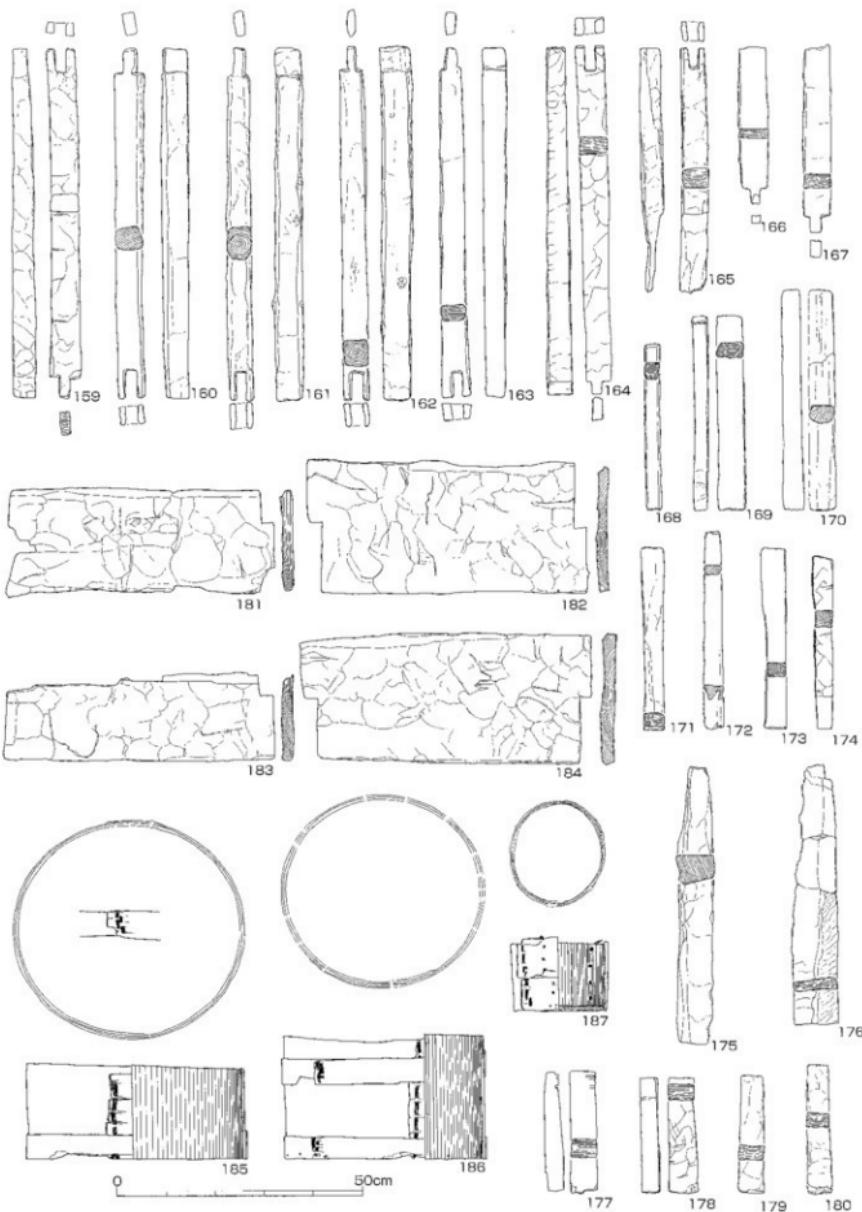


fig.64 SE 302 出土木製品

や、四角く穿孔したものもあることから建築部材を転用したものと考えられる。

井筒の構造は、曲物を二段に組み上げ、さらに枠状の構造まで設けており、粗砂層を深く掘り下げていることから、豊富に水を溜めることができたと考えられる。

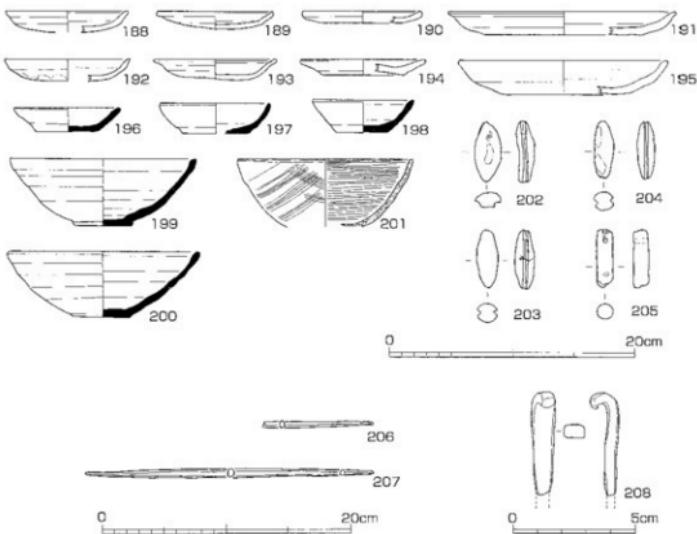


fig.65 SE 302 出土遺物

#### 出土遺物

井戸からの出土遺物としては、(187)が直径20cm、高さ15cmの底板の付いた小型の曲物が横転した状態で井筒の曲物が2段組まれた中から出土した。その他に23.5cm、径0.5cmの両端が細くなった箸(206・207)や、鉄釘(208)が出土している。

出土遺物は、土師器皿(188~195)、須恵器皿(196~198)、須恵器塊(199・200)、瓦器塊(201)、土錐(202~205)である。

出土遺物の時期差から、この井戸は、11世紀末から使用され、12世紀前半には廃絶したものと考えられる。

#### SE 303

久保地区の西北の離れた調査区の北端で検出された井戸である。

北半分が調査区の外になるが、直徑1.2mの円形で、遺構検出面からの深さが90cmの素掘りの井戸である。底は、平坦であるが人頭大の石が2個並んで検出されたが、その石に何かの役割があるかは不明である。

図化して示せる遺物は出土しなかった。

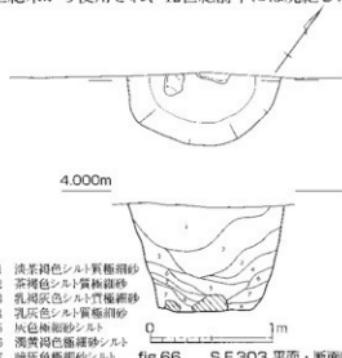


fig.66 SE 303 平面・断面図

(5) 木棺墓

ST301

ST301は調査区南東部の南端附近で検出した全長2.0m、幅0.7m前後の土坑状の落ち込み遺構で、主軸をN-32°Wにとる。

深さは南側が一段深くなっている。最深部が20cm、その他の部分は15cm前後を計測する。

埋土は2層に分かれ、上から暗褐色砂質シルト、暗褐色粗砂である。

掘形内の北西隅と南東、南西の各隅に15cm前後の白色円礫が置かれていたが、北東隅には円礫は確認されなかった。各円礫間は東西10cm、南北75cmである。南側の一段深くなつた部分の底よりも上面で、瓦器塊片と鉄釘1点が出土した。

(209)はいわゆる「和泉型」の瓦器の塊で高台断面は三角形を呈し、体部は丸味を持ちながら立ち上がる。口縁端部はやや外反し、丸く收める。体部外面はユビオサエによる成形後にヨコナデによる調整を行っている。内面は疎らな割線ミガキの調整を施し、見込みには平行線状の暗文を施す。(210)は鉄釘である。長さ8.5cmで太い方の端部を折り曲げて頭部としている。先端部は欠損している。断面形は台形である。

人骨は検出されなかつたが、掘形内からの円礫や鉄釘の出土から木棺墓と考えられる。円礫は棺台で、鉄釘は木棺に使用されたものと考えられるが1点のみの出土であり、疑問は残る。掘形内南側から出土した瓦器からST301の時期は平安時代末葉～鎌倉時代初頭(12世紀後半)頃と考えられる。

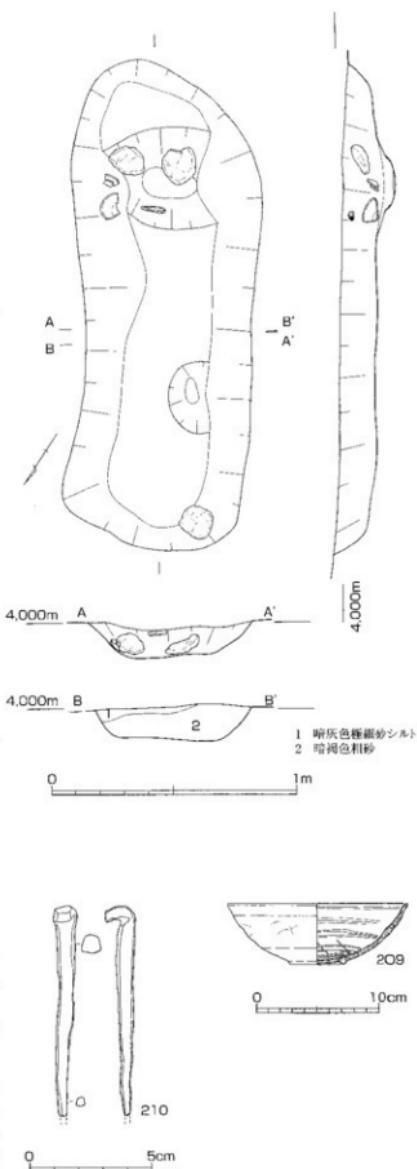


fig.67 ST301 平面・断面図・出土調物

(6) 不明遺構

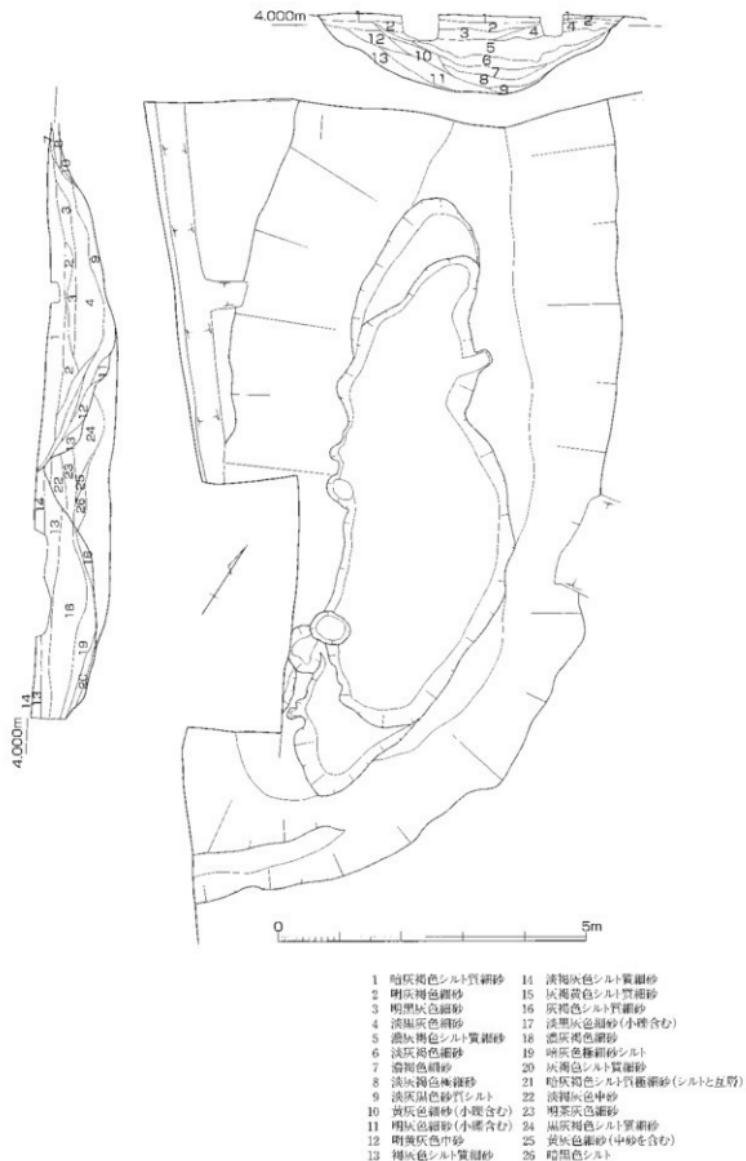


fig.68 SX301 平面・断面図

## SX301

調査区の西北隅で検出された遺構である。北と西が調査区の外になるため全容は不明であるが、検出できた範囲での規模は南北13m、東西6.2mの長楕円形を呈している。遺構面からの深さは、1.2m程度を測る。楕円形の斜面は急勾配であり、木組みなどの構造物は検出されなかった。また、この遺構の周辺においても付随するような遺構は検出されなかつた。

遺構断面の土層堆積から、初期の堆積は沈滞したシルト質の土層が見られるが、北と南に2度ほど掘り直した痕跡が見られることから、繰り返し使用される用途のものであったと考えられる。

出土遺物として図化して示せる資料は、土師器皿(211~216)、瓦器塊(217)、青磁碗(218~220)、土師質の土鍤(221)、土師質の鍋(222・223)である。金属製品としては、鉄釘(224~225)の一部が2点と用途不明の金属製品(226)が1点である。遺構の底から播磨産の三巴文軒平瓦(227)と軒平瓦の唐草文中心飾り部の破片(228)が出土した。図化できない遺物には、輸入磁器の白磁や青磁の破片が多く含まれていた。3回に分けて掘り直し順に掲載を行ったが、下層で(222・223)の鍋が出土し、底で(227・228)の瓦が出土した。このことから、12世紀から使用され13世紀に廃絶した遺構と考えられる。

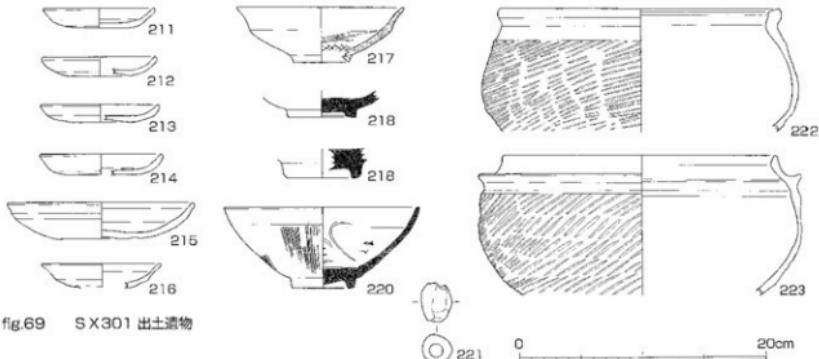


fig.69 SX301 出土遺物

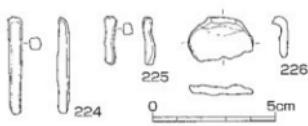


fig.70 SX301 出土金属製品



fig.71 SX301 出土瓦

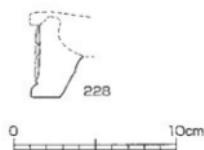


fig.72 SX301 出土瓦

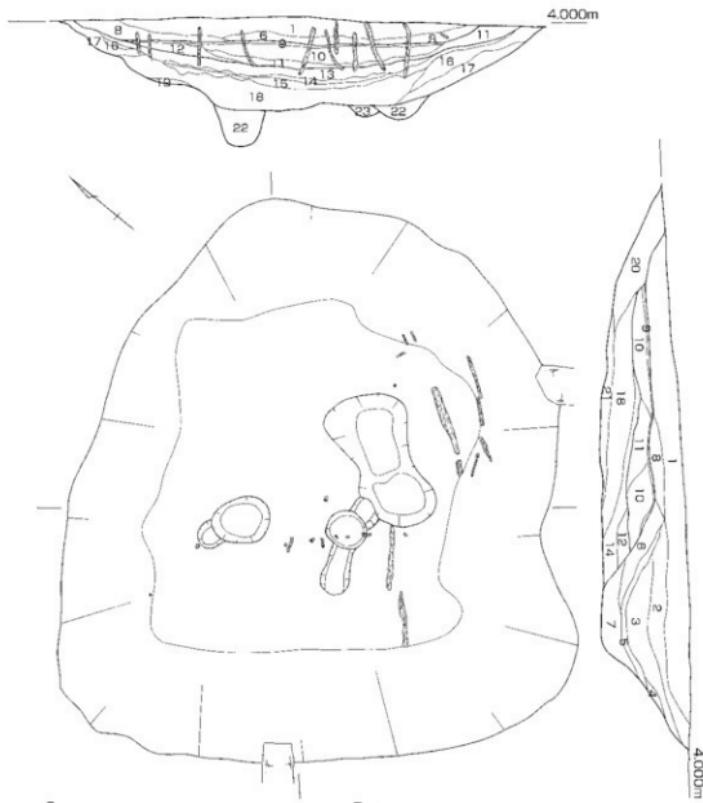


fig.72 S X302 平面・断面図

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1 灰褐色粗砂          | 13 青灰色粘質土(白色砂混じり) |
| 2 黄褐色粗質土         | 14 黑色粘質土          |
| 3 青灰褐色粗質土        | 15 墓床色粘質土(砂塵混じり)  |
| 4 白色粗土           | 16 白色粗土           |
| 5 黑灰色粘質土         | 17 明褐色砂質土         |
| 6 白色粗土           | 18 墓床色粘質土(植物遺体含む) |
| 7 墓床色粘質土         | 19 墓床色粗砂          |
| 8 茶褐色粘質土         | 20 黑白色粗砂          |
| 9 茶褐色砂質土(軟分性岩層)  | 21 青灰褐色砂質土        |
| 10 青灰色粘質土(粗砂混じり) | 22 黑灰色粘質土         |
| 11 白色粗土          | 23 墓床黑色粘質土        |
| 12 明褐色砂質土        |                   |

### S X302

S B 301 の南東で検出された遺構である。掘形の平面形と規模は、南北9.3m、東西7.8mの不定形な円形を呈している。遺構面からの深さは1.4mを測る。遺構の土層断面から南端に東西方向に掘り直された落ち込みが確認されることから、当初の規模と形状は不明である。

遺構の掘形は、急勾配である。遺構底部には、直径0.4～1.4m、深さ20～60cmの窪み

が複数検出された。この埴みの埋土はシルト質であり、初期の堆積は沈滯したものであったと考えられる。また、直径19cm、高さ11cmで内面に黒漆が塗布された底板付きの曲物(231)が出土している。南端で掘り直しされたものは、東西7.8m、南北3.4mの細長い平面形を呈している。遺構面からの深さは1.4mを測る。掘り込みの北斜面中腹には、直径5cm前後の杭を南北方向に打ちつけた状態で検出された。

図化して示せる出土遺物は、土師器皿(232~243)、須恵器皿(244~245)、須恵器塊(246~247)、捏鉢(248)、有溝土錘(249~253)、大型管状土錘(254~255)である。

(229)は、鉄滓である。図化できなかった遺物には、十瓶山窯産の甕の底部や輸入磁器の白磁や青磁の破片が多数出土している。

遺構の状態と出土遺物から日常生活と密接に関連した遺構と考えられる。出土遺物から遺構の時期は、11世紀末~12世紀前半の遺構と考えられる。

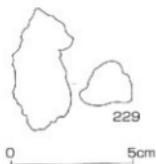


fig.73 SX302 出土鉄滓

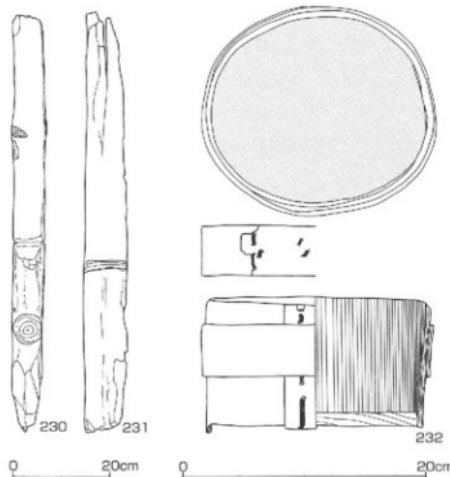


fig.74 SX302 出土木製品

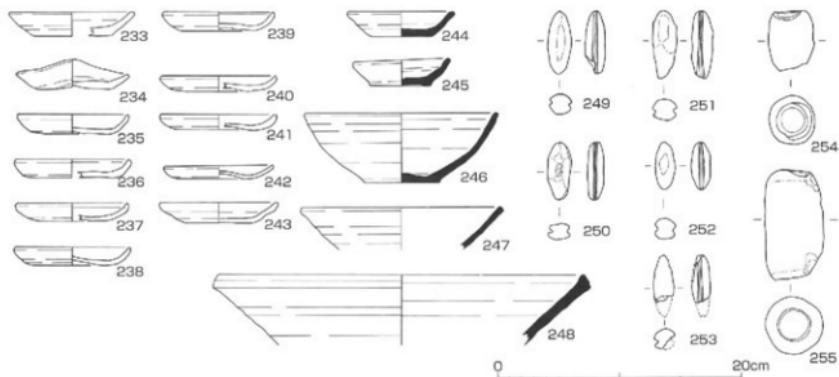


fig.75 SX302 出土遺物

S X303

調査区南東部東端付近で検出した南北5.8m、深さ2.8m以上の土坑状の落ち込み遺構である。

東側は調査区外へと続き、深さは壁面崩落の危険のため、底までの掘削ができます。全体としての規模は不明である。

埋土は基本的にシルト質極細砂層と粗砂層であるが、ベース層のブロックを多量に含んでいることから、比較的短期間で、人為的に埋められたものと推定される。

S X303については出土遺物もなく、不明な点も多いが、本地区以外でも二葉地区や、隣の松野遺跡<sup>(2)</sup>等でも同様な大型の土坑状遺構が確認されており、出土遺物はほとんど無く、比較的短期間で、人為的に埋められている点が共通している。湧水施設等は確認されなかつたが、湧水は著しく、灌溉に関連するものと考えられ、奈良県箸尾遺跡<sup>(3)</sup>にみられるような涌井状遺構である可能性が高いと考えられる。

時期については前述したように出土遺物はなく、不明と言わざるを得ないが、壁面の土層断面の観察から、近世以降から近代にかけての時期であると考えられる。

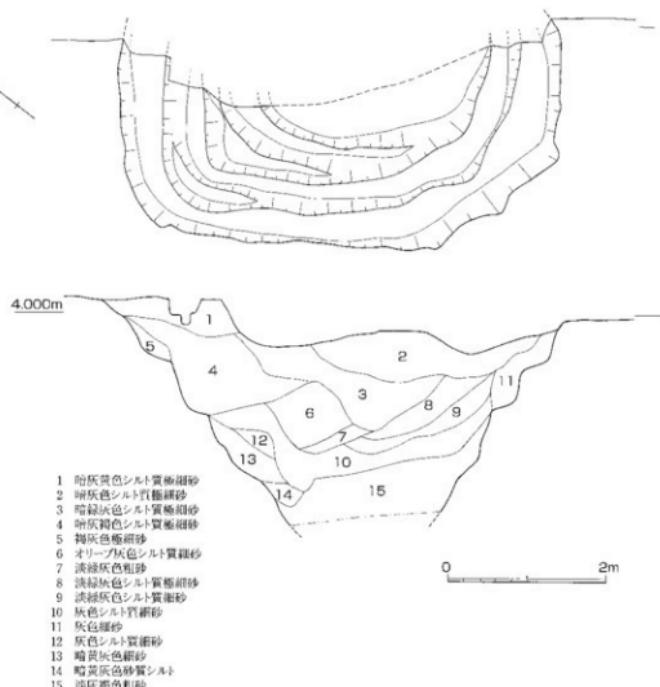


fig.76 S X303 平面・断面図

S X 304 は調査区南東部の東側南壁付近で検出した落ち込み状の遺構であるが、5～15cmの深さでシルト層、極細砂層が堆積したもので、調査区外へと抜がっている。一時期低い土地に水が帶水し、水はけの悪い水たまり状になっていたものと考えられる。

これに流入するような状況で遺物が出土した。土師器、瓦器、瓦、土錘等が出土したが、図示できたのは(256～258)である。

(256)は瓦器の塊である。体部外面はユビオサエの後にヨコナデによる成形を行っている。内面に疊らなヘラミガキがわずかに確認される。(257)は土師質の有溝土錘である。手づくね後にユビナデにより成形を行っている。(258)は土師器の鍋である。「く」の字に短く立ち上がる口縁部をもつ。内面頸部の稜線は明瞭である。口縁部はやや内窺する。口縁内面は横向方向のハケメを施している。

出土遺物から S X 304 の時期は平安時代末葉～鎌倉時代初頭（12世紀後半）の時期が考えられる。

### (7) 土坑

S K 301 は調査区南東部で検出した全長1.5m、幅0.47mの落ち込み状遺構である。南西側は中世の鶴溝に切られている。深さは7cmで、底がわずかに二段に窪む、北側がわずかに深く、南側が浅い。埋土は黒褐色砂質シルトの單一層である。

掘形内から十師器皿、壺が正位置で据えられたような状況で出土した。底面上からの出土ではなく、やや浮いた状態で出土している。出土状況からは特に配列等を意図したものであるとは考えられない。

出土遺物で図示できたのは(259～265)で、全て口縁部を外反させ、口縁端部を内側に上縁状に丸める「ての字状口縁」のタイプである。伊野近富氏の分類による白色系のB<sup>(7)</sup>タイプと類似するものである。

(259～262)は皿である。器壁は薄い。口縁下部に強いヨコナデが施される。(263～265)は壺である。皿と同じく器壁は薄く、口縁下部外面に強いヨコナデが施される。胎土は皿と共に精良である。皿、壺共、体部下半にはユビオサエが確認される。

S K 301 から出土したこれらの土師器は、平安京の編年による平安京Ⅲ期古段階に比定されるものと考えられ、二葉町遺跡の北方に位置する神奈遺跡においても出土例がある。出土遺物から S K 301 の時期は10世紀半ば頃と考えられる。<sup>(8)</sup>

遺構の性格については、付近にこれと対応する同時期の遺構は存在せず、不明な点は多いものの、出土遺物が土師器の皿、壺で構成される点や、遺物の出土状況から考えて、祭祀に伴うものと考えたい。

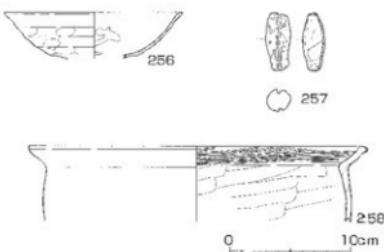


fig.77 SX304 出土遺物

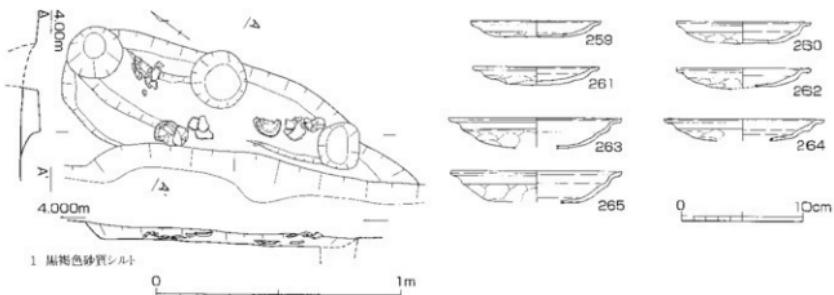


fig.78 SK 301 平面・断面図・出土遺物

久保町6丁目において検出された土坑の中でSK 302、303からも遺物が出土している。

#### SK 302

調査区南東部やや西で検出した長径0.95m、短径0.75m、深さ0.23mの隅円方形の土坑である。埋土は3層に分かれ、上から暗茶褐色シルト、暗茶褐色シルト（炭を多く含む）、暗灰褐色シルトである。

#### SK 303

調査区南東部やや東で検出した長径1.0m、短径0.65m、深さ0.16mの隅円方形の土坑である。埋土は3層に分かれ、上から暗灰褐色シルト質細砂、暗褐色砂質シルト、暗褐色砂質シルト（上層よりもやや明るい）である。

出土遺物で図示できたのは（266～269）である。（267～269）はSK 302、（266）がSK 303からの出土である。

（267）は土師器の大皿である。ヨコナデを施し、口縁端部はやや外反する（268）は須恵器の塊でやや外反する体部で、口縁端部は丸く收めている。（269）は土師器の羽釜である。内縁気味に立ち上がる体部から口縁部は内傾気味に立ち上がる。鋸部は水平方向に延びる。SB 309出土の羽釜（88）と類似する。

SK 302は出土遺物から鎌倉時代前半（13世紀前半）の時期が考えられる。

（266）は土師器の小皿である。ヨコナデを施し、体部下にはユビオサエが確認される。

SK 303は出土遺物から鎌倉時代前半（13世紀前半）の時期が考えられる。

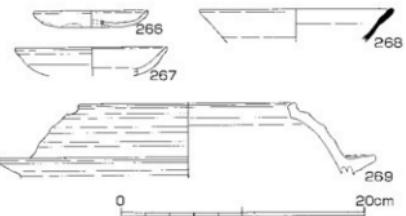


fig.79 SK 302 出土遺物

### (8) 包含層出土遺物

調査地全体でも包含層の残りはあまり良好ではなかった。出土遺物の量も比較的少量であったが、土錘と鉄製品の出土量が遺構からの出土遺物では挙げられないものが出土している。土錘と金屬製品について、遺構出土遺物と包含層出土遺物を共に記述する。

#### 土錘

久保6から出土する土錘の種類としては、S X302から出土した大型管状土錘(254-255)と、出土量としては最も多く出土している有溝土錘(249-253)、管状土錘(274-276)、棒状土錘(205)、卵形管状土錘(271-273)が出土している。卵形管状土錘の中には、須恵質でできたものが1点(270)だけ出土している。

大型管状土錘は、長さ9cm、直径5cm、穴の直径が2cmのものである。形状的には円筒形を呈しているが、穴の端部が両側で同じ方向にすり減った痕跡がみられることから、使用時に繩などが擦れて磨滅したものと考えられる。

有溝土錘は、卵形を呈しており、周囲に溝を施しているが、断面が円形のものと偏平なものの2種類に分けることができる。

卵形管状土錘は、長さ4cm前後の大きさで、直径3cm前後、穴の直径が1cmほどのものである。大型管状土錘と同様に穴の端部が両側で同じ方向にすり減った痕跡がみられる。

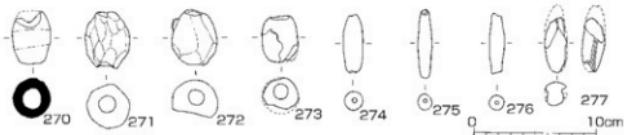


fig.80 包含層出土遺物

#### 金属製品

大半が鉄釘である。(278)は、折釘である。(279)は、頭部形状不明であるが横断面の形状から船釘の可能性がある。(280)は、両端を欠失しているため形状は不明であるが、(278)と同規模の釘と考えられる。(281)は、鐵鎌と考えられる。裏面は平坦で表面は両端で丸みを帯びている。明確な稜は見られないが、片刃ぎみの刃をもっている。(282)は、頭巻の釘である。(282・283)は、両端を欠失しているため形状は不明であるが、規模の小さな釘である。(285)は、頭部端を欠失しているが端部中央は残存しており、切釘と考えられる。横断面が1cm角のもので、全長は不明であるが大型の釘になるものと考えられる。

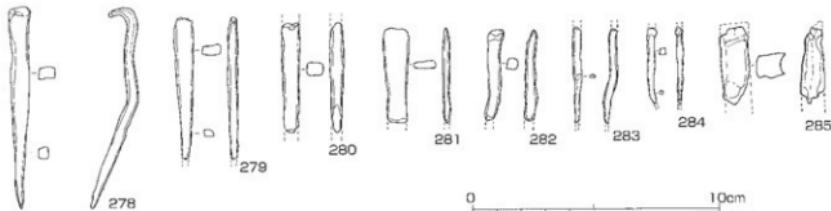


fig.81 包含層出土金属製品

### 第3節 小結

久保町6丁目地区での調査では、弥生時代前期、11世紀末～13世紀中頃（平安時代後期～中世前半）の大きく2時期の遺構と遺物が検出された。

**弥生時代前期**　図上復元が可能な壺形土器が出土している。この遺物の出土地点に隣接して、S D101が検出されている。S K101からは下半分を復元できる壺形土器が出土しており、遺物を伴う唯一の遺構が検出された。二葉町遺跡において弥生時代前期の遺構が確認されたことから、周辺にもこの時代の遺構が存在する可能性を示唆する資料である。

**11世紀末～13世紀中頃**　(平安時代末～鎌倉時代中頃) 二葉町遺跡で最も多くの遺構と遺物を伴う時期である。掘立柱建物10棟、井戸4基、木棺墓1基、不明遺構2基、溝、鋤溝、ピット多数を検出している。掘立柱建物は、調査地の南中央に集中しているのと、南西隅に集中して検出されている。建物の重なりが多く、住居地を建て替える際にあまり移動せずに行われていたと考えられる。

井戸は、S E301とS E303が素掘りの井戸であり、二葉町遺跡の遺構面を形成している2m程の粘土層の途中で底が納まるものである。S E302は井戸側として、縦板組横棧留構造のもので、土圧により崩壊した状態で検出された。このため井戸側材などは使用時のまま放置されていた。井戸側に使用されていた縦板は、木目や節目から同一の材から切り割りをしたものであることが解る資料が得られた。

不明大型土坑は、用途が判然としていなかったが、S X301では、數度にわたり掘り直しを行なって長期間、使用していたことが判明し、S X302で土留めに使用したと考えられる杭列が検出され、さらに底板のついた内面に漆が塗布された小型の曲物が出土したことから、水を溜める遺構であると示唆する資料が得られた。

特定の場所で建て替えを行い、その場所から離ないことから集落の中での建物を建築する空間が明確になる資料が得られた。

#### 註

- (1) 小林行雄・木永雅雄・藤岡謙一郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」京都帝国大学文学部考古学研究報告16 桑名文星堂 1943年
- (2) 上山義作「山賀遺跡（その3）出土の弥生土器について」「山賀（その3）」大阪文化財センター 1984年
- (3) 橋田辰次郎・森田 勉「太平出土の輸入中國陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」九州歴史資料館研究論集4 九州歴史資料館 1978年  
山本信夫「中世前朝の貿易陶磁器」「概説 中世の土器・陶磁器」真言社 1995年
- (4) 橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」高崎市教育委員会 1980年尾上 夫・森島康雄・近江俊秀「瓦窯跡」概説 中世の土器・陶磁器」真言社 1995年
- (5) 岸野博史編「松野追跡発掘調査報告書」第3～7次調査 神戸市教育委員会 2001年
- (6) 善尾遺跡では13世紀中頃と考えられる漆井が検出されている。寺沢義爾「奈良県北葛城郡広隆町善尾遺跡第7・9次発掘調査報告」奈良県遺跡調査報告書1990年度 奈良県立橿原考古学研究所 1991年
- (7) 伊勢宮「土器器皿」「概説 中世の土器・陶磁器」真言社 1995年
- (8) 古代の土器研究会編「古代の土器2 都域の上器集成Ⅱ」古代の上器研究会 1993年
- (9) 萩本宏明「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1981年

#### 参考文献

- 森田 稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」一神出古窯址群を中心に―『神戸市立博物館研究紀要』3  
神戸市立博物館 1986年

- 深井明ヒ古編「対中」兵庫県教育委員会 1988年  
山田清治「平安時代～鎌倉時代の土器」「川陰・藤ノ木遺跡」兵庫県教育委員会 1992年  
中川 泰「中世の土器」「大津田中遺跡（第6分便）」兵庫県教育委員会 1996年  
池田征弘「まとめ」「神出空跡群」兵庫県教育委員会 1998年  
古代の土器研究会編「古代の上器2 都域の上器集成Ⅱ」古代の土器研究会 1994年  
千種浩「金屋器」「大間道路発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1993年  
小松望「金屋製品と貿易資料」(財)長野県埋蔵文化財センター 1989年  
広島県草芦千軒町遺跡調査研究所編「草芦千軒町遺跡発掘調査報告書V」 1996年  
真鍋義行「瀬戸内地方出土上器の変遷」「瀬戸内地方出土土器調査報告書II」  
瀬戸内海歴史民俗資料館 1993年

- 前田佳久「大間遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1993年

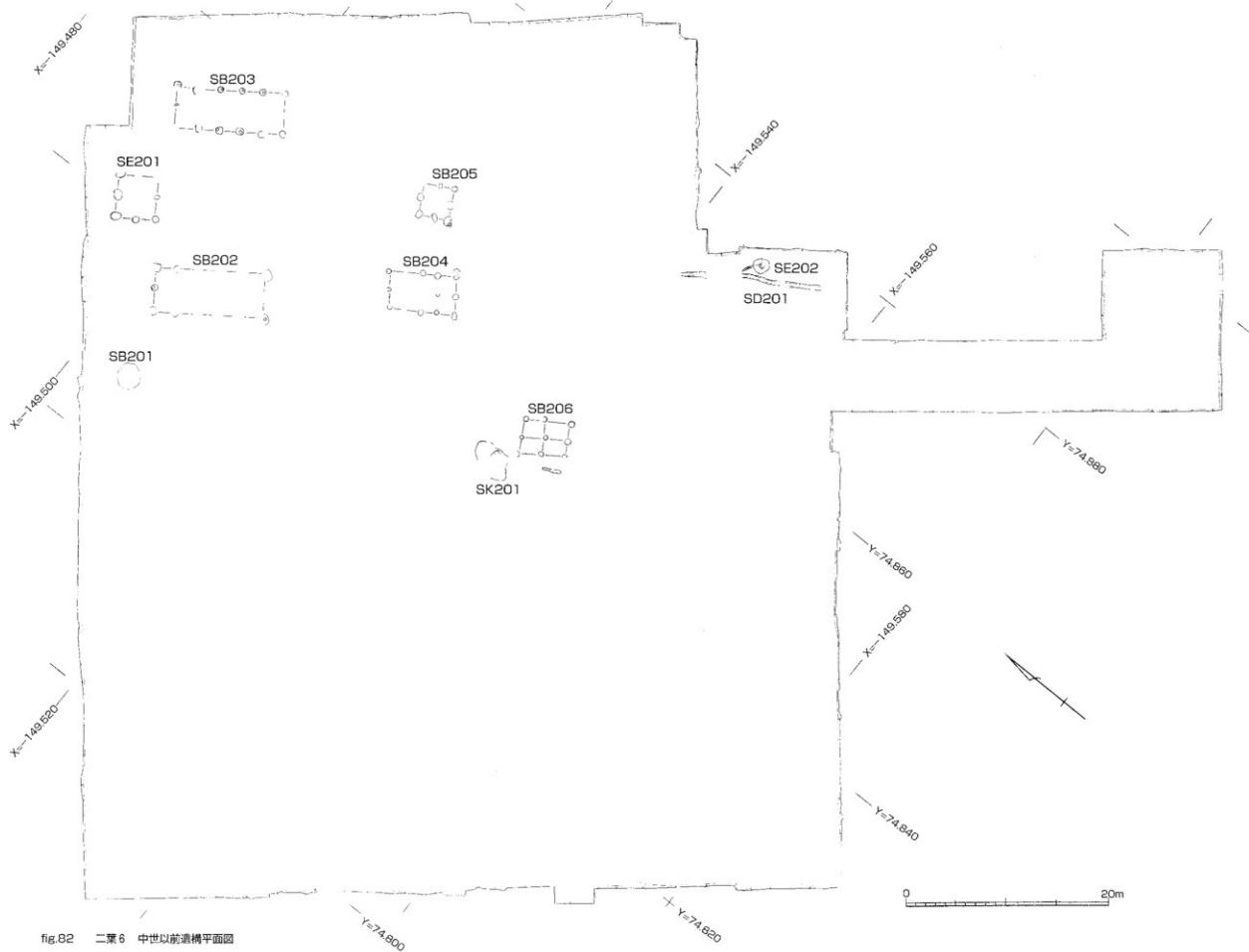


fig.82 二葉6 中世以前遺構平面図

## 第5章 二葉町6丁目の調査

### 第1節 中世以前の遺構と遺物

縄文時代晚期

二葉町遺跡の遺構面は、淡灰黄色粘質土と黄褐色砂質土などで形成されている。このうち黄褐色砂質土の中で、さらに粗砂を含む割合の多い層が、調査地北東隅周辺などに分布する。この粗砂層から縄文時代晚期の窓式土器が微量出土した。

縄文時代晚期の遺物を含む粗砂層は、これまでに第2次調査で検出されている。この調査では調査面積が小さく、また現在の建物の搅乱を多く受け、全容を把握するにはいたらなかった。

いま述べた黄褐色粗砂層は、今回調査地の北東隅から中央へ真南の方向に、3条ほど検出されている。自然堆積のため規模などは不明であるが、幅2~3m、深さ0.1~0.5mほどで、部分的に検出される。遺構面を断ち切り、下層の遺構の存在の有無を確かめる作業を適宜行った。しかしながら調査地中央から南の粗砂層などでは、遺構・遺物は検出されなかった。

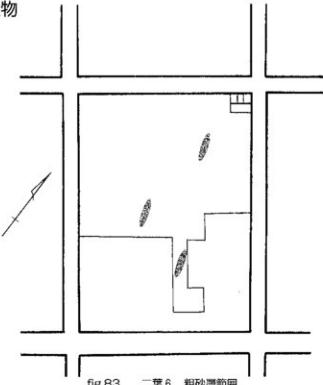


fig.83 二葉6 粗砂層範囲

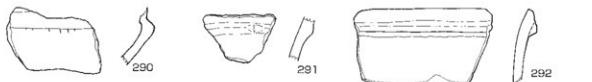


fig.84 縄文時代晚期の遺物

(290)は浅鉢口部の屈曲部である。屈曲部に線状の小さい刻みをもつ。(291~293)は深鉢口縁部である。(291)は小D字形の刻みが1か所残る。(292)は無刻みである。(293)は口縁部端と突带上にD字形の刻みをもつ。遺物は消耗しているため明言できないが、船橋式の可能性が考えられる。(294)は器形は不明である。内面はケズリ、外面はミガキである。胎土からは、いずれも在地的なものと考えられる。

## 奈良時代～平安時代

奈良時代から平安時代の遺構としては、掘立柱建物6棟、溝1条、井戸2基、土坑2基を検出した。中世の遺構面と同一面で遺構が検出されている。このため、出土遺物がない遺構については、時期の決定に際し、奈良時代から平安時代の遺物を含む遺構の埋土や掘形の規模・形状が明らかに中世と異なるものを取り上げている。

### (1) 掘立柱建物

SB201

主軸をN-32°Wにとる東西2間(約4.2m)×南北2間(約4.2m)の側柱建物である。柱の間隔はおよそ2.1mで7尺を1間とする建物と考えられる。東側柱列の南半分は攪乱により遺存しない。

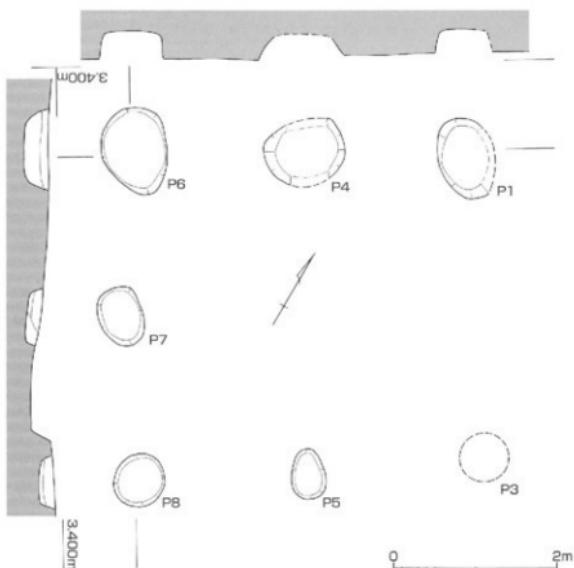


fig.85 SB201 平面・断面図

柱穴の掘形プランは円形で、直径0.7～1.0mの規模である。大きな掘形をしているが、遺構検出面から柱穴の底までは20～30cmと浅いため当時の生活面は全体に削平されている可能性がある。柱穴内からは遺物は出土しなかった。柱穴の埋土は黒褐色シルト質極細砂である。



挿図写真11 二葉8 SB201 (南から)

## SB202

上軸をN-36°Wにとる東西2間（約3.3m）×南北5間（約10.5m）の側柱建物である。南北の柱の間隔は2.1mで東西の柱の間隔は1.5mと1.8mとなっている。北側の柱穴と南の柱穴の間の柱穴3個分が攪乱により遺存しないが、南辺の柱穴とは並びと柱穴の埋土が一致することから建物の規模を推定した。柱穴の掘形プランは円形で、直径50~80cmの規模である。柱痕は横断面円形で径20~30cmを測る。北辺の中柱では、柱を抜き取ったあとから須恵器の甕の破片が出土した。柱穴の埋土は黒褐色シルト質極細砂である。

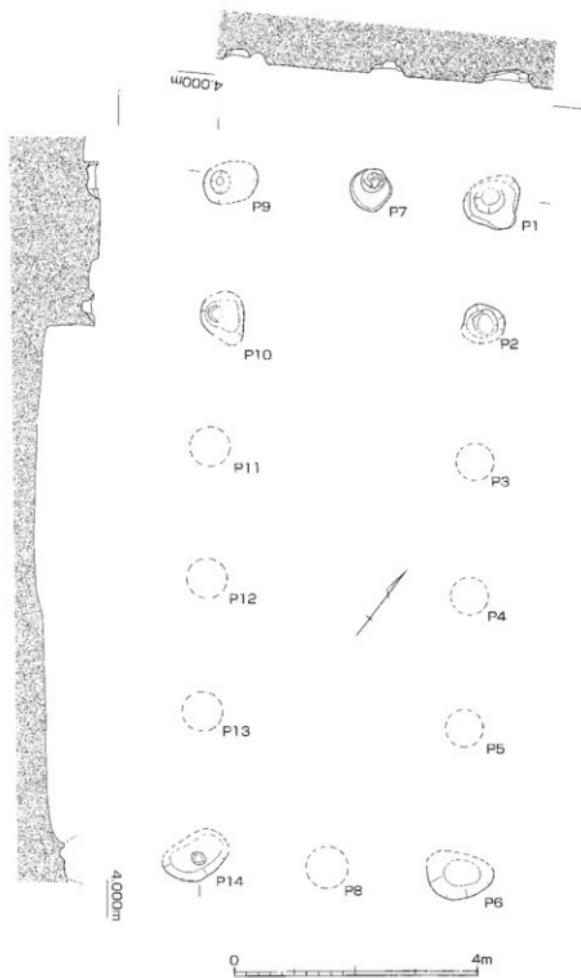


fig.86 SB202 平面・断面図

## SB203

主軸をN-34°Wにとる東西2間（約4m）×南北5間（約10.5m）の側柱建物。柱の間隔はおよそ2.1mで七尺を一間とする建物になるだろう。P8・P9部分は搅乱により遺存しない。西辺のP10～P14の柱掘形プランは方形に近く、東辺のP3～P6は円形に近い。怪あるいは一辺60～70cmほどを測る。搅乱を受けていない、P1～P5・P7・P11・P12で柱痕

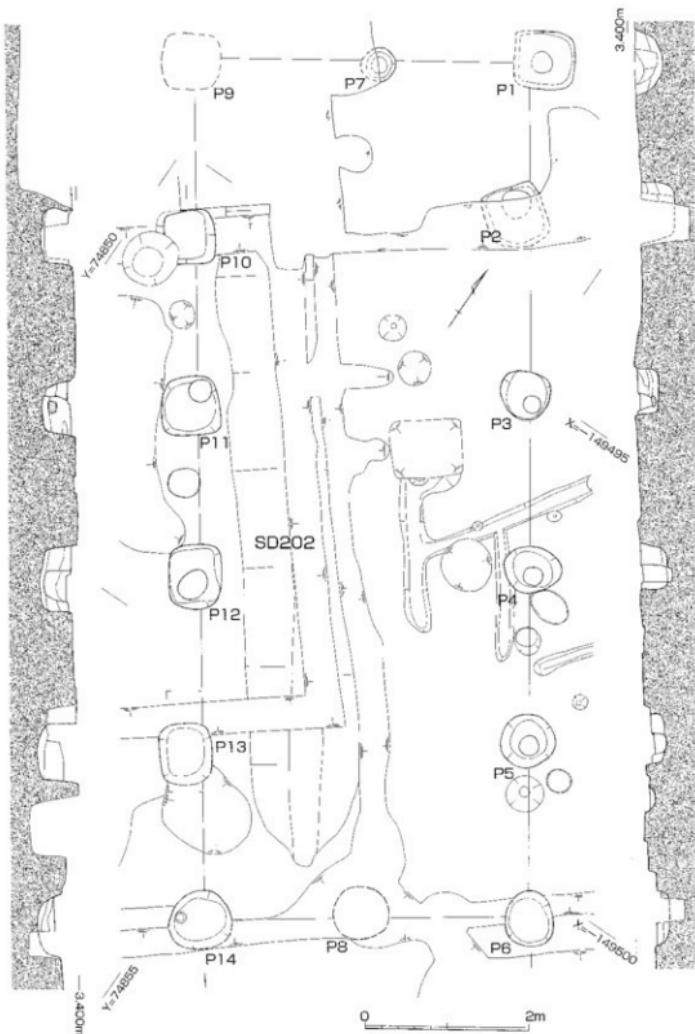


fig.87 SB203 平面・断面図

を確認した。横断面円形で径20cmほどを測る。

出土遺物として図示できるものは、P3の柱痕内の鉄釘、P10の埋上の須恵器甕、P12の柱痕内の上師器壺・内面黒色土器壺などにとどまり、遺物はごく少量が出土したのみである。

#### SB204

主軸をN-33°Wにとる東西2間（約3.6m）×南北4間（約6.5m）の建物である。

掘乱によりP2・7・8・12は検出されなかった。柱の間隔は1.8mとなっている。柱穴の掘形は直径40～60cmの円形であるが、P5とP15は東西方向の長楕円形をしており、長径1.1mを測る。柱穴の埋土は黒褐色シルト質極細砂である。

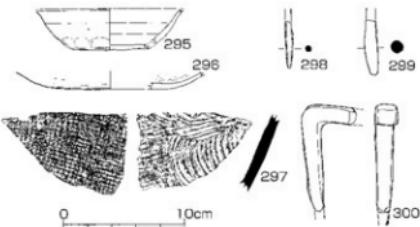


fig.88 SB203出土遺物

3.400m

3.400m

0 2m

fig.89 SB204平面・断面図

## SB205

主軸をN-26°Wにとる東西2間(約3.6m)×南北3間(約4.5m)の建物である。擾乱により南東隅の柱穴の有無は不明であるが、P5の南側で建物の中柱にあたる柱穴は精査を繰り返したが検出されなかった。

柱の間隔は、1.8mとなっている。柱穴の掘形は、不定形の長楕円形をしており、長径0.5~1.0mを測る。

P10では、底に柱の沈み込みと思われる直径30cm、掘形の底から20cmの深さの窪みが検出された。

柱穴からの出土した遺物はなかった。

柱穴の埋土は黒褐色シルト質極細砂である。

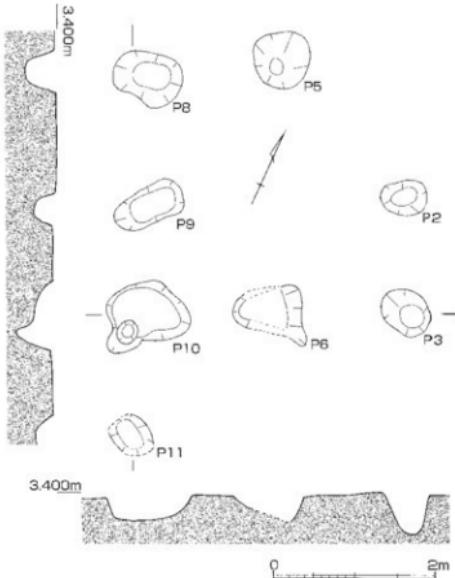


fig.90 SB205 平面・断面図

## SB206

主軸をN-33°Wにとる東西2間(約3.3m)×南北2間(約4.5m)の総柱建物である。柱の間隔は、1.8mとなっている。柱穴の掘形は、直径40~60cmの円形である。

P3では、直径25cmの偏平な石が掘形内の検出面でみられるが、柱の沈み込みを防止するためのものと考えられる。柱穴からの出土した遺物はなかった。柱穴の埋土は黒褐色シルト質極細砂である。

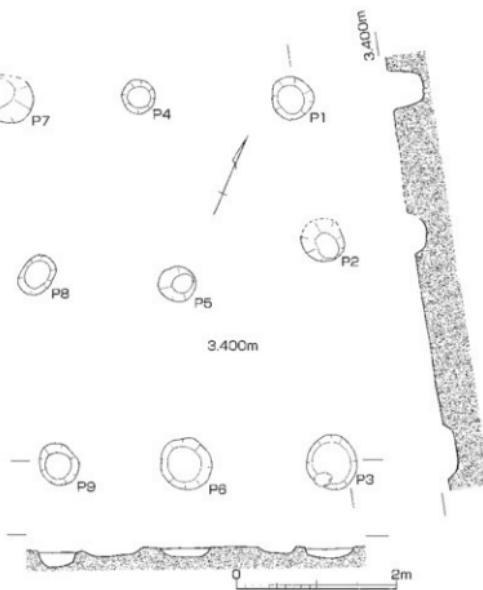


fig.91 SB206 平面・断面図

## (2) 井戸

SE201

S B202 の西側で検出された、素堀の井戸である。直径2.7m、深さ1.55mを測る。井戸 桟等ではなく、井戸底に土師器の甕が1点据えられていただけであった。深さ0.9mの壁面に酸化した鉄分を含む砂層が存在しており、その肩位から湧水が認められる。砂層下面が黒褐色シルト層となっており、緩やかに中央部分に向けてレンズ状に窪み、その中心部分に直径0.8m、深さ0.6mの水溜め状の施設を持つ。井戸の下層埋土は、シルトブロックから成っており、人為的に埋められた可能性があるが、上層埋土部分は、きれいなレンズ状の堆積をなしており、最終的には自然に埋没したものと考えられる。埋没段階等での祭祀的な行為に因るよう な痕跡は確認できていな い。

井戸内からは甕(301)

が1点出土した。この甕 は、球形に近い器体と、 強く外反する口縁部とか らなる広口の上器である。 口径17.6cm、高さ13.8cm で体部外面をハケメで調 整する、体部内面にもハ ケメをついている。

井戸の時期は、8世紀後 半のものと考えられる。

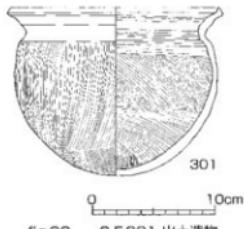
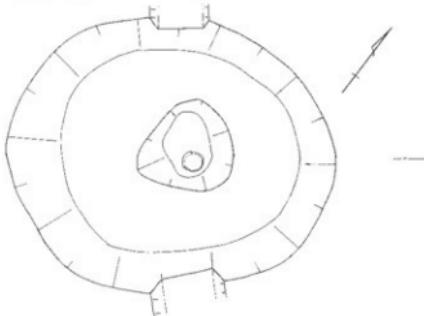
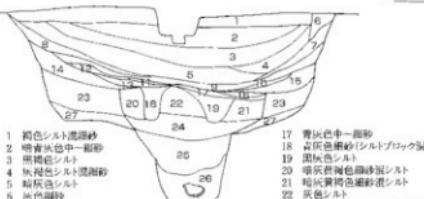


fig.93 SE201 出土遺物



3.500m



- |           |                    |
|-----------|--------------------|
| 1 緑色シルト層  | 17 青灰色中一細砂         |
| 2 噴青色中一細砂 | 18 青灰色細砂(シルトブロック層) |
| 3 黒褐色シルト  | 19 黒灰褐色シルト         |
| 4 黒褐色シルト層 | 20 順次層             |
| 5 細粒層     | 21 順次層             |
| 6 黒褐色層    | 22 黒褐色シルト          |
| 7 青灰色シルト  | 23 青灰(?)シルトブロック層   |
| 8 青灰色シルト  | 24 黒褐色細砂層          |
| 9 噴青色シルト  | 25 青灰色シルト層         |
| 10 黒褐色層   | 26 黒褐色シルトブロック層     |
| 11 黒褐色層   | 27 黑褐色層            |
| 12 青灰色層   |                    |
| 13 黒褐色層   |                    |
| 14 黒褐色シルト |                    |
| 15 明青色シルト |                    |
| 16 黒色シルト  |                    |

0 2m

fig.92 SE201 平面・断面図

SE202

調査区の南東隅で検出された井戸である。搅乱により検出面中央部を欠失しているが、 直径1.8mの円形、深さ1.9mを測り、厚い粘土層を掘削し湧水層である粗砂層まで到達 している。掘形断面の形状は、漏斗状を呈しており、遺構面から50cm下がった所で段が付 いている。この段から井戸側として、幅25~35cmのアカマツ材の縦板(307~308)が立てら れていたが、地上に近い側は腐食しており、下は擦れて内側に落ち込んでいるために旧状 は保たれていない。これらの縦板を、留めるための横桟などは検出されなかった。この井 戸には湧水施設として、直径50~57cm、高さ62cmのアカマツの太い幹を削り貫いた簡状の もの(310)を据えつけていた。厚みは、底部で5cmを測る。表面には特に整形した痕跡は

見られないが、樹皮の痕跡はなく、胴部中央に半月状に横幅27cm、縦幅15cmの切り込みが施されている。切断は外部の下方から内側に斜め上方に、斧を使用して切りこみ、上辺は水平に鋸で切断されたと考えられる。切り込みの結果開いた穴の大きさは横幅16cm、縦幅6cmを測る。木材切り出し時または、井戸使用に際して加工したものか、用途を含めて不明である。図化して示せる遺物は、須恵器の坏(302・303)、須恵器の壺底部(304)、大型骨状土錘(305)、壺の一部(306)である。

出土遺物から、9世紀に廃絶した井戸と考えられる。

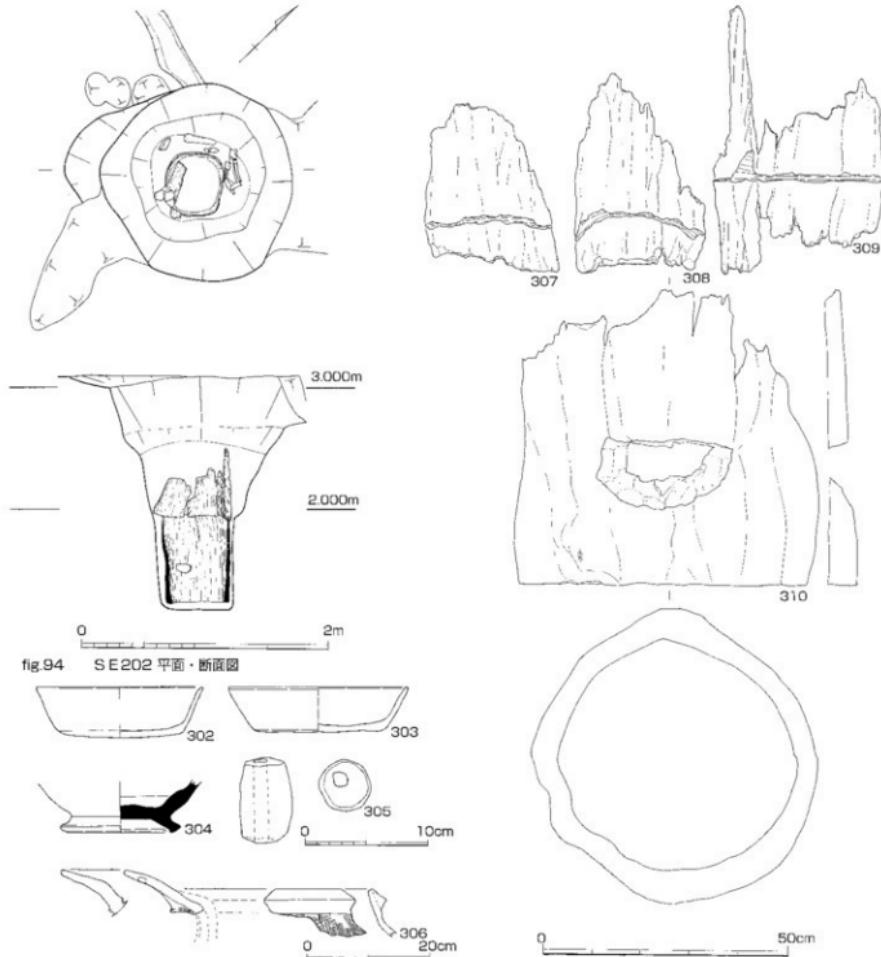


fig. 96 S E 202 出土遺物

fig. 95 S E 202 井戸側及び井筒部材

### (3) 溝

SD201

S E 202 の西に北西 - 南東方向に直線的に延びる幅広の浅い溝。覆土から須恵器などの土器が出土した。この遺物から 9 世紀のものと考えられる。

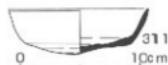


fig.97 SD201 出土遺物

### (4) 土坑

SK201

90×80cm でプラン不整形、深さ約 40cm を測る土坑。覆土中位から瓦・土師器環・内面黒色土器・土鍤などが出土している。これらの出土遺物から 9 世紀の遺構と考えられる。

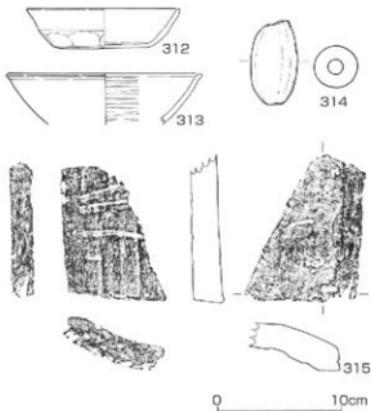


fig.99 SK201 出土遺物

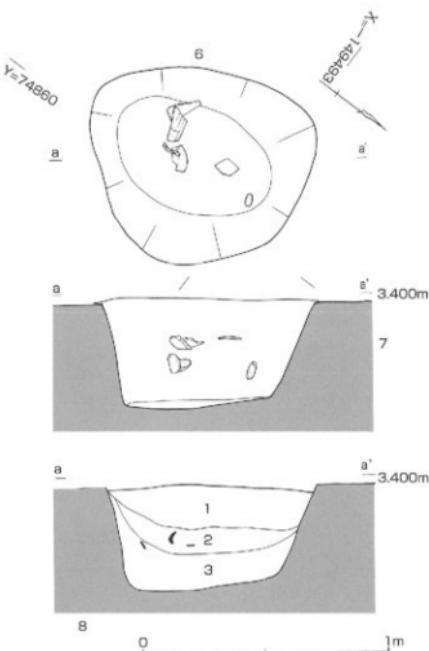


fig.98 SK201 平面・断面図  
1.埋褐色粗砂質シルト  
2.黒褐色砂質シルト  
3.黒色シルト質砂

SK202

SK202 は長径 3.0m、短径 1.5m の東西に長い楕円形の土坑で、東西両側は 2 段掘りになっている。段状になっている浅い部分は深さ約 10cm、深い部分は深さは 40cm を測る。埋土は主に暗褐灰色シルトである。埋土の中層から上層にかけて遺物が出土している。

(316～318) は須恵器の环 H で、口径は 9.8cm～11.4cm である。(316) は底部と体部の境の外面にヘラケズリを施す。底部外面はヘラ切りの後ナデを施すもの(317・318)と未調査のもの(316)がある。陶邑・田辺編年の T K217 型式にあたる。(319) は土師器の环 C で口径は 12.4cm を測る。丸みを持って内側する体部に、口縁端部は外反する。外面下半はユビオサエ、上半はヨコナデを施す。内面はナデで調整する。口縁部は内外面ともヨコナデを施す。藤原京編年の飛鳥 I または II にあたる。(320) は土師器の小型の蓋で、丸い体部に直立ぎみの頭部を持ち、口縁端部は外反する。体部外面はユビオサエの後、板ナデを施し、内面

は板ナデを施す。(321)は土師器の鍋で、浅い体部に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部には面を持つ。体部外面下半は横方向のハケ、上半は縦方向のハケを施す。内面はヘラケズリの後板ナデを施す。頭部から口縁部はヨコナデを施し、頸部内面には斜め方向のハケを施す。外面には煤が付着している。(322)は土師器の高坏脚部で筒部外面は面取りを施す。筒部内面はケズリを施す。裾部内外面はヨコナデを施す。(323)は土師器の釣鐘型タコ壺の釣手部である。孔内面には使用による擦痕がある。(324～327)は土師質の棒状土錘である。長さ6～7cm前後、直径は1.5～2.2cmを測る。断面形はほぼ円形である。以上の図示できた遺物の他に埋土上層で器壁の薄い土師器の小片が多数出土した。器種は不明である。

以上の遺物からSK201は7世紀前半から中頃の時期に比定できる。

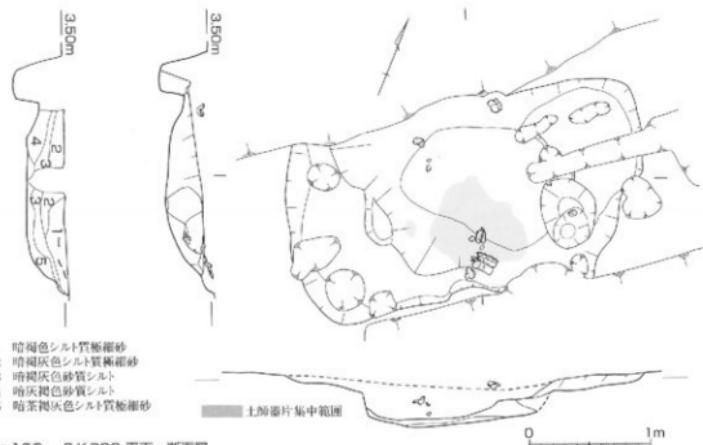


fig.100 SK202 平面・断面図

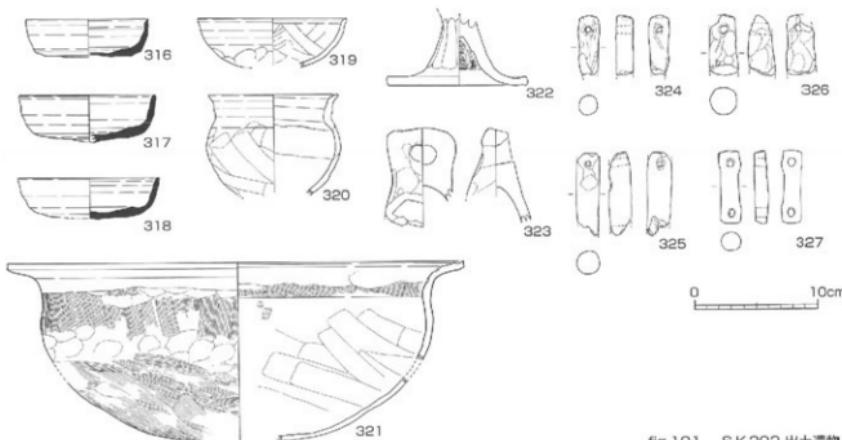


fig.101 SK202 出土遺物

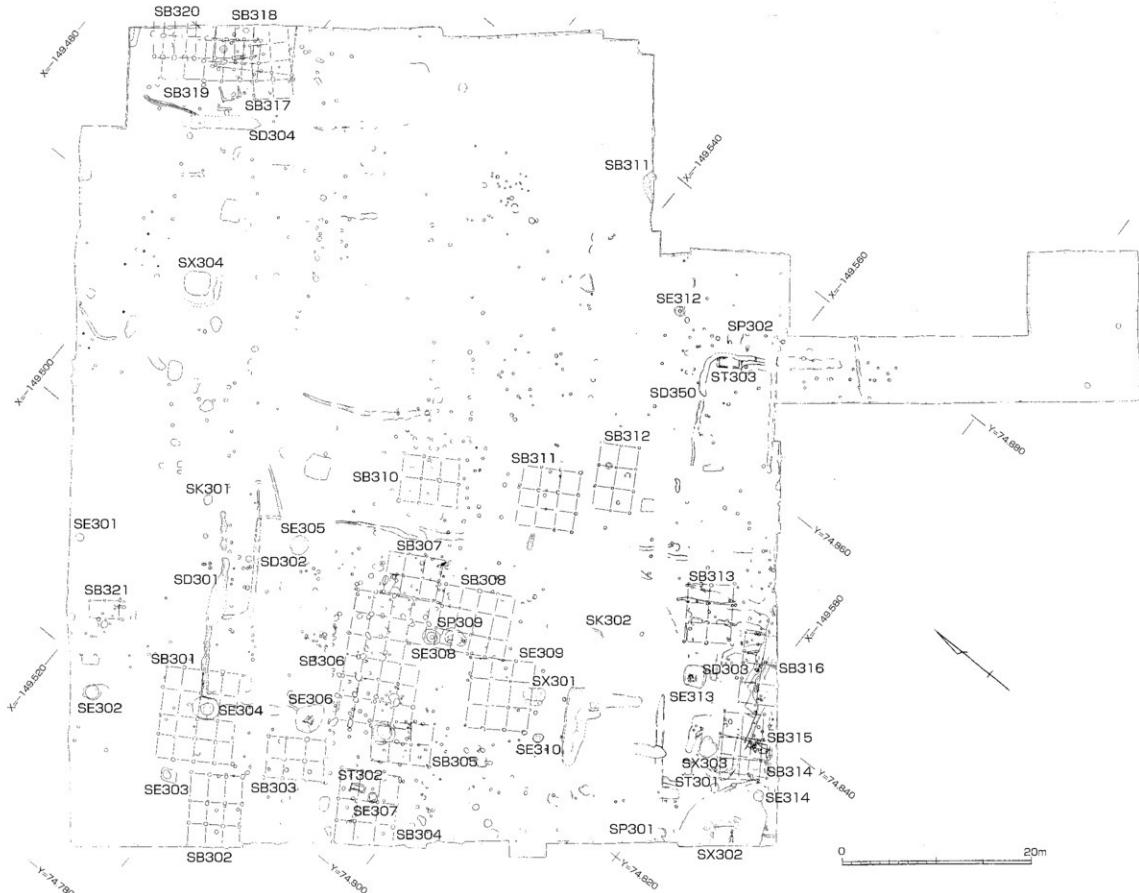


fig.102 二乘 6 中世遺構平面図

## 第2節 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物21棟、井戸14基、土坑1基、木棺墓3基、不明遺構5基、溝、鋤溝、ピット多数を検出した。

### (1) 掘立柱建物

SB301

主軸をN-35°Wにとる東西4間（約5.0m）×南北4間（約4.1m）で21m<sup>2</sup>を有している。コンクリートの基礎による攪乱があるため消滅した柱穴もあるが、残存の柱穴から縦柱建物と考えられる。柱の間隔はおよそ1.2mと1.5mの二種類に分けられる。柱穴の掘形は直径20~40cmの円形である。柱痕は確認できた柱穴の横断面では径20cmほどを測る。出土遺物として図示できるものは、土師器皿(328~330)、須恵器塊(331)が柱穴内より出土した。出土遺物などからこの建物は12世紀中頃~末のものと考えられる。



fig.103 SB301 平面・断面図

0 2m

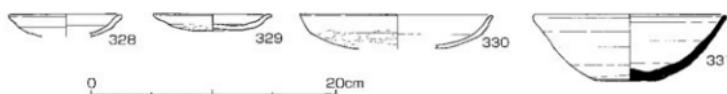


fig.104 SB301 出土遺物

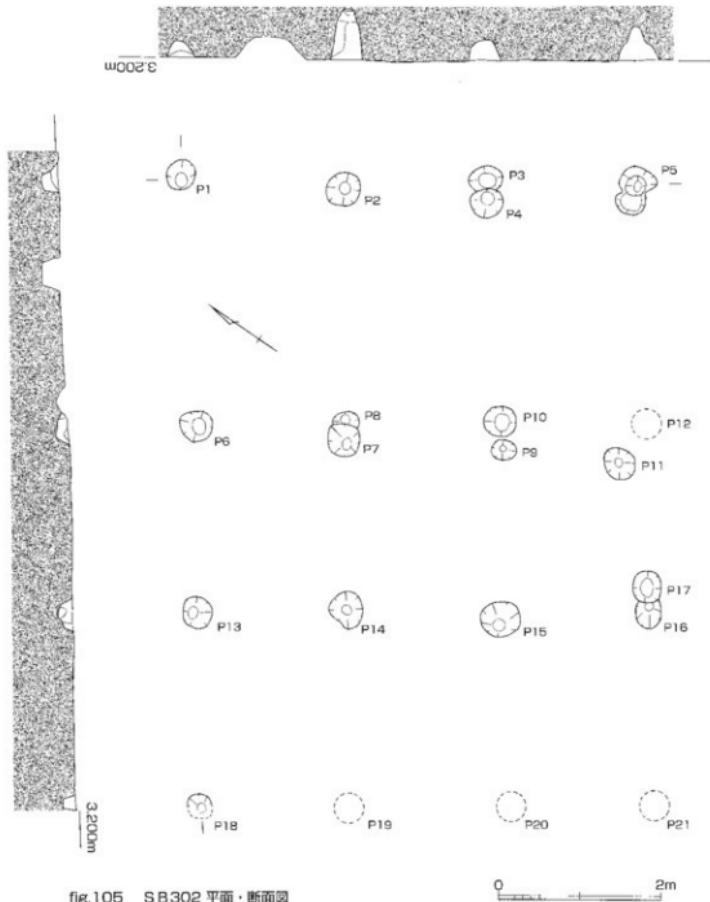


fig.105 SB302 平面・断面図

### SB302

主軸を N-34° W にとる東西3間以上(約7.8m)×南北3間(約5.6m)の総柱建物である。西端の柱穴列が調査区外に延びているため正確な規模は不明である。柱の間隔はおよそ1.8mであるが、東端の柱穴列との間は3mとやや離れた配置となっている。柱穴の掘形は直径40cmの円形である。柱穴が重なって検出されることから、建て替えもしくは袖強を行ったと考えられる。



fig.106 SB302 出土遺物

出土遺物として図示できるものは、須恵器塊(332)が柱穴内より出土した。出土遺物などからこの建物は13世紀前半のものと考えられる。

#### SB303

主軸をN-36°Wにとる東西2間(約4.5m)×南北3間(約6.5m)で29m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。柱の間隔はおよそ2.1mである。柱穴の掘形は直径30~60cmの円形であるが、中柱には長径1.2mの楕円形の柱穴も存在する。この楕円形の柱穴は、余り深くないことから礎盤などの構造物を取り去った痕跡と考えられる。

出土遺物として図示できるものは、出土しなかった。

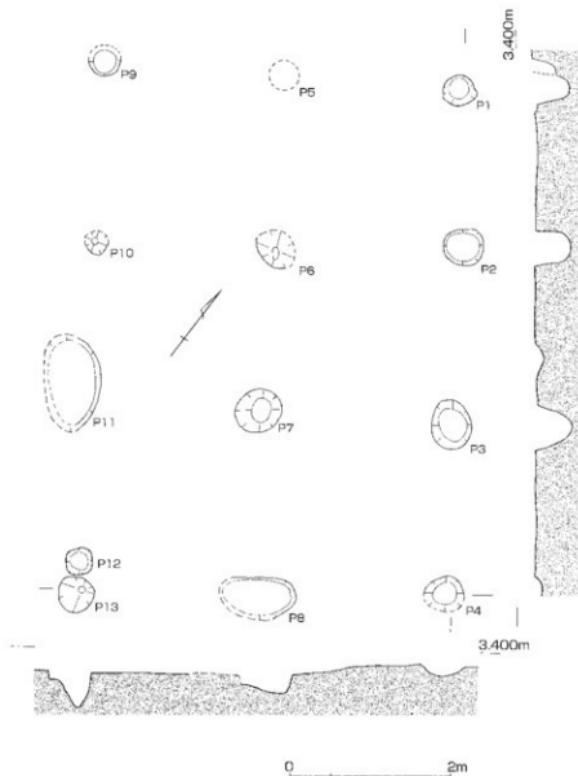


fig.107 SB303 平面・断面図

#### SB304

主軸をN-32°Wにとる東西3間以上(約7.8m)×南北3間(約6.2m)の総柱建物である。西端の柱穴列が調査区外に延びているため正確な規模は不明である。柱の間隔はおよそ1.8mであるが、東端の柱穴列との間は3mとやや離れた配置となっている。柱穴

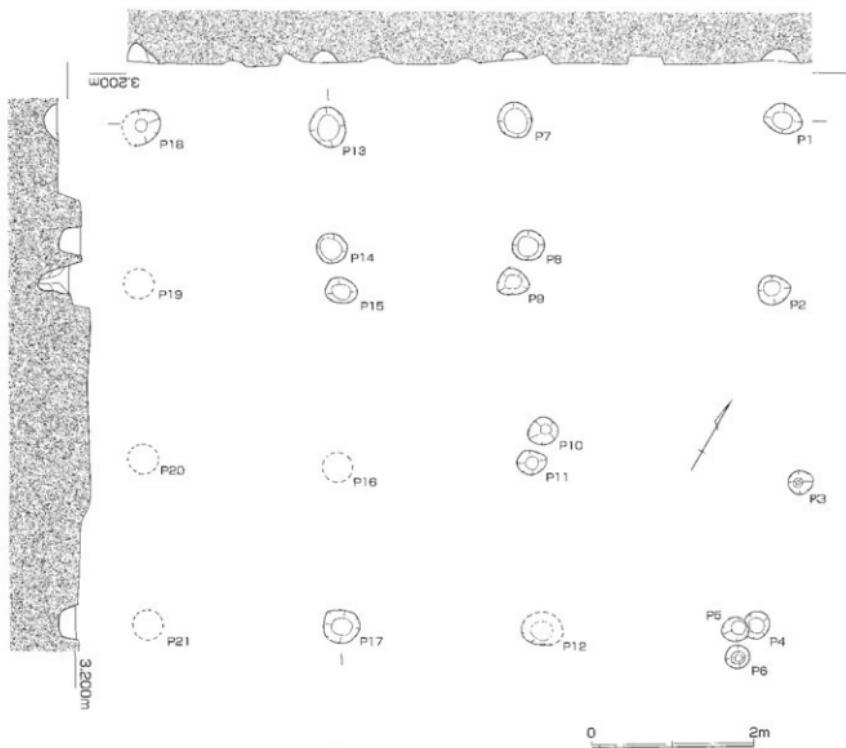


fig.108 SB304 平面・断面図

の掘形は直径40cmの円形である。柱穴が重なって検出されることから建て替えもしくは補強を行ったことがうかがえる。この建物の柱穴の配置や建て替え等の痕跡がSB302と共通している。

出土遺物として図示できるものは、須恵器皿(333)が柱穴内より出土した。出土遺物などからこの建物は13世紀前半のものと考えられる。

#### SB305

主軸をN-31°Wにとる東西2間(約4.4m)×南北3間(約6.2m)の27m<sup>2</sup>を有する純柱建物である。柱の間隔はおよそ2.1mであるが、南東の隅の東西方向の柱間は2.7mと間隔が開いている。柱穴の掘形は直径30~40cmの円形である。

出土遺物として図示できるものは、出土しなかった。

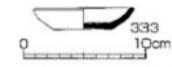


fig.109 SB304 出土遺物



fig.110 SB305 平面・断面図

### SB306

主軸を N $-30^{\circ} 50'$  W に据える東西 6 間（約 13.8m）×南北 4 間（約 8.2m）で 113m<sup>2</sup> を有する総柱建物である。

南辺部中央の柱穴は、近世の井戸構築の際、掘削されたため消滅している。柱の間隔はおよそ 2.1m である。柱穴の掘形は直径 20~50cm の円形である。それぞれ複数の柱穴が検出されることから、建て替えもしくは補修があったと考えられる建物である。重複する柱穴の切り合いの関係から、東西 4 間（約 8.0m）×南北 3 間（約 6.4m）で 51m<sup>2</sup> を有する総柱建物の規模を拡張するかたちで建て替えが行われたと考えられる。また、長径 120 cm の楕円形プランの柱穴は、建て替えを行なうか解体する際に再利用する柱を抜き取った痕跡と考えられる。柱痕に関しては確認できるもののがなく、柱の抜き取りが行われたあとに埋め戻したことによる起因すると考えられる。この建物は、二葉町遺跡で今回検出された中世の掘立柱建物中で最大の規模をもつ建物である。

出土遺物は、図示できる柱穴内からの出土遺物は、(334~336) が土師器皿、(337~338)

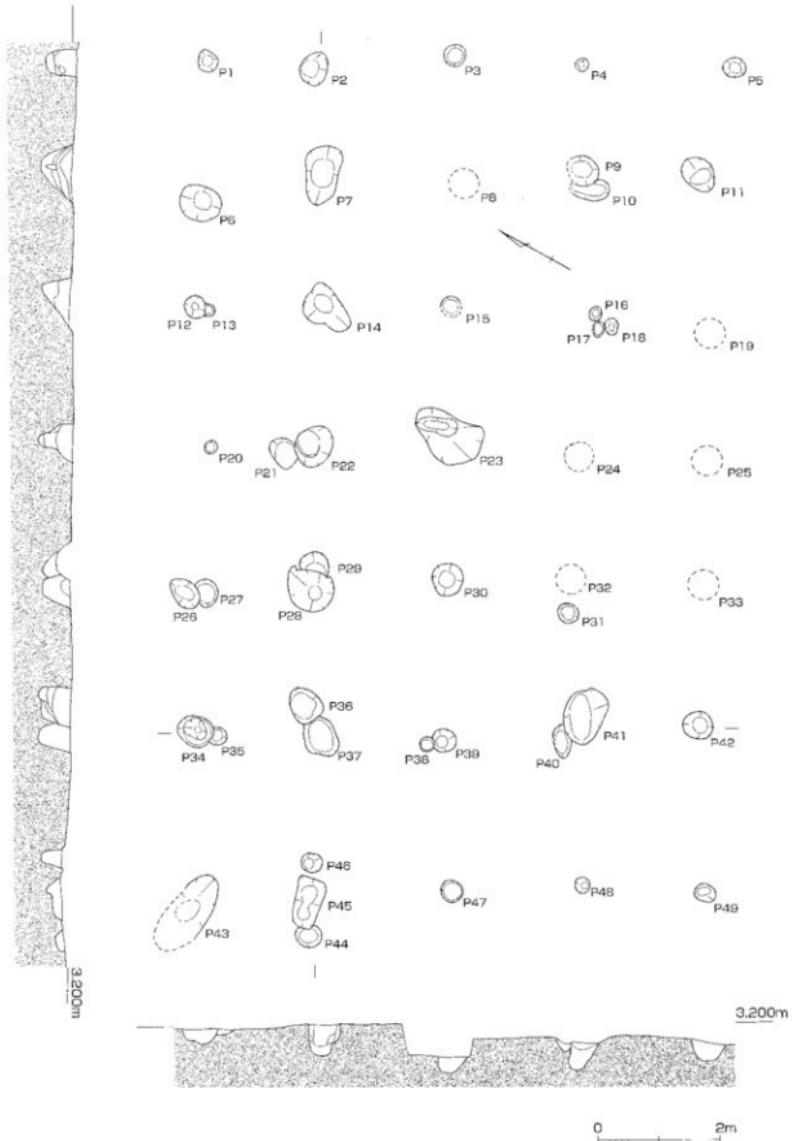


fig.111 SB306 平面・断面図

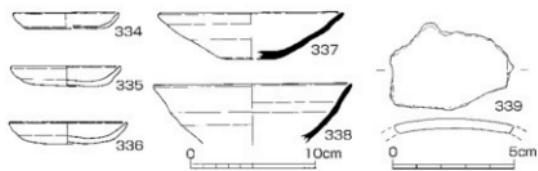


fig.112 SB306 出土遺物・不明銅製品

が須恵器の境である。

P23からは用途不明の銅製品(339)が出土した。長さ5cm、幅3cm、厚み5mmのもので、円面を有している。

出土遺物などからこの建物は13世紀前半のものと考えられる。

**SB307** 主軸をN-31°50'Wにとる東西2間(約4.7m)×南北3間(約6.5m)の31m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。柱の間隔はおよそ2.1mである。柱穴の掘形は直径20~60cmの円形である。出土遺物として図示できるものは、須恵器皿(340)のみである。この遺物からこの建物は13世紀前半のものと考えられる。



fig.113 SB307 平面・断面図

fig.114 SB307 出土遺物

SB308

主軸をN-27°Wにとる東西3間（約6.8m）×南北4間（約7.7m）で52m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。

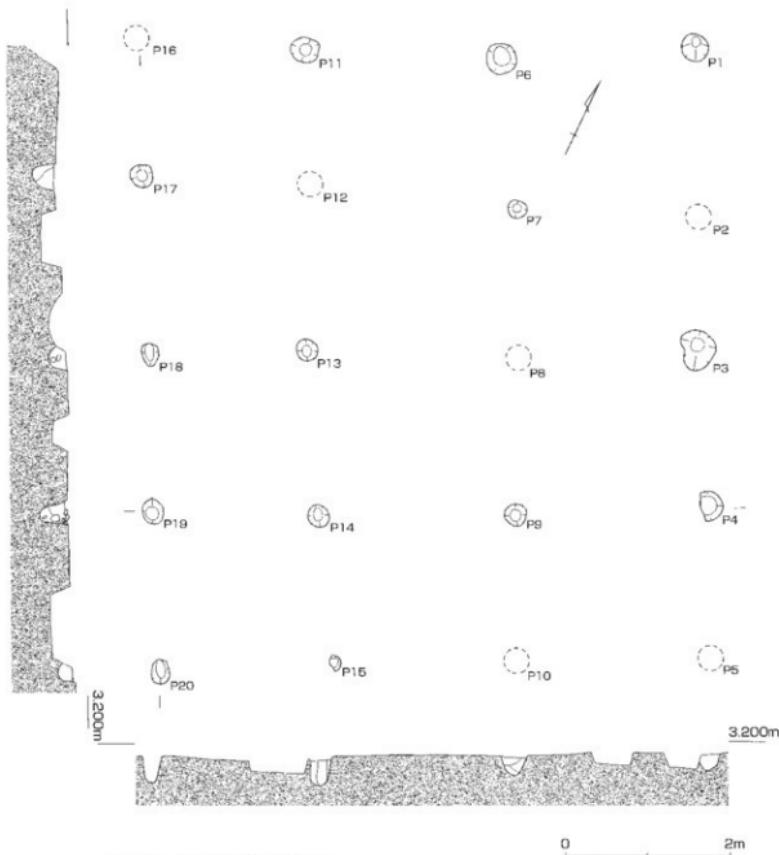


fig.115 SB308 平面・断面図

0 2m

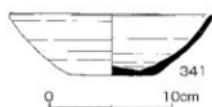


fig.116 SB308 出土遺物

柱の間隔はおよそ2.1mであるが、東西方向の3間の真ん中の柱間は2.4mあり、1間×1間の建物が2棟並んで建っているかのように見える。柱穴の掘形は直径20~40cmの円形である。柱痕は確認できた柱穴の横断面では径15cmほどを測る。また、柱痕は確認されなかったが、拳大の石を重ねた状態の柱穴が検出された。図示できる柱穴内の出土遺物として、須恵器壺(341)が出土した。13世紀前半頃の建物と考えられる。

## SB309

主軸を N-25°W に据る東西3間（約5.3m）×南北3間（約6.5m）で34m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。柱の間隔はおよそ2.4mであるが、東西方向の3間の真ん中の柱間は2.8mあり、SB308と同様の構造をなしている。柱穴の掘形は直径20~40cmの円形である。柱穴の掘形の大小の差に、規則性がないため底の有無は不明である。柱痕が確認できる柱穴はなかった。

出土遺物は小破片のものが少量出土したのみであり、図示できるものはない。

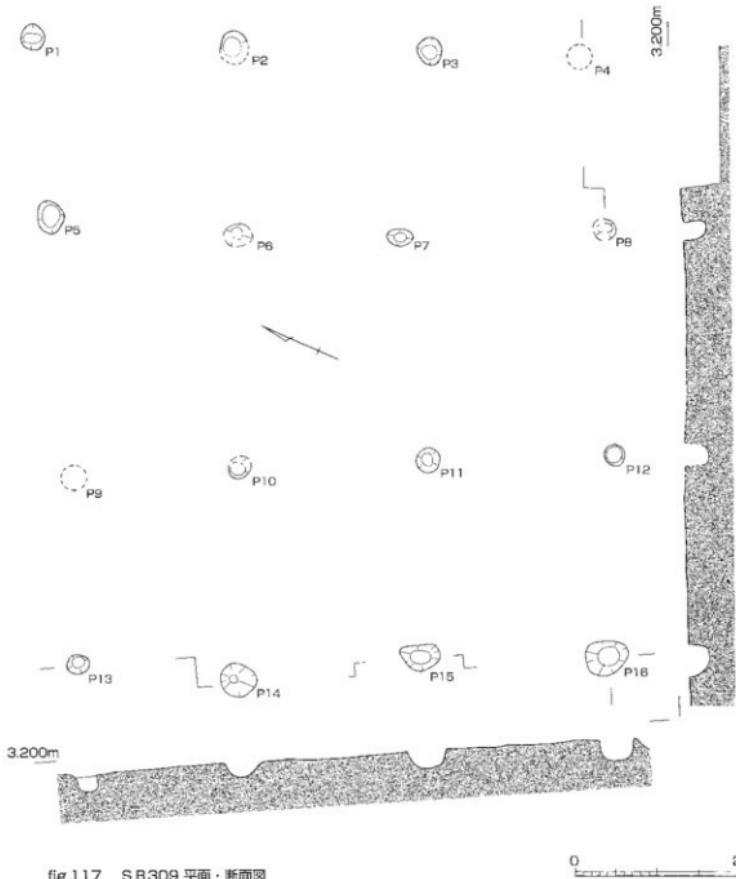


fig.117 SB309 平面・断面図

SB310

主軸をN-33°50'Wにとる東西2間(約5.2m)×南北3間(約6.2m)で32mを有する総柱建物である。柱の間隔は東西方向のもので2.4~2.7m、南北方向のもので1.8~2.1mである。

柱穴の掘形は円形で、南辺に並ぶP4.8.12の直径は25cm、遺構面からの深さが20cmの規模であるのに対し、P1.7.9.11は直径が30~50cm、遺構面からの深さが40cmであり、南辺一列に比べると規模が大きい。柱旗が確認できる柱はなかった。

これらのことから南の一列は庇に伴う柱と考えられ、隅柱の掘形が大きな2間×2間の建物で、柱間の長さの違いから東西棟の庇付き総柱建物と考えられる。

出土遺物は小破片のものが少量出土したのみであり、図示できるものはない。

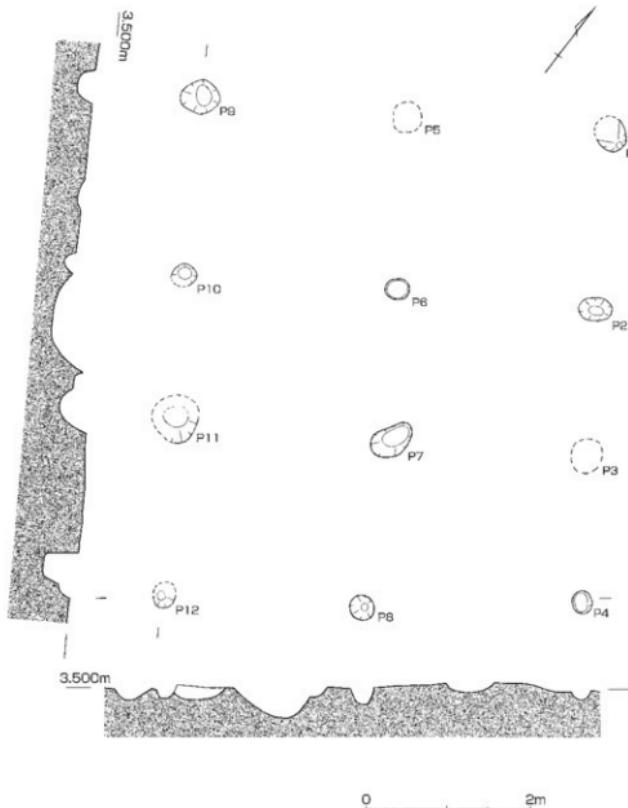


fig.118 SB310 平面・断面図

## SB311

主軸をN-33°Wにとる東西3間（約6.4m）×南北3間（約6.4m）で41m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。柱の間隔はおよそ2.1mを測るが、東端の南北列との東西幅が2.4mと拡がっている。

柱穴の掘形は円形で、直径が20~50cmを測る。造構面からの深さは15~30cmの規模である。ほとんど全ての柱穴で柱痕は確認され、横断面円形で15cmほどを測る。

柱間の間隔が東端一列のみが拡がっていることから、東に庇の付く2間×3間の南北棟の総柱建物と考えられる。

出土遺物は小破片のものが少量出土したのみであり、図示できるものはない。

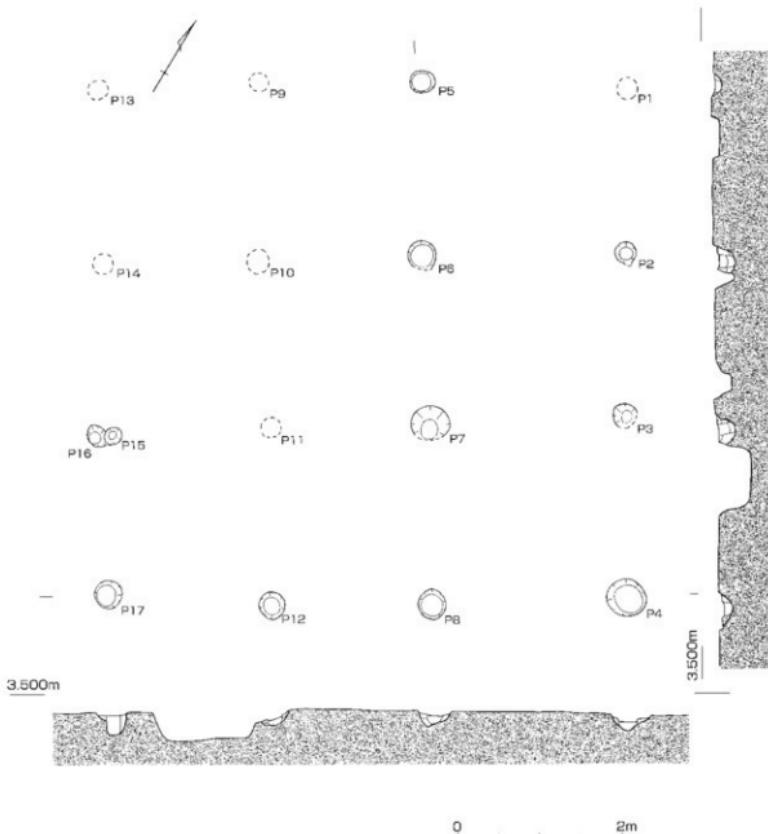


fig.119 SB311 平面・断面図

**SB312**

主軸をN-32° 50' Wにとる東西3間（約7.0 m）×南北2間（約4.0 m）で28m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。柱の間隔は東西方向のもので2.2～2.4 m、南北方向のもので1.8～2.2 mである。

柱穴の掘形は円形で、25～35cm、邊構面からの掘形の深さが20～35cmの規模である。柱痕が確認できる柱では、横断面円形で15cmほどを測る。P7では、掘形の底に柱の沈み込みと考えられる直径15cm、深さ5cmの窪みが検出された。

出土遺物は小破片のものが少量出土したのみであり、図示できるものはない。

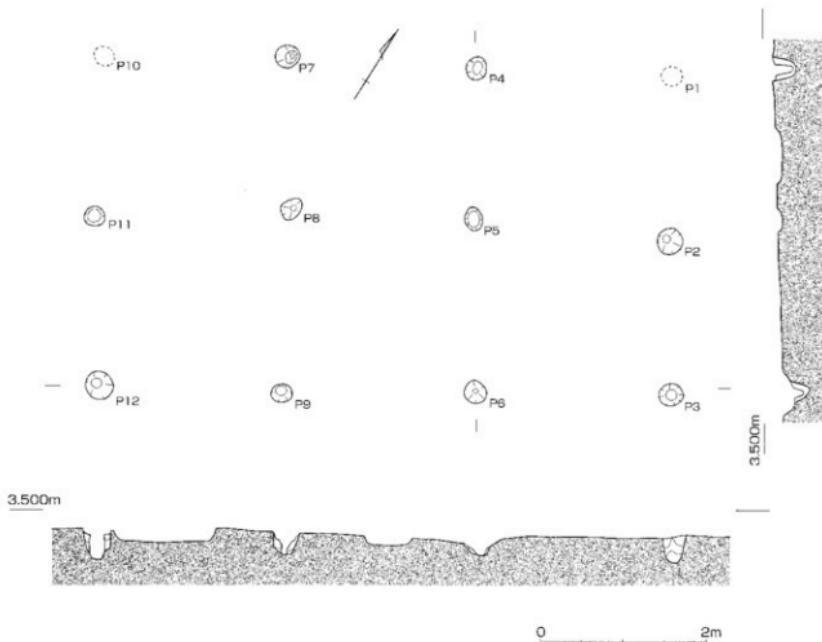


fig.120 SB312 平面・断面図

**SB313**

主軸をN-35° 50' Wにとる東西3間（約6.3 m）×南北2間（約5.1 m）で32m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。柱の間隔はおよそ2.1 mである。柱穴の掘形は直径20～40cmの円形である。柱穴の掘形の大小の差に、規則性がないため底の有無は不明である。柱痕が確認

できる柱穴はなかった。建物に伴う柱穴内から出土した遺物として、土師器皿(342)が図化して示せる。この遺物から、13世紀前半の建物と考えられる。

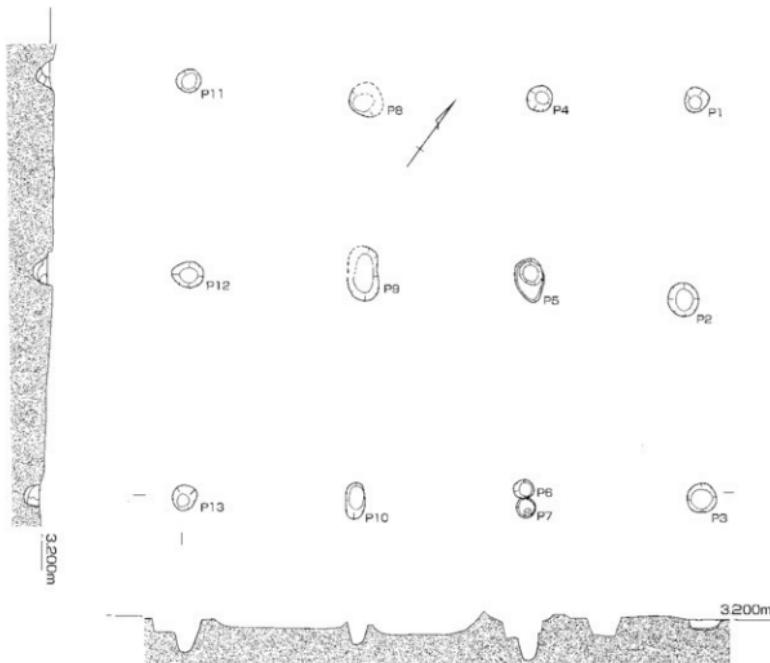


fig.121 SB313 平面・断面図

0 2m



fig.122 SB313 出土遺物

0 10cm

#### SB314

主軸を N-32° W にとる東西 2 間（約 4.1 m）×南北 3 間（約 5.5 m）で 23 m<sup>2</sup> を有する建物である。建物の中にある柱穴が、擾乱により検出できなかつたため、側柱建物か総柱建物の判別は付かない。柱の間隔はおよそ 2.1 m である。柱穴の掘形は直径 20~40 cm の円形である。柱穴痕が重なって検出されることから、建て替えもしくは補強を行つたことがうかがえる。柱穴の掘形の大小の差に、規則性がないため底の有無は不明である。柱痕が確認できた柱穴の横断面では直径 15 cm ほどを測る。図示できる遺物は出土しなかつたが、小破片の遺物から 11世紀中頃~12世紀前半の建物と考えられる。

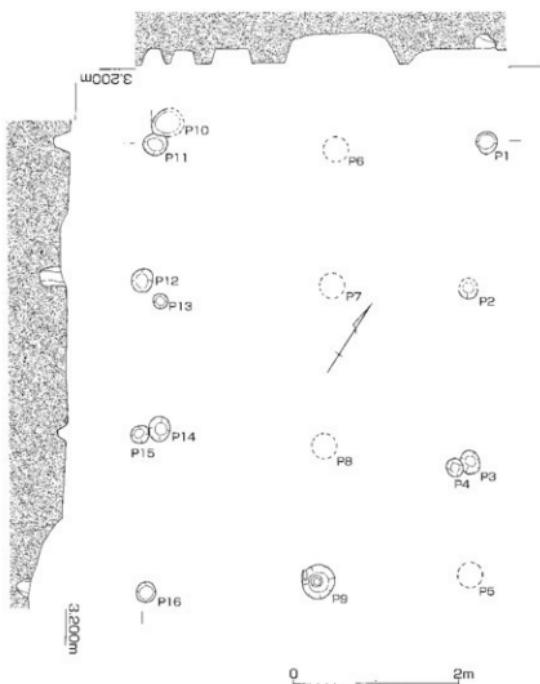


fig.123 SB314 平面・断面図

SB315

主軸を N-34° 25' W にとる東西2間（約4.3m）×南北3間（約7.4m）で32m<sup>2</sup>を有する総柱建物である。調査区の南端で検出されたため、南に続きの柱穴が存在する場合は、建物の規模はさらに大きくなる可能性がある。東西の両柱列とも、真ん中の柱が搅乱により削平を受け確認されなかった。

柱の間隔はおよそ2.4mである。柱穴の掘形は直径20~40cmの円形である。柱穴の掘形の大小の差に、規則性がないため底の有無は不明である。ほとんど全ての柱穴で柱痕が確認できた。横断面の観察から直径20~25cmほどを測る。いずれの柱痕にも、柱の沈み込みの痕跡は見られなかった。南辺の柱穴列には、重なり合う柱穴が存在することから建て替え、もしくは補修を行った可能性がある。

出土遺物は小破片のものが少量出土したのみであり、図示できるものはない。遺物から11世紀中頃～12世紀前半の建物と考えられる。

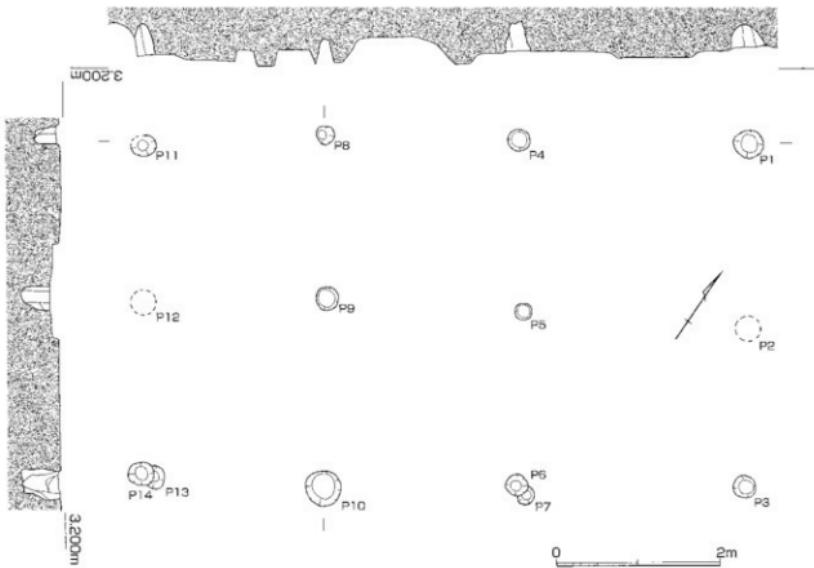


fig.124 SB315 平面・断面図

### SB316

主軸を N-26° 50' W にとる東西4間（約9.0 m）×南北1間以上（約2.0 m）の建物である。調査区の南端で検出されたため、南に続く場合は建物の規模はさらに大きくなる可能性がある。柱の間隔は2.0～2.4 mに不規則な間隔で並んでいる。

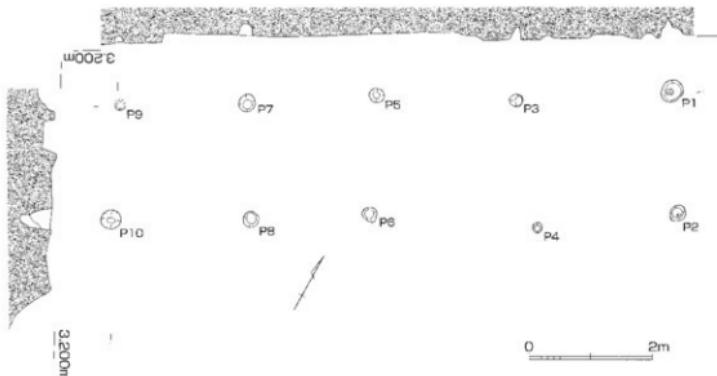


fig.124 SB316 平面・断面図

柱穴の掘形は直径20~40cmの円形である。柱穴の掘形の大小の差に、規則性がないため庇の有無は不明である。柱痕が確認できる柱穴はなかった。

出土遺物は小破片のものが少量出土したのみであり、図示できるものはない。

SB317

後世の搅乱を受け、遺存していない柱穴が多いが、主軸をN-42°Wにとる南北2間（約4.2m）×東西3間（約5.7m）の総柱建物である。ただし、東側部分が調査区外にかかり、さらに規模の大きくなる可能性がある。柱穴掘形プランは円形で、径は40~50cmを測る。図示できる出土遺物はない。

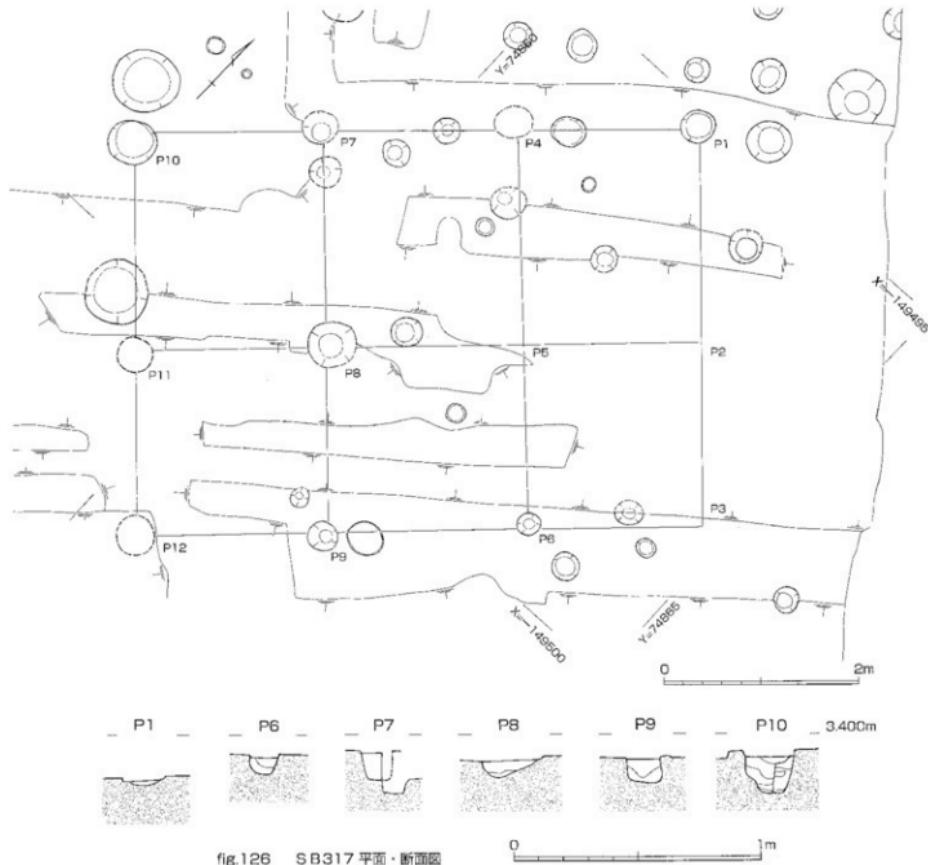


fig.126 SB317 平面・断面図

## SB318

主軸を N-34°W にとる南北4間（約8.5m）以上×東西2間（約4.4m）以上の側柱建物。東および北側の柱列は調査区外にかかるため規模の確定ができない。柱掘形プランは円形で、径は40cm～60cmほど。各柱穴で柱痕または柱の抜き跡が確認され、P4は柱根が遺存していた。柱痕は横断面円形で径20cmほど。P7の柱抜き跡には蛸壺、P8の柱抜き跡には蛸壺と上鍤が納められている。その他の柱穴からの出土遺物のうち図示できるものにはP3の須恵器壺、P5の内面黒色土器壺・上師器皿、P6の土鍤などがある。

出土遺物から12世紀末～13世紀初頭の遺構と考えられる。

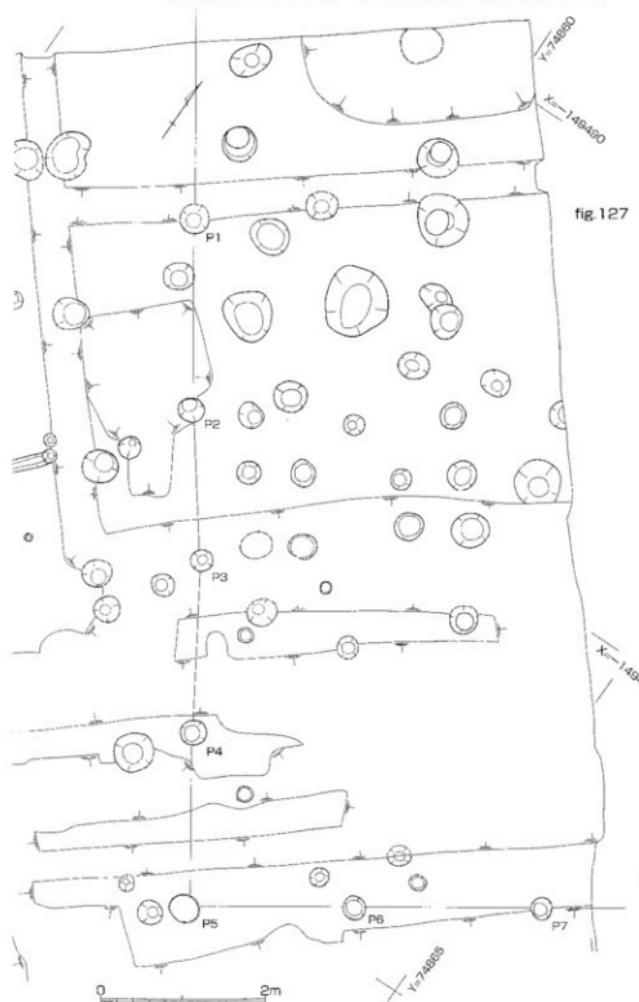


fig.127 SB318 平面・断面図

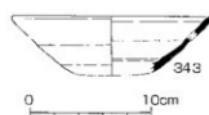


fig.128 SB318 出土遺物

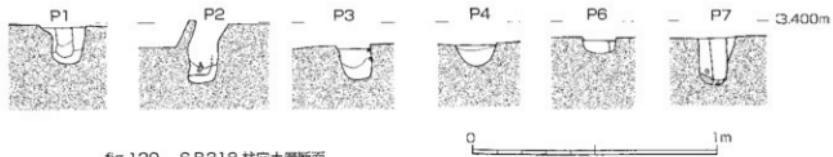


fig.129 SB318 柱穴土層断面

**SB319** 主軸をN-36°Wにとる南北5間(約9.6m)×東西2間(約4.3m)の総柱建物。東側に規模が大きくなる可能性がある。柱掘形プランは円形で、径は40cm~60cmほどを測る。各柱穴で柱痕または柱の抜き跡が確認され、P6は柱痕が遺存していた。柱痕は横断面円形で径20cmほど。P11の柱抜き跡には蜻蛉、P12の柱抜き跡には蜻蛉と土鍤が納められている。その他の柱穴からの出土遺物のうち図示できるものにはP5の須恵器壺、P9の内面黒色上器壺・土師器皿、P10の土鍤などがある。

出土遺物から13世紀前半の遺構と考えられる。

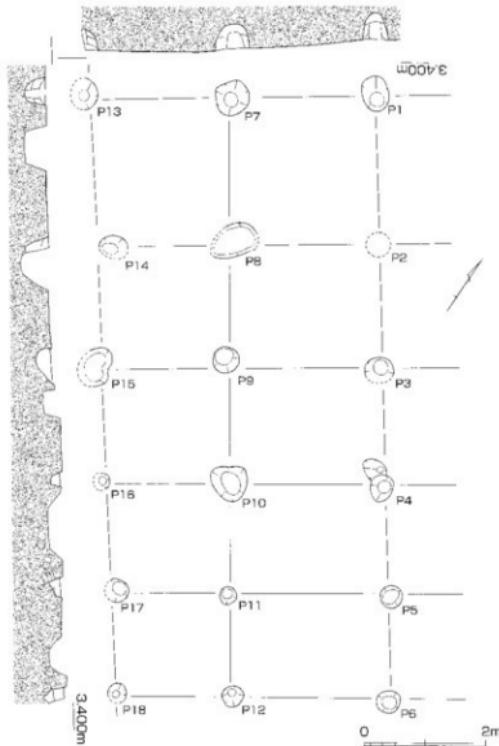


fig.130 SB319 平面・断面図

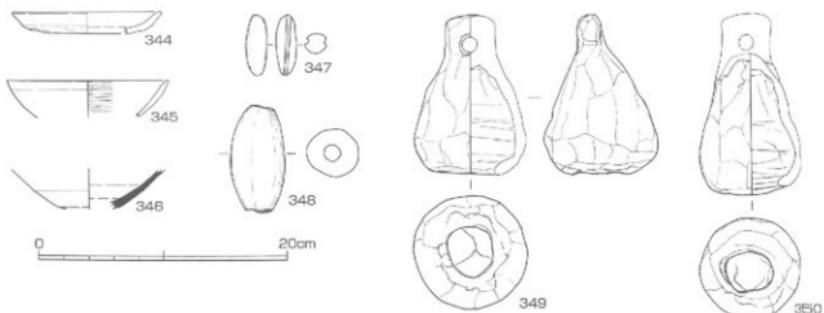


fig.131 SB319 出土遺物

SB320

主軸を N-38° W にとる南北4間（約8.5m）以上×東西1間（約2.0m）以上の側柱建物。東および北部分が調査区外にかかるため規模の確定ができない。柱掘形プランは円形で、径は40cm～60cmほど。P4で柱痕が確認された。横断面円形で径25cmほど。柱穴からの出土遺物のうち図示できるものにはP4の須恵器小皿、P10の須恵器甕などがある。

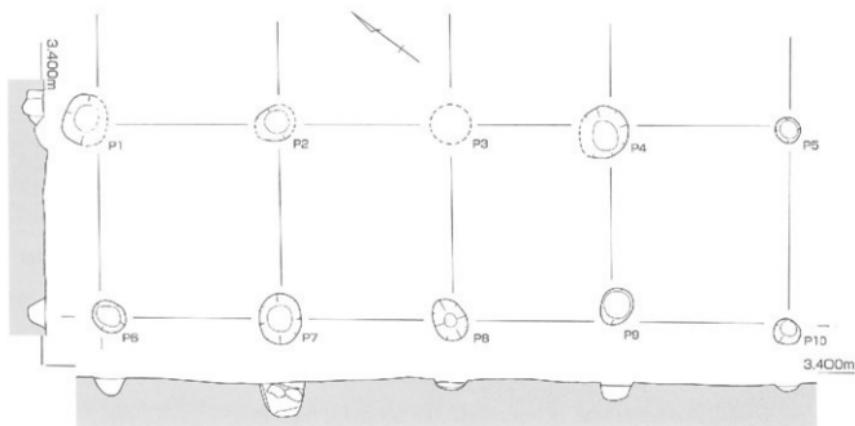


fig.132 SB320 平面・断面図

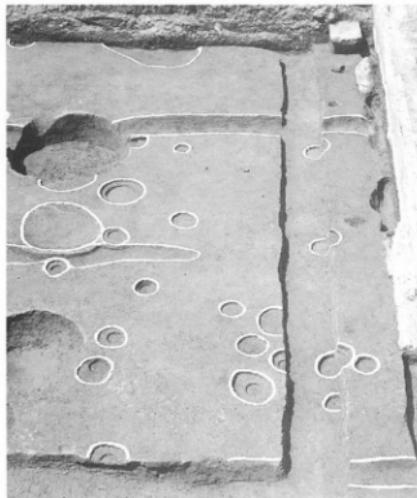


fig.133 SB320 出土遺物

SB321

主軸をN-39°Wにとる東西1間(約1.9m)以上×南北2間(約3.0m)の建物である。東にコンクリート基礎による攪乱があるため、正確な規模は不明である。柱穴は、直径30cmほどの円形であるが、すべての柱穴に柱痕が確認された。柱痕の直径は、横断面径15cmほどを測る。

出土遺物は小破片のものが少量出土したのみであり、図示できるものはない。小破片の遺物からこの建物は鎌倉時代前半のものと考えられる



博図写真12 二葉6 SB321 (南から)

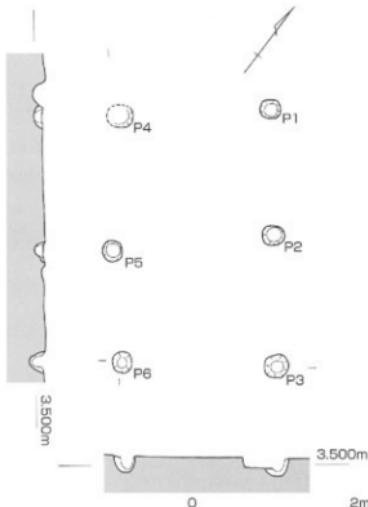


fig.134 SB321 平面・断面図

## (2) 井戸

SE301

調査区の北端で検出した井戸である。掘形の直径が1mの円形プランを呈している。井戸の深さは70cmと浅く、二葉町遺跡のベース層となっている淡灰黄色粘土層の中で取まつており、砂質の湧水層に到達していない。

井戸の中からは、少量かつ小破片の土器が出土したが、図化して示せるような資料は得られなかった。

井戸の底部の構造は、平坦になっており曲物などを据え付けた痕跡は検出されなかった。井戸の状態から見て、湧水を溜めたのではなく、湧水を利用する溜井的な利用が考えられる。

- |               |             |
|---------------|-------------|
| 1 淡灰茶色シルト質板岩砂 | 5 淡灰色板岩砂シルト |
| 2 乳白色板岩砂シルト   | 6 淡灰色板岩砂シルト |
| 3 乳白色シルト質板岩砂  | 7 暗青灰色シルト   |
| 4 淡灰色板岩砂シルト   |             |

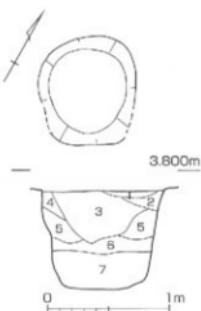


fig.135 SE301 平面・断面図

調査区の北西隅で検出された井戸である。現代の地下構造物によって上半部分が削平を受けているため、規模などの詳細は不明である。残された部分から直径約2mの円形の掘形を呈しており、掘形の東には張り出した掘り込みが検出されたが、明確な段が認められるものではない。井戸の深さは約2.5mあり、底は湧水層と思われる粗砂層に到達している。井戸側の構造は、上半分が円形の掘形を呈しているのに対し、下半分は一辺約70cmの方形を呈している。方形の掘形の状況から、角材などを組み継板などを並べた構造をしていたと考えられるが、井戸の廃絶に伴い木材は抜き取られたものと考えられる。井筒の構造は、長径30cm、短径25cm、高さ23cmの格円形の曲物(354)が一段のみ最下層に据えられた状態で検出された。

木製品の遺物として、横植(353)が出土した。この横植は一木作りで頭長12cm、直径6cm、柄残存長10cm、直径3cmのものである。

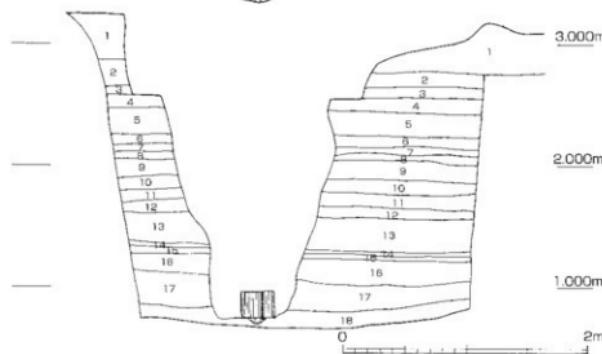
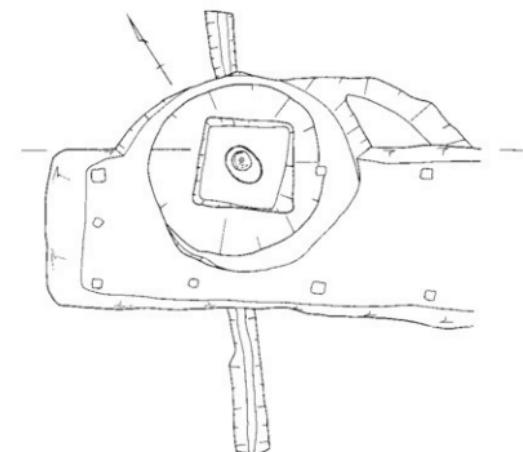


fig.136 SE302 平面・断面図

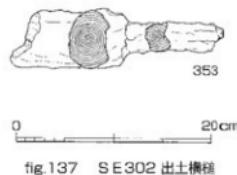


fig.137 SE302 出土横植

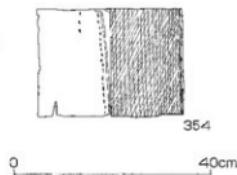


fig.138 SE302 出土曲物

- |              |           |
|--------------|-----------|
| 1 乳茶褐色シルト質細砂 | 11 奇灰色粘土  |
| 2 乳白色粘土      | 12 灰色粘土   |
| 3 淡黄褐色細砂     | 13 乳青灰色粘土 |
| 4 深褐色粘土      | 14 暗灰色粘土  |
| 5 茶褐色中砂一細砂   | 15 暗青灰色粘土 |
| 6 明灰白色粘土     | 16 乳灰色粘土  |
| 7 乳茶色シルト質細砂  | 17 灰色細砂   |
| 8 黄灰色粗砂      | 18 灰色粗砂   |
| 9 品月色粘土      |           |
| 10 明黄色粘土     |           |

井戸内からの出土遺物は掘形が円形から方形に変化する井戸側の途中で、土師器皿(355)、須恵器皿(356)、鍋(358)などが集中して出土した。

また、井筒最下層では、須恵器塊(357)を据え置いたような状態で出土した。塊内から特に遺物は出土しなかった。

井戸の中間や曲物の中に収められたこれらの遺物は、出土状況から井戸の埋め戻しの際に祭祀に使用したものと考えられる。

井戸の廃絶時期は、井筒に据えられた塊などから12世紀中頃～末と考えられる。

#### SE 303

調査区の北西隅で検出した素掘りの井戸である。掘形の直径が1.2mの円形を呈している。井戸の断面は、漏斗状で上半部が開いた形をしている。井戸の深さは1mとやや浅く、二葉町遺跡のベース層となっている淡灰黄色粘質土層の中で収まっており、粗砂質の湧水層に到達していない。井戸の中からは、少量かつ小破片の土器が数点出土したが、図化して示せるような資料は得られなかった。

井戸の底部の構造は、平坦になっており曲物などを据え付けた掘り込み、木材の破片などの痕跡は検出されなかった。

埋没土は、下層が黒灰色シルトで、上層が黒灰色粘質土の2層に分層される。

湧水を作わない粘土層内で井戸の掘削が取まっていることから、湧水を溜めたのではなく、溜水を利用する溜井的な利用が考えられる。



fig.139 SE 302 出土遺物

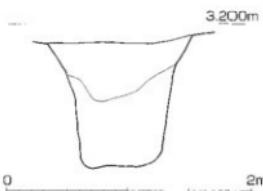


fig.140 SE 303 平面・断面図

#### SE 304

S B301と重なった状態で検出された井戸である。井戸掘形の断面形は漏斗状で上半部は素掘りで、下半部に曲物を3段に組んで井戸柱とした構造である。

掘形の平面形は南北に長い楕円形で、長径2.8m、短径2.5m、深さ2.9mの規模である。下半部の曲物の井戸柱は、井戸柱の直径より僅かに0.02～0.05m程大きい径の掘形に曲物を入れている。

1段目の曲物は直径0.42m、高さ0.25mで上部のみに幅0.06mの縁が付く。2段目の曲物は直径0.33m、高さ0.32mで上端と下端にそれぞれ幅0.04mと0.05mの縁が付く。2段目の曲物と3段目の曲物との間に0.11m程の隙間があり3段目となる。3段目の曲物は直

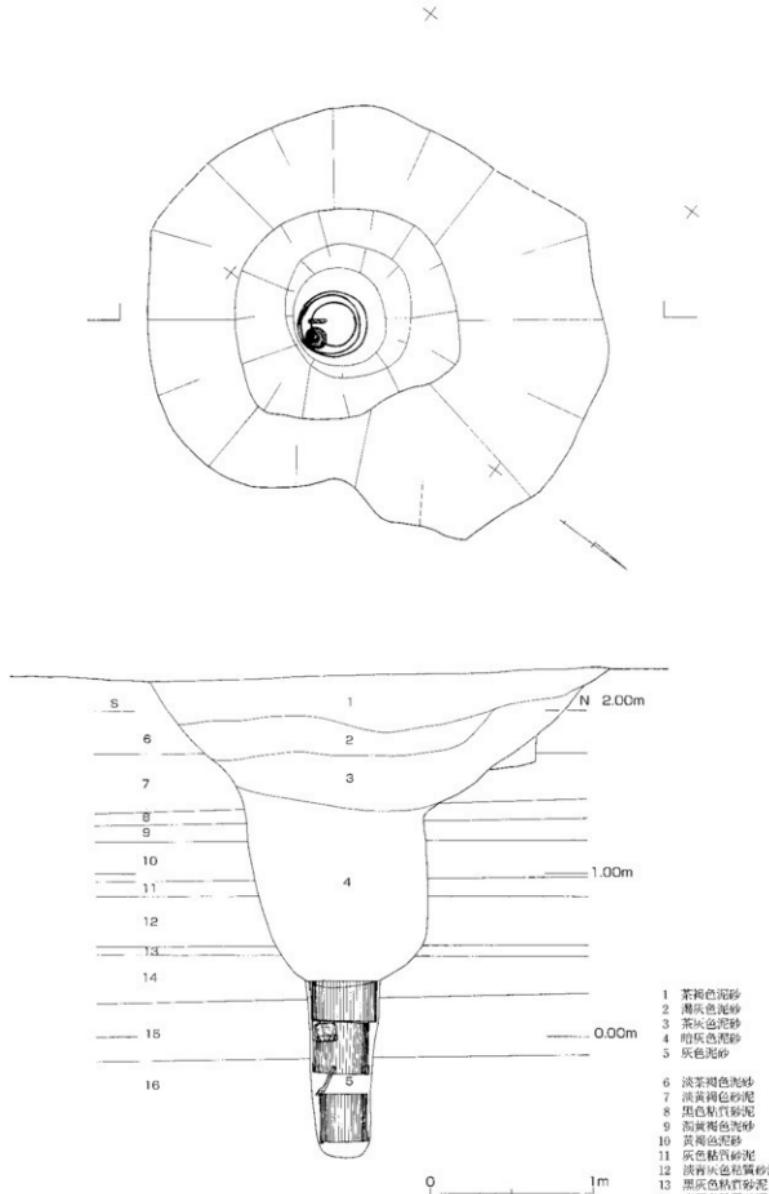


fig.141 SE 304 平面·断面图

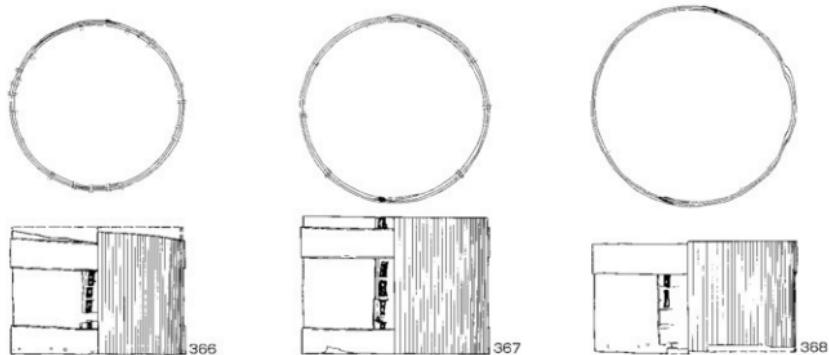
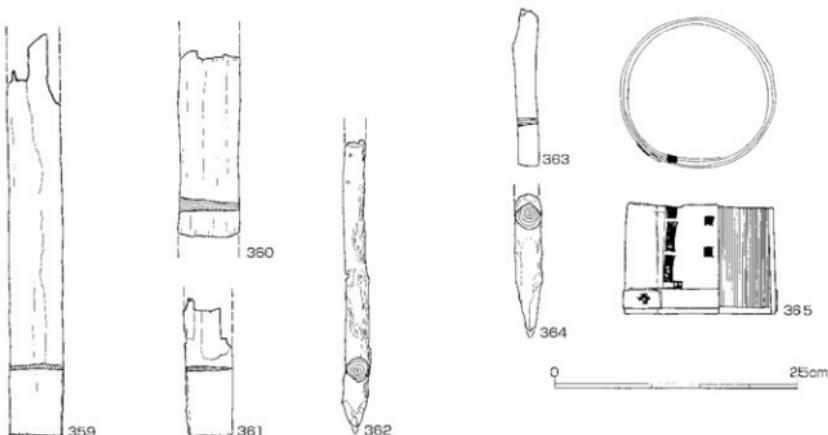


fig.142 SE304 出土木製品

径0.24m、高さ0.29mで2段目同じように上端と下端にそれぞれ幅0.06mの籠が付く。また曲物の内面下半には黒漆が塗ってあるようである。3段目の曲物には南側に自然木で曲物が動かないように押さえている。この木は長さ0.2m、直径0.03mほどの又になった自然木の枝で、又になった部分にさらに切り込みをいれ曲物を挟みこんで押さえている。さらに3段目の曲物の南側下部に長さ0.2m、幅0.03m、厚さ0.01m程の桿木としてかませていた。この桿木は非常に残存状況が悪くほとんど腐っていた。

曲物の直徑から分かるように、下部にいくに従って井戸の掘形は狭まっていく。2段目の曲物の下部から地山が、粘土層から青灰色礫砂に変わり、この層が湧水層と思われる。

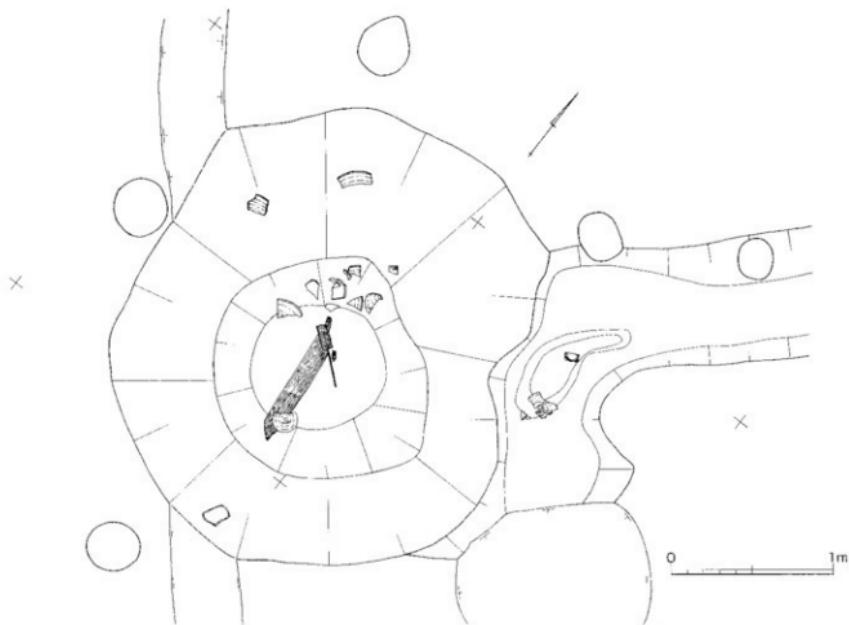


fig.143 SE304 平面圖

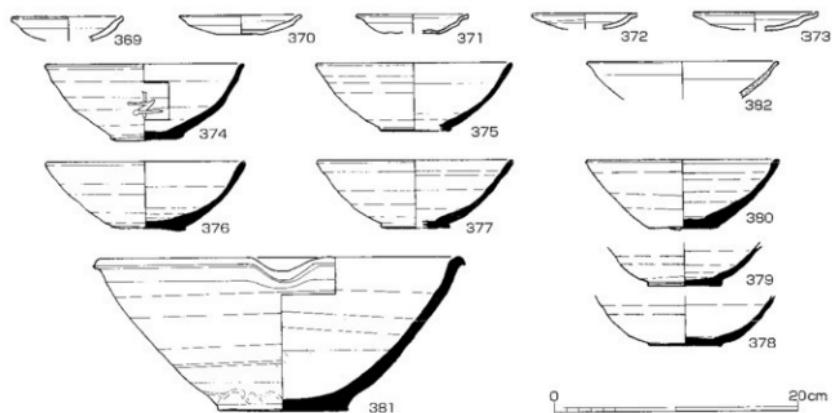


fig.144 SE304 出土遺物

このあたりの標高が 0 m である。

井戸内から土師器皿、須恵器鉢・塊、瓦器と小型の桶・板・杭などの木片が出土した。小型の桶は、直徑 0.15m、高さ 0.115m のもので 2 段目の曲物の中から出土した。また同じ箇所から外面に「本」と墨書きされた須恵器塊が出土した。出土遺物から 11 世紀末から 12 世紀初頭に属する時期と考えられる。

#### SE305

掘形の直徑が 2m の円形の素掘りの井戸である。井戸の深さは 1.5m と比較的浅い深度であるが、粘土層が薄い場所であるため粗砂層に到達している。井戸の井筒には、直徑 25cm の縫みがみられることがから曲物などを据え付けた構造であったと考えられる。井戸の中からは、図化して示した遺物が出土した。

これらの遺物から 11 世紀末～12 世紀初頭の井戸と考えられる。

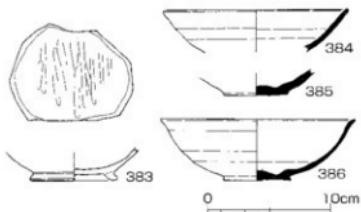


fig.146 SE305 出土遺物

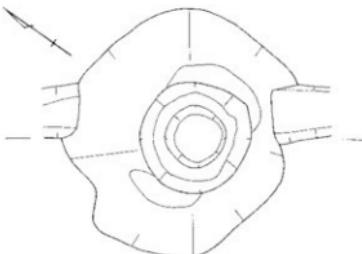


fig.145 SE305 平面・断面図

#### SE306

S B303 の東側、S B306 の北西隅で検出された井戸である。直徑約 2 m の円形の掘形を呈している。遺構検出面では、掘形に沿って拳大の石が並べられ、須恵器などの破片と共に検出された。掘形の東には張り出した掘り込みが検出されたが、明確な段が認められるものではない。

井戸の深さは、検出された遺構面から約 3.3 m あり、底は湧水層と思われる粗砂層に到達している。円形掘形内の遺構面から 50cm 下がったところで、一辺 1.1m の方形の木材を立て並べた井戸側上半を検出した。この縦板は、長さ 30～50cm、幅約 10～20cm、厚み 1～2 cm の大きさのスギ、マツ、ツガ、ヒノキなどの木材 (395～409) を横棟で留めたものである。角にあたる部分にはスギの剥板を 90 度に折り曲げ、井戸側の角に沿わせて設置しているもの (416) を検出した。また、掘形と井戸側の間に粘土を張りつけた痕跡を確認した。この井戸側上部構造の下層において大きな一枚板 2 枚がお互いに内部に押しつぶされた状態で検出した。これは、一本を削ったもので、刎船を半分に切って内面を合わせることにより大きな筒を立てた状態にしており、井筒に転用された船材と判明した。

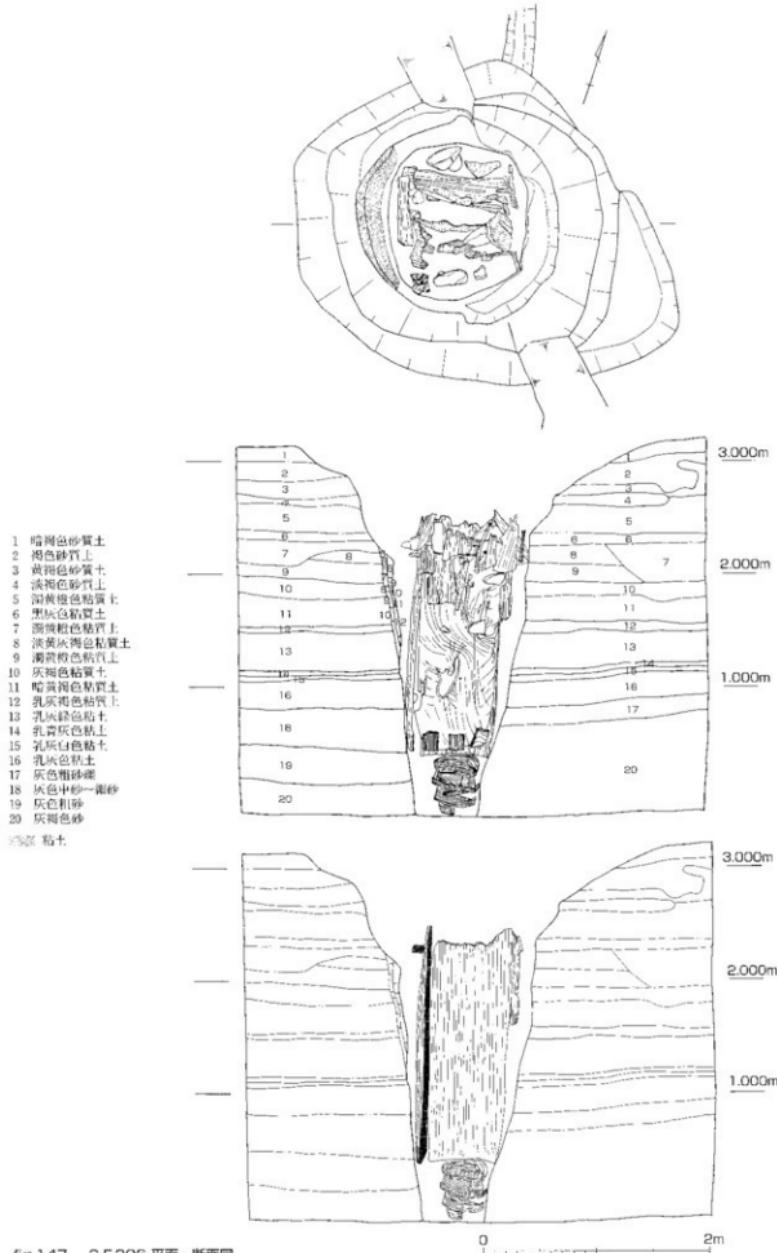


fig.147 SE306 平面·斷面圖

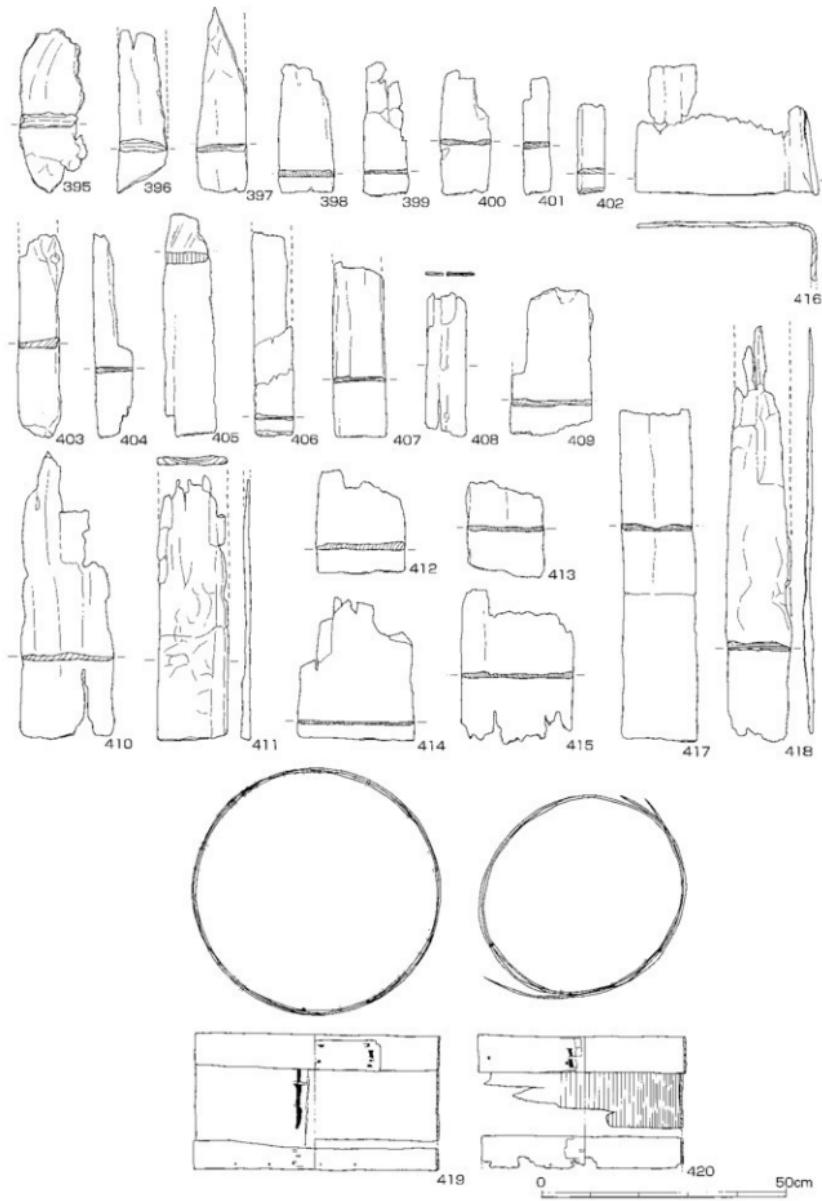


fig.148 SE306 出土木製品

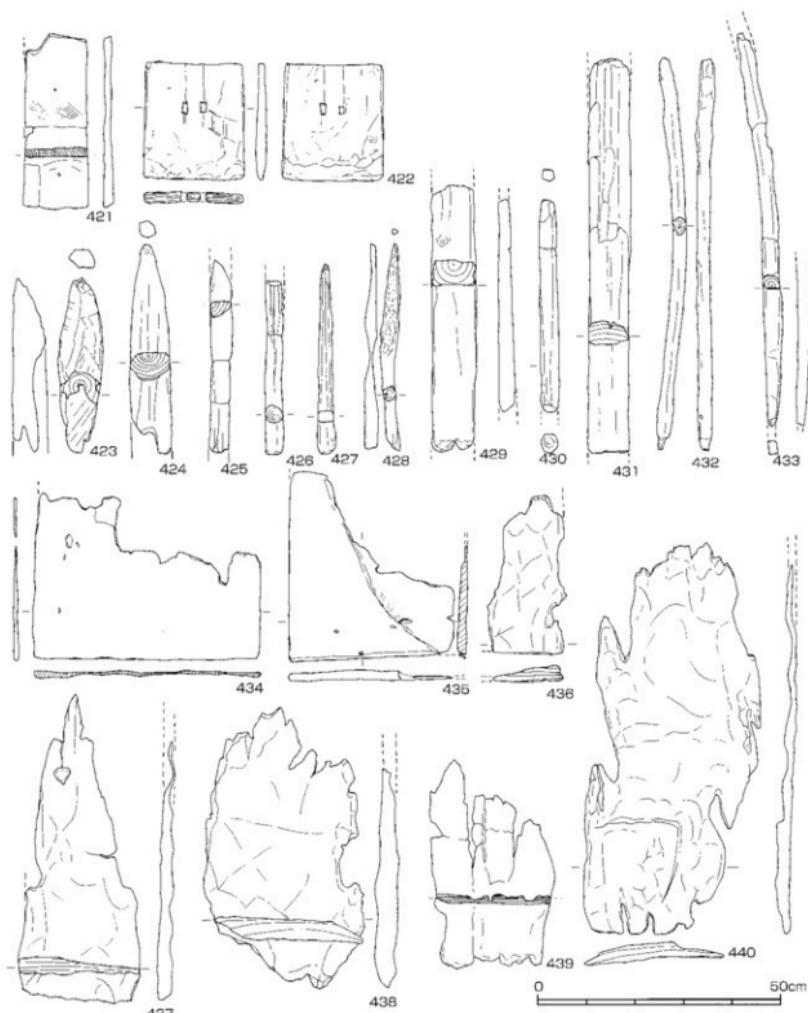


fig.149 SE306 出土木製品

転用された船材の井戸側を固定するために、長さ23cm、幅20cm、厚み3cmの楔形の板など（422）3枚を差し込んだ状態で検出された。

最下段には、水溜め部として曲物を2段に重ねて検出した。この曲物は、接合部が腐食により外れていたため、螺旋状に延びた状態で出土した。

## 転用船材

転用船材は、船体側部の前半分と後半分の船底と右舷の大きく3個の部位に分かれて出土した。それぞれの規模は、船体胴部前半分のもので、長さが約2m、幅約80cmを測り、船底からの立ち上がりは約45cmである。次に大きな部位として船体胴部後半分の船底部分で長さが約2m、幅70cmを測る。この船底部に接合する、船体後半分右舷にあたる部分が長さ約2m、船底からの立ち上がり約50cmである。これらの部位は、井戸として利用された際、船首側と船尾側がそれぞれ下になるように設置されたことにより、上に向いた方が腐食により先細りして、前半分と後半分が接合しない。このため、船体全体の長さは不明である。

船材の形状は、丸木を割り抜き、端部を受け口状に加工し、鉄釘が打ち込んでいることから、「複材刳船」の胴部を利用したものである。この型式の船には、別材で船首の先端部分と船尾末端部分がそれぞれ船体胴部に装着されるものであるが、井戸に転用されていたものの中には船首、船尾の部材は発見されなかった。

側面上部には長さ約5cm、幅2cmの横長楕円形の穿孔2個を横に並べたものや、縦に並べた配置が、約40cmの間隔で施されている。また、側面上面には釘穴が多数観察され、上部に他の部材が取り付けられた可能性が高い。このことから船体をより大きくするために舷側板などを取り付けた準構造船と考えられる。

前半胴部船底面には、幅15cm、長さ40cmの凹面と直径1cmの穿孔が2ヶ所に施されており、民俗事例から木の節などからの亀裂を補修したものと考えられる。使用されている木材は、耐朽性、対虫性が高く水質にも強いクスノキの大木を使用している。木目や節の多さから、根に近い部分を使用しており、船尾端部がより根に近いものと考えられる。

井戸の井戸側補強材として、多数の木材が出土しているが、中には山線を描く抉りを入れた板材(435)や船材と同じクスノキ材(438、439、440)、特に(440)は、クスノキ材に凸部を削り出し、側面には横長楕円形の穿孔が見られることから、同じ船材の一部分と考えられる。

この型式の船は、室町時代に描かれた「法然上人絵伝」等に表現された丸木を割り抜いた胴部に船首と船尾を繋ぎ足した「複材構造船」であると考えられる。しかし、転用された船材には船首あるいは船尾の接合は鉄釘のみで行った形跡があり、接合の補強をなす部材の痕跡が船底部に見られないため接合方法には舷側板などの上部構造により、船首、船尾を抱え込むような形で装着されていたことが考えられる。船の全長は、前述したようになじみではあるが使用されている木材が枝分かれが多く真っ直ぐした部分をとりにくいクスノキであることから胴部は8m前後と考えられ、小型の船舶に分類されよう。

中世の出上船は数例あるが、「複材構造船」の構造が解り、絵巻物では水面下であるため考察できなかった下部構造を明らかにする貴重な資料である。



挿図写真13 船材補修痕

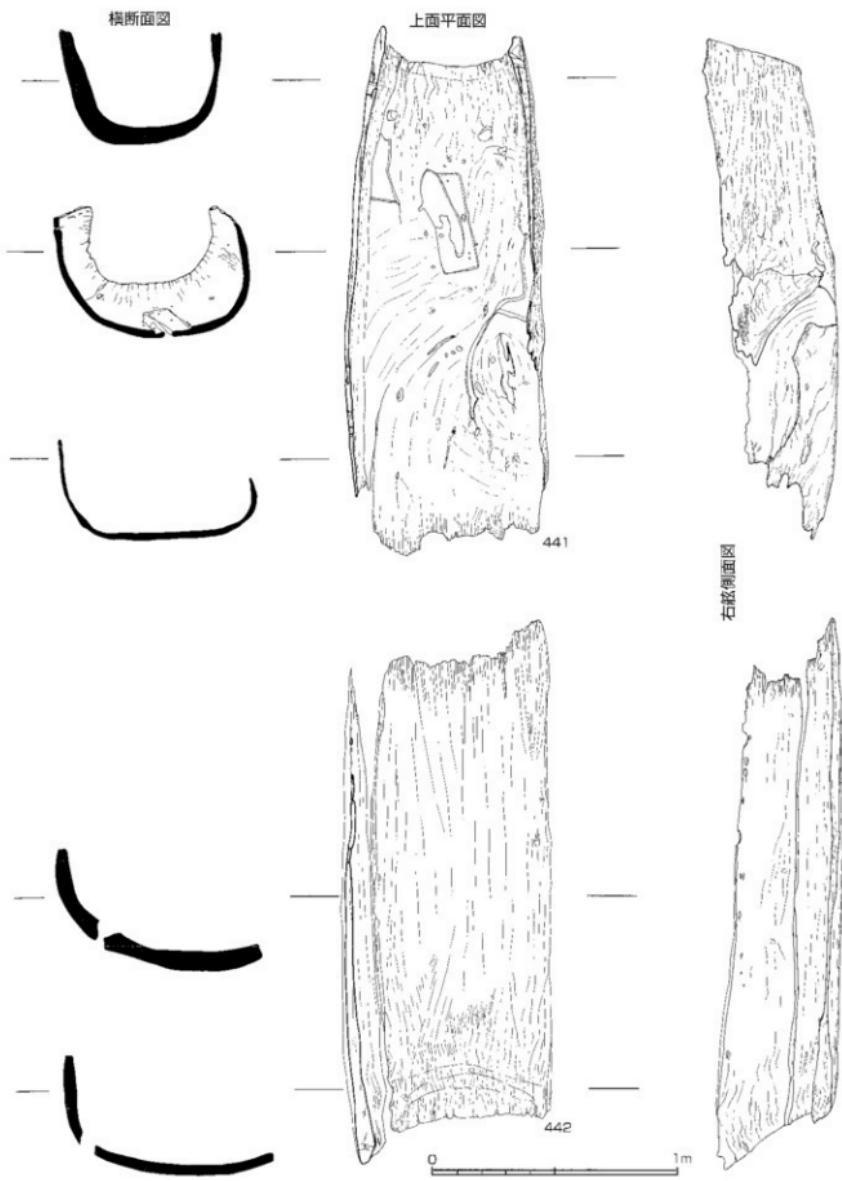


fig.150 SE306 出土船用船材

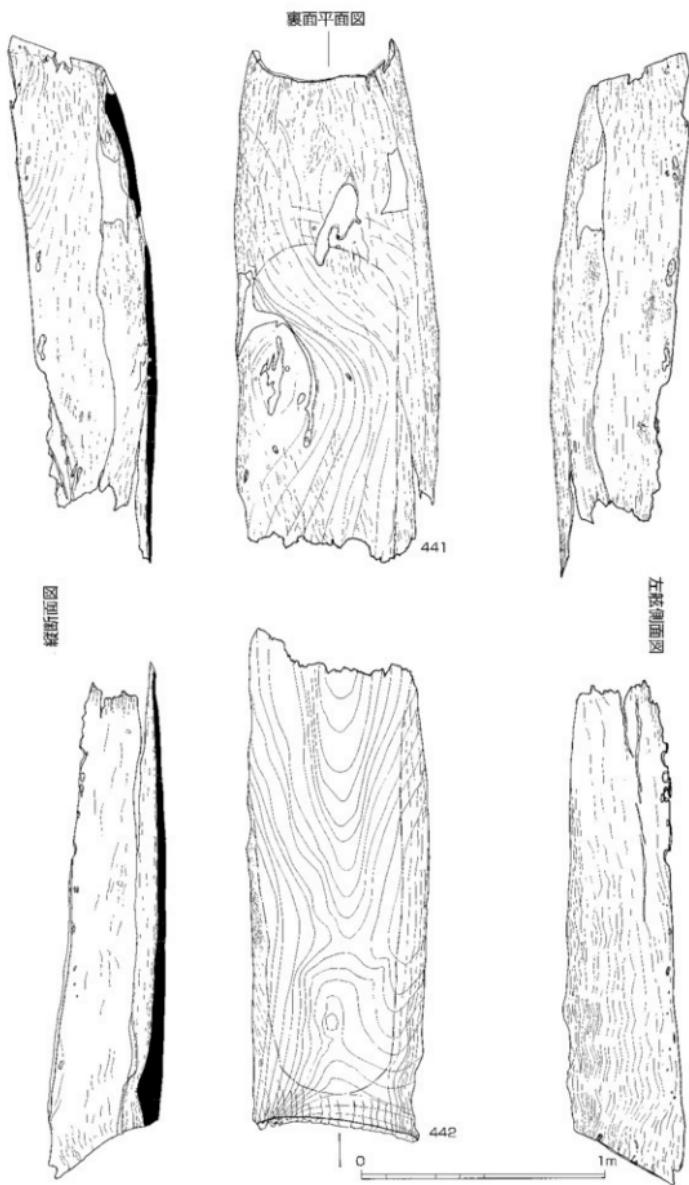


fig.151 SE 306 出土転用船材

## 出土遺物

井戸の中から出土した遺物は、井戸側を構築した際に井戸側の裏込めとして投棄された遺物と井戸側内部から出土する遺物とに分けられるが、井戸側が押しつぶされたように内側に寄っているため井戸側内部と外部の遺物は混ざっているようである。

(443～448) 上飾器の小皿である。(449～454) は須恵器の小皿である。(454) の底部裏面には、×印の墨書きが施されている。(455～457) は須恵器の塊である。(455・456) は、内面底部の見込みに凹みがあり、明瞭な平高台を有する。(457) は、内面底部の見込みに凹みがなくなり直線化した体部をしている。(458～461) は、瓦器塊である。体部が湾曲するものと直線的に延びるものがあり、ヘラミガキは比較的細いものを粗く周囲にまわしている。内面見込みの部分には、ジグザグにミガキを施している。(462・463) は輸入磁器碗である。(462) は無文の白磁碗、(463) は青磁碗で外面に直線的な櫛描文、内面にジグザグの櫛描文を施している。

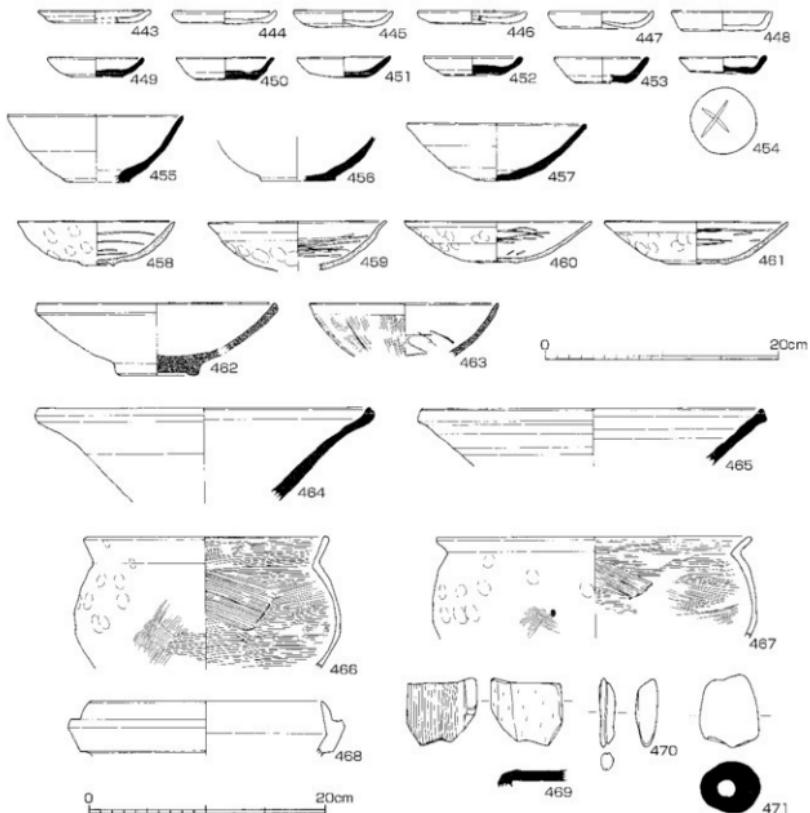


fig.152 SE306 出土遺物

## 金属製品

(464・465)は東播系須恵器の捏鉢、(466・467)は上師質の甕である。(468)は口縁直下に削り出しの鋸がめぐらされた石鍋である。(469)は須恵器の甕の胴部片を観として転用したものである。(470)は有溝土鍤(工字型土鍤)、(471)は大型の管状土鍤である。

## 時期

出土遺物からS E 306の時期は、古いもので12世紀前半から13世紀中頃のものまで混在している。井戸の廃絶した時期は13世紀中頃と考えられ、転用されていた船については11世紀末から12世紀前半に廃船となったものと推測される。

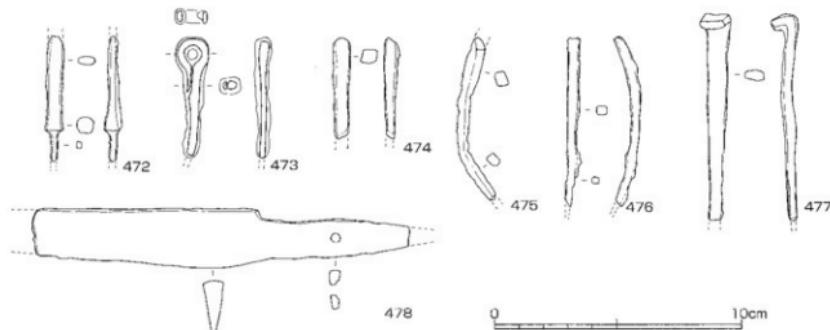


fig.153 S E 306 出土金属製品

## S E 307

S B 304 と重なる位置で検出された井戸である。掘形上面の平面形は、直径 1 m の円形を呈している。深さは、遺構検出面から 1.2 m を測る。最深部でも粘土層内で納まり粗砂層に到達しないことから、湧水を伴うものではなく溜井的な利用が考えられる。

井戸側に特に構造物は検出されなかったが、井戸の底には直径 40 cm、井戸の底から約 12 cm ほどの窪みが検出された。これは井戸底に曲物などを据えつけた痕跡と考えられる。埋没土は、大きく 3 層に分けられる。

井戸の埋没土内からは図化できる遺物は出土しなかった。

- 1 淡黄褐色シルト質砂層
- 2 濁灰黃色粘土
- 3 乳灰褐色粘土

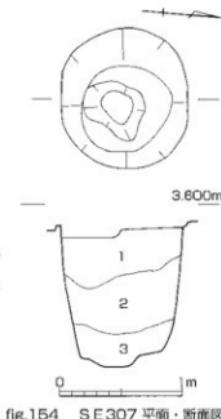


fig.154 S E 307 平面・断面図

SE308

S E 309 と S E 308 は、S B 306 と S B 308 に重なるように検出された。2基の井戸が掘形上面で切り合っており、S E 308 が S E 309 に切られている。

掘形の直径が1.5～1.9mの南北に長い楕円形の井戸である。深さは、遺構検出面から1.9mあり、最深部では粘土層を突き抜け粗砂層まで到達している。井戸掘形の断面形が漏斗状で上半部の途中で直径1.1mの円形に窄まる。

井戸底部の井筒では曲物1段分を検出したが、腐食が進行しており取り上げは困難であった。遺物は、土師器皿(480・481)、須恵器の塊(482・484～486)、須恵器の壺の底部(483)が出土した。12世紀中頃～後半と考えられる。

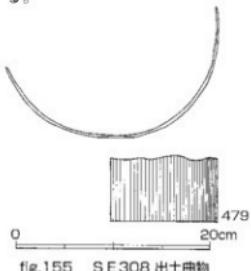


fig.155 SE 308 出土曲物

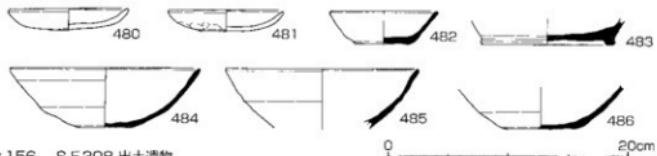


fig.156 SE 308 出土遺物

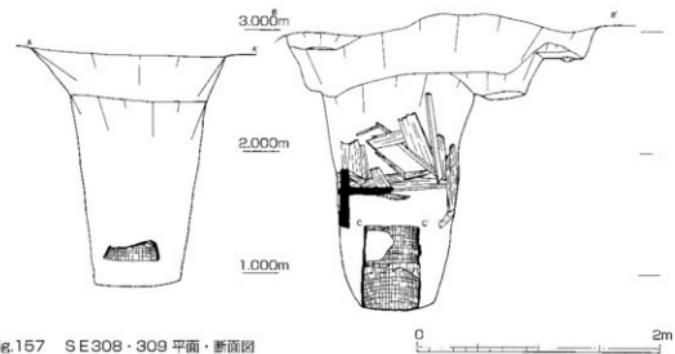
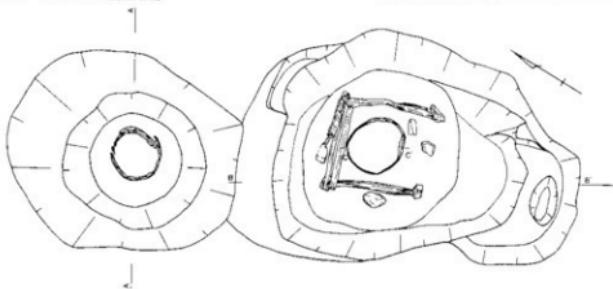


fig.157 SE 308・309 平面・断面図

SE309

掘形の直径が東西 1.9m、南北 2.8m の楕円形をしている。掘形の南には高低差30cm、幅30cmの段が 2段分を造りだしており、階段のような形状をしている。

井戸の深さは、遺構検出面から2.4 m 掘削されており、遺構面を形成している淡黄灰色粘質土層を掘削し、湧水層である粗砂層まで到達している。

井戸側の構造は、縦板組隅柱横桟梁に形式分けされるものであるが、井戸の廃絶後に抜き取りもしくは、崩壊によって板などは正位置を保っていない。掘形と井戸側の間には、拳大の石が散見される。使用されていた木材は、各面に穴を四角く穿った打抜枘が施されたもの(493~497)や縦板には幅10cm前後の板(498~514)などの精巧に加工されたものが使用されている。

横桟を組んだ井戸側最下段には、井筒として直径45cm、高さ30cmの曲物と直径45cm、高さ20cmの曲物を 2段積み上げられている。劣化が進んでいたため、非常に脆弱な状態であり、取り上げは困難であった。この井筒の曲物以外に、井戸内からは30cm前後になると思われる曲物の底部の一部(492)が出土している。

井戸内からの出土遺物は、土師器皿(519~521)、須恵器小皿(522)、須恵器塊(523~528)、漆の椀(532)、有溝土錘(529・531)、棒状有孔土錘(530)である。

須恵器の塊に、12世紀後半の時期ものが出土していることから、この井戸が廃絶したのは12世紀中頃~後半と考えられる。



挿図写真14 SE309(東から)

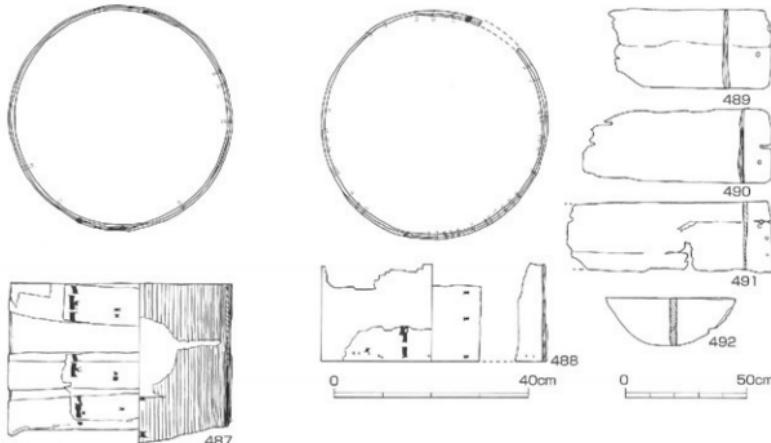


fig.158 SE309 出土木製品

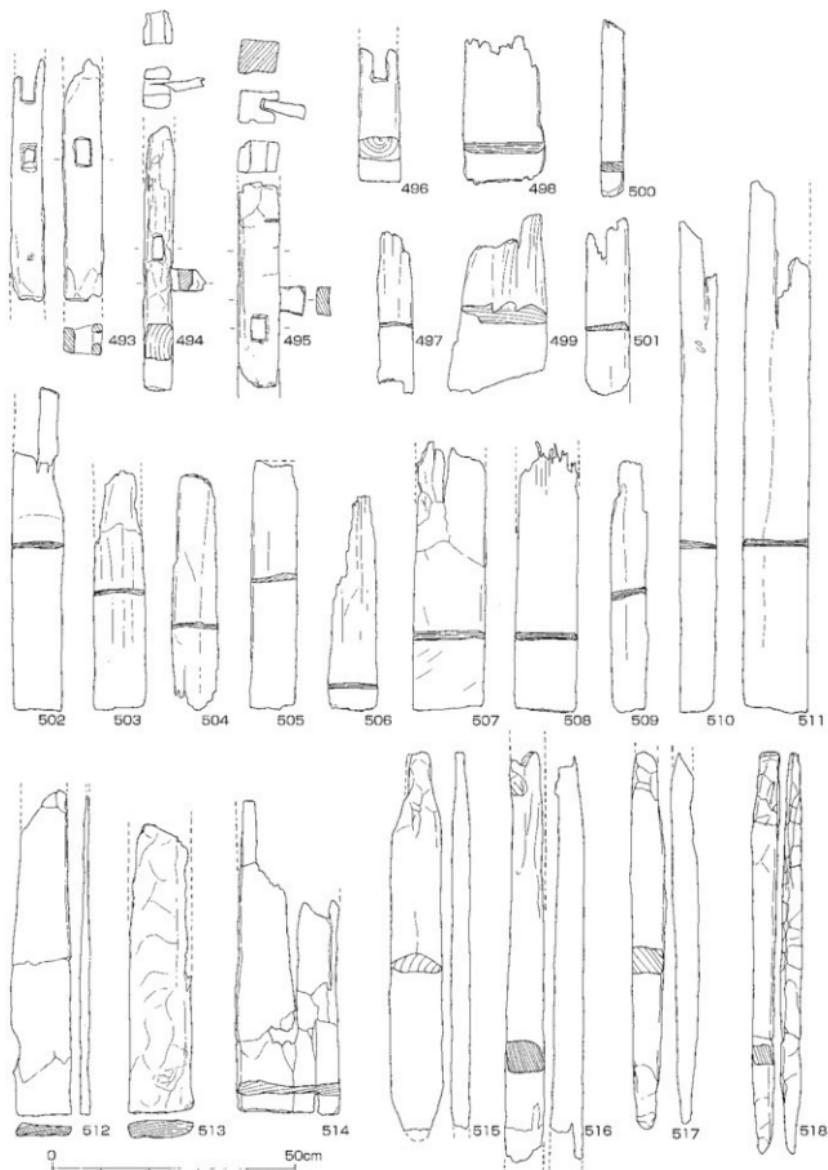


fig.159 SE309 出土木製品

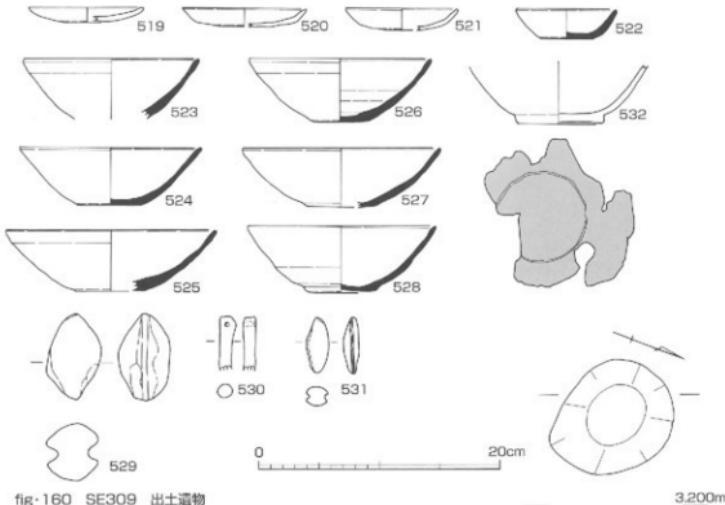


fig.160 SE309 出土遺物

#### SE310

S B309の南西隅で検出された素掘りの井戸である。掘形の直径が1mの円形で、造構面からの井戸の深さは1.1mを測る。淡黄灰色粘質土内に取まっており、湧水層の粗砂層には到達していないことから、溜井的な利用が考えられる。井戸の底は、平坦であり曲物などの構造物を設置した痕跡は確認されなかった。出土遺物(533~538)から12世紀中頃~後半の井戸と考えられる。

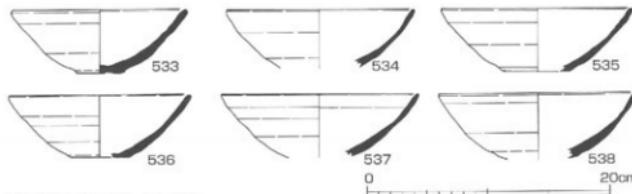


fig.161 SE310 平面・断面図

- 1 灰褐色砂質土
- 2 暗灰褐色砂質土
- 3 暗黄褐色砂質土
- 4 暗黄灰色砂質土
- 5 暗褐色砂質土
- 6 灰褐色砂質土
- 7 黄褐色砂質土
- 8 淡褐色砂質土
- 9 貴灰褐色砂質土
- 10 暗褐色砂質シルト

#### SE311

調査地の南西端で検出された井戸である。北は既存の建物の基礎により消失され、南は調査区外となるため規模などは不明である。

- 1 土
- 2 暗黄灰色板岩
- 3 暗褐色板岩
- 4 暗灰褐色砂質シルト
- 5 暗灰褐色砂質シルト
- 6 暗褐色板岩
- 7 暗褐色板岩細砂
- 8 暗褐色板岩細砂
- 9 灰褐色板岩
- 10 暗灰色シルト
- 11 暗灰色シルト質板岩
- 12 暗褐色板岩細砂
- 13 暗灰褐色シルト質板岩 (やや暗)
- 14 暗灰褐色シルト質板岩細砂
- 15 暗灰褐色シルト質板岩細砂
- 16 暗褐色砂質シルト

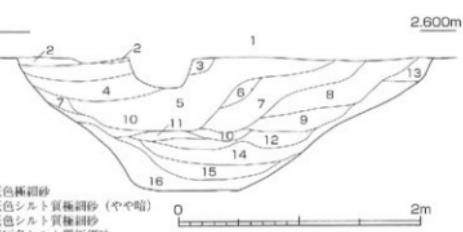


fig.163 SE311 断面図

上位が著しく攪乱を受けており、形状、規模の詳細は不明であるが、一辺約1.1mの隅円方形の平面形と推定される。深さは検出面より約55cmを測る。底のほぼ中央部には径約40cmの曲物枠が存在し、井戸側もしくは水溜として利用されたと考えられ、その上部にも井戸側材が存在した可能性もあるが、井戸側材そのものは遺存しておらず、また、齿土遺物の散在状況から抜き取られた可能性が高いものの、埋上の状況からは確認できなかつた。

遺物は木片なども含まれるもの、大半は土器類で、土師器、須恵器、瓦器、白磁などである。器種としては土師器が皿、須恵器壺、瓦器壺、白磁碗が多いが、土師器甕、須恵鉢などの小片も含まれる。

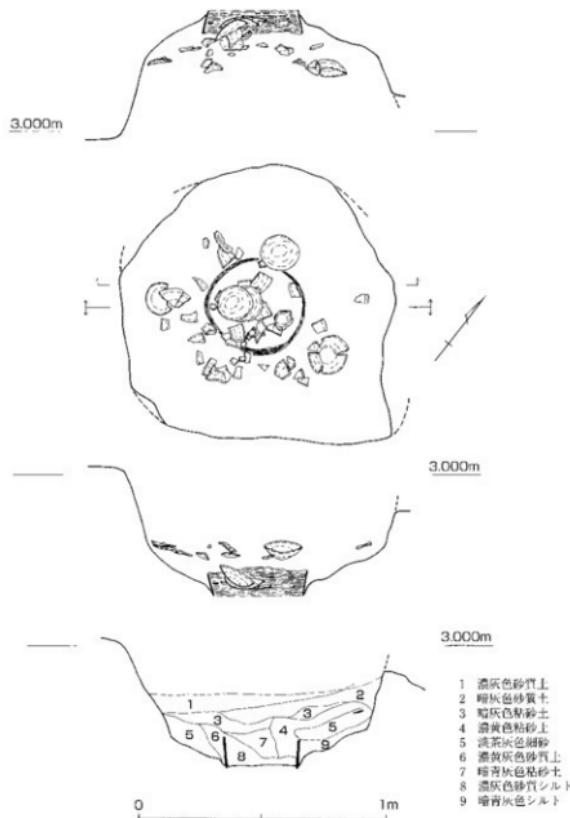


fig.164 SE312 平面・断面図

(539) は土師器の皿で、口径13.9cm、器高2.7cmである。口縁端部がやや内側に、先端部の外側をナデによる面取りが施され、先が尖ったように仕上げられている。回転ナデにより成形されているが、内面底部は丁寧な不定方向ナデ、外面底部はユビオサエ及びユビナデによって仕上げられている。

(540～546) は瓦器の塊である。口径が14.4～16.0cm、器高が4.25～5.35cm、高台径が3.8～5.1cmと法量にややバラつきがみられ、器壁が薄いタイプ(541・542・546)と厚いタイプ(540・543～545)、口縁部がやや内側するタイプ(540・541)と直線的なタイプ(542～546)、見込みの暗文が平行線状のタイプ(541・544・545)と渦巻き状のタイプ(542・546)などに分類が可能で、バリエーションが多いのが特徴である。いずれも内面を闇線ヘラミガキ、外側の体部中位以下をユビオサエによって仕上げられている。

(547～550) は須恵器の塊である。口径が16.25～17.2cm、器高が4.4～4.7cmで、いずれも回転ナデにより成形されており、外面底部には回転糸切り痕がみられる。体部は底部からほぼ直線的に斜め上方に立ち上がるが、(548・549)はわずかに内側する。

(551～553) は白磁の碗である。(551・552) は口縁部及び体部の一部、(553) は底部のみの残存で、(551・552) は復元口径がそれぞれ16.0cm、16.4cm、(553) は高台径6.8cmを測る。

(551・552) は口縁部が玉縁状のもので、(551) は内面体部下位に幅2mm程度の沈線が巡り、外面体部下位は施釉されていない。(553) はやや粗いケズリ出しによって高台部が作り出されており、外面は施釉されていない。見込みにわずかな段を有し、そのやや上位に幅1mm程度の沈線が巡る。

遺物の出土状況から判断するならば、井戸側材を抜き取った後にそれらを投入あるいは配置された可能性が考えられ、この井戸の廃絶期を示す一括性が高い資料と認められる。時期的な考察をすると、瓦器塊の外面にヘラミガキを施さなくなっている点や高台が縮小傾向ながら断面三角形を呈する点、須恵器塊の体部が内側せずに直線的になっているものの底径が未だ大きい点などから、いずれも概ね13世紀の第1四半期（13世紀初頭～前半）の範囲内に属するものと考えられる。

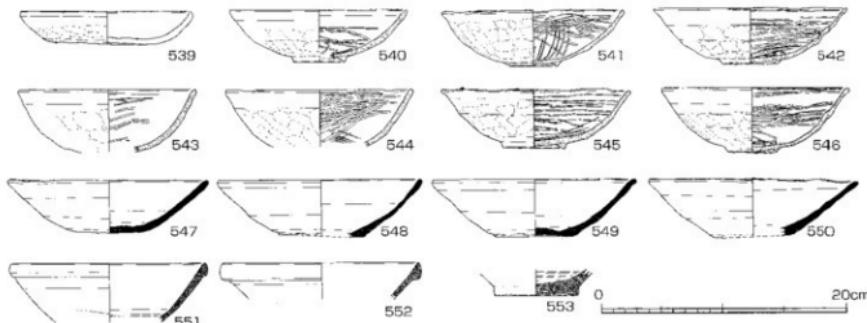


fig.165 SE312 出土遺物

SE313

S B313 の西隣で検出された井戸である。井戸の構造は、掘形の一辺が約2.5 m の方形をしており、深さ約3 mまで掘削している。井戸側上部には、拳大から人頭大の石を組んでおり、その下に縦板横桟組の井戸側を構築している。井筒には、直徑60cm、高さ80cmのクスノキの丸太を割り貫き、さらに表面の平滑に加工したものを用いている。

#### 井戸の構築

井戸の断面から、構築過程を考えると、一辺が約2.5 m の方形の掘形を 3 m 剥削し、湧水層である粗砂層を約 1 m 剥り進み、割り貫きの一木を据えるため下を平らにしてから設置する。割り貫きの一木の周りを粗砂質の土で埋め、上面に横桟を井桁に組み、その外側に幅40~80cmの縦板を並べ、周囲を粘土質の土で埋めている。井戸側上半部は、石を設置するために、再び一辺1.2 m の方形の掘形を剥削し、石を組み上げている。縦板が腐食して補修を行った可能性がある。

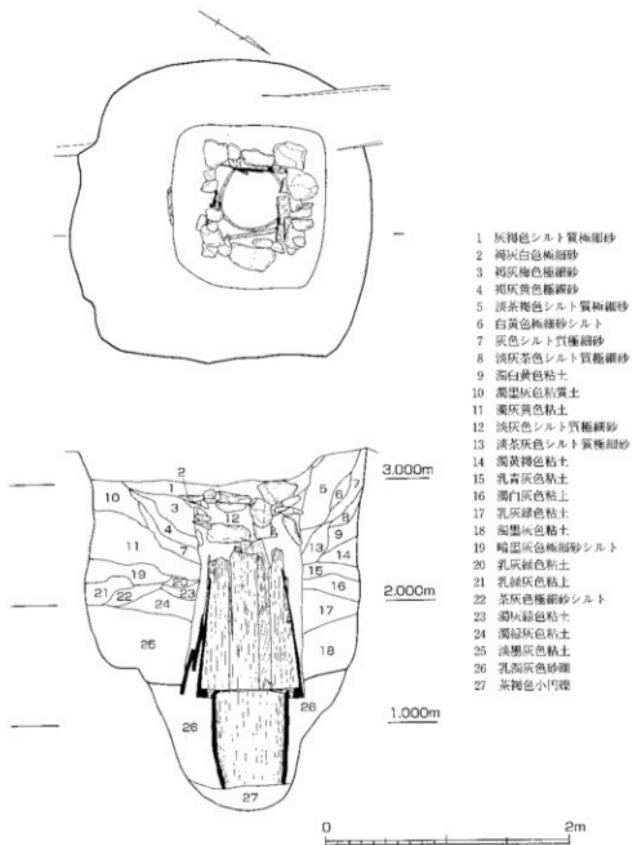


fig.166 SE313 平面・断面図

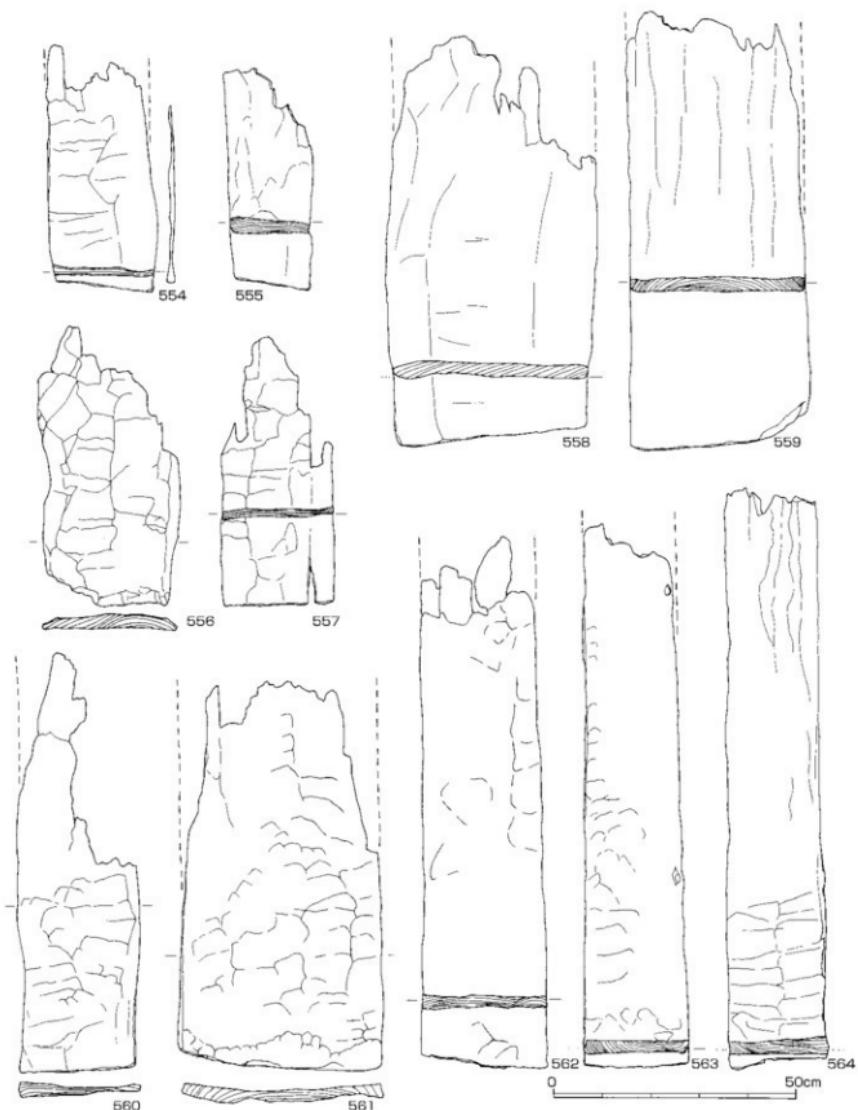


fig. 167 SE313 出土木製品

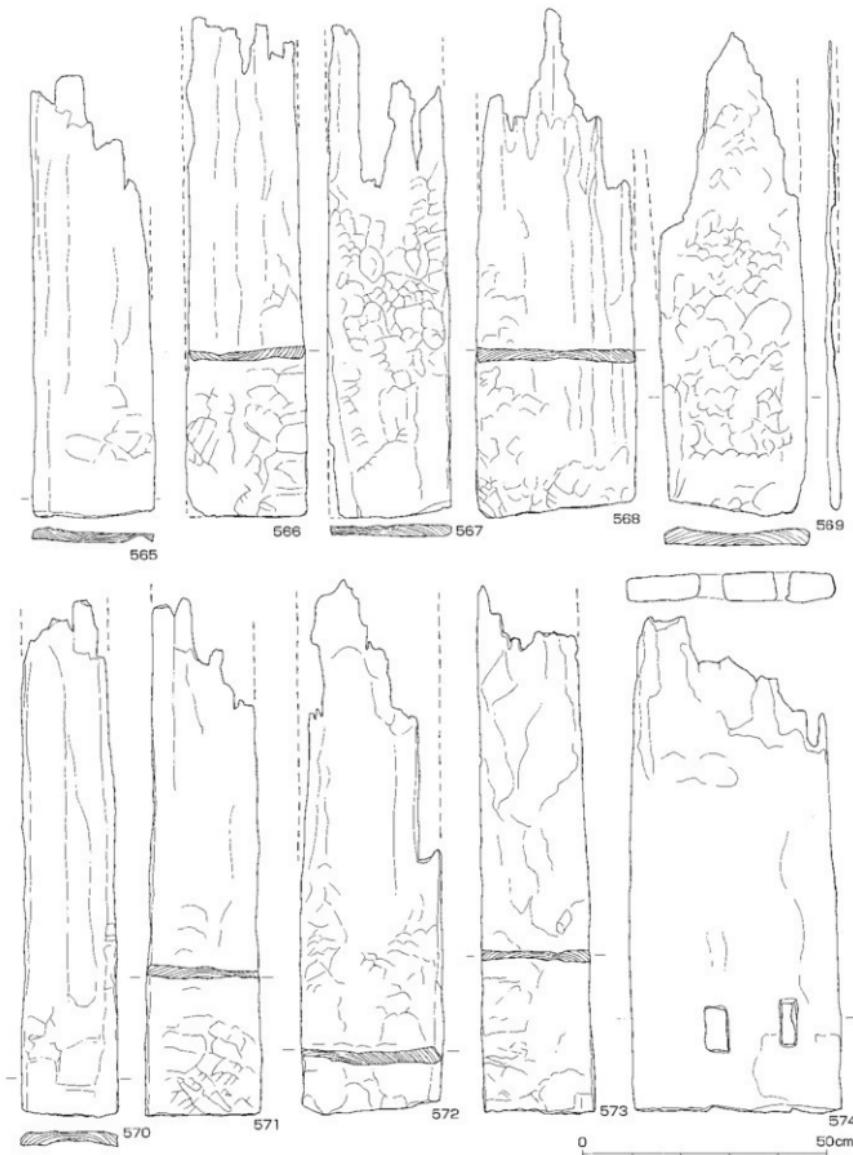


fig.168 SE313 出土木製品

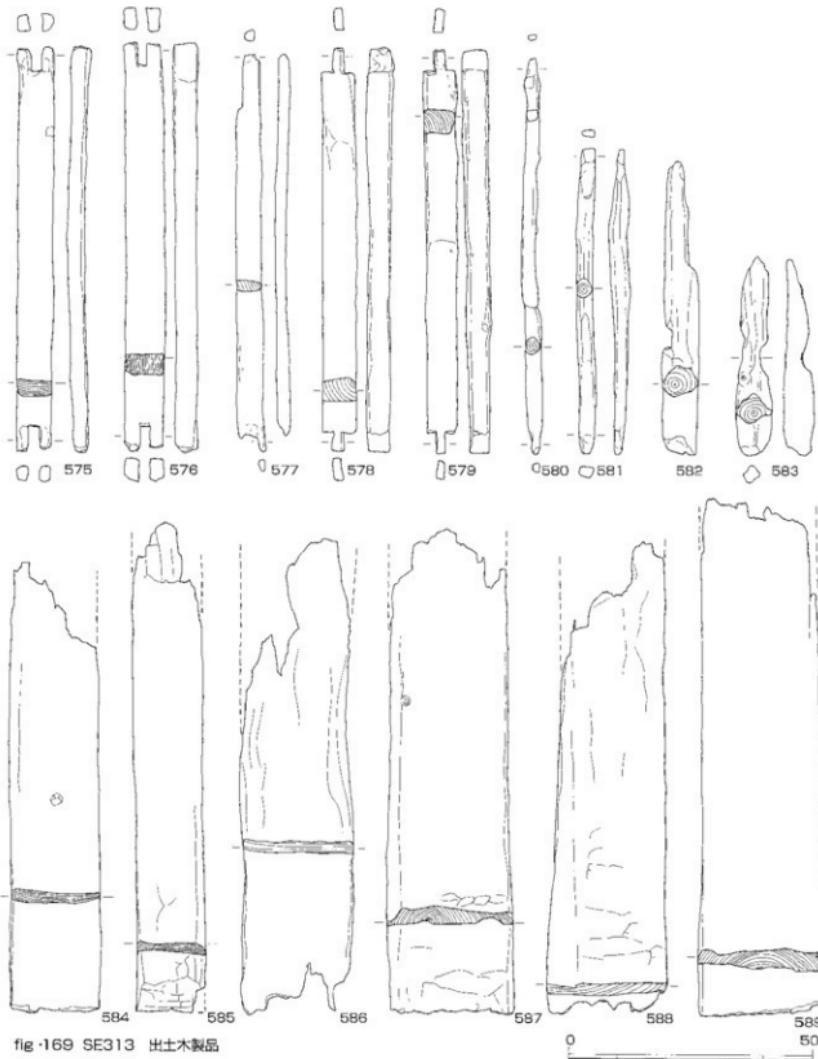


fig.169 SE313 出土木製品

#### 木材

縦板に使用されている材は、コウヤマキやヒノキなど数種に及ぶが井戸とは直接関係のない枘穴が開けられたもの(574)などがあることから、建築部材などの転用が考えられる。

また、井戸の中から出土した木製品の中には両端を丁寧に加工したもの(580-581)があり、形状から酌の柄などが考えられる。

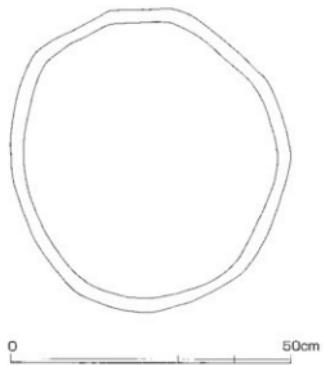
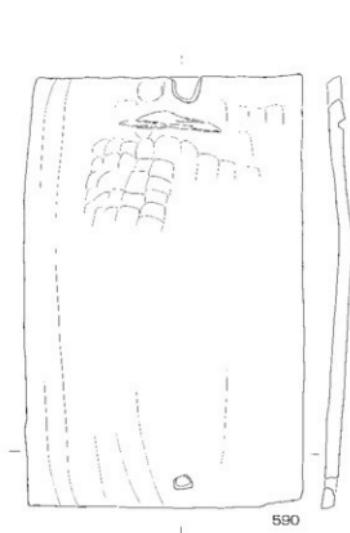


fig.170 SE313 井筒部材

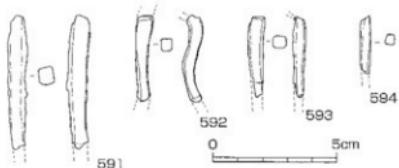


fig.171 SE313 出土金属製品

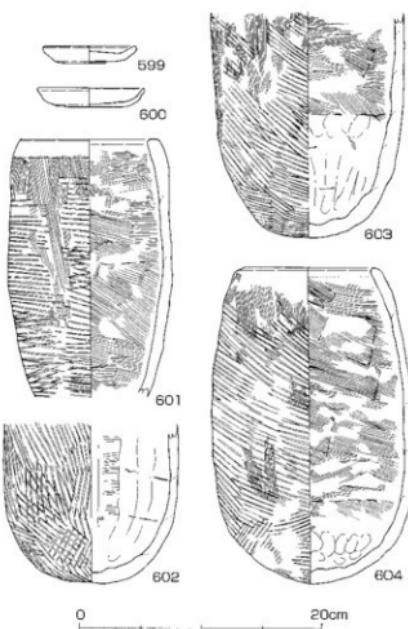
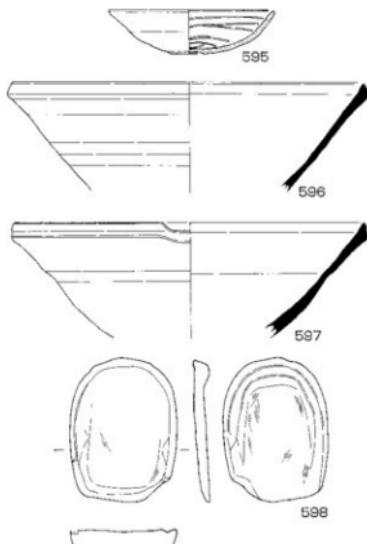


fig.172 SE313 出土遺物

## 遺物

出土遺物は、土師器皿(599・600)、蛸壺(601～604)、瓦器塊(595)、東播系須恵器の捏鉢(596・597)、須恵質の風字硯(598)である。蛸壺(601～604)は、口縁部が完全に残っている遺物がないため、紐などを付ける穿孔の有無は不明である。瓦器塊(595)は、内面見込みに連結輪状のヘラミガキが施されている。須恵質の風字硯(598)はくり抜きの井筒の中から出土したもので、両面に使用痕跡が見られる。金綱製品は、両端を欠失しているが鉄釘である。出土遺物から、この井戸の廃絶時期は13世紀前半と考えられる。

## SE314

調査区の南西隅で検出された素掘りの井戸である。掘形の直径が1.1mの円形で、遺構面からの井戸の深さは1mを測る。

井戸の掘削は、淡黄灰色粘質土内に納まっており、湧水層の粗砂層には到達していない。このことから、溜井的な利用が考えられる。

井戸の底は、平坦であり曲物などの構造物を設置した痕跡は確認されなかった。

岡化して示せる遺物は出土しなかった。

- 1 淡茶褐色シルト質細砂
- 2 淡茶灰色シルト質細砂
- 3 黄茶色シルト質細砂
- 4 暗墨灰色層細砂シルト
- 5 淡灰色シルト質細砂

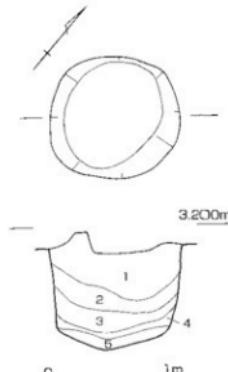


fig. 173 SE314 平面・断面図

## (3) 溝

### SD301

調査区北西部で検出された溝状遺構である。幅0.4～1.6m、深さ約0.1mで東西方向にのびるが、SE304の東側でSE304を切って南に延びる。岡化して示した遺物が出土した。13世紀前半の溝と考えられる。

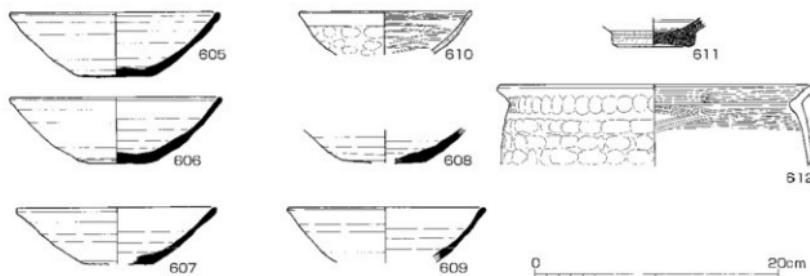


fig. 174 SD301 出土遺物

### SD302

SD301と平行して東西方向に走る溝状遺構である。幅30cm、深さ10cmの規模で、出土遺物はなかった。

### SD303

幅50~60cm、深さ10cm程度の小規模な溝であるが、出土遺物は比較的多い。

図示できたものは、以下に示す6点である。(613)は須恵器塊、(614)は土師器皿、(615)は白磁碗である。(616)は有溝土鉢で、長さ3.65cm、重さ約10gの小ぶりなタイプである。(617)は砾石で、片面と側面の一部が擦面として使用されており、わずかに擦痕がみられる。

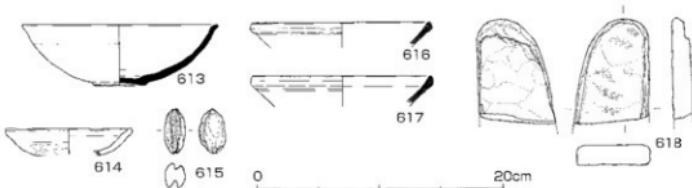


fig. 175 SD303 出土遺物

### SD304

S D 203西辺柱列の東に平行して北西一南東方向に直線的に延びる幅広の浅い溝である。東側の立ち上がり部分が搅乱により遺存していないが、幅1.2m、遺構面からの深さ約10cmを測る。覆土から須恵器などの土器や火打金が出土した。火打金は、山(笠)形を呈しており、長さ8cm、最大幅2.5cm、厚み1mmの大きさのもので、山(笠)形の頂部には、直徑3mmの穿孔がある。出土遺物から11世紀末~12世紀初頭と考えられる。

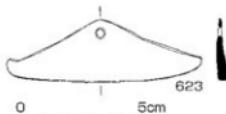


fig. 177 SD304 出土火打金

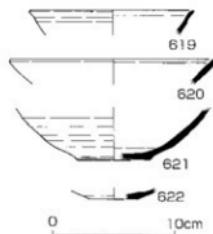


fig. 176 SD304 出土遺物

#### (4) 土坑

### SK301

S D 301の西側で検出された土坑である。長径1.1m、短径0.9mの楕円形をしており、検出面からの深さは70cmを測る。

図化して示せる資料とて須恵器塊(624)が出土した。出土遺物から13世紀前半のものと考えられる。

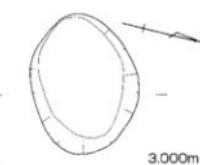


fig. 178 SK301 平面・断面図

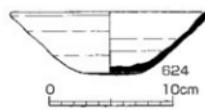


fig. 179 SK301 出土遺物

### SK302

S B 308から南10mの地点で検出した土坑である。搅乱により形状、規模は不明であるが、13世紀前半頃の土師器皿が出土した。

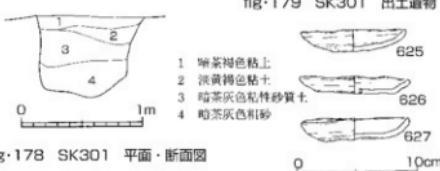


fig. 180 SK302 出土遺物

## ST301

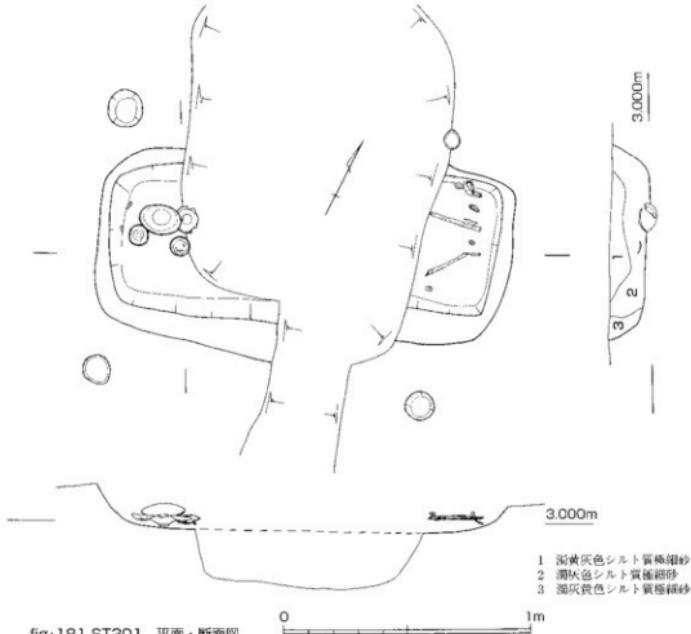
### (5) 木棺墓

S B314 北で検出された木棺墓である。木棺墓の掘形は、現在の町割りと同じ東西方向で検出された。掘形の規模は、長さ167cm、幅70~80cmで、長方形であるが中央で緩やかに広がった掘形を呈している。中央部分は、現代の擾乱により削平を受けている。

木棺の木質は腐食により、ほとんど見られなかったが土層の違いにより木棺の痕跡を検出することができた。木棺の規模は、長さ156cm、小口幅56cm、遺構検出面からの深さは15cmと浅いため、遺構面全体が後世の開発、耕作などにより削平を受けていると考えられる。東北隅の木棺の側板が立てられていたと思われる箇所からは、集中して鉄釘が垂直に打ちつけられたような状態で出土した。

棺内からの出土遺物としては、西端に集中して白磁碗1点、青磁の小皿4点が出土した。また、東端では伸展葬であるならば出土位置と太さから脛骨と考えられる骨が、底から5cmほど浮いた地点で2本が東に向いてハの字の状態で出土した。このことから被葬者は、頭を西に向けて埋葬されたものと考えられる。骨は非常に脆弱な状態であったため取り上げは困難であった。

木棺墓との明確な関係は不明であるが、掘形の周囲に4個の小さなピットを検出した。ピットの内2個は、木棺墓の北東隅と南東隅の外側で検出され、残りの2個は、木棺墓の



足元の南北両側に分かれて検出された。直径は、7cm～14cmで検出面からの深さは、約10cmである。4個からなるピットであるため、墓の上に覆いの構造物か、もしくは絵巻物にみられる葬送に用いる指し物を立てた痕跡の可能性などが考えられる。

埋葬の際に、一緒に副葬品として埋められたと考えられるものは、白磁碗(628)と青磁の皿(629～632)であるが、木棺墓の中央に攪乱坑が存在しており、攪乱土中からも同様の青磁皿の小破片が出土していることから、他にも副葬された遺物が存在した可能性がある。

白磁碗(628)は、口径17cm、器高2.1cmで外面底部は露胎で内面は無文であるが、見込みに一条の沈線が施されている。口縁端部を外方に反り返しており、高台部はケズリダシにより高くつくりだしている。釉の透明度は高い。

青磁の小皿(629・630)は、口径9.2cm、器高2.1cm、外面底部は露胎で内面見込み部に釉を施した後に蛇の目状にケズリ取っている。

青磁の皿(631・632)は、口径11cm、器高2.6cm、内面見込み部にジグザグ状に列点文を施し、中央に花文を刻み込んでいる。底部は露胎で、釉の透明度は高い。

これらの磁器は、中国製の輸入磁器であり形態的特徴から、13世紀前半の同安窯系のもとのと考えられる。

金属製品は、全てが鉄釘である。断面は長方形で、打ち込み部は折り曲げて造られている。鉄釘の中には、木棺の一部と考えられる木質が付着しているもの(638)がある。

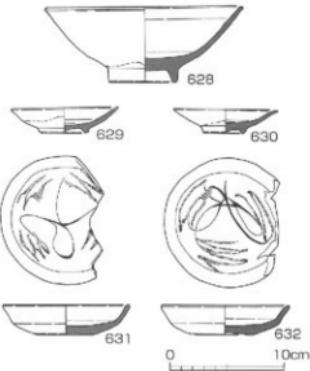


fig. 182 ST301 出土遺物

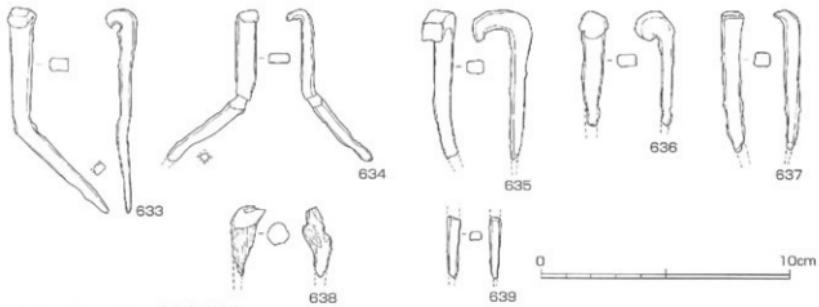


fig. 183 ST301 出土金属製品

### ST302

S B304と重なって検出された木棺墓である。木棺墓の掘形は、南北方向に向いて検出された。掘形の規模は、長さ165cm、幅は北側で70cm、南側で80cmの長方形である。東半分が攪乱により若干削られている。

遺構検出面から底までの深さは、55cmと深くS T301よりも遺構面の保存状態は良好で

あった。墓坑の底から13cmのところで木棺材と考えられる板材2枚を検出した。板の規模と材質は、長さ126cm、幅28cm、厚さ2.5cmのモミ属もの(648)と、長さ151cm、幅27cm、厚さ3cmのコウヤマキ(649)である。これら2枚の板の外側に位置する墓坑側縁部には、この板材の厚みと同じ幅の平坦面があり、板の下から副葬品と考えられる遺物が出土したことから、これらの板材は、木棺の棺側板が内側に両方から倒れてきたものと考えられる。小口面については、木材の痕跡等がないことから木棺の構造については不明である。

板の直下の北端で、白磁の碗(644・645)と上師器の皿(640~643)が出土し、木棺の中心部で刀子(646)、その南からは手斧(647)が出土した。さらに、南端では、足の一部と思われる骨が3点出土した。このことから被葬者は、頭を北に向けて埋葬されたものと考えられる。骨は非常に脆弱な状態であったため取り上げは困難であった。

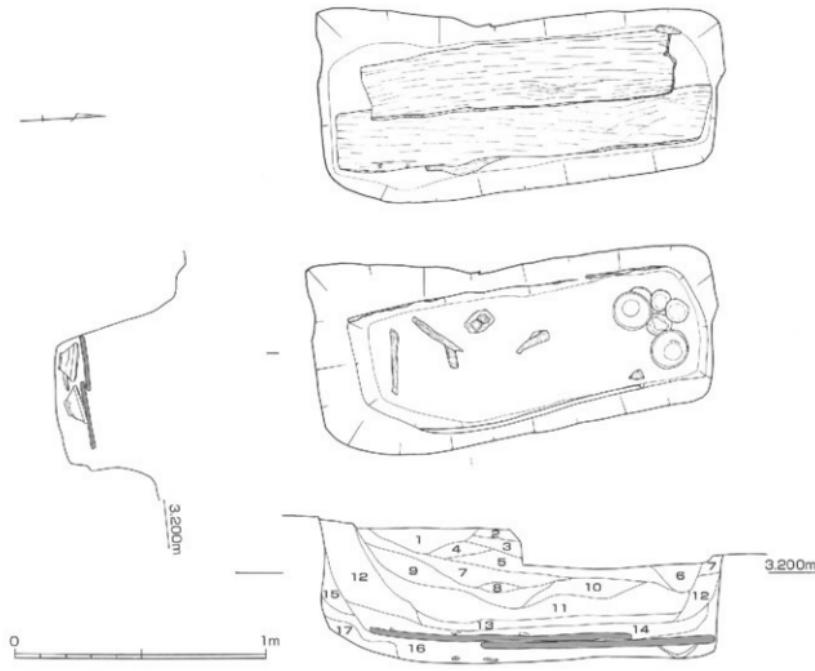


fig.184 ST302 平面・断面図

- |               |                |
|---------------|----------------|
| 1 潟黄褐色シルト質粘細砂 | 9 暗灰茶色シルト質粘細砂  |
| 2 潟灰黄色シルト質粘細砂 | 10 海浜灰色シルト質粘細砂 |
| 3 乳灰白色シルト質粘細砂 | 11 潟灰褐色シルト質粘細砂 |
| 4 乳灰白色粘土質     | 12 潟灰褐色シルト質粘細砂 |
| 5 淡茶褐色シルト質粘細砂 | 13 暗青灰色シルト質粘細砂 |
| 6 乳灰白色シルト質粘細砂 | 14 暗青灰色シルト     |
| 7 淡灰黄色シルト質粘細砂 | 15 暗灰褐色シルト質粘細砂 |
| 8 乳白灰色粘土質     | 16 暗灰褐色シルト     |
|               | 17 暗茶褐色粘細砂シルト  |

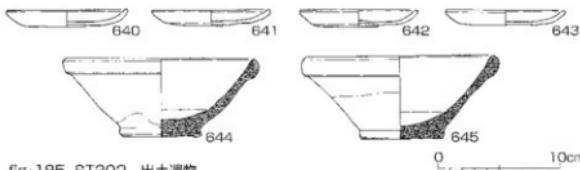


fig. 185 ST302 出土遺物

出土遺物は、棺側板の下から出土したことから、すべて棺内副葬品と考えられる。

(640～643)は上師器皿で、口径9.8cm、器高1.2cm、灯明皿として使用された芯の痕跡が明確に残っている。

(644・645)は白磁の碗である。口径が15cm、器高7cmの玉縁をした形態である。

(646)は長さ15cmの刀子である。棟側は無闇で直線的である。刀側は緩傾斜の不明瞭な闇がつく。中子には目釘穴は見られない。

(647)は手斧である。全長11cm、刃部幅4cmで、装着部は両端を90度に折り曲げて造られている。装着部断面は、やや丸みのある方形を呈している。

出土遺物から、13世紀前半に埋葬が行われたと考えられる。

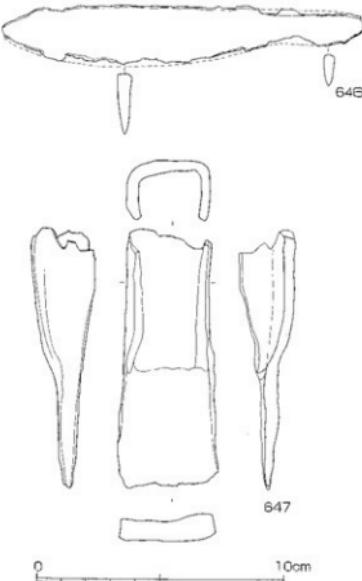


fig. 186 ST302 出土金属製品



fig. 187 ST302 出土木棺材



## ST303

ST303は調査区南東部で検出された木棺墓である。掘形は長辺2.7m、短辺1.1m、木棺の痕跡は長辺2.1m、短辺0.9mで、長軸の方向はN-37°Wを測る。木棺内には頭部および体部の骨の痕跡が残っており、頭部は北と考えられる。副葬品としては、頭部西側には土師器の大皿1点と刀子が1点大皿に載せた状態で出土した。頭部付近のこれらの副葬品は棺底から出土しており、棺内に副葬されたものと考えられる。木棺の中央部では土師器の小皿が2点出土したが、内1点は棺底から浮いており、棺上または遺体の上に置かれていたものと思われる。頭骨の痕跡の東側では、それに接して纖維質が残存した薄い漆製品が出土した。その出土位置から鳥帽子と考えられる（第7章参照）。棺の北半部において棺底下で横方向に木質の痕跡が4条検出され、棺底板下の横桟の痕跡と思われる。また、埋土の上層から棺に使用されていたと思われる鉄釘が2本出土している。この木棺墓は一部溝S D305に切られているが、この溝と方向を同じくし、その内側に造られているので、南北方向に存在すると思われる建物に付随する「屋敷墓」と考えられる。

(650・651)は木棺中央部から出土した土師器小皿で、底部はユビオサエ、体部外面は1段のヨコナデを施し、口縁端部は外面の強いヨコナデにより若干内彎する。(652)は頭部西側から出土した土師器大皿で、底部はユビオサエ、体部外面は2段のヨコナデを施し、口縁端部は丸く収める。(655)は(652)の大皿の上に置かれた状態で出土した刀子で銹化が激しく元の形状は明らかでないが、残存する長さは18cm、幅3cmを測る。(653・654)は埋土上層から出土した鉄釘で、断面は方形を呈し頭部は折り曲げている。残存長は1.8cmを測る。以上の遺物から、この墓は13世紀前半に造られたものと考えられる。

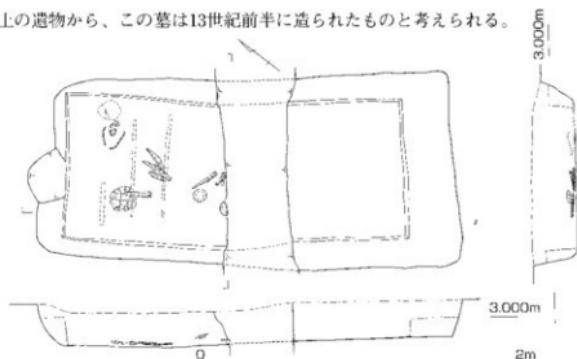


fig. 188 ST303 平面・断面図

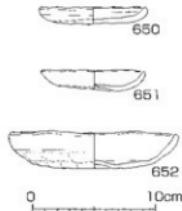


fig. 189 ST303 出土遺物

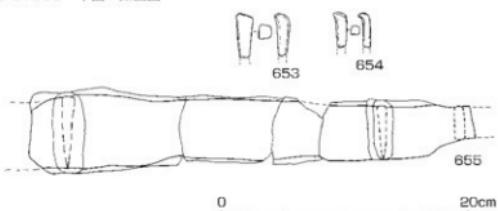


fig. 190 ST303 出土金属製品

### (6) 不明遺構

SX301

S B309 と重なって検出された不明遺構である。北側半分が擾乱により削平されているため、検出面での平面形や規模は不明であるが、擾乱の底での観察では、現在の町割りに沿って南北方向に長い隅円長方形をしており、南北2.2 m以上、東西1.4 m、深さ1.4 mの規模をしている。掘形西辺は幅70 cm、40cmの深さまで傾斜をもつ掘り込みが施されている。S X301 が検出された周辺の遺構面を形成している土層は、層厚40cmほどの黄褐色粗砂層であるが、西辺の掘り込み部には、遺構全体が埋まる前に粘土を人為的に詰めた状態で検出された。

遺構内部の埋土についても、粘質土で構成されていた。遺構の底は、粘土層内で納まっており、その下層の粗砂層には到達していない。

埋土内からは、極少量の上器片が出土したのみである。

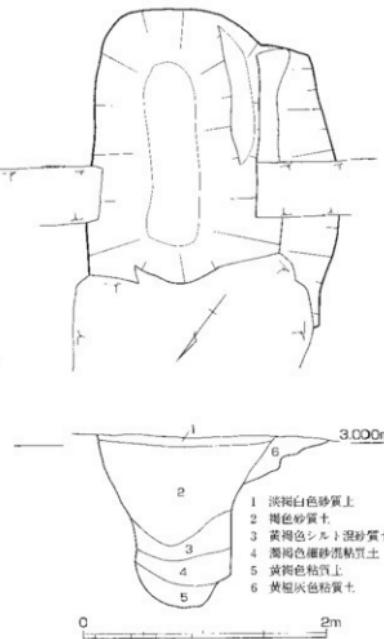


fig.191 SX301 平面・断面図

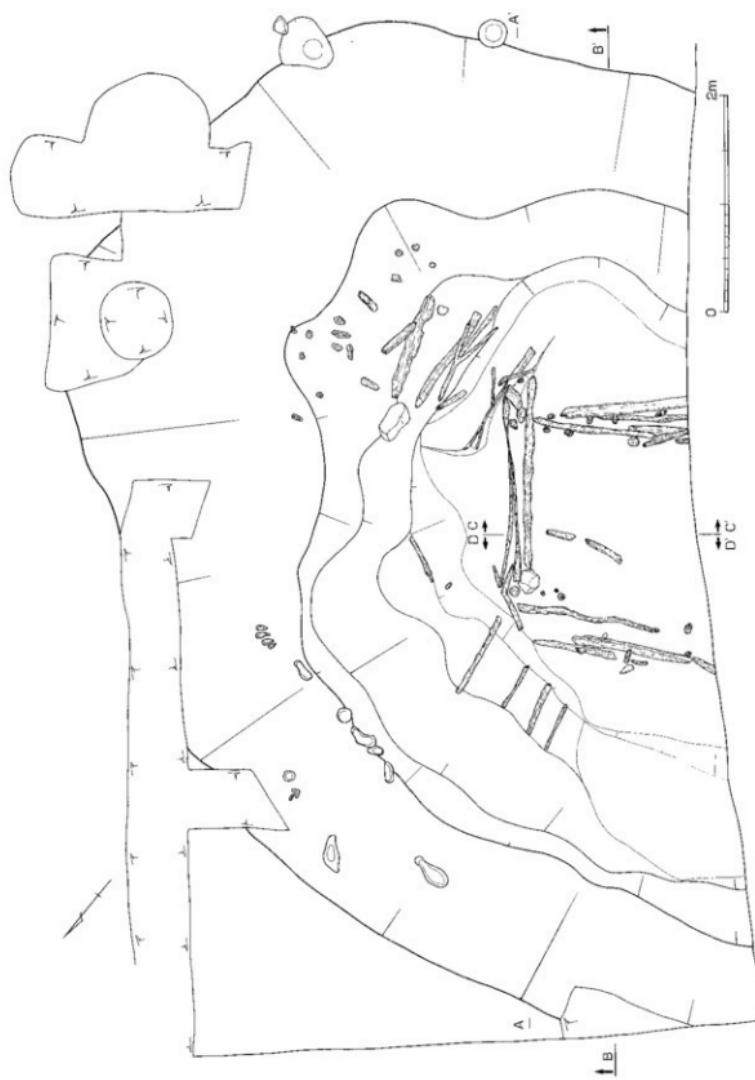
SX302

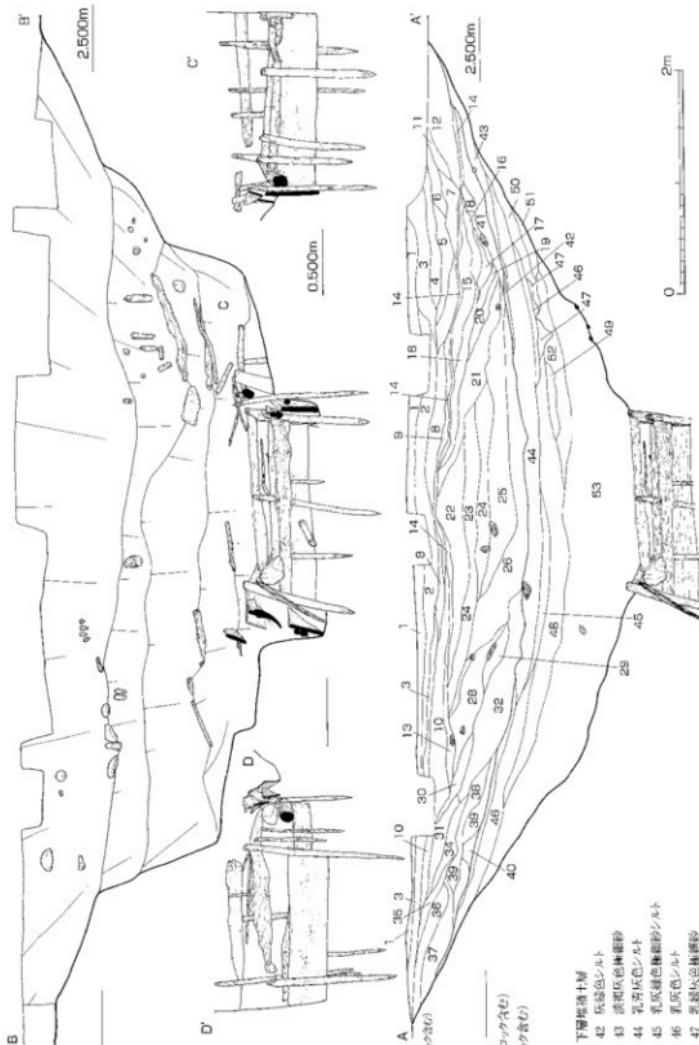
調査区の南西隅で検出した不明遺構である。西側半分が調査区外に出ているため遺構の平面形と規模は不明であるが、検出可能な範囲での形状と規模は、半円形のみが観察可能であり、径は8.8 m、遺構検出面からの深さは2.5 mを測る。

掘形は、上半部では緩やかな傾斜をしており、遺構検出面から約70cmと約1.3 mの地点で傾斜角度がきつく変化する。遺構の東斜面の一部には直径2.5 ~ 8 cmの複数の杭が深く打ち込まれている。この杭が集中している斜面の傾斜角は、他の斜面に比べて比較的緩やかである。杭の集中する範囲の下には、長さ1 mの木材を杭と杭に掛けるように3段設置している。出土状況からは、階段を連想せることから以後、これを階段状遺構と称することとする。

階段状遺構の3段目の下からは、地山が粗砂層となる。粗砂層に到達すると、掘り込みの傾斜が終わり、幅0.5 ~ 1.2 mの平坦面を形成している。遺構の底部には、木材を組み合わせた囲いが設置されていた。この囲いの内法の1辺の長さが約1.8 mあり、深さが約50cmの規模を測るが、西半分が調査区外に続いているため詳細は不明である。構造としては、長さ1.0 ~ 1.3 m、直径10cm前後の杭を1辺に前後交互に打設して、間に長さ1.75 ~ 2.2 mの丸太や板材を挟み込み2 ~ 3段に組上げて、上留めとしている。

fig. 192 SX302 平面圖





上河井地土層

- 1 淡灰褐色シルト質粘土
- 2 淡赤褐色シルト質粘土
- 3 苔原色シルト質粘土
- 4 淡赤色砂土
- 5 淡海苔原色シルト質粘土
- 6 浅褐色シルト質粘土
- 7 乳黃褐色シルト質粘土
- 8 灰原色沙色シルト質粘土
- 9 淡赤褐色シルト質粘土
- 10 淡灰褐色沙色粘土質
- 11 淡灰褐色シルト質粘土
- 12 淡赤色シルト質粘土
- 13 椿原色粘土
- 14 黄褐色シルト質粘土
- 15 带褐灰色シルト質粘土
- 16 淡褐灰褐色シルト質粘土
- 17 淡褐灰褐色沙色粘土
- 18 淡灰褐色シルト質粘土
- 19 淡灰褐色沙色粘土
- 20 淡褐灰褐色シルト質粘土
- 21 淡灰褐色シルト質粘土 (上ノガラクガ)
- 22 淡灰褐色シルト質粘土
- 23 淡灰褐色沙色粘土 (側壁)
- 24 向原茶原色粘土
- 25 淡灰褐色シルト質粘土 (B+ガラク含)
- 26 褐原色粘土質
- 27 淡青原色粘土
- 28 灰原色沙色粘土
- 29 灰原色沙色粘土
- 30 淡灰褐色シルト質粘土
- 31 淡褐茶原色シルト質粘土
- 32 淡灰茶原色粘土
- 33 淡褐青原色粘土
- 34 淡海苔原色シルト質粘土
- 35 淡灰褐色シルト質粘土
- 36 淡灰褐色沙色粘土
- 37 淡灰褐色沙色粘土
- 38 淡灰褐色沙色粘土
- 39 向原茶原色粘土
- 40 淡灰褐色沙色粘土
- 41 淡灰褐色沙色粘土
- 42 乳灰褐色
- 43 淡灰褐色
- 44 灰原色粘土
- 45 乳灰褐色沙色粘土
- 46 乳灰褐色
- 47 乳灰褐色
- 48 淡灰褐色
- 49 白灰褐色
- 50 杏仁褐色
- 51 乳褐色
- 52 乳灰色
- 53 乳灰色

fig. 193 SX302 立面・断面図

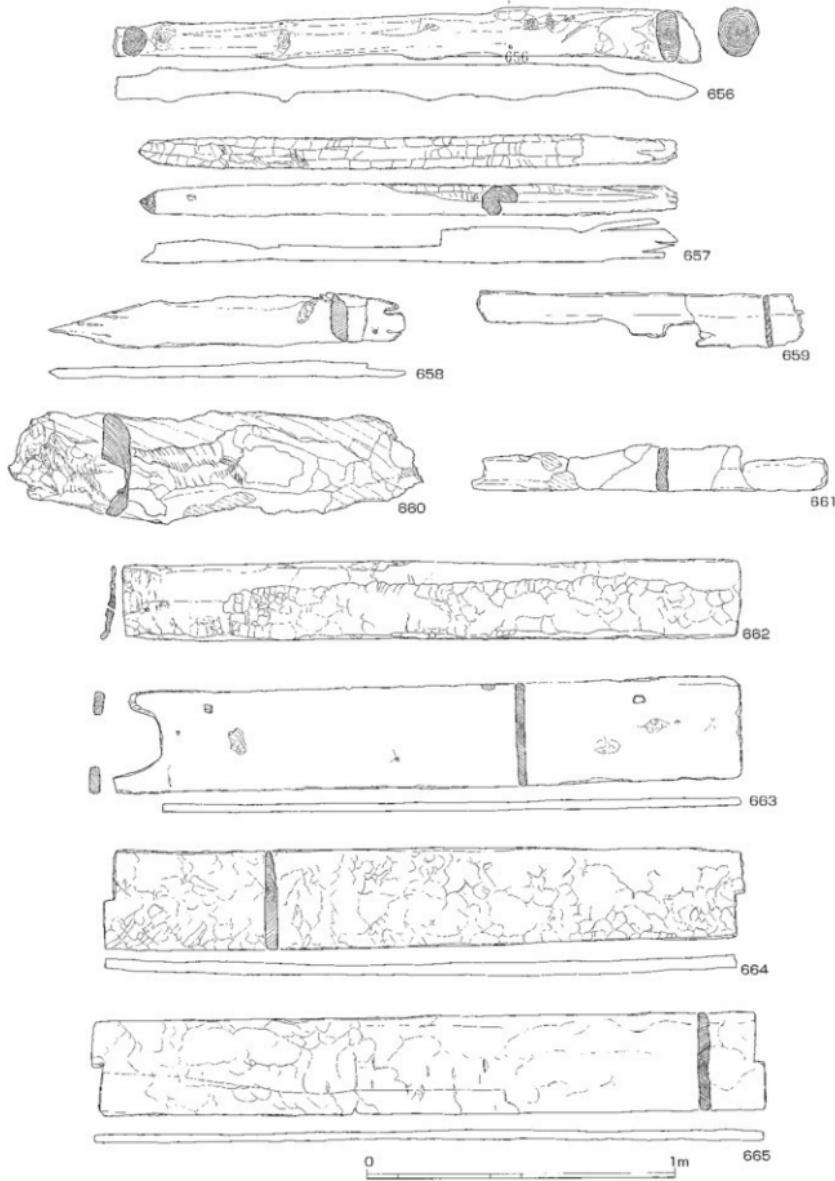
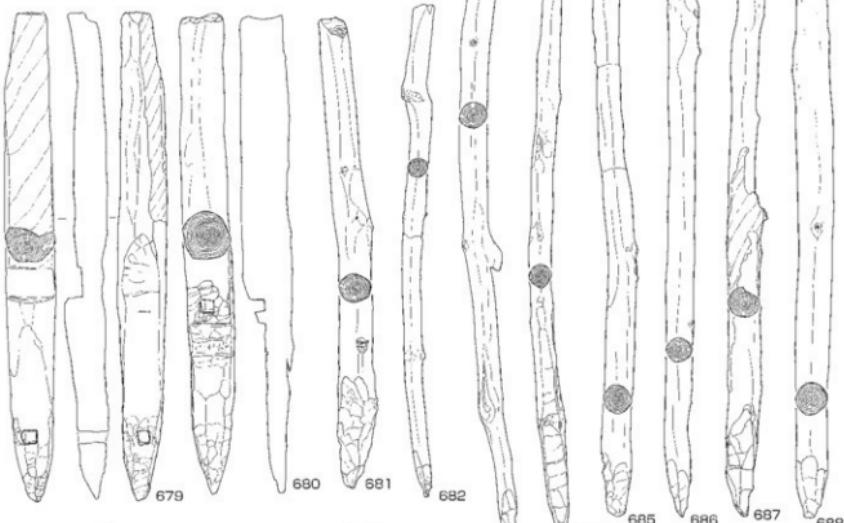
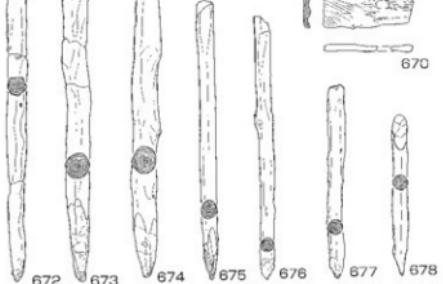
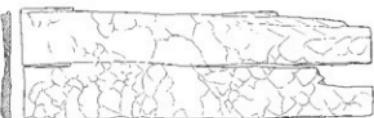
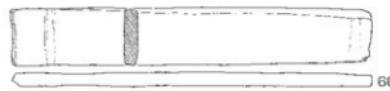


fig. 194 SX302 出土木制品



0 50cm

fig. 195 SX302 出土木製品

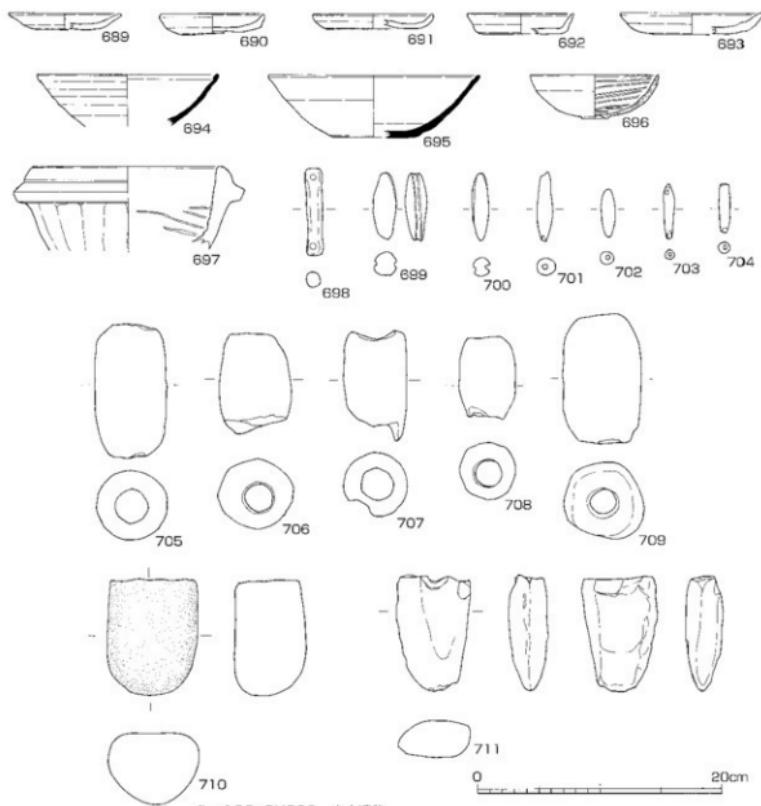


fig. 196 SX302 出土遺物

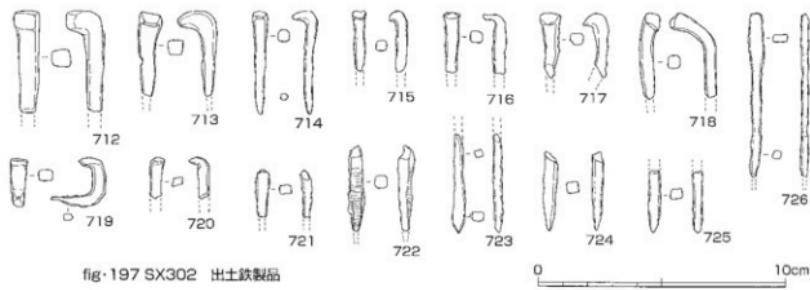


fig. 197 SX302 出土鉄製品

## 木製遺物

土留めに横木として使用していた木材には、丸太の一面を半らに削り込んだもの(654)や、断面が八角形のもの(657)、板杭(658)、半円形の抉りを小口にいた板(661)、両小口にL字形に切欠きをいた板材(664・665)などがみられる。

杭として使用されていたものの中には、面取りをして柄が切られたり、2cm角の穿孔が施されているもの(679・680)などがみられる。

## 出土遺物

埋没過程としては、下半は砂層で覆われているが、上半は粘質土により小刻みに上を入れながら埋め戻した状況がみられる。遺物はほとんどが上半の粘質土層からの出土である。

図示した遺物は、土師器皿(689～693)、須恵器塊(694・695)、瓦器塊(696)、滑石製の石鍋(697)、土鍤(698～709)である。上鍤には(698)の棒状有孔土鍤や(699・700)の有溝上鍤、(701～704)の管状上鍤、(705～709)の大型管状上鍤の多くの種類の土鍤がある。(710・711)は擦られた面をもった石で、砥石と考えられる。

(712～726)は全て鉄釘である。(722)は釘の周囲に木質が鉄の腐食とともに残されたものもある。この遺構の埋没時期は、これらの遺物から13世紀前半と考えられる。

## SX303

S B314 のすぐ北隣で検出された不明遺構である。検出遺構面での平面形と規模は南北分が搅乱により、欠失しているため詳細は不明であるが、残された範囲では直径2.2mの不定形な円形を呈しており、検出遺構面からの深さは75cmほどを測る。土層断面から、そこから2層分は整地を行ったような状況であり、その上面で20cm前後の大きさで平らな石を9個を敷きつめたように出土した。この石の面は、炭層で覆われているが、火を受けた焼けた石や土、焼け残りの遺物などは検出されなかった。直接の関係は不明であるが、この遺構を取り囲むように

幅1m前後で深さ5cmほどの浅い溝が円弧を描くように検出されている。

遺物としては、ての字口縁をした土師器皿(727)と、須恵器塊(728・729)である。遺構の埋没時期は、11世紀末～12世紀前半と考えられる。

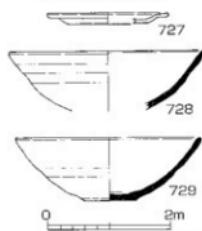


fig. 199 SX303 出土遺物

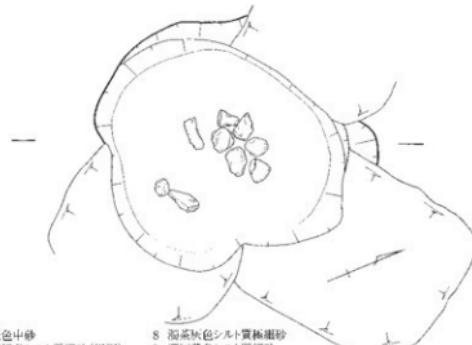


fig. 198 SX303 平面・断面図

特殊な金属製品として、(730)が出土している。用途は不明であるが、鋳鉄製品と考えられる。残存長5.5cm、残存幅3.5cm、最大厚み8mmを測る。短片を斜めに切った形状を呈している。

遺構内からの出土遺物から、11世紀末～12世紀初に存続していた遺構と考えられる。

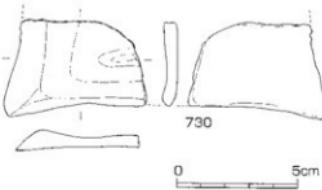


fig.200 SX303 不明鋳鉄製品

**SX304** S B202と重なるように検出された、1辺約4.2m、深さ約0.9mの隅円方形の平面形を呈すと考えられる落ち込み状遺構である。

検出面が既存の建物の基礎によりほどんどが攪乱を受けていたため、南辺の一部のみが残存していた。遺構の形状としては、掘形が2段になることから隅円方形の平面形を推定した規模は、5.5mである。

少量の土師器・須恵器・白磁・青磁・瓦器・土師質平瓦片とサヌカイト片1片が出土した。

図化して示せる資料として、白磁碗の口縁部と底部がある。

時期は13世紀前半と考えられる。

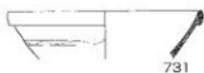


fig.202 SX304 出土遺物

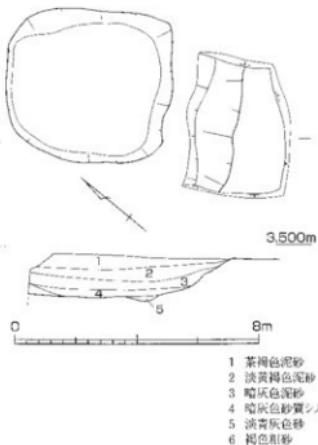


fig.201 SX304 平面・断面図

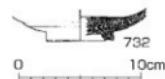


fig.203 SX301 出土遺物

## (7) ピット

**SP301** 径約50cm、深さ約20cmを測る平面形状が円形のピットで、攪乱により北半部が失われている。今回の調査区域内では、掘立柱建物の一部にあたるかどうかは確認できなかったため、その性格は不明である。

(733)は須恵器塊で、体部全体の20～30%程度しか残存しない。塊としては一般的なタイプではあるが、器壁がやや厚く、口縁端部もかなり丸みを帯びており、全体的にシャープさに欠ける。また、底部の糸切り後の調整にもやや粗さがみられる。復元口径16.6cm、器高4.7cmを測る。

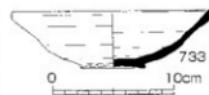


fig.203 SX301 出土遺物

SP302

径約40cm、深さ約50cmを測る平面形状が不整円形のピットで、攪乱により西半部が失われている。SP301と同様に、掘立柱建物の一部にあたるかどうかは不明である。

(734) は砾石で、材質は砂岩である。全長12.5cm、最大幅9.4cm、最大厚6.8cmを測る。長辺面のうち3面が擦面として使用されており、擦痕が數カ所認められる。

#### (8) 鋤溝

二葉町6丁目での鋤溝の検出は、調査区の縁辺部に限られて検出された。鋤溝の規模は、幅20cm前後で深さが5~10cm前後のものである。鋤溝の方向は、北端で検出されたもの(A群)はN-130°Wの方向をしており、西端に検出されたもの(B群)はN-35°Wの方向である。この2群はそれぞれ直行するものである。南西端で検出した鋤溝(C群)の方向は、N-25°Wである。北端及び西端での鋤溝の方向は、S B301・305・309(12世紀中頃~12世紀後半)とほぼ同じ主軸をとっており、南西端の鋤溝の方向は、S B302・303・304・308・309(13世紀前半)と共通していることが注目される。

掘立柱建物群が検出される地区には、鋤溝などの耕作に伴う痕跡がみられないことから、耕作地と居住地域とは近隣もしくは、屋敷地内で耕作が行われていたと考えられ、集落内の土地利用がわかる資料となった。(fig.207参照)

#### (9) 包含層出土遺物

包含層からは、土師器、須恵器、輸入磁器片などの遺物の他に鉄釘や土錘が多数出土している。

土錘は管状土錘と卵形管状土錘が出土している。

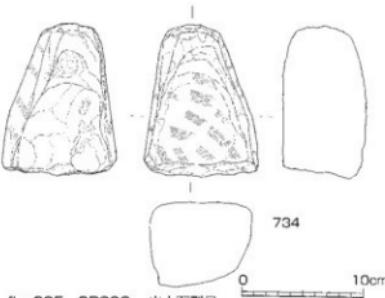
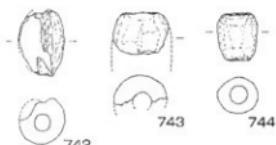
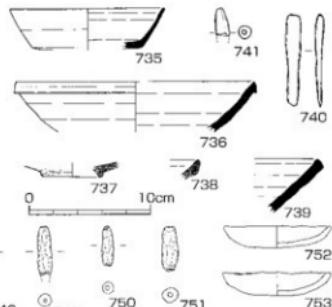


fig.205 SP302 出土石製品



#### (10) 近世井戸

SE401

S E308の西隣で検出した近世の井戸である。検出面での掘形直徑は6.4mを測り、深さは4.5m以上の規模である。井戸側として、桶を逆転したものを積み上げたものを4段分検出したが、最上段のものは腐食のためほとんど残っておらず、4段目以下は粗砂層が崩壊するため確認できなかった。染め付け磁器の破片1点が出土した。



fig.207 二葉6遺構全体図(鉛溝含む)

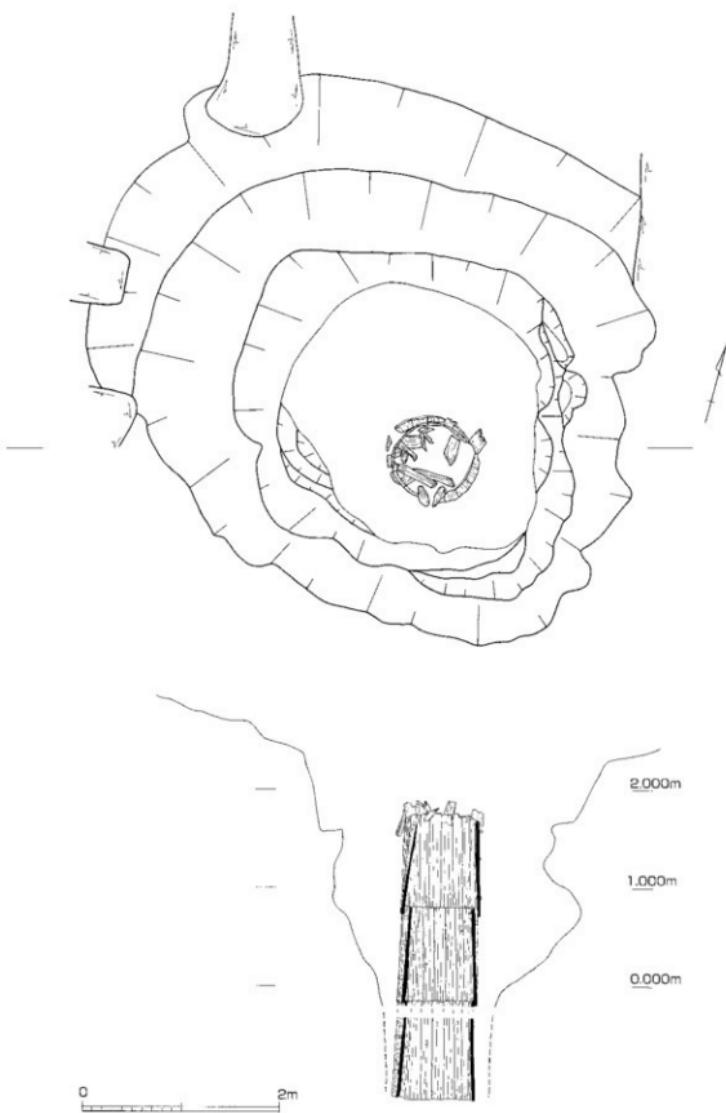


fig. 208 SE401 平面・断面図

### 第3節 小結

二葉町6丁目地区での調査では、縄文時代晚期、8世紀（奈良時代）、9世紀（平安時代中頃）、11世紀末～13世紀中頃（平安時代後期～中世前半）の大きく4時期の遺構と遺物が検出された。

**縄文時代晚期** 二葉町遺跡の遺構面は、淡灰黄色粘質土と黄褐色粗砂の斑模様になって平面的には検出される。この状況は、腕塚地区、久保地区でも同様の遺構面の状態を形成している。この2層の内、黄褐色粗砂から縄文土器晚期の遺物片が出土する。これは、高取山などの六甲山系から流れてきた河川が氾濫した結果、堆積した粗砂層と考えられる。遺物の磨滅が少ないことから二葉町遺跡の北側に縄文時代晚期の遺構が存在する事を示唆する資料である。

**8世紀  
(奈良時代)** 遺物の伴う遺構は限られていたが、二葉町6丁目地区の北東地区に集中して遺構が検出された。遺構の時代決定にに関しては、S K 201及びS B 203から奈良時代の遺物が出土しており、これらの遺構の埋没土が他の遺構の埋没土上が灰褐色をしているのに対して、黒褐色をしていることから分けることができた。また、中世の掘立柱建物の柱穴が30～40cmの円形であるのに対し、50～80cmと大型で方形の掘形をしたもののが検出されている。掘立柱建物は、S B 206以外は側柱建物であり、規則的に配置された建物群と北西隅に井戸が1基検出されている。律令期の集落形態を知る資料が得られた。

**9世紀  
(平安時代  
中頃)** 明確な遺物を伴う遺構がS E 202とS D 201だけであったため、詳細は不明であるが日常生活に欠かせない井戸を検出していることから、この時代の集落が周辺に存在していたことが考えられる。

**11世紀末～  
13世紀中頃  
(平安時代末～  
鎌倉時代中頃)** 二葉町遺跡で最も多くの遺構と遺物を伴う時期である。掘立柱建物21棟、井戸14基、土坑1基、木棺墓3基、不明遺構5基、溝、鶴溝、ピット多数を検出している。掘立柱建物は、調査地の西半分全域に集中しているのと、北東隅に集中して検出されている。井戸に関しては、S E 212を除いて西半分の東西30m幅に南北に連なるように検出された。S E 306からは、井戸側に船体胴部を転用しているものが出土し、中世船舶の構造を知る資料が得られた。木棺墓は、掘立柱建物と近接して検出しており、屋敷と墓の位置関係を知る資料となった。特殊な遺構として、久保町6丁目地区においても検出された不明大型土坑S X 302を検出した。この遺構は、大きなすり鉢状の窪みに階段状の杭と横木を設置し、底部には四角く開いた木組みが検出された。遺構の状態から木組み内に水を溜めて利用した遺構と考えられる。

出土遺物としては、日常什器以外に輸入磁器、上鍤、蛸壺、多種にわたる大型の木製品や船材などが出土しており、海との密接な関係を示す集落像がうかがえる。

#### 参考文献

- 町田章・上原真人編『奈良国立文化財研究所史料第27号「木器集成図録近畿古代編」』奈良国立文化財研究所 1984年  
安達裕之編『日本の船』和船編 船の科学館 1998年  
石井謙治『因説 和船史話』至誠堂 1983年  
石塚尊俊『日本民家集落博物館報』『民俗資料による別舟の研究－ソリコ・モロタ・トモドを重点として－』日本民家集落博物館 1960年  
横山直树・松木哲『日本に現存する別舟』『海事資料館年報』No.7 神戸商船大学 1979年  
北野耕平『木栓で結合した中国漢代の木船』『海事資料館年報』No.10 神戸商船大学 1982年  
千種 浩『金鳳殿』『大崩遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 1993年  
木戸雅寿『石器の生産と流通について』『中近世土器の基礎研究』 XI 中近世土器研究会 1993年  
森島康雄『畿内産瓦器類の併行関係と層年代』『大和の中世土器』 大和古中近研研究会 1992年

## 第6章 二葉町遺跡出土木製品の樹種同定

松葉礼子（バレオ・ラボ）

### I. はじめに

二葉町遺跡は神戸市長田区二葉町6丁目にある中世を中心とした遺構が確認されている遺跡である。井戸などの遺構から井戸枠や板、杭、曲物などの木製品が出土している。今まで神戸市内で行われてきた中世の事例には兵庫区の大開遺跡がある。鎌倉時代末から室町時代に相当する丸杭、板材に対して同定が行われ、マツ属を中心にヒノキ、スギなどの針葉樹とツバキ、サカキ、ヒサカキなどの常緑広葉樹が利用されていた（神戸市教育委員会・財団法人神戸市スポーツ教育公社編、1993）。マツ属は花粉分析の結果から稲作の開始前後から増加すると考えられているが、木製品には中世以降確認されている（兵庫県植生史研究会、1993）。今回は大開遺跡より古い11世紀末から13世紀中頃の試料が中心で、マツ属をどの程度の時期から積極的に利用してきたのかわかることが期待できる。そのため中世の木材利用を明らかにすることを目的として二葉町遺跡の樹種を同定した。

### II. 試料と方法

同定した試料は久保6調査分76点、二葉6調査分288点の合計364点である。遺物は二葉6SE202の9世紀以外は、11世紀末から13世紀中頃に相当する中世の遺物が中心である。木製品は井戸枠や井戸内から出土した遺物が中心で、二葉6SX302の構築材や二葉6SE306の船材を転用したと考えられる遺物（395）も含まれている（表3～12）。

同定には、木製品から直接片刃削刀を用いて、木材組織切片を横断面、接線断面、放射断面の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、現生標本との比較して行った。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版にし、同定の証拠とする。なお、同定に用いられた標本は神戸市埋蔵文化財センターに保管されている。以下に木材構造の特徴を記すことによって、同定の根拠とする。

#### 1. モミ属 *Abies* Pinaceae 写真図版1a～1c:実測原図番号5891

放射方向・軸方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、成長輪界は明瞭。放射組織は放射柔細胞のみからなり單列。その軸方向壁は単穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型で、1分野に1～4個程度ある。

#### 2. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. Pinaceae 写真図版2a～2c:実測原図番号6151

放射方向・軸方向両細胞間道とともに持つ針葉樹材。細胞間道の周囲にはエピセリウム細胞があるが腐朽のため欠落している。早材から晩材への移行は緩やかで、成長輪界は明瞭である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管と放射細胞間道からなり、単列と紡錘形がある。放射仮道管は放射組織の上下端に位置し、その放射方向壁には鋭角な鉗齒状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、1分野に1～2個。

#### 3. ツガ属 *Tsuga* Pinaceae 写真図版3a～3c:実測原図番号6043

軸方向・放射方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、晩材部の量が多い。成長輪界は明瞭である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり

單列。放射組織の上下端に放射仮道管を持つ。放射柔組織の放射方向壁は単穿孔が著しく数珠状を呈す。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で1分野に1~4個存在する。

4. スギ *Cryptomeria japonica* (L.fil.) D.Don Taxodiaceae

写真図版4a~4c:実測原図番号5963

放射方向・軸方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で成長輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり單列。分野壁孔は大型のスギ型で通常1分野あたり2個ある。

5. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc. Sciadopityaceae

写真図版5a~5c:実測原図番号5958

水平・垂直両樹脂道と樹脂細胞を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行はやや急である。晩材部の量は少ない。放射組織は放射柔組織からなり單列。分野壁孔は小型窓状が1分野に通常1~2個ある。

6. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. Cupressaceae

写真図版6a~6c:実測原図番号6014

放射方向・軸方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、成長輪界は明瞭。晩材部の量は少ない。樹脂細胞が早材部と晩材部の境にあり、放射方向壁は結節状に肥厚している。放射組織は放射柔組織のみからなり單列。分野壁孔は中型のトウヒ~ヒノキ型で1分野に1~3個ある。

7. カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. Taxaceae 写真図版7a~7c:実測原図番号6319

放射方向・軸方向両細胞間道、樹脂細胞がない針葉樹材。成長輪界は明瞭である。晩材部の量が多い。放射組織は放射柔細胞のみからなり單列。分野壁孔は小型のヒノキ~トウヒ型。仮道管内壁に顕著な対列状の螺旋肥厚がある。

8. ヤナギ属 *Salix* Salicaceae 写真図版8a~8c:実測原図番号5893

やや小型で丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合して密に散在する散孔材。道管の直径は成長輪界に向け徐々に減少する。道管は単穿孔板を持つ。放射組織は單列で、平伏細胞と1~3細胞高の直立細胞から構成される。道管放射組織間壁孔は壁孔縁が狭く密であるため蜂の巣状を呈している。

9. シイ属 *Castanopsis* Fagaceae 写真図版9a~9c:実測原図番号5966

成長輪の始めに大型で丸い道管が単独で間隔を置いて1列に並ぶ環孔材。晩材部では徐々に径を減じた薄壁の角張った道管が火炎状に配列している。道管は単穿孔板を持つ。木部柔組織は接線状から單接線状。放射組織は單列で平伏細胞のみから構成される。

12. コナラ属コナラ節 *Quercus* Sect.*Prinus* Fagaceae 写真図版12a~12c:実測原図番号6012

成長輪の始めに大型で丸い道管が1列に並ぶ環孔材。晩材部では急激に径を減じた多角で薄壁の道管が火炎状に散在する。放射組織はすべて平伏細胞であるが、大きさは明らかに2階級あり單列と10列前後に達する大型のものから構成される。道管放射組織間壁孔は橢円形の対列状~柵状。軸方向柔組織は晩材部で3細胞幅以下の帶状に分布する。

13. アカガシ亜属 *Quercus* Subgen.*Cyclobalanopsis* Fagaceae

写真図版13a~13c:実測原図番号5990

中型で厚壁の丸い道管が単独で放射方向に配列する放射孔材。道管径は晩材部にむかって多少減少する。道管は單穿孔板をもつ。放射組織の大きさは明らかに2階級あり、單列と2細胞輪前後に達する大型のものからなり、同性。道管放射組織間壁孔は柵状。軸方向柔組織は晩材部で3細胞幅以下の帯状に分布する。

14. ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino Ulmaceae 写真図版14a～14c;実測原図番号6006

成長輪の始めに大型で丸い道管が1列に並ぶ環孔材。晩材部では急激に径を減じた薄壁で多角形の道管が多数集合して接線方向に配列する。道管は單穿孔板を持ち、小道管内部には螺旋肥厚があるが腐朽のため観察できない。放射組織は1～8列程度で多列部の平伏細胞と1細胞高の方形細胞からなる縁辺部から構成されている。時に縁辺部の方形細胞に結晶が含まれている。

15. クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) Presl Lauraceae

写真図版15a～15c;実測原図番号6011

中型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材。道管の直徑は晩材部に向かい徐々に減じる。軸方向柔組織は周開状である。道管は單穿孔板をもつ。放射組織は2列で平伏細胞と1細胞高の直立細胞からなる縁辺部を持つ。直立細胞や柔組織に大型の油細胞がある。

16. ヤツツバキ *Camellia japonica* L. Theaceae 写真図版16a～16c;実測原図番号5936

小型で角張った道管が単独または2～3個複合して成長輪界に向かって径を減じながら散在する散孔材。道管は階段状穿孔板を持つ。軸方向柔組織は散在状である。放射組織は2～3列で多列部は平伏細胞からなり單列部は直立細胞や方形細胞から構成されている。放射組織にはしばしば大型の結晶細胞が見られる。

17. マンサク *Hamamelis japonica* Sieb. et Zucc. Hamamelidaceae

写真図版17a～17c;実測原図番号6335

小型でやや角張った道管がほぼ単独で密に散在する散孔材。道管は階段状穿孔板を持つ。放射組織は單列で、平伏細胞と直立細胞から構成されている。道管放射組織間壁孔は階段状である。

18. イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. Hamamelidaceae

写真図版18a～18c;実測原図番号6264

やや小型で丸い道管がほぼ単独で均一に散在する散孔材。年輪界は不明瞭である。軸方向柔組織は接線状で著しい。道管は10本程度の横棒からなる階段状穿孔板を持つ。放射組織は異性で1～2細胞高の直立細胞からなる縁辺部と平伏細胞から構成される。道管放射組織間壁孔は階段状である。

19. サクラ属 *Prunus* Rosaceae 写真図版19a～19c;実測原図番号6314

小型の丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材。道管は單穿孔板を持ち、内壁には螺旋肥厚をもつ。放射組織は1～4列程度で、平伏細胞と1～3細胞高の方形細胞からなる縁辺部から構成されている。

20. グミ属 *Elaeagnus* Elaeagnaceae 写真図版20a～20c;実測原図番号6274

成長輪のはじめに中型で丸い道管が一列に並び、晩材部に向かって徐々に径を減じた单

独の丸い道管がややまばらに散在する散孔材。道管の直径は早材部から晩材部にかけて急に減じる。軸方向柔組織は晩材部で散在状～短接線状を呈す。道管は単穿孔板で仕切られ、内壁に螺旋肥厚を持つが腐朽のため不明瞭である。放射組織は1～7列程度で、平伏細胞と1細胞高の方形細胞からなる縁辺部から構成されている。

## 21. カキノキ属 *Diospyros* Ebenaceae 写真図版21a～21c:実測原図番号5937

中型で丸く厚壁な道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材。道管は単穿孔板を持ち、軸方向柔組織は接線状。放射組織は2列で多列部は平伏細胞からなり1細胞高の直立細胞からなる縁辺部で構成され、接線断面においてきれいな階層状に配列する。道管放射組織間壁孔は網かく交差状である。

## 22. ハイノキ属 *Symplocos* Symplocaceae 写真図版22a～22c:実測原図番号5926

小型の道管がほぼ単独でややまばらに均一に散在する散孔材。道管の直径は晩材部でやや減少する。道管の穿孔は30～40本ほどの横棒からなる階段状、放射組織は異性で2細胞幅程度、背の高い裏部を持つ。

## 23. スノキ属 *Vaccinium* Ericaceae 写真図版23a～23c:実測原図番号5896

小型で角張った道管が均一に散在する散孔材。道管の直径は成長輪界に向けて徐々に減少する。道管は階段状穿孔板を持つ。放射組織には明らかに2階級あり直立細胞からなる單列と平伏細胞と直立細胞の縁辺部なる4～6列程度の大型のものがある。

## 24. トネリコ属 *Fraxinus* Oleaceae 写真図版24a～24c:実測原図番号6013

大型の道管が成長輪の始めに並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小型の道管が単独あるいは放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔板を持つ。軸方向柔組織は周囲状あるいは連合翼状分布する。放射組織は2列前後で平伏細胞のみで構成される。

## 25. イボタノキ属 *Lingustrum* Oleaceae 写真図版25a～25c:実測原図番号6287

小型で丸い道管がほぼ単独で成長輪内に散在するが、成長輪界にはやや大きめの道管が並ぶ半環孔材。道管は単穿孔板を持ち、内壁には螺旋肥厚がある。放射組織は2列で平伏細胞からなる多列部と1細胞高の方形細胞からなる上下端の縁辺部から構成されている。

## 26. ガマズミ属 *Viburnum* Caprifoliaceae 写真図版26a～26c:実測原図番号5945

小型で角張った道管がほぼ単独で散在する散孔材。道管は30本程度の横棒からなる階段状穿孔板をもつ。放射組織は1～3列程度で全体に平伏、方形、直立細胞が混在している。

### III. 結果

同定した結果針葉樹が7樹種、広葉樹が18樹種確認された（表5～14）。9世紀に相当するとされている遺物はいずれもアカマツであった。大部分を占める11世紀末～13世紀中期の遺物と二葉6S X 302の構築材を中心に結果を述べる。

まず、11世紀末～13世紀中頃の製品は268点がある（表4）。同定されている遺物は井戸構築材が最も多く151点、曲物が46点でその他板材や杭などが多く確認されている。樹種ではヒノキが95点と最も多く、次にスギ、ツガ属、モミ属、コウヤマキ、アカマツが続き針葉樹が全体の8割以上を占めている。広葉樹材ではシイ属とクヌキが多い樹種である。

井戸枠材ではヒノキ（扁）、スギ、ツガ属、コウヤマキなどの樹種が中心に利用されているが、曲物や角材はヒノキが中心で確認される樹種が異なっている。モミ属やアカマツは二葉6SX308・SE309などで多く利用されており出土遺構に偏りがある。船材片はクスノキであった。

二葉6SX302構築材は87点あるが、モミ属とアカマツが11世紀末～13世紀中頃の製品と比較して多く、スギやヒノキが少ない特徴が見出せる。杭はアカマツが60点中21点を占めている。しかし、広葉樹も13種類利用されておりそれらの樹種の材質もそろっていないことから、杭の用材が意図的に選択されているとは考えにくい結果である。板材も針葉樹のみであるが、樹種ごとの出土点数にまとまりは見られていない。

船材を転用していると考えられる木材はクスノキであった。クスノキの木材には5～10%樟腦が含まれているため、耐朽性、耐虫性が高く水湿にも強い。そのためクスノキは丸木船や和船の材料としても使用されていた（平井、1996）。

針葉樹が全体の8割を占めており木材利用の中心になっている。しかし、針葉樹の特定の樹種に集中した傾向は見られなかった。遺構内でも多くを占めている樹種はあるが、複数の樹種で構築されており、針葉樹の特定樹種を積極的に選択している様子はうかがわれない。広葉樹は材質が適さない曲物を除いた製品に多く、特に杭、井戸枠側板などに利用されている。しかし、広葉樹は利用されている樹種の多さに対して出土点数が少なく、特に二葉6SX302の杭では樹種を選択したうえで利用した製品とは考えにくいほど、多様な樹種が出土している（表3）。曲物や井戸側板にはヒノキ、コウヤマキ、ツガ属など比較的水に強い樹種を選んでいることから、二葉6SX302の杭材の樹種だけを見れば遺構が長期的な耐久性や水湿対策を重視した遺構とは考えにくい。

#### IV. 考察

樹種同定を行った結果から針葉樹が木材利用の中心であったことが同われる。ヒノキ、スギ、ツガ属、コウヤマキなどの針葉樹が多く、それらの木材が選択されているといえる。しかし、遺構内では複数の樹種が確認されており、これらの樹種を意識的に区別する必要はなかったと考えられる。アカマツは利用されているが優占するほど多くの製品に利用が拡大してはいなかった。利用されている広葉樹の樹種の多さは周辺からの供給もある程度含めたものであることが類推されるが、木材利用の中心はすでに針葉樹材にある。

#### 引用文献

- 平井信二,1996.木の大百科 解説編,642pp.朝倉書店,東京。  
兵庫県植生史研究会編,1993.  
兵庫県の考古学と自然科学 自然科学による過去の環境復元「播磨をめぐる弥生文化」453-459  
神戸市教育委員会・財團法人神戸市スポーツ教育公社編,1993.木製品の樹種.神戸市兵庫区大蔵跡発掘調査報告書,神戸市教育委員会,216-218.

表3 二葉6S×302遺構構築材樹種同定結果

樹種	杭	板	階段用材	その他製品	総計
モミ属	7	3		1	11
アカマツ	21	2		6	29
マツ属	2		2		4
ツガ属	2	5			7
スギ		1			1
ヒノキ	2	1		1	4
カヤ	2				2
シイ属	2				2
クヌギ節	3				3
コナラ節	1				1
アカガシ亚属	1				1
クスノキ	1	1			2
マンサク属	4			1	5
イスノキ	3				3
サクラ属	1				1
グミ属	1				1
カキノキ属	1		1		2
ハイノキ属?	1				1
イボタノキ属	2				2
ガマズミ属	1			2	3
散孔材	2				2
総計	60	13	3	11	87

表4 11世紀末～13世紀中頃に相当する木製品樹種同定結果

樹種	製品名	曲物	漆椀	井戸		板	杭	角材 割材等	船材片	その他 製品等	総計
				側板	その他						
モミ属				9	4	3				6	22
アカマツ				11	1		1	1		6	20
マツ属椎管束垂属										1	1
マツ属				2						1	3
ツガ属		1		19		5					25
スギ		2		24		5		1			32
コウヤマキ				16		1		1		3	21
ヒノキ		37		35	5	4		9		5	95
ヒノキ属		5		2							7
ヒノキ科				1						1	2
針葉樹		1						1		1	3
ヤナギ属							1				1
シイ属				5			2			2	9
コナラ属コナラ節				1			1				2
アカガシ垂属				2	1					1	4
ケヤキ		1									1
クスノキ				6					1	1	8
ヤブツバキ				1							1
マンサク属							2				2
カキノキ属				1							1
ハイノキ属				2							2
スノキ属?							1				1
トネリコ属							1				1
ガマズミ属				2							2
タケ垂科					1						1
総計		46	1	139	12	18	9	13	1	29	268

表5 神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（1）

地区名	遺物番号	現場取上番号	実測取上番号	遺物名(個別取上番号)	遺構名	樹種名	時期
久保6	230	R-236	6151	杭	SX302 No.2	アカマツ	11世紀末~12世紀前半
久保6	231	R-258	6152	板材	SX302 No.5	ツガ属	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-321-A	6153	曲物(側板)	SX302内落ち込み	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	232	R-321-B	6153	曲物(底板)	SX302内落ち込み	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	153	R-323	6154	井戸枠(板2)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	156	R-324	6155	井戸枠(板3)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-325-1	6156	井戸枠(板8)	SE302	スギ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-326	6157	井戸枠(板10)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-327-1	6158	井戸枠(板9)	SE302	スギ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-328	6159	井戸枠(板12)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-329-1	6160	井戸枠(板13)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	143	R-330	6161	井戸枠(板5)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-331	6162	井戸枠(板14)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-332-1	6163	井戸枠(板11)	SE302	ツガ属	11世紀末~12世紀前半
久保6	170	R-333	6164	井戸枠(板15)	SE302	シイ属	11世紀末~12世紀前半
久保6	160	R-334	6165	井戸枠(板16)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	161	R-335	6166	井戸枠(板17)	SE302	ウヤマキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	159	R-336	6167	井戸枠(板18)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	171	R-337	6168	井戸枠(板19)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	179	R-338	6169	井戸枠(板21)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	165	R-339	6170	井戸枠(板20)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	180	R-340	6171	井戸枠	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-341	6172	井戸枠(板23)	SE302	モミ属	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-342-1	6173	井戸枠(板24)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	157	R-343	6174	井戸枠(板25)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-344-1	6175	井戸枠(板26)	SE302	スギ	11世紀末~12世紀前半
久保6	152	R-345	6176	井戸枠(板27)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-346	6177	井戸枠(板28)	SE302	ツガ属	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-347-2	6178	井戸枠(板29)	SE302	モミ属	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-348-1	6179	井戸枠(板27後)	SE302	ツガ属	11世紀末~12世紀前半
久保6	144	R-349	6180	井戸枠(板6)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	151	R-350	6181	井戸枠(板4)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	148	R-351	6182	井戸枠(板7)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6		R-352	6183	井戸枠・北側面側板東	SE302	スギ	11世紀末~12世紀前半
久保6	158	R-353	6184	井戸枠・北側面側板西	SE302	スギ	11世紀末~12世紀前半
久保6	162	R-354	6185	井戸枠(板32)	SE302	コウヤマキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	164	R-355	6186	井戸枠	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
久保6	175	R-356	6187	井戸枠(板30)	SE302	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半

表6 神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（2）

地区名	遺物番号	現場取上番号	実測取番号	遺物名(個別収上番号)	追構名	樹種名	時期
久保6	149	R-357	6188	井戸枠（側板西より西）	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	147	R-358	6189	井戸枠（板33）	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	145	R-359	6190	井戸枠（板1）	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	155	R-360	6191	井戸枠（板2）	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	154	R-361	6192	井戸枠（板3）	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-362-1	6193	丸材	SE302	コウヤマキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-362-2	6194	角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-362-3	6195	角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-362-4	6196	楔形	SE302	アカマツ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-362-5	6197	楔形	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-363-1	6198	角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	173	R-363-2	6199	角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	168	R-363-3	6200	角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	167	R-363-4	6201	井戸枠角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	166	R-363-5	6202	井戸枠角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	172	R-363-6	6203	井戸枠角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	146	R-365	6205	井戸枠（板35）	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	169	R-367	6206	支柱	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	163	R-368	6207	角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	177	R-369	6208	角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	178	R-370	6209	角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	181	R-372	6210	枠木	SE302	アカマツ	11世紀末～12世紀前半
久保6	183	R-373	6211	枠木	SE302	モミ属	11世紀末～12世紀前半
久保6	182	R-374	6212	枠木	SE302	モミ属	11世紀末～12世紀前半
久保6	176	R-375	6213	枠木	SE302	アカマツ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-376	6214	枠木	SE302	モミ属	11世紀末～12世紀前半
久保6	184	R-377	6215	枠木	SE302	モミ属	11世紀末～12世紀前半
久保6	187	R-378-A	6216	曲物（側板）	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-378-B	6216	曲物	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-378-C	6216	曲物（底板）	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	185	R-379	6217	曲物	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	186	R-380	6218	曲物	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6	174	R-382-1	6219	角材	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-382-2	6220	板	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-385	6222	箸	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-238	6223	曲物底板	SE302 2区	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半
久保6		R-384	6221	角材	SE302	針葉樹	11世紀末～12世紀前半
久保6	150	R-364	6204	板34	SE302	ヒノキ	11世紀末～12世紀前半

表7 神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（3）

地区名	遺物番号	規局取上番号	実測取上番号	遺物名(個別取上番号)	遺構名	樹種名	時期
二葉6	R-014	5890	板材	SX304	ヒノキ	12世紀後半	
二葉6	R-030-1	5891	板材	SE304 二段目井戸枠上	モミ属	11世紀末~12世紀前半	
二葉6	R-030-2	5892	板材	SE304 二段目井戸枠下	スギ	11世紀末~12世紀前半	
二葉6	R-030-3	5893	丸杭	SE304 三段目井戸枠下	ヤナギ属	11世紀末~12世紀前半	
二葉6	R-030-4	5894	板材	SE304 三段目井戸枠下	モミ属	11世紀末~12世紀前半	
二葉6	R-030-5	5895	板材	SE304 三段目井戸枠下	モミ属	11世紀末~12世紀前半	
二葉6	R-030-6	5896	丸杭?	SE304 二段目井戸枠下	スノキ属?	11世紀末~12世紀前半	
二葉6	367	R-038-1	5897	曲物(上)・側板	SE304	ヒノキ属	11世紀末~12世紀前半
二葉6	367	R-038-2	5897	曲物(上)・端板	SE304	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
二葉6	366	R-039-1	5898	曲物(中)・側板	SE304	ヒノキ属	11世紀末~12世紀前半
二葉6	366	R-039-2	5898	曲物(中)・帶板(上)	SE304	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
二葉6	366	R-039-3	5898	曲物(中)・帶板(下)	SE304	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
二葉6	365	R-040-1	5899	曲物(中)・側板	SE304	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
二葉6	365	R-040-2	5899	曲物(中)・帶板(上)	SE304	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
二葉6	365	R-040-3	5899	曲物(中)・帶板(下)	SE304	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
二葉6		R-041-1	5900	曲物(下)・側板	SE304	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
二葉6		R-041-2	5900	曲物(下)・帶板	SE304	ヒノキ	11世紀末~12世紀前半
二葉6		R-041-3	5900	曲物(下)・底板	SE304	針葉樹	11世紀末~12世紀前半
二葉6		R-063	5901	柱材?	SP301	コウヤマキ	12世紀後半
二葉6		R-069		樹種サンプル	SP303	マツガシラ属 管束亞属	12世紀後半
二葉6		R-077	5902	柱材?	SP302	マツガシラ属 管束亞属	12世紀後半
二葉6		R-078		樹種サンプル	SP304	針葉樹	12世紀後半
二葉6	400	W-61	5923	井戸枠1	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	398	W-63	5924	井戸枠2	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	430	W-64	5925	井戸枠4	SE306	ハイノキ属	13世紀中頃
二葉6	428	W-65	5926	井戸枠5	SE306	ハイノキ属	13世紀中頃
二葉6	438	W-66	5927	井戸枠6	SE306	クスノキ	13世紀中頃
二葉6		W-67	5928	井戸枠7	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	413	W-69	5929	井戸枠9	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	438	W-70	5930	井戸枠10	SE306	クスノキ	13世紀中頃
二葉6		W-71	5931	井戸枠11	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	408	W-72	5932	井戸枠12	SE306	ツガ属	13世紀中頃
二葉6	402	W-73	5933	井戸枠13	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	439	W-74	5934	井戸枠14	SE306	クスノキ	13世紀中頃
二葉6		W-75	5935	井戸枠15	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	423	W-76	5936	井戸枠16	SE306	ヤブツバキ	13世紀中頃
二葉6	433	W-77	5937	井戸枠17	SE306	カキノキ属	13世紀中頃
二葉6	401	W-79	5938	井戸枠19	SE306	スギ	13世紀中頃

表8 神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（4）

地区名	遺物番号	現場取上番号	実測標高番号	遺物名(個別取上番号)	遺構名	樹種名	時期
二葉6	399	W-80	5939	井戸桿15-2	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	414	W-81	5940	井戸桿21	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	415	W-82	5941	井戸桿22	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	412	W-83	5942	井戸桿23	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6		W-84	5943	曲物底板	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	396	W-85	5944	井戸桿25	SE306	マツ属	13世紀中頃
二葉6	426	W-86	5945	井戸桿26	SE306	ガマズミ属	13世紀中頃
二葉6	429	W-87	5946	井戸桿27	SE306	シイ属	13世紀中頃
二葉6		W-88	5947	井戸桿28	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	432	W-89	5948	井戸桿29	SE306	モミ属	13世紀中頃
二葉6		W-90	5949	井戸桿30	SE306	コウヤマキ	13世紀中頃
二葉6	435	W-91	5950	井戸桿31	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6		W-92	5951	井戸桿32	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	434	W-93-1	5952	井戸桿33	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6		W-93-2	5953	井戸桿33	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6		W-94	5954	井戸桿34	SE306	クスノキ	13世紀中頃
二葉6	440	W-96	5955	井戸桿36	SE306	クスノキ	13世紀中頃
二葉6		W-98	5956	井戸桿38	SE306	シイ属	13世紀中頃
二葉6		W-99	5957	楔形	SE306上層	アカマツ	13世紀中頃
二葉6	407	W-100-1	5958	板材	SE306	コウヤマキ	13世紀中頃
二葉6	409	W-100-2	5959	板材	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	424	W-100-3	5960	半丸材	SE306	シイ属	13世紀中頃
二葉6	410	W-102-1	5961	板材	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	427	W-102-2	5962	削角材	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	404	W-103-1	5963	板材	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	405	W-103-2	5964	板材	SE306	スギ	13世紀中頃
二葉6	418	W-104	5965	北西隅縦板	SE306	モミ属	13世紀中頃
二葉6	431	W-105	5966	木桿浅木	SE306	シイ属	13世紀中頃
二葉6	422	W-106-1	5967	木桿下部くさび	SE306最下層	コウヤマキ	13世紀中頃
二葉6	421	W-106-2	5968	木桿下部くさび	SE306最下層	アカマツ	13世紀中頃
二葉6		W-107	5969	半丸杭	SE306	シイ属	13世紀中頃
二葉6	411	W-108	5970	南西隅・裏縦板	SE306	アカマツ	13世紀中頃
二葉6	397	W-109	5971		SE306	ヒノキ科	13世紀中頃
二葉6		W-110	5972	曲物破片	SE306上面一枚	スギ	13世紀中頃
二葉6	499	W-111	5973	井戸桿1	SE309	アカマツ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	510	W-112	5974	井戸桿2	SE309	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	516	W-113	5975	井戸桿3	SE309	アカマツ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	504	W-114	5976	井戸桿4	SE309	ツガ属	12世紀中頃～12世紀末

表9 神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(5)

地区名	遺物番号	現場取上番号	米謫居番号	遺物名(個別取上番号)	遺構名	樹種名	時期
二葉6	403	W-115	5977	井戸桿5	SE309	ツガ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	509	W-116	5978	井戸桿6	SE309	ツガ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	505	W-117	5979	井戸桿7	SE309	ツガ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	503	W-118-1	5980	井戸桿8	SE309	ツガ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	518	W-118-2	5981	井戸桿8	SE309	アカガシ亜属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	501	W-119	5982	井戸桿9	SE309	ツガ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	511	W-120	5983	井戸桿10	SE309	ヒノキ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	502	W-121-1	5984	井戸桿11	SE309	ツガ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	506	W-121-2	5985	井戸桿11	SE309	ヒノキ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6		W-121-3	5986	井戸桿11	SE309	ヒノキ科	12世紀中頃~12世紀末
二葉6		W-122	5987	井戸桿12	SE309	アカマツ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	497	W-123	5988	井戸桿13	SE309	スギ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6		W-124	5989	井戸桿14	SE309	シイ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	515	W-125	5990	井戸桿15	SE309	アカガシ亜属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	493	W-126	5991	井戸桿16	SE309	アカマツ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	495	W-127-A	5992-A	井戸桿17	SE309	アカマツ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	495	W-127-B	5992-B	井戸桿17 横木	SE309	アカガシ亜属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	517	W-128	5993	井戸桿18	SE309	アカマツ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	496	W-129	5994	井戸桿19	SE309	シイ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	507	W-130	5995	井戸桿20	SE309	マツ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	512	W-131	5996	井戸桿21	SE309	アカマツ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	494	W-132-A	5997-A	井戸桿22	SE309	コナラ節	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	494	W-132-B	5997-B	井戸桿22 横木	SE309	カマツ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	514	W-133	5998	井戸桿23	SE309	アカマツ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	508	W-134	5999	井戸桿24	SE309	スギ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	513	W-135	6000	井戸桿25	SE309	アカマツ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	492	W-136	6001	井戸桿26	SE309	ヒノキ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6		W-137-1	6002	板材	SE309	ツガ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	498	W-137-2	6003	板材	SE309	ツガ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	500	W-137-3	6004	板材	SE309	スギ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6		W-137-4	6005	削材	SE309	アカマツ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	532	W-138-1	6006	黒漆椀	SE309	ケヤキ	12世紀中頃~12世紀末
二葉6		W-138-2	6007	不明	SE309	マツ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6		W-139-1	6008	丸杭	SE302	マンサク属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6		W-139-2	6009	両端加工材	SE302	シイ属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	352	W-140	6010	横樋	SE302	アカガシ亜属	12世紀中頃~12世紀末
二葉6	395	W-141-1	6011	船材片?	SE306	クスノキ	13世紀中頃
二葉6		W-141-2	6012	半丸材	SE306	コナラ節	13世紀中頃

表10 神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（6）

地区名	遺物番号	現場取上番号	実測原回番号	遺物名（個別取上番号）	遺構名	樹種名	時期
二葉6	425	W-141-3	6013	削杭	SE306	トネリコ属	13世紀中頃
二葉6		W-141-4	6014	箸	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	479	W-142	6015	曲物	SE308	ヒノキ属	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	488	W-143-1	6016	曲物・内側板	SE302	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	488	W-143-2	6016	曲物・外側板上	SE302	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	488	W-143-3	6015	曲物・外側板中	SE302	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	488	W-143-4	6016	曲物・外側板下	SE302	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	488	W-143-5	6016	曲物・副板右	SE302	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	488	W-143-6	6016	曲物・副板左	SE302	ヒノキ属	12世紀中頃～12世紀末
二葉6		W-144-1	6017	曲物・帯板	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6		W-144-2	6025-1	曲物・側板	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6		W-144-2	6025-2	木釘	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	420	W-144-3	6026	曲物	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	420	W-144-4	6027	曲物・帯板	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	362	W-151	6024	曲物	SE302	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	428	W-152-1	6028-1	曲物・側板	SE309	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	428	W-152-1	6028-2	曲物・帯板	SE309	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	490	W-152-2	6029	曲物・副板	SE309	ヒノキ属	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	491	W-152-3	6030	曲物・副板	SE309	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	489	W-152-4	6031	曲物・副板	SE309	ヒノキ	12世紀中頃～12世紀末
二葉6	419	W-156-1	6033	曲物	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	419	W-156-2	6034	曲物・帯板	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	419	W-156-3	6035	曲物	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	419	W-156-4	6036	曲物・副木	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	419	W-156-5	6037	曲物・副本	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	419	W-156-6	6038	曲物・副本	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	419	W-156-7	6039	曲物・副本	SE306	ヒノキ	13世紀中頃
二葉6	419	W-156-8	6040	曲物・副本	SE306	ツガ属	13世紀中頃
二葉6	417	W-156-9	6041	板材	SE306	ツガ属	13世紀中頃
二葉6			6042	丸杭	SE306	マンサク属	13世紀中頃
二葉6	406		6043	板材	SE306	ツガ属	13世紀中頃
二葉6	317	W-001	6253	井戸枠板材	SE202	アカマツ	9世紀
二葉6	318	W-002	6254	井戸枠板材	SE202	アカマツ	9世紀
二葉6	319	W-003	6255	井戸枠板材	SE202	アカマツ	9世紀
二葉6		W-004	6256	井戸枠板材	SE202	アカマツ	9世紀
二葉6		W-005	6257	井戸枠板材	SE202	アカマツ	9世紀
二葉6	648	W-006	6258	木棺材	ST302	モミ属	12世紀末～13世紀初
二葉6	649	W-007	6259	木棺材	ST302	コウヤマキ	12世紀末～13世紀初

表11 神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（7）

地区名	遺物番号	現場取上番号	実測原同番号	遺物名（個別取上番号）	遺構名	樹種名	時期
二葉6		008-1	6260	杭 (1)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6	676	008-2	6261	杭 (1)	SX302	モミ属	13世紀前半
二葉6	677	008-3	6262	杭 (1)	SX302	モミ属	13世紀前半
二葉6	658	009-1	6263	板杭 (2)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		009-2	6264	杭 (2)	SX302	イスノキ	13世紀前半
二葉6		009-3	6265	剖材 (2)	SX302	ヒノキ	13世紀前半
二葉6	668	010	6266	板材 (3)	SX302	ツガ属	13世紀前半
二葉6	671	011	6267	板材 (4)	SX302	ツガ属	13世紀前半
二葉6		012-1	6268	階段用材 (5)	SX302	マツ属	13世紀前半
二葉6		012-2	6269		SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6	662	013	6270	板材 (6)	SX302	ツガ属	13世紀前半
二葉6	669	014	6271	剖材 (7)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		015	6272	杭 (8)	SX302	イスノキ	13世紀前半
二葉6		016	6273	杭 (9)	SX302	マツ属	13世紀前半
二葉6		017	6274	杭 (10)	SX302	グミ属	13世紀前半
二葉6	660	018	6275	板状木製品 (11)	SX302	クスノキ	13世紀前半
二葉6		019	6276	丸杭 (12)	SX302	イスノキ	13世紀前半
二葉6	656	020	6277	丸材 (13)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6	685	021	6278	丸杭 (14)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6	681	022	6279	丸杭 (15)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6	679	023	6280	杭 (16)	SX302	ヒノキ	13世紀前半
二葉6		024	6281	杭 (17)	SX302	クヌギ節	13世紀前半
二葉6		025	6282	杭 (18)	SX302	クヌギ節	13世紀前半
二葉6	666	026	6283	板材 (19)	SX302	スギ	13世紀前半
二葉6	663	027	6284	板材 (20)	SX302	ツガ属	13世紀前半
二葉6	686	028	6285	丸杭 (21)	SX302	モミ属	13世紀前半
二葉6		029	6286	丸杭 (22)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6	673	030	6287	丸杭 (23)	SX302	イボタノキ属	13世紀前半
二葉6	672	031	6288	丸杭 (24)	SX302	シイ属	13世紀前半
二葉6		032	6289	杭 (25)	SX302	モミ属	13世紀前半
二葉6		033	6290	丸杭 (26)	SX302	シイ属	13世紀前半
二葉6		034	6291	杭 (27)	SX302	ハイノキ属？	13世紀前半
二葉6		035	6292	杭 (28)	SX302	マツ属	13世紀前半
二葉6		036	6293	丸材 (29)	SX302	ガマズミ属	13世紀前半
二葉6		037	6294	杭 (30)	SX302	イボタノキ属	13世紀前半
二葉6		038	6295	杭 (31)	SX302	マンサク属	13世紀前半
二葉6	680	039	6296	杭 (32)	SX302	ヒノキ	13世紀前半
二葉6		040	6297	杭 (33)	SX302	モミ属	13世紀前半

表12 神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（8）

地区名	遺物番号	現場取上番号	実測原番号	遺物名(個別取上番号)	遺構名	樹種名	時期
二葉6		041	6298	杭 (34)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		042	6299	杭 (35)	SX302	クスノキ	13世紀前半
二葉6		044	6300	杭 (37)	SX302	散孔材	13世紀前半
二葉6		045	6301	階段用材 (38)	SX302	カキノキ属	13世紀前半
二葉6		046	6302	階段用材 (39)	SX302	マツ属	13世紀前半
二葉6	667	047	6303	板材 (40)	SX302	ヒノキ	13世紀前半
二葉6		048	6304	杭 (41)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		049	6305	杭 (42)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6	683	050	6306	杭 (43)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		051	6307	杭 (44)	SX302	マンサク属	13世紀前半
二葉6		052	6308	杭 (45)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		053	6309	杭 (46)	SX302	散孔材	13世紀前半
二葉6		054		(47)	SX302	マンサク属	13世紀前半
二葉6		055	6311	杭 (48)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		056	6310	杭 (49)	SX302	ツガ属	13世紀前半
二葉6		057	6312	杭 (50)	SX302	クヌギ属	13世紀前半
二葉6		058	6313	丸材 (51)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		059	6314	杭 (52)	SX302	サクラ属	13世紀前半
二葉6		060	6315	杭 (53)	SX302	アカガシ属	13世紀前半
二葉6		061	6316	丸材 (54)	SX302	ガマズミ属?	13世紀前半
二葉6		062	6317	杭 (55)	SX302	モミ属	13世紀前半
二葉6	684	063	6318	杭 (56)	SX302	モミ属	13世紀前半
二葉6		064	6319	杭 (57)	SX302	カヤ	13世紀前半
二葉6	675	065	6320	杭 (58)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		066	6321	杭 (59)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		067	6322	杭 (60)	SX302	マンサク属	13世紀前半
二葉6		068	6323	杭先 (61)	SX302	カキノキ属	13世紀前半
二葉6	678	069	6324	杭 (62)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		070	6325	杭 (63)	SX302	ガマズミ属?	13世紀前半
二葉6		072	6326	杭 (65)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		073	6327	杭 (66)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		074	6328	杭 (67)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6	674	075	6329	杭 (68)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6	682	076	6330	杭 (69)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		077	6331	杭 (70)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		078	6332	杭 (71)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		079	6333	杭 (72)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		080	6334	丸材	SX302	アカマツ	13世紀前半

表13 神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（9）

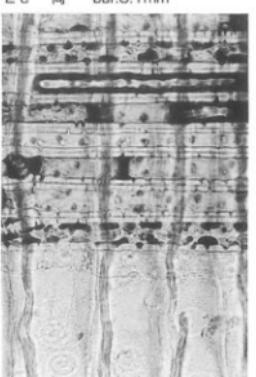
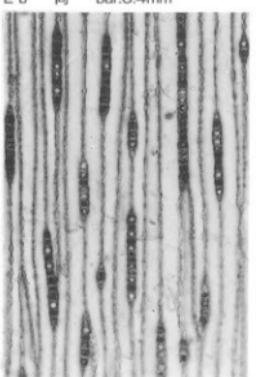
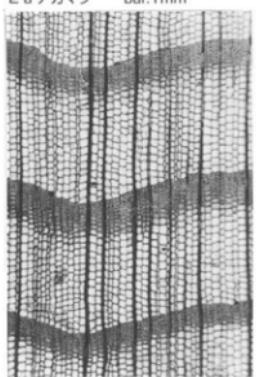
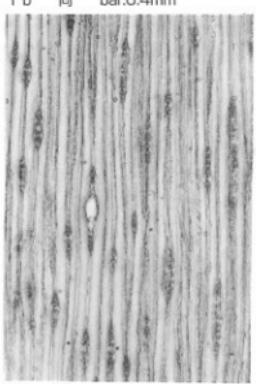
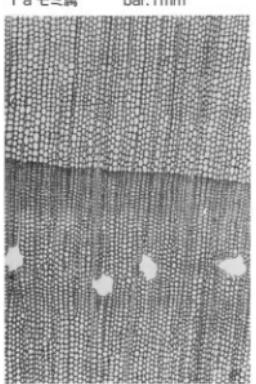
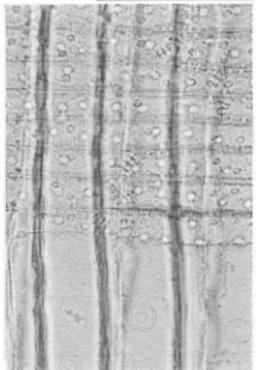
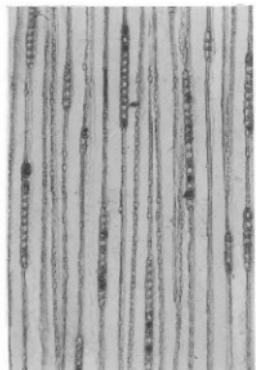
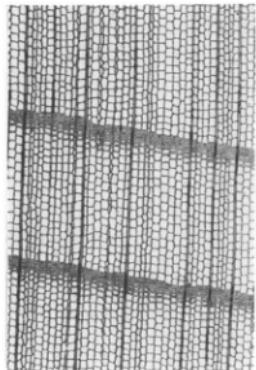
地区名	遺物番号	現場取上番号	実測割番号	遺物名(個別取上番号)	遺構名	樹種名	時期
二葉6		081	6335	丸杭材 (73)	SX302	マンサク属	13世紀前半
二葉6	657	082	6336	杭(多面角杭) (74)	SX302	カヤ	13世紀前半
二葉6	670	083	6337	板材 (75)	SX302	ツガ属	13世紀前半
二葉6	687	084	6338	丸杭材 (76)	SX302	ツガ属	13世紀前半
二葉6	661	085	6339	板材 (77)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6		086	6340	丸材 (78)	SX302	アカマツ	13世紀前半
二葉6	659	087	6341	板材 (79)	SX302	モミ属	13世紀前半
二葉6		088	6342	丸材 (80)	SX302	モミ属	13世紀前半
二葉6	665	089	6343	板材 (81)	SX302	モミ属	13世紀前半
二葉6		090	6344	杭材 (82)	SX302	コナラ節	13世紀前半
二葉6	664	092	6345	板材 (84)	SX302	モミ属	13世紀前半
二葉6	568	093	6346	井戸側板材 (1)	SE313	ツガ属	13世紀前半
二葉6	572	094	6347	井戸側板材 (2)	SE313	ツガ属	13世紀前半
二葉6	569	095	6348	井戸側板材 (3)	SE313	ツガ属	13世紀前半
二葉6	563	096	6349	井戸側板材 (4)	SE313	アカマツ	13世紀前半
二葉6	562	097	6350	井戸側板材 (5)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6	565	098	6351	井戸側板材 (6)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6	582	099	6352	井戸側丸材 (7)	SE313	モミ属	13世紀前半
二葉6	577	100	6353	井戸側角材 (8)	SE313	ヒノキ	13世紀前半
二葉6	555	101	6354	井戸枠板材 (9)	SE313	モミ属	13世紀前半
二葉6	587	102	6355	井戸枠板材 (10)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6		103	6356	井戸枠板材 (11)	SE313	ヒノキ	13世紀前半
二葉6	567	104	6357	井戸枠板材 (12)	SE313	ツガ属	13世紀前半
二葉6		105	6358	井戸枠板材 (13)	SE313	モミ属	13世紀前半
二葉6	566	106	6359	井戸枠板材 (14)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6	558	107	6360	井戸枠板材 (15)	SE313	クスノキ	13世紀前半
二葉6	564	108	6361	井戸枠板材 (16)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6	584	109	6362	井戸枠板材 (17)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6	554	110	6363	井戸枠板材 (18)	SE313	モミ属	13世紀前半
二葉6	586	111	6364	井戸枠板材 (19)	SE313	モミ属	13世紀前半
二葉6	560	112	6365	井戸枠板材 (20)	SE313	モミ属	13世紀前半
二葉6		113	6366	井戸枠板材 (21)	SE313	モミ属	13世紀前半
二葉6		114-1	6367	井戸枠板材 (22)	SE313	ツガ属	13世紀前半
二葉6		114-2	6368	井戸枠板材 (22)	SE313	ツガ属	13世紀前半
二葉6	589	115	6369	井戸枠板材 (23)	SE313	ウヤマキ	13世紀前半
二葉6	556	116	6370	井戸枠板材 (24)	SE313	アカマツ	13世紀前半
二葉6	561	117	6371	井戸枠板材 (25)	SE313	ツガ属	13世紀前半
二葉6	588	118-1	6372	井戸枠板材 (26)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半

表14 神戸市二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（10）

地区名	遺物番号	現場取上番号	実測取上番号	遺物名（削削取上番号）	遺構名	樹種名	時期
二葉6		118-2	6373	井戸枠両端加工丸材(26)	SE313	モミ属	13世紀前半
二葉6		118-3	6374	井戸枠角材(26)	SE313	ヒノキ	13世紀前半
二葉6		118-4	6391	井戸枠(26)	SE313	モミ属	13世紀前半
二葉6		118-5	6392	井戸枠(竹)(25)	SE313	タケ亜科	13世紀前半
二葉6	570	119	6375	井戸枠板材(27)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6	574	120	6376	井戸枠板材(28)	SE313	ヒノキ属	13世紀前半
二葉6	559	121	6377	井戸枠板材(29)	SE313	ツガ属	13世紀前半
二葉6	580	122	6378	井戸枠板材(30)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6	585	123	6379	井戸枠板材(31)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6	571	124	6380	井戸枠板材(32)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6	573	125	6381	井戸枠板材(33)	SE313	コウヤマキ	13世紀前半
二葉6	583	126	6382	井戸枠丸材(34)	SE313	モミ属	13世紀前半
二葉6	579	127	6383	井戸枠材(35)	SE313	ヒノキ	13世紀前半
二葉6	576	128	6384	井戸枠材(36)	SE313	ヒノキ	13世紀前半
二葉6	578	129	6385	井戸枠材(37)	SE313	ヒノキ	13世紀前半
二葉6	575	130	6386	井戸枠材(38)	SE313	ヒノキ	13世紀前半
二葉6	581	131	6387	井戸枠両端加工材(39)	SE313	ガマズミ属	13世紀前半
二葉6		132	6393	湧水部削り貫き丸木	SF202	アカマツ	9世紀
二葉6		133	6394	湧水部削り貫き丸木	SE313	クスノキ	13世紀前半
二葉6		295-1	6388			ヒノキ	
二葉6		295-2	6389			スギ	
二葉6		295-3	6390			ヒノキ	

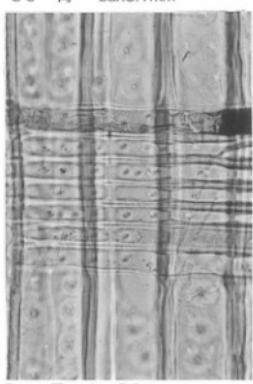
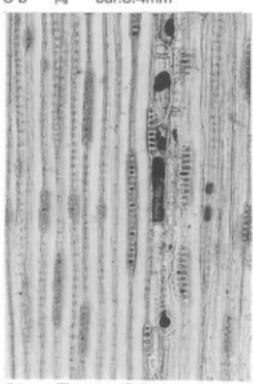
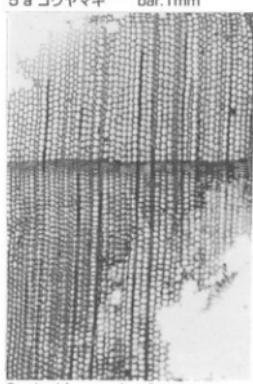
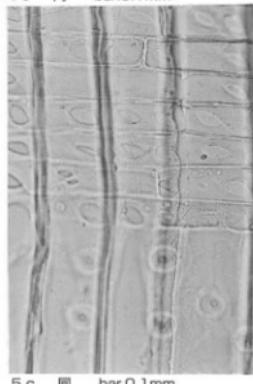
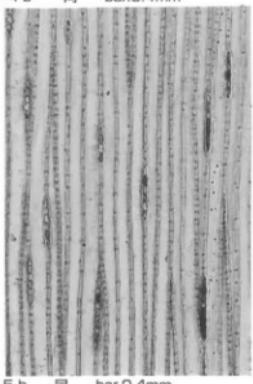
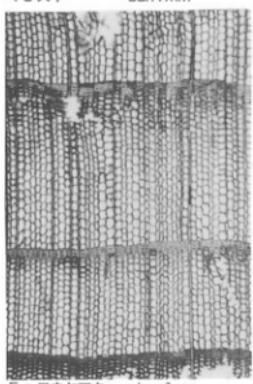
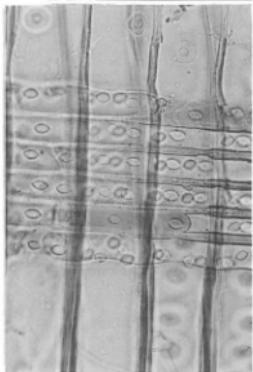
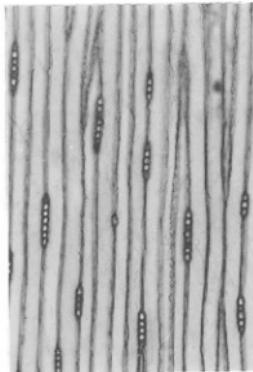
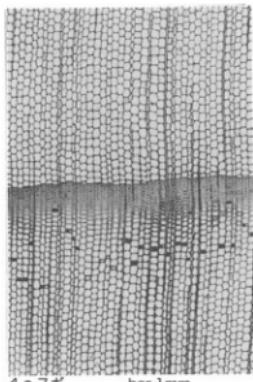
挿図写真15 二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真1

Bar.



挿図写真16 二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真2

Bar.



挿図写真17 二葉町遺跡出土木材組織顕微鏡写真3

Bar.

